

キライーキラン

條に分る。西尾町をもと西條といひしは之に因す。足利左馬頭義氏この莊の地頭職となり、その子長氏病を以て本莊に隱居し吉良氏の祖となり、西條城(西尾城)を築きてこれに居る。

キライ 芥菜

【芥菜平野】 臺灣花蓮港龍花港港街を中心とする花蓮溪の流域地方の平野。東海岸に於ける最大の農耕地帯なり。花蓮溪流域は洪水のため半河原の状態なりしも近年、本島人の移住により開墾さるるこ

キライ 貴來面

【貴來面】 朝鮮江原道原州郡の西南部。北は興業面に、西北は建寧面、富善面に、東は忠清北道堤川郡白雲面に、南は同忠清道靈巖面に各隣接す。四四九〇〇米餘の山地に圍繞され、漢江の一支

キライチ 喜良市村

北津輕郡の中部。金木町の東南に隣り、南は嘉瀬村に、東は東津輕郡奥内村、後淵村に各隣接す。本村は津輕半島の脊稜

キラガワ 吉良川村

佐田安藝郡の西南部。室戸町の西北に隣り、東北は佐喜濱村に、西北は利根村に界し、南は太平洋に臨む。北境は最高に

三〇四

して九四七米あり、南方へ次第に傾斜し東境中部にて六五〇米、西境中部の大隔山は七〇九米、その中間に笠木山(五九八米)聳立す。北部山地に發する西ノ川、東ノ川は笠木山を挟みて南に流れ、東ノ川以西の海岸に模式的海岸段丘發達す。

三〇五

景観を呈し、最も秀麗なる松林地として知らる。(吉良川の榕樹) 宇耳耳にあり。本樹は地上二・三米の周圍四・一米にして、樹の高さ一〇米、推定樹齡四百年。

キラン 宜蘭

【宜蘭郡】 臺灣臺北州二市九郡の一。州の東部に位置し、渺茫たる太平洋に面し西北一帯は山嶽連続して基隆郡及び文山郡に接し、南は宜蘭濁水溪を以て羅東郡に接し、面積約二十三方里、人口九萬七千六百五人。中に宜蘭街を始め礁溪・頭圍・壯圍・員山の一街四庄を包括す。平野は宜蘭濁水溪一帯に半月形に展開し、宜蘭農産の富庫をなす。西境に連る山嶽は金山・鴻子山・五峰旗山・三角崙山・枕頭山・員山・大湖山・阿玉山等にして

キラン 宜蘭

方は砂丘の長汀にして良港に乏しく往時の舟運は見られず、僅に漁船を容るるに過ぎず。宜蘭は清領當時、東海岸地方最初の行政地域となり、嘉慶十五年清版圖に收めらるるや、噶瑪蘭廳を現在の宜蘭街に設け通判一員を以てその統治を司らしめ、その行政區域は北は基隆郡双溪より南は蘇澳郡の大南澳溪に至る間の謂はゆる蘭陽の地とす。その範圍は凡そ現在の宜蘭・蘇澳の二郡に相當す。宜蘭の舊名噶瑪蘭は、此地方に住居せる平埔蕃の稱呼たるカパラン或はカガアラワン(蛤仔港)の譯字、その用字法は諸多にして、葛羅蘭・蛤仔港・甲子蘭等ある中に於て公用名稱としては嘉慶以後噶瑪蘭に一定せらる。ただ漢人はその蕃語譯なるを以て、多くの場合、蘭の一字を以て、蘭地・蘭人等の用法をなし、且つ東海岸を「臺灣」と稱せしより兩者を合して蘭陽なる語に廣く噶瑪蘭に代つて此地の稱呼と轉じ、現に蘭陽三郡なる通稱を有す。光緒元年には宜蘭の佳字を宛てて宜蘭と改稱す。この地方は清領以前、早くよりその存在を知られし、康熙二十三年清朝の臺灣領有當時に於て謂はゆる山後の地にして、撫政の及ばざる蕃界にて僅に漢人はその情況を知り交易を行へり。漢人が蘭陽地方開拓を集團的に行ひしは乾隆五十三年、福建省漳州人吳沙の屯田に始む。かくて富沃なる平野を現在の頭圍庄より順次宜蘭濁水溪に至りしは嘉慶七年

キラン 宜蘭

頃なり。産業は農産を以て第一とし、米三百二十六萬四千八百四圓、蔬菜二十四萬一千三百七十七圓、甘蔗十七萬一千三百三十三圓、柑桔類・芋類・落花生等に四萬八千七百九十九圓餘に達す。畜産は牛・豚等に八十二萬餘圓、家禽十萬六千九百六十三圓。林産は木材・薪炭・竹材等十一萬八千七百三十三圓。工業は製糖精米を第一として總額三百七十九萬三千五百六十一圓に達し、密蝨及び蠶繭・蠶類等を主とす。木産は養蠶・沿岸漁獲高八萬六千二百餘圓。商業は農産價格の上下に左右され居る事情なるも、鐵道の外自動車道路に相當發達せる結果、郡内の配給は圓滑にして、たゞ物貨を西部海岸地方より運搬するに未だ不便を感ず。大正九年地方制度改正に依りその行政區域は現在の如く縮小せられしも、領臺當初明治二十八年六月臺北縣宜蘭支廳、同三十五年五月宜蘭郡署、同三十四年十一月宜蘭廳と改め、その範圍は舊噶瑪蘭廳のそれに等しく、東海岸北半の中心地として重點の置れし結果、現に宜蘭分屯中隊、臺北地方法院支部、專賣局出張所、無線電信局等の施設あり。教育關係は宜蘭農林學校を始め小學校二・公學校十三・分教場三にして、本島人兒童の就學歩合は三五・九〇パーセント。其他四十ヶ所の國語講習所及び教化聯合會を各街庄に設けて本島人の教育に資しつゝあり。氣象は降雨の多きを以て蘭雨と稱し、新竹の

キラン 宜蘭

季節風と共に有名なり。宜蘭最初の居住者はカパラン(蛤仔港)族なり。カパラン族は謂はゆる蕃蕃に屬するものにて、その土俗は今も殆んど全く漢民族化し、言語の如きも極めて少數の老人を除いて蕃蕃固有の語を解する者なし。カパラン族の祖先は口傳に依るにサナサイ(火燒島)に發すると云ひ、最初舟にて花蓮港廳のタツキリ溪口に上陸、一部は南下して今の加禮宛その他の部落の祖となり、他の者は又舟にて北上、宜蘭地方に上陸、分派してこの地方一帯の先住者となる。併して又一部は更に臺北平野地方に至りタマケラン族を形成すると云ふ。大體に於て花蓮港地方のカパラン族、宜蘭地方のカパラン族、臺北地方のカパラン族は同一系統の蕃蕃と思はる。宜蘭地方のカパラン族の形成せし部落は東勢十六社、西勢二十社にして宜蘭濁水溪を分界として溪南を東勢、溪北を西勢とす。清朝の政治の及ぶと共に漢字名を一定せらる。東勢一奇武老・武翠・打朗巷・里老・珍珠美簡・打朗米・至仔港・特務・南搭香・波羅仔仔宛・觀々・吧呢喃・馬老武・加禮宛・留々。西勢一哆囉里連・棋立丹・抵把葉・打馬烟・抵美簡・流々奇立板・龍里目察・抵美福・新那美翠・羅羅・珍仔滿力・龍支領落・新仔翠・奇武老・抵美抵美・踏々・哆囉岸・馬崎・奇蘭武蘭。

キランーキラン

キラン——キラン

宜蘭川を以て遊溪庄に、東は壯開庄に、西南は員山庄に属す。その周囲は謂ゆる宜蘭平野にして良田をなし、面積〇・三〇三方里、人口二六七六〇。いま宜蘭・壯一・金六結の三大字を含む。蘭陽地方第一の都會にして清嘉慶十五年噶瑪蘭廳設置以後、領臺後に於ても此地方各級の中心地をなす。嘉慶の初年頭開庄の開拓をなせる漢人は、その七年蘭の漳州人吳表・楊牛・林盾・簡東來・林胆・陳一理・陳五蘭・泉州人劉德、粵の李先等率丁一千八百十六人を率ゐて此地を占有し五圍を設くと云へば、頭圍を第一起點として此地はその第五の據城たるの謂なり。嘉慶十五年開闢とともにその創設事務に當れる委員蘭事宜楊廷理は本街の舊字三結に其地を卜し、周圍に墻壁を廻し、道光年間には蘭城の偉容備ると傳ふ。産業は農産約二十三萬圓、その中、米の約十五萬圓、蔬菜の約六萬圓以下甘蔗・芋麻・豆類等にして、畜産の約十三萬圓は牛・雞・鴨・豚その他畜類にしてその屠殺價格は三十九萬五千餘圓に達す。工業は製糖精米業の二百六十餘萬圓を筆頭に麵粉・木製品・蜜餞・金銀紙等に十六萬一千餘圓を有す。商業金融方面は一に農村の景氣に左右せられ、商業中心地としての本街は商品の移入乃至臺北方面より取引上の不利を有する結果、不振の状況を呈す。蘭陽の各官衙・公共機關は凡て本街に施設せられ、その機能は東海岸を

花蓮港と二分するの觀あり。郡役所・分屯中隊・法院支部・專賣局出張所・無線電信局・刑務所支所・州立農事試驗場支場・農林學校等はすべて本街にあり。其他、臺灣銀行・商工銀行・三和銀行各支店等の金融機關が置かる。(宜蘭神社)員山庄外員山に鎮座。天照大神・大國魂命・四神一尊を祀る。明治三十九年宜蘭公園内にありしを、大正七年現位置に移す。〔孔子廟〕大字頭門にあり。同治八年起工、改築當時噶瑪蘭院に使用せられたるも同四十年大改修を加ふ。蘭陽地方唯一の文廟にて地方教育の中樞として遊遊の地に於ける科舉應試者は本街の文昌廟及びその隣の考棚に於て幾多の秀才を輩出せり。(天后宮)大字頭門にあり。天上聖母(媽祖)を祀り、嘉慶十六年の創建たり。(城隍廟)大字頭門にありて郡城の隍水の神なる城隍を祀り嘉慶十八年の建立。(文昌廟)大字頭門にあり、文昌帝及び關聖帝を祀り嘉慶十二年の建立とす。(東嶽大帝廟)大字頭門にあり。東嶽大帝を祀り成豐七年の創建たり。(宜蘭公園)大字頭門にあり。園内に領臺以後、蕃人・土匪の討伐その他に殉難せる諸氏の忠魂碑を始め、本島人愛女の保護を請ふる道光二十年碑等多數を有す。(宜蘭溫泉)宜蘭神社の附近、員山庄内員山にあり。風光佳く、泉質極めて純潔なり。〔宜蘭平野〕臺灣東北部に位する一平野

にしてヒヤオン鞍部に發したる宜蘭濁水溪の小流が作る見事なる扇狀地と、同河が平地に入り、無數に分流して形成せる沖積地との複合アルムである。西北は宜蘭斷層層に接し、南は中央山脈の北邊に達り、東は太平洋に面して海岸の平沙となり、形狀はほぼ三角形を呈す。面積約三〇〇平方軒、海岸の砂丘、潟湖の並ぶ低濕地と、西部亂流地との中間地方に良好なる耕地發達し、水利の便と相俟ちて、米・甘蔗・甘藷・果實・蔬菜・芋麻・黄麻等の栽培盛んに行はる。殊に米はその雄なるものにして、臺北州下第一の米産地を以て著され、宜蘭・羅東兩郡の作付面積は州下の三分の一を占む、甘蔗また州下第一にて、羅東郡五結庄二結の昭和製糖工場に原料を供給す、都邑はこの中間地帯に位し、頭圍・遊溪・宜蘭・羅東等を主なるものとなし、八堵より分岐せる宜蘭線また此等の諸邑を縫うて走り、東南端の蘇澳港に達す。氣候は臺北附近と大差なく、氣温平均二十一—二度、冬期は北東季節風が正面より吹來つて細雨連日に及び新竹市の風とともに竹風雨の稱あり。雨量は一般に二五〇〇—三〇〇〇毫の間にあり、夏季は概して雨量少し。此地の開拓は臺北平野との間に峻険なる山脈を以て隔られたることに由り、著しく遅延し、漸く乾燥の末葉(一七九〇頃)に至り漢民族なる漳州人吳沙が東北端の頭圍に上陸し、爾來徐々に南

下し、二圍・三圍・四圍・五圍(宜蘭)を形成し、先住民たる土蕃を迫りてこの平野を開墾せしに係る。現在この先住民は謂はゆる平埔蕃(熟蕃)として漢民族化し、部落をなして多數點在す。〔宜蘭濁水溪〕臺灣東北部の一河。源をヒヤオン鞍部に發し、中央、次高兩山脈間の隘谷を東北に流れ、大なる扇狀地をなし、その上を數多細流に分派し、扇狀地末端二結附近にて再び合流して本流と宜蘭川の二流となり、河口附近にて更に合一して東港口に至り太平洋に注ぐ、延長約七〇軒、もと八哩沙嘴(領臺後埔を削る)と稱せしが、流水常に混濁せるを以て濁水溪と名付く。〔宜蘭川〕臺灣東北部にある宜蘭濁水溪の一支流。宜蘭斷層層に沿うて流れ、宜蘭街道附近にて街の北を廻りて南流し、東港に至り濁水溪本流と合して太平洋に入る。往時は冷水溪と呼ばれ、海岸に沿うて北流し頭圍に至るを主流とせしが、光緒十九年(一八九三年)の洪水に際し、現在の如く河流の變遷を見る。〔宜蘭線〕臺灣總督府鐵道部線の一。臺灣の東北部にあり。臺北基隆市にある縱貫線基隆驛より起り基隆郡七堵庄にある八堵驛にて縱貫線より分れ、東方の瑞芳庄・雙溪庄・貢寮庄等を過ぎるや南方に向ひ宜蘭郡の頭圍庄・遊溪庄・宜蘭街・羅東郡の五結庄・羅東街・冬山庄等を経て蘇澳郡に入り蘇澳庄に通す。延長約六

二哩。工事は南北兩端より工を起し、蘇澳—宜蘭間は大正八年三月、八堵—瑞芳間は同年五月開通、宜蘭—大里間は大正九年十二月竣工せり。然して瑞芳—大里間は本線中、最難工事の區域にして、種種苦心の結果、同十三年に至りて漸く全線の開通を見たり。

霧

【霧山】岩手縣西磐井郡一關町の西北方約一八軒に當る一峰。岩手縣瀧澤郡衣川村字上衣川の西方に峙つ。西斜面より衣川の一支流流す。頂上を霧城と呼ぶ。これば昔この山頂に修造道場ありしにより禪定の訛なりと考へらる。封名名蹟志に依れば此山は常に霧立ちこめれば霧山と云ふなりと。東麓に洞あり、昔夷、賊の據りし所なりと傳ふ。幸若舞曲、高僧云「きり山高嶺の残の雪消え、谷のつららも融けぬれば、衣川の水蒸騰つて、奥方軍兵を、得處が軍刀にて、湯をさいて斬り流す、斬り流す、云々」

キリ——キリコ

【霧ヶ峰】富士火山脈八ヶ岳火山群に屬し、中央本線上諏訪驛より東北方約八軒に當る。長野縣諏訪郡四賀村・上諏訪町・下諏訪町の二町一村境界に横がり、勾配緩徐なるも角閃石安山岩の溶岩臺地を云ひ、標高一八〇〇米内外。一般には東稜の車山(九二五米)を頂心とする高原一體を云ふ。東稜は南北走する大門街道に當る大門峠最高點(四四七米)を経て霧科山(二五三〇米)・八子ヶ峰(一八三四

米)に續き、西北は霧ヶ峰(一七九八米)・和田峠最高點(一五三一米)に達す。南斜面より上川の一支流流して南走し、北方に鎌ヶ池・八島ヶ池あり。夏季のキヤンプサイド・ハイキングコースの中心のスキーゲレンデ・スキーコースの冬心地として親まらる。特にスキー場として名高く、高度一七〇〇米附近に緩急各種の好スロープあり。雪質も理想的なるパウダースノーにして、十二月中旬より翌年四月頃までのスキー期間には常に一米以上の積雪量あり。霧ヶ峰・和田峠方面へのスキーツアーは特に稱揚せらる。いま車山の下に収容力二五〇名の霧ヶ峰ヒュッテ設けらる。南麓には上諏訪・下諏訪の温泉湧き、官幣大社諏訪神社本社鎮座す。登山は多く上諏訪町より角田新田、或は北大鹿峠を経て行はれ、また西北方和田峠方面より登高せらる。

【霧ヶ峰】富士火山脈八ヶ岳火山群に屬し、中央本線上諏訪驛より東北方約八軒に當る。長野縣諏訪郡四賀村・上諏訪町・下諏訪町の二町一村境界に横がり、勾配緩徐なるも角閃石安山岩の溶岩臺地を云ひ、標高一八〇〇米内外。一般には東稜の車山(九二五米)を頂心とする高原一體を云ふ。東稜は南北走する大門街道に當る大門峠最高點(四四七米)を経て霧科山(二五三〇米)・八子ヶ峰(一八三四

キリイシ

切石

【切石】山梨縣南巨摩郡にありし村。明治二十五年靜川村と改稱。【霧ヶ石峠】濱松市の北々東五〇數軒に當る峠。最高點は愛知縣北設樂郡富山村・豊根村の村界に跨り、標高約一〇〇〇米、基體花崗岩より構成せらる。東南稜は日本ヶ塚山(一〇七米)に達す。西方峠下を天龍川支流大入川南流し、東方に天龍川本流南流す。天龍川河畔富山村河内より大入川河畔豊根村大立に至る山道に當る。

キリガヤ

桐谷

【桐谷】東京市品川區西大崎町の舊稱。もと在原郡大崎町の大字名なりしも、大崎町が昭和七年東京市城郭擴張により品川町・大井町と共に品川區を成すに當り、桐谷は西大崎町一丁目・二丁目・三丁目と改稱せらる。此地は和名抄在原郡御田郷の地に於て、古くより發達し足利氏の中世以後、鎌倉の山内・上杉の有となり次で小田原北條氏に歸し、北條氏亡ぶるに及び徳川氏の領有となる。大崎は寛文十一年四代將軍家綱の時に品川宿の一部を割きて大崎村を置きたるに始まり元禄十一年に上下の二村に分る。桐谷の創始も此の前後にありしものならんも年代詳かならず。而して大崎・居木橋とともに品川領に屬しともに幕府の直轄支配地たり。明治二年品川縣の管轄となり、同四年東京府の所轄となり、同二十三年上大崎・下大崎・谷山・居木橋・白金

キリガフ

斷株山

【斷株山】阿蘇火山脈の一峰。別府市の西方約二五軒、萬年山(一四〇米)の西方約四軒に當る。大分縣玖珠郡の西方玖珠町字山田に峙つ。標高六八五米。山體輝石安山岩より構成せらる。山容さながら斷株の如し、因りて山名出づ。南麓に萬年山を仰ぎ、北麓は西流する玖珠川に限らる。

キリガン

吶里岸

【吶里岸】臺灣臺北州の茶昆所たる火車站あり。臺北投庄の大字。往昔この地方がタタカラン蕃族の聚居せし處なるも、清領臺の後より乾隆年間漢人次第に此地方に侵入し來りて附近を開く、現に字石埭の警察官派出所内に残れる石碑は當時此地に住せし蕃人と漢人との交渉を知るべき資料として珍しく、その内容は漢・蕃の境界を定め、漢人の蕃界を侵すを禁する旨のものなり。大正九年十月の地方制度改正前、この地は北投區六庄の一なりしも改正後北投庄中の一大字となる。石碑に依れば此地は往時淡水河岸なりしと云はれ、依之觀之、淡水河は當部落附近まで延長し一大湖を形成し居りし如し。吶里岸の名は西班牙人が北部臺灣を占居せし時、此地を採掘し、其地形が比律賓群島中、呂宋の西北に在るタタカランに酷似し居たるに依り名付けたりと云ふも詳ならず。吶里岸は此附近に於て最も早く開けたる地にして、淡水廳志(同治十年)にも淡水開墾自奇里岸始旨の記事あり、現在一小部落に過ぎず。また淡水廳の吶里岸驛(大正四年設置)あり。

キリコ

切木村

【切木村】佐賀縣肥前國東松浦郡の中央部。東は唐津市、北は佐志町。

有浦村、西は入野村に隣接し、西南は海式多島海を隔てて福島に對し、東南は西松浦郡波多津村に境す。海岸に湯野浦、松野浦・大浦等の小入江多く、漁業行はる。〔芳谷炭坑〕海軍省備備炭田時代は大小の炭田開採せしが、明治十九年竹内以下の共同開採となる。附近を買収併合して七萬餘坪となり、鬼塚村大字山本小字鹿ノ口まで大八車にて運炭し、唐津東港まで松浦川の河船に依り。同二十三年中野に第二坑を開き、松浦川畔まで輕便鐵道を敷設せりと。最近産額は相相炭坑と合して、三十六萬餘噸なり。

キリシマ

桐島村 新潟縣越後國三島郡の北部。東は大津村・奥板町に、南は島田村に、西より北は出雲崎町・寺泊町に各々隣接す。東南部は低山性の丘陵を成すも西部を島崎川南流し、其沿岸は低平にして水田拓く。主産業は農にして米を多産し、繭の産これに次ぐ。省線越後線及び里道西南より東北に村内をほぼ並行して前者の小島驛に近く交通便なり。大字根小屋の地は東南方陣ヶ崎の麓にあり、陣ヶ崎には陣城の跡あり。根小屋の名も陣城の臥小屋ありしより起る。北越軍記に、天文年中黒田和泉守秀忠、新山岩に據守したる由見ゆ。或はこの根小屋の事をいひしものか。大字島崎陣城寺境内に奇僧良寛の墓あり。良寛は俗姓山本氏、俗稱兼藏。越後國出雲崎の名主左門の長子。幼にして孤異、流俗の事を

キリシマ 霧島

七十五歳にて歿す。【霧島山】 大瀧根山(福島縣)の別名。【霧島山】 南九州、鹿兒島・宮崎縣境に跨る活火山にして、東方宮崎縣側に北より南にかけて西諸縣郡諸市村・加久藤村・飯野村・小林町・高野村並びに北諸縣郡西嶺村・山田村・高崎村に屬し、西方鹿兒島縣側は北より南にかけて始良郡吉松村・栗野町・牧園村・霧島村に屬す。霧島火山脈の東北端に位しその型主なり。單式火山の密集形式による典型的群狀火山にして、大小二十二座の火山、完全なる火口十五個、火口湖八、爆裂火口八、破氣孔・蒸氣孔十五個、温泉數十を算す。西北方より東南にかけて長き橢圓形の山麓を示して發達し、諸峰頭は略々長軸の方向に排列す。即ち西北方よりトロイテ型の飯盛山(八四六米)・栗野岳(一〇九四米)・コニテ型の白鳥山(三三九米)・韓國岳(一七〇〇米)・新燃(一四二二米)・大瀧池・矢岳(一一三二米)・高千穂峰(一五七四米)・御池の諸岳連繫す。これ等は比較的大なる火口を有し、火口に湛水するもの尠からず。大瀧池・大瀧池・御池はその中の著大なるものとす。前記排列は斷層が火山基底に伏在するを暗示するもの如し。されど更に詳細に觀察すれば前記の線に直交する東北方より西南方に走る一線ありて、橢圓の短軸の方向に通過するを見る。即ち夷守岳(一三四

數回に亘りて爆發あり。大正二年の本には御鉢大噴火し、同三年一月の櫻島大噴火の先驅をなせしが、櫻島大噴火とともに勢衰へたり。されど御鉢は今もなほ活動をつづく。西北方の硫黄山にはいま硫黄孔あり。此等の諸峰よりする展望は廣闊雄偉にして、霧島の諸峰の特色ある相貌と、南國的情緒豊かなる山麓の景観とを収め、殊に西南方鹿兒島灣に浮ぶ盆量の如き櫻島の下瞰は欣賞に値す。諸岳は優美なる裾野と高原とを有し、山腹一帯は南國には珍しき櫻・梅など針葉樹の原始的森林に掩はれ、山頂附近には映山紅(マヤマキリシマ)の大群落あり。開花期の美観は霧島の一特色をなす。山中よりは大小幾多の溪河發源し、東流する大瀧川、西流する川内川、南流する新川に朝宗し、景観に變化と雅趣とを與ふ。霧島温泉群は山の西南部中腹、標高七五〇米前後の地點に散在す。硫黄谷・明礬・榮之尾・林田・丸尾を主要泉とし、その他硫黄・栗川湯・關平・針投・太良・新湯・手洗湯・湯之野・殿湯・湯之子の數十泉湧き、泉質も種々にして、硫黄・明礬・鹽類・含鐵・炭酸等の諸泉あり。東霧山型主高千穂峰並びに西霧島山主峰に就き附言すれば次の如し。高千穂峰は天孫降臨の靈峰と傳へられ、其故に最初峰とも云ひ、また頂上に「天の逆針」あるを以て針峰とも稱す。我國神代史・建國史に深き交渉を有し、考古學上・民族學上

キリシマ——キリシ

幾多の遺跡を遺す。山容玲瓏壯麗なるも快晴の日には峰頭絶えず雲霧に掩はる。頂上は方二米程の平地にして、此處は天孫降臨の御遺跡なりと信ぜられ、皇孫が神勅を受けらるる時授かり給ひしものと傳へらるる「天の逆針」あり。但しこれに就きては、神代第一たる諸册二神の天瓊鐘と云ひ、或は景行天皇が日本武尊に與へ給ひし比良木八尋針なりとの説もあり。針は六・七〇程の木桶の中に青味を帯びて錆び、小石に埋り、その一部を地上に表す。他にも鐵形・針の寄進あり。古より文人墨客等の登頂するもの尠からず、新井白石も「下野無際日視而兩脚下伸」と述べたり。山頂よりの展望は雄大にして、殊に西南方櫻島・開國岳の山々は宛ら盆石の如く、さては際涯なき太平洋上に浮ぶ薩南十島の島山の遠望は、蒼茫として無幻境にあるの感あらしむ。西霧島山の主峰にしてまた霧島火山の最高峰たる韓國岳は、日本書紀に「骨穴之空國」とある「空國」を、カラクニと呼び馴れしより、山名出でたりと云ふ。山麓の徑人はカンコト岳とも呼ぶ。古事記天降の段に「韓國に向ひ笠沙の御前を渡通りて、朝日の直刺國夕日の日照國、かれ此地ぞ其吉き地」と詠ひきとある韓國とは此山なるべし。山麓針葉樹の原始林に掩はれ、西麓は新床官林・北麓は白鳥官林をなす。山頂にはほぼ圓形の火口あり、直徑約九〇〇米、深さ約二〇〇米乃至三

〇〇米にして、急崖は熔岩垂壁して凄絶たり。火口内への下降は可能なれども、雨期には湛水あり。山頂より眺望は宛も月世界の表面を見る如く四圍に火口湖數多散在し、西南斜面の大瀧池を最大とし、東斜面の大瀧池これに次ぐ。遙か西方方には太平洋上に浮ぶ屋久島・宮の浦岳を遠望し、西南方脚下には鹿兒島灣岸なる櫻島・開國岳を指し、北方は遠く市房山麓を望見す。尙この山よりの御來迎は霧島第一と稱せらる。春の櫻開は名高く、秋の紅葉に探勝者も尠からず。西南斜面の大瀧池は標式的火口湖にして、直徑約一〇〇〇米、火口壁の最も高き箇所は水面より一七三米、千古の碧水を湛へ、水深一〇米前後なり。内陸の急崖は櫻・梅等の針葉樹に山毛櫨・水楡等の混生する原始林に掩はれ、幽幻神祕の感を與ふ。春の櫻開・秋の紅葉・冬の霧氷のほか、夏日池畔にてキャンピング生活をなす。池上にスケートを試むるは最も興趣深し。この池に美女お浪の傳説あり。霧島登山には通常霧島温泉より行ける。温泉へは肥薩本線牧園驛より約一六軒、自動車あり。途上驛より緩かなる牧草地の高原を約一二米登りて鹿兒島種馬所あり。温泉より高千穂峰まで約一二軒。明礬湯・湯之野湯を経て、溪谷に沿うて森林帯を登れば熔岩壁帯に出で、これより馬背越なる急崖を攀れば御鉢(眞鉢)の左側に達し、東に半周して高千穂峰と

の鞍部より登臨す。韓國岳へは温泉より約八軒。途中約四軒にして大瀧池あり、附近一帯はマヤマキリシマの群落跡に美し。このほか高千穂峰登山路としては西南麓肥薩本線霧島驛よりするものあり。霧島神宮まで約八軒、途中原生林あり。また東北麓日登嶺高野驛より高千穂峰に登高せられ、山頂まで約一四軒、途中約六軒被川まで自動車を通ず。なほ高千穂峰より韓國岳への縱走は多少の困難はあれども興味深く、約一二軒五時間前後にて完了す。霧島山は阿蘇外輪山の雄大なるも中岳噴火口の遺害とを缺くと雖も、その山容の優麗崇高にして變化に富み、山頂部に於ける映山紅群落の美観並びに四圍の雄大なる展望、中腹なる原始的森林および數十の温泉群、加ふるに高千穂の靈域、霧島神宮の鎮座あり。登山の價值、決して阿蘇山に劣らずと稱し得らる。いま霧島國立公園に指定せらるるも宜なりと云ふべし。薩摩歌「下」あれ見さいな霧島山の横雲、このなん／＼の横雲、横雲の下こそ己らが親里」

キリシ——キリシ

山・飯岳・白鳥山等を抱擁する霧島山麓の山麓を繞るほゞ圓形の線をなす。この霧島山麓は大小十二箇の密集山岳より成る群状火山にて、然も特色ある火口十五、火口湖八、爆裂火口八を有する。こ

白鳥神社等の靈地存す。此等自然の素質に加へて山間山麓各地に霧島温泉・湯之野・新湯・手洗・飯ノ湯・白鳥・蝦野等の諸温泉が湧き利用の好根拠地とせらる。本公園は氣候極めて温暖なる九州の最南部に位置する故、四季を通じて觀光・社寺巡禮・登山・自然研究・温泉浴等あらゆる方面の利用に適することは国立公園として大なる強味と稱し得。〔主なる勝地〕

舟遊の設備あり。その西南に小池あり。(ハ)霧島東神社 御池の西北に近く位置す。崇神天皇の御代の創建にて伊弉那岐命・伊弉諾美命以下の九神を祀る。二ツ石を經て高千穂峰の登山路が通す。(ニ)新湯・中岳 頂上附近はミヤマキリシマの最も多き地帯にて、五月下旬より六月上旬にかけて全山真紅に染る。新湯には直徑約七五〇米の火口あり。狹野または霧島温泉より徒歩にて約三時間、新湯の東北大橋山の北山腹に大橋池あり。略々圓形の火口湖、附近に夷守岳・丸岡山あり。ミヤマキリシマ・ツツシ類多し。その下方には小野宇都温泉あり。(ト)霧島 霧島山の最高峰、標高一六九九米、直徑九〇〇米の圓形の火口あり、高千穂峰に對して好一對なる雄大無比の大展望を恣にするを得。霧島温泉より徒歩約三時間、蝦野・獅子戸より約一時間にして達す。(チ)大浪池 直徑約七〇〇米の圓形の池、標高一四一〇米の火口壁より約一七〇米の下方に紺碧の水を湛へ湖中には常綠闊葉樹鬱蒼として繁る。池中には鯉魚を行ひ冬季はスケートを樂しむを得。霧島温泉より約一時間餘。(リ)霧島温泉 霧島山の南山腹にある温泉群。明紫・硫黄谷・榮之尾・林田・丸尾・栗川等の温泉を含む。宿泊の設備完備す。錦江灣・櫻島の眺望頗るよろし。霧島神社よりバス四十五分、又は牧園驛よりバス五十分。霧島温泉の東南に湯之野温

IIIAD

泉あり。泉量頗る豊富にて霧島神社に引湯さる。湯之野の上方に新湯あり。(ヌ)手洗温泉 栗野岳と霧島温泉との中間にあり。一帯は隱所に泉質の異なる熱湯涌出して炊事に利用せらる。附近には温泉を湛ふる湯ノ池を始め、金湯・銀湯・鉾投・關平・大良等の諸温泉あり。(ハ)蝦野 霧島山麓の高原にして將來公園西部の根拠地として發展性あり。蝦野の海岸の自生地は指定天然記念物。蝦野湯・カサ湯等の湧泉もあり、露天風呂は古くより利用さる。附近に硫黄精錬所あり。(チ)六觀音池と白鳥神社 六觀音池は一名御池といひ、池畔の六觀音は牛馬の神と傳へられ、毎年五月八日盛大なる祭典行はる。一帯はツ、シの名所にて附近にびやくし池・不動池の火口湖あり。池の西北に古くより知らるる白鳥温泉あり、その近くに日本武尊を祀る霧島神社遺跡あり。境内には立派なる松並木あり。(リ)栗野岳温泉 栗野岳の西山腹にあり、岳の湯とも呼ばれ大噴氣孔あり、九州最遊の地として記念さる。栗野驛より自動車約四十分。(交通と觀光コース)本国立公園は宮崎市より八〇餘軒、鹿兒島市より四〇餘軒に位置し、例軒も直通バス及び汽車にて二時間乃至三時間半にて到達し得らる。本公園への主なる入口を掲ぐれば次の如し。(イ)日豊本線霧島神社驛—鹿兒島方面、又は別府・宮崎・都城方面よりの入口にして、霧島神社までバス

十五分、霧島温泉まで約五十分。都城より霧島まで直通バス。宮崎より小林まで直通バスの便あり。(ロ)肥後線栗野驛及び牧園驛—栗野驛より栗野温泉までバス四十分、牧園驛より霧島温泉までバス約五十分。(ハ)吉都線高原・小林・飯野・加久藤・京町各驛—高原は高千穂峰・狭野神社・御池方面の入口、他は大橋池・蝦野・白鳥神社等公園北部一帯の探勝の入口なり。小林より高原を經て狹野神社、霧島東神社・御池及び霧島神社へのバスの便あり。飯野・加久藤・京町方面よりは白鳥温泉まで自動車を通じ他はそれら山麓まで自動車を通じ得る。本公園觀光の宿泊根拠地としてに既述の諸温泉を利用し得るが、その中、宿泊施設の完備せるものは霧島温泉・霧島神社・湯之野・手洗湯・栗野岳温泉・白鳥温泉等。この中、湯之野・手洗は自炊會の少。觀光コースは種々考へ得るが、主なるものを次に掲ぐ。

一、霧島神社—高千穂峰—湯之野—霧島温泉(又はこの逆コース)所要時間約七・八時間
二、高千穂峰—湯之野—高千穂河原—霧島温泉(又はこの逆コース)所要時間約七時間
三、霧島温泉—大浪池—霧島神社—白鳥—飯野—加久藤(又はこの逆コース)
四、狹野—皇子原—新湯—新湯—

一、霧島温泉(又はこの逆コース)はミヤマキリシマ見物のコースとして最も一般的なもの、所要時間は六・七時間
五、霧島温泉—手洗温泉—湯之池—栗野岳温泉—栗野(又はこの逆コース)
六、高原—狹野神社—皇子原—高千穂河原—高千穂峰—二ツ石—御池。このコースは高千穂登山コースとして最も容易なるものの一。
七、霧島温泉—大浪池—霧島神社—新湯—高千穂峰—高千穂河原—霧島神社又は狹野神社。
【霧島村】鹿兒島縣大隅國始良郡の東北部。西は牧園村、日富山村に、南は岡分町・清水村に隣接し、東南は鳴響郡に境し、東より北は宮崎縣北諸郡・西諸郡に界す。東北部縣境には霧島山の諸峰及び高千穂峰屹立し、その山腹は何れも村内を南下し村内諸所に丘陵を起す。概して山地に屬するも南部に稍々低地ありて水田拓く。新川の上游、村の北部に發して西北境に沿うて南流し、その支流は東南部に發し南境を西流し何れも灌溉に便す。主産業は農にて米を主産し麥・蕎麥の産これに次ぐ。また林業行はる。日豊本線通じて北水野田(昭和七年設置)・霧島神社(昭和五年設置)の二驛を設く。本村の地は霧島国立公園の内なり。古くは和名抄、鳴響郡鳴響郷の内に屬せしもの

の如し。もと東栗山村と稱せしが昭和十一年七月霧島村と改稱す。明治十年西南役の古戦場なり。村内に神宮温泉あり、霧島山の中腹なる湯之野温泉より約四軒あり引湯せるものにして、泉質は鹽類泉なり。(霧島神社)大字田口に鎮座。官幣大社。祭神、天鏡石國鏡石天津日高彦理杵尊。始め日向國諸郡に屬して霧島神社と號し、また霧島ノ神とも稱せり。蓋し霧島山上にあるを以てなり。なほ高千穂二上ノ峰とも云ふ。故に本宮・千穂神社等の稱もあり。二上ノ峰は東西二峰に分れるより起れる名にして、その東峰は日向國諸郡に屬し、西峰は大隅國始良郡に屬す。日向國諸郡の霧島神社の社傳によれば、上古は高千穂山の絶頂なる東嶽、俗に謂ふ矛ノ峰と火常峰との間なる瀬戸尾に鎮座ありて、天永三年、仁安二年に山上噴火に依りて社殿災厄に罹りしも、神像は恙なく舊の如く坐したり。文暦元年十二月二十八日三度の震火に社殿並びに別當寺焼亡す、此時も神像恙なかりしも、用水潤滑のため瀬戸尾より乾方十八町餘の山下霧島王子なる本社に遷座、降りて享保元年九月二十六日に山上また噴火して數日熄まずして、殿宇すべて烏有に歸す。因りて神體を奉じ小林郷の麓なる岡原の假宮に遷し、同十四年、現在地に鎮座せるものなりと云ふ。また當社も霧島山敷度の噴火に由り村上天皇の御宇に彼の瀬戸尾より遷座ありし由社記に見えれば、二者ともに初めは同殿なりしなるべく、のち日向と大隅の二國に分祀せるものなるべし。從世に霧島神社と稱するもの六社ありて、俗に六所權現・六社權現と稱せらる。六所權現の稱呼は古く長門本家物語・卷四の治承二年六月十五日少將藤原成經霧島神社參詣の事を云へる條にも見え、一説にもと瓊々杵尊・彦火・出見尊・鸕鷀草葺不合尊・神大日尊彦彦尊・國常立尊・國狹狹尊の六神を合祀せる故をもつて、この稱ありと云へり。承和四年八月官社に預り、天安二年十月二十二日從四位下を授けられ、延喜の制に依りて式内小社に列す。明治七年十二月十五日社名を霧島神社と改め官幣大社に列す。社殿は霧島山の中腹にあり、正徳五年藩主島津家の造營せしところなり。例祭、九月十九日。(止上神社) 大字重久に鎮座。郷社。祭神、彦火・出見尊・豐玉尊命・瓊々杵尊外三神。創立年月は詳かならざるも、地理纂考に、景行天皇この神の御授成により鎮座を平らげ給ひし故に創建ありしと云ひ、始めは尾車籠米にありしを、數百年前に今の處に遷し祀るといふ。藩主の崇敬厚く、神領も亦多かりき。例祭、二月二十三日。

IIIPI

【霧島神社】日豊本線の一驛(昭和五年設置)。鹿兒島縣始良郡霧島村にあり。キリシケ 霧島 福國縣金敷郡にありし村。明治四十年本村及び皆根村・朽

キリシ——キリタ

キリタ ー キリハ

桐村・芝浦村を廢して新たに曾根村を置く。昭和九年に曾根村は町制を布く。

キリタフ 霧多布 北海道厚岸郡にありし村。明治三十九年四月中村と改稱さる。

キリツミ 霧積

【霧積】群馬縣上野國磯米郡坂本町の大字。この地に霧積温泉あり。泉質は硫酸。地は磯米嶺の麓を廻る山形明細の境にして海拔一八〇米、標高より約二〇米ばかり高く、夏期は蚊咬を用ひず。最近キャンアの好適地として知らる。昔一重藤、犬の傷つきてこゝにて治するを見て発見せりといひ、爾來、一名犬ノ湯とも稱せられ、外傷に效くといはる。特に長時間浴するを以て良とされ、一回の入浴時間を五時間乃至十時間とし、殊に火傷の時は終夜浴槽に浸る者あり。

【霧積山】長野縣北佐久郡藤原津深の東北方約五軒、信越線横川驛の西方約四十軒に當る。群馬縣磯米郡坂本町に時、標高一〇七・九米。西南方に子持山(一一〇米)隆起し、西北方に鼻山(一六五四米)時つ。北に針ノ峰(一四二九・六米)・角落山(三三九六米)に連る。東北方側ノ峰との場合より霧積川發して東南流し、その源流地に霧積温泉湧く。西南方子持山との場合より霧積川の一支流として東南流し、その水源地に津深・磯米の二湯からる。磯米嶺の北方に連る一峰にして、秋紅葉の美を以て知られ

また標高津・磯米嶺・霧積温泉なるハイキリノコトに當る。

キリノ 桐野 省線桐野線の一驛(明治三十五年設置)。福岡縣鞍手郡宮田町にあり。

キリノイ 桐井

の運華王院(今の三十三間堂)の東南にありし井。井邊に桐木ある故の名あり。この邊は太政大臣藤原爲光の宅地にて多樹を植ふしといはる。爲光の女祇子、花山天皇の女御となり君臨を集めしが病みて卒す。秀光、悲しみに塔へ一寸寺を建て法住寺と號す。のち鳥羽・後白河兩法皇の離宮となり法住寺と稱す。

キリノジョー 桐ノ庄

府船井郡にありし村。昭和四年、本村及び岡部町・岡部村を廢し、新たに岡部町を置く。

キリノト 霧ノ塔

山群中の一峰をなす。神樂ヶ峰(新湯峯)の別稱。

キリハタ 切畑村

大分縣豊後國南海部郡の中央。東及び北は佐伯町、西南は直見村、西は中野村に各隣接す。村の中央に西南より東北に因尾川の支流注出し、沖積地あり、東南と西北は山由にて西部に左間ヶ岳あり。日豊本線は村の中央を東北より西南に通ず。木炭・紙・竹細工の特産物あり。(八坂神社)大字江良字紙間川に當る。神社・祭神、建速素戔鳴命・素戔川比賣命・須勢理比賣命・佐伯命

三三三

治外敬神。創立年代不詳。もと紙園社と稱す。領主の崇敬社にて、また近郷の産土神。祭神中、佐伯惟治は大永年間榊本陸山の城主、何れの世にか本村字竹田の前に祀りしをもち本社に合祀す。例祭、三月十五日。

キリハラ 桐原・切原・霧原

【桐原】省線越後線の一驛(大正八年設置)。新潟縣三島郡大河津村にあり。【切原村】長野縣信濃國南佐久郡の西部。白田町に西南隣し、北には大津村・前山村、南には栗村あり。豊科山火山の東北斜面に當り、西南境の高度一八七二米に達す。大岩穴の南、源左衛門庄の西には廣き緩斜面あり。北部の小田切川の河口附近には乾田あり、且つ小田切新田は野澤の扇状地の扇頂に當る。米・蕎麥・薯蕷人蔘・瓦・薪木細工・馬・材木等を産す。本村は湯原村・上小田切村・中小田切村・中小田切新田村の諸四箇村を合して置けるものにして、湯ノ湯・麻降・城址等あり。(泉龍寺)大字中小田切にあり。曹洞宗。豊玉山と號す。本尊藥師如來。上州磯米郡後開村長源寺末。元祿九年の創建、開山は長源寺第八世爲堂和尚なり。徳川時代十五石の朱印を附せしが明治維新後上地す。【切原・霧原・桐原】信濃國(長野縣)の牧場として古來有名なり。拾遺集「建坂の園の岩かとふみならず山立ちいつるさよりはらの胸 大武高道」とあるも其位置

詳かならず。東筑摩郡八山邊村の大字に桐原あり、或は關係あるものか。武道傳來記に「毎年信濃國桐原のさとり賣馬引せて彌太夫といふ馬口勢、播州立野に立超ける」太平記續編二「あら面白の牧狩や、三津の御牧か鳥養牧か、信濃に望月霧原牧」

【桐原村】滋賀縣近江國蒲生郡の北西部。八幡町の南隣にして丘は変形をなし、東北は金田村、東南は馬淵村・鏡山村、西北は岡山村、西南は野洲郡藤原村に隣接す。面積八・六四平方軒。湖東平野の一部にて土地平坦、全村殆ど田地をなし、米の産最も多く外に生糸(蠶繭)・麥・粟・糠・桑葉・茶等を出し、また絞染・竹葉手の特産あり。中山道と省線東海道本線藤原驛に近く交通不便ならず。古くは岐利渡船と稱され、中世の桐原郷または桐原の庄の地なり。本村は熊澤善山の青年時代七ヶ年を修業に過したる處。(上野神社)大字安養寺にあり。村社。祭神健甕須佐之男命。桐原七郎の産土神なり。雄略天皇の御代、蒲生郡物忌高比古なるもの神籬を築きり箭を齎せざる雲馬なりと傳ふ。國寶、素戔鳴尊像・大己貴命立像・菅原道真像の三軀は鎌倉初期の作。(光照寺)大字森尻にあり。天台宗眞盛派。草創及び沿革不詳。本尊木造藥師如來座像は國寶、藤原末期の作と推定せらる。(莊嚴寺)大字安養寺にあり。淨土宗。寺傳に當寺に初め安養寺と稱し

天台宗に屬せしが、元龜二年後醍醐天皇の兵燹に燒失せり。のち管領足利長九郎、一字を建てて阿彌陀如來を安置し莊嚴寺と號し淨土宗に改む。天明中再び燒失し現在の堂は明治四年の建立。境内釋迦堂安置の釋迦如來立像一軀(國寶)は木造、清涼寺式釋迦・鎌倉末の作。聖觀音像一軀(國寶)は木造、山越觀音像と傳へ、俗に聖母までの作にて、衣褶を作らず、口唇・眉目・髻等を木地の上に彫り、厨子内に安置して下部を山形を以て覆ふ。本體は藤原本の作。破損佛を以て山越佛院に擬せしものならん。空也上人立像一軀(國寶)は木造、鎌倉末期の作なり。

キリフ ー キリユ

キリフ 鎌倉末期の作なり。
キリフリ 霧下山 龍玉山(徳島・香川縣境)の別名。
キリベ 切目村 切目川村
キリベガワ 切目川村
キリメ 切目・殺目 古くはキリメとも讀めり。

次たり。いま省線紀勢西線通じて大字島田に切目驛(昭和六年設置)を置き交通不便ならず。古くは殺目・切部とも書き、今の切目村・切目川村邊一帶の汎稱なり。萬葉集に殺目山の名見ゆ。本村は熊野街道の切目驛にて、有名なる切目王子のあり。中古熊野詣の盛なりし頃、後鳥羽院を始め、貴神の詣づるもの多く、保元物語・平家物語・太平記などに其名屢々見ゆ。平治物語に、平治元年十二月十日の曉、六波羅より立し早馬切目の宿にて追付たり、大武高道は熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳上る云々とあり、高道この報を得てその子重盛と急ぎ京師に入りしは、汎く人の知る所。また大塔宮(護良親王)熊野に遊れ給ふ時この社に御祈願ありて神の御告により道を十津川に轉じたりといふ。太平記・五・大塔宮熊野落つたを遊る道寺の鐘、寔を籠す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。大塔宮瑞穂・四「けふ見る眺が響みの辛くも潮の身にぞ染む、切目の王子に著き給ひ、各法施を奉り、丹精無二の御祈禱」(切目神社)大字西地字東風早に鎮座。五體王子宮と稱し、熊野神社の齋社たる王子諸社中にて古來最も有名なりし切目子の社なり。齋社地は社殿の東隣丘上にあり、社殿は天平中兵燹に罹り炎上せしが、文祿元年再興すといひ、のち徳川頼宣入國するに及び社殿の修補、什物の寄進等あり、社前に櫓等を移植す。いま境内

内に數八樹の老木あり。なほ神社の東北方を御所屋敷と稱し後鳥羽院熊野御幸の際の御假殿と傳へ、傍の大笹屋敷と稱する芝生は、大塔宮熊野落の際の舊址として、大塔宮を祀る小祠ありしも今は神社境内に移し、その跡に石標を建つ。【切目山・殺目山】和歌山縣西本妻郡田邊町の西北海岸約十四軒、日高郡切目山の西南端に位する一嶺。標高一五八米。山の西南麓は太平洋に突き出で切目岬をなす。日ノ岬は西北方十里に當る。昔の熊野街道の一名所にして、いま紀勢西線、北・西南麓を廻走し、北麓に切目驛あり。西北方約二軒に昔の五體王子宮の址として名高き切目神社鎮座す。萬葉・一「殺目山往反る道の朝霞ほかにたにや妹にあはさむ」

キリメガワ 切目川村

【切目川】和歌山縣日高郡を流るる川。三里岬の西北斜面、眞妻村の川又岡有林中に發し、西南に流れ切目川村の西北部宇跡ノ谷にて流路を南に變じ、切目川の字崎山にて海に注ぐ。流域約一五軒。

キリヤマ 霧山岳

【霧山岳】岩手山(岩手縣)の別名。【桐生市】群馬縣三市の一。關東三大農業地の一。縣の東境を流るる桐生川の右岸段丘上に位置し川を隔てて栃木縣足利郡栗村に相對す。足尾山塊は東北一帯に横ばり、市はこの山塊に源發する桐生川の沿いに發達せる霧日養藩にして、西北に吾妻山(四八一米)を控へ東南に石尊山

三三三

(四六六米)・湯殿山ありて其兩山麓の各形に支配され、市街は東北より西南の方向に向つて狭長に伸び、その西南端は渡良瀬川に制せられて東南に轉じ、市街の全長五軒に達し、街村式市街を形成す。省線兩毛線と足尾線との分岐點に位置し足尾山麓地帯に於ける交通上の要衝に位置するのみならず、關東に於ける機織地として足利・八王子と共に三大機織地として夙に聲界の王座を占め、また京都の西陣とも併稱され關東に優越せる機織物本場なり。いま本市一三四七八戸中の職業構成を見るに機織業に關係するもの原料商九六戸、内地機織物買取商二八戸、輸出機織物買取商一五戸、精練及び整理業四二戸、染色及び加工業一六五戸、機織加工販賣業五二戸、機織製造業中御召類専門一〇五戸、御召専門五七戸、帯地一五三戸、生機織物二五戸、洋反物六〇戸、輸出機織物四五戸以上にして機織關係戸數八四三戸の多きに達す。工場法適用工場數五五八戸、副業的家用工業を合すれば約一千戸に達し、機織業に従事する職工男女合して約一萬人、其年生産内地機織物價額四千萬圓の多きに達し生絹・生紗・御召・御仙・純絹帯地・人絹帯地・絹織物織帯地・御裏地・綿織物其他なり。輸出機織物は二千餘萬圓、其主なるものは縮類・富士絹・紋朱子・タフタ・甲斐絹等にして輸出仕向地は印度・滿洲・南洋・支那等、最近アメリカ地方にも進出を見るに

至れり。また内地は全國に商圏を有す。本市機織の特色は、京都西陣の精巧、高價なるものに對し、安値にして實用的大衆向なるにあり。殊に縮類機織物・人絹帯地等は廉價高し。機織物の今日の盛衰をなすに至れる要因を考察するに古來本地方は地形・地質の關係上水田に乏しく、桑園その大部分を占め、養蠶業夙に行はれ、原料の比較的容易に得られしこと、桐生川の水質良好にて染織洗滌に適し、加ふるに關東北部に位置して兩毛・磐・越信等の農山村より低廉なる女工職工を得るに容易なりし等を主因となす。市には機織物検査所及び明治四十五年創立にかゝる高等工業學校あり。人口は七六一四五(昭和十年)。和名抄に、山田郡山田郷とあるは、蓋し當市附近をも總べしもの如し。桐生は近世地名に呼ばれたる。蓋し當地方開發の史實は文獻の微すべきものなく、往古のこの詳かならざるも、市内桐生ヶ丘及び新宿三ツ塚等に古墳多く散在し、また延喜式内社美和神社等の存するより推して、其開發は頗る上代に屬するを知り得べし。往時は荒戸または荒處と稱し附近一帯荒蕪の原野なりしが、天正十八年家康の東國入國後此處に南北の街衢を開き、桐生新町と稱す。明治維新新島縣の所管となり、同五年栃木縣に編入されしが、同九年群馬縣の治下に含まれ同二十二年市町村制の實施と共に、隣接地と合して始めて桐生町をな

せり。爾來産業著しく發展し大正十年三月一日市制施行し、昭和八年四月山田郡境野村を合併して今日の隆昌を見るに至れり。(桐生城) 縣の東北約二軒にありて、西方に鳴神山脈連り、北方に槍杓山の勢ゆるあり、更に東に桐生川南流し、平地を占むると雖も頗る形勝の地たり。館址は現に藥師堂の建てる地點にして、周圍に方形の土壘と堀とを一重に繞らしをりしもの、如く、現に藥師堂を圍みて土壘の一部残存す。その起原は詳かならざるも、上野志に據れば、桐生氏の祖を藤原元綱といひ、文治二年始めて入部せしといふ。このうち大炊介助綱の時、上杉謙信に従ひ、元祿二年謙信の東征に當りて當城に館せり。天正元年助綱死し養子又次郎親綱嗣ぐや、家業れ家臣黨をなして争へるに乘じ、同國新田郡金山城主由良成繁これを攻めて陥れ、親綱は佐野に奔る。ここに於て桐生氏遂に亡ぶ。其後天正十六年成繁の子國繁、金山より桐生に移る。當時由良氏は小田原北條氏に屬せしにより、同十八年北條氏滅亡の時、また運命を共にす。(槍杓山城) 桐生館址の東北なる槍杓山にあり。この山の形狀頗る柵形に似たる故を以てか呼び慣るに至る。此城は桐生三郎國綱、足利尊氏に隨ひて武功あり、桐生の地を領せし後に營まれしものと思はれ、その子孫の久しく據る所なりしが、永祿二年上杉謙信の關東略略の軍を起せし際に、近衛前久を

此城に入れしこともあり。天正中に至り由良成繁の爲め桐生氏没落し、小田原役後ば廢城となる。山頂の平地は創ち本丸の地にて、稍々梯形をなし、その周圍は一段低くなれり。西南部に土壘の一部を殘せるのみならず、堀の狀態もなほ明かなり。その他、二ノ丸址または切通などと稱せらるる部分にも、土壘及び堀の趾を點在しほこの城の規模を窺ふを得。(桐生機織物) 本市を中心とする二町十數箇村内の桐生機織物同業組合の製出に係る染織物の總稱。桐生機織物の起原は極めて古く詳ならざるも、元明天皇和銅七年に絶を獻げしことありといへば、古きこと明かなり。一説には淳仁天皇の頃に桐生の人山田某に據せる官女白龍姫が、養蠶糸製織の法を里人に傳授せるに因るともいはる。爾後、桐生の製織業は漸く發達せしが、朱雀天皇の承平天慶の亂に一頓挫し、後醍醐天皇の元弘年中、新田義貞が兵を桐生を驅る二里の新田郡品品村に擧げ、同地方産の絹織物を旗幟用に製したる爲め、新業盛に製織しこれに應ずるに至り、稍々隆昌に向はんとして再び應仁の兵亂に打撃を受け衰頽に傾くに至れり。然るに慶長五年徳川家康、旗の絹織物を當地より徵發して大徒を得たるに因り、のち年々機織一臺に對し一疋づつの絹織物を、貢に代へて上納せしめたり。當時上納せる數は年々二千四百疋づつなりしところよりみて、桐生にては

二千餘臺の機織を動かすつありしこと知らる。これが動力となり製織の業は漸く旺盛の域に進まんとせり。これ迄は専ら海州地にのみ限られ製品極めて單調なりしが、享保・元文の頃に京都人、彌兵衛・吾兵衛なる機工師、桐生に來りて種種の織法を傳へし結果、縮類を始め縮・紗・綾及び古綴子等の機織をも製出するに至り著しく進歩發達するに至れり。以上は専ら白無地物に過ぎざりしが、遂には桐生の大森辰右衛門が東雲綴子と名づけたる染色紋織物の模倣、技術の進歩を見、遂に名匠石田九野がでて珍貴なる各種機織物を製出す。降つて安政年間縮類の輸入により縮類交換を製出し、これを販出したるが世人に迎へられ、需用漸く盛ならんとせしが、王政復古に海内騷然として斯業は一頓挫するに至れり。併し先覺者等はこの間、染色に製織に大なる研究を試み、或はジャカード紋織機を購入する等、技術上より製品の改良を計り、或は團體を設立して粗製濫造の弊を一掃するなど、改善に努め、明治十四年には米國の註文に應じて羽二重の輸出を試み、大いにその需用を喚起し、引續き多大の輸出を見るに至れり。同二十六年には英國製品に似ひ高配海風の製織を試み同國に輸出せるに、これまた頗る歡迎せられ引續き多額の輸出を見たり。また濱琥珀と稱し、純絹織物に模様を織り出して輸出を試みしもの印度方面に非常な

る需要を喚起し、引續き永年その製織及び輸出を見たり。のち紋類縮・フランス縮類・ヤウセット及び人造絹絲の混用、各種の紋織物の製出、その他この輸出は年を逐つて増加し、他省、内地向機織物も染色法、製織技術の改良、意匠組織の進歩は種種の新業機織物を製出し、その品種も益々多きを加へ、綾羅縐紗の高等工芸品より縮毛織及び人絹織物の普通品に至るまで、機織の種類としては殆んど全般を製出し得ざるものなきに至れり。特に加工・仕上の技術上の進歩と、用器具の改良整頓及び原料絲の精選、捻絲法の進歩等は共に桐生機織物をして國際的重要の位置を占むるに至らしめたり。殊に有名なるは輸出向各種絹織物及び桐生縮類・縮子・女帯地及び人造絹絲混用の紋織物、並に縮仙・御召・紗縐の類なり。(天満宮) 天神町に鎮座。縣社。祭神、天穂日命・菅原道眞。創建年代沿革等不詳なるも、景行天皇御宇の創祀と傳ふ。菅公は觀應(正平)年間に桐生家の北野神社より勧請配祀せることなり。この時、社殿を修理し近郷五十四箇村社と定む。天正年間、由良氏の桐生氏に代るや崇敬以前に異ならず。徳川氏また厚く當社を敬ふ。慶長五年關ヶ原役起るや徳川家康の命に依り平岩親吉代參して戰捷を祈り、氏子五十四ヶ村をして軍旗用の胡弓を獻ぜしめたることありしため、凱旋の後に當地の藝妓を免ぜられしといふ。これを

吉例として胡弓の市場を境内に開くこととなり、遂に桐生機織物今日の盛況を致す基となりしと傳ふ。明治四十年無格社菅原神社を合祀し大正八年縣社に列す。境内二千三百六十余坪、社殿は本殿・拜殿・幣殿・神樂殿を具ふ。境内神社に神明宮・八幡宮・春日神社・田心姫神社・市井島神社・白大夫社・機神社その他八社あり。例祭日不詳。(美和神社) 安樂土町に鎮座。郷社。祭神、大物主命。社傳に崇神天皇御宇の創建と稱す。延暦十五年官社に列し元慶四年從五位上より正五位下勳十二等を授けられ、延喜の制には小社に列す。菅原下布施孫兵衛は祭祀料として玄米八石を年々寄進せりと云ふ。明治五年郷社に列す。境内社に奉平神社・綿津見社・波比岐社・大國主少彦名神社・豊城入彦神社・阿須波社・菅原神社・豊受神社・大年神社・御年神社その他九十九社を有す。例祭、十一月三日。(賀茂神社) 廣澤町に鎮座。郷社。祭神、別雷神。創立年代不詳。蓋し京都上賀茂社を勧請せし古社にて早く延暦十五年官社に列し、元慶四年正五位下勳十二等を授けられ、延喜の制小社に列し、正平元年郷下にこの神の崇ありしため、使を遣はし社司に中祓を科せらる。地方の名社にて、近郷より崇敬せらる。例祭、四月十五日。(淨雲寺) 淨土宗。永昌院と號す。本尊阿彌陀如來、脇土、觀世音・大勢至兩菩薩。永祿元年の創建、開山は靈譽玉念上人た

り。(養泉寺) 安樂土にあり。曹洞宗。青龍山と號す。本尊釋迦牟尼佛、脇土、文殊・普賢兩菩薩。永祿年中創建、開基は金谷因幡守たり。天正元年竹本土佐守これを修營す。正徳四年放閣和尚現堂を改修し、同六年放閣和尚現堂を建設、十八世泰道和尚總門を改築し以て今日に至る。境内に馬頭觀音を安置せる水竹庵ありてその名近郷に聞ゆ。(桐生公園) 宮本町にある丘陵にして、拾遺集に「朝まだき桐生の岡に立つ雉は千代のひつぎのはじめなりけり。清原元輔」とある皇族吉瑞の勝地と稱せらる。櫻・藤岡の名所として聞え、造園の巧を極め、配するに假山奇石四阿を以てし、四季の花木新を競うて行樂の人を慰め、各種の禽獸を飼ひて一入の感興を添ふ。また園内には記念碑銅像軍事考館等諸所に散在す。(丸山) 中世桐生氏の出丸なりしに因り登山といふ。市の西端に位し山頂より西方指呼の間に上野三山の秀峰を望み、眼を轉すれば一望全市を納め眼下に渡良瀬の奔流を俯瞰す。明治三十五年六月三日、大正天皇の皇太子殿下におはしし御時行啓あらせられ風光を賞せられたり。(桐生山) 風來寺山(愛知縣)の別名。の所在詳かならず。雄・月・雁・鹿・鶴・紅葉・落葉・竹等の名所たり。夫木・一二、あけくれにきりふの丘に立しかばつまの行へも見えずとや鳴く。清輔。同。

キリン——キロン

二八「はしたかのきりふの岡の竹の露をふさの鈴とみがく月かげ 家隆」

キリン 龜林面

朝鮮全羅北道淳昌郡の中部。東は仁溪面に、東南は八徳面に、西は雙鏡面に、北は任實郡徳鮮面に、山内面に、西南は潭陽郡龍淵面に各隣接す。北地東西に山地連りその斜面南方に傾き西南部に僅に低地あり。米・麥・豆・蕎麥・大麻・莞草等を産す。三等道路は南部低地を東西に通ずるも、山地多く交通便ならず。内地人は殆んど住せず。

キリン 歸林面

朝鮮咸鏡南道定平郡の東南部。西は文山面に接し、北は春柳面に界し、南は永興郡古亭面・仁興面に隣接し、東北は海に臨む。東部に三峰山の山脈延びて海岸に迫り、北部を金津川東に流れて沖積低地をつくり、米・大豆・粟・大麦等を産し漁業も行はる。街道は東北部海岸に近く通ずるも交通便ならず。内地人の居住者は僅に十人に足らざる程なり、金津川岸の河南里その主邑をなす。

キリン 麒麟

【麒麟山】 會津若松市の西北方七十數軒、新潟縣中蒲原郡新津町の東北方約三十八軒に當る。東蒲原郡津川町に峙ち、標高一九四米。山容麒麟に似るを以てこの名あり。東斜面は屏風を立てたるが如き絶壁をなす。北麓を磐越西線・今津街道及び通じ、阿賀川は西流して日本海に注ぐ。この山紅葉の名所として著れ、落

政時代には此處に津川城ありたり。北方約二軒中に當る赤崎山のスロープはスキー場として知られ、また北麓に麒麟山温泉あり。ここにありし狐屋城(津川城)は建長二年龜名氏の族、藤倉盛弘の築きしところ、子孫相繼ぎ金上氏を稱す。此後、屢々變遷あり元和元年廢城となる。

【麒麟山】 臺灣高雄州高雄市の打狗山の別名にして埋金山とも稱せられたり。大正十二年四月、皇太子殿下行啓の際御登山遊ばされ、壽山と御命名あらせられ給へり。

【麒麟面】 朝鮮江原道麟蹄郡の南部。北は麟蹄面に、西北は南面に、南は内面に、東は襄陽郡西面に、西南は乃村面に各隣接す。東南境に勞臺山(一四三六米)聳立し、西境に鷹峰山(一〇三三米)の山嶺連り概ね山をなすも、兩山地の中間を内麟川北流し沿岸に僅に低地ありて耕地拓く。産物は米・大麦・蕎麥・粟・棉・大麻等を出し藥草を栽培す。街道は淡流沿ひに四近に通ずるも險坂ありて交通便ならず。面事務所は上東里に置く。

【麒麟島】 朝鮮黃海道慶津郡にある島。龍泉面に屬す。島内は一〇〇米の丘陵起伏し雙頂島をなし、その中間は低地を成す。而して之と本陸との間は幅二混半の水道を成す。島周には暗礁干出岩多くその東岸にある一岩は十呎干出し岩脈を以て東岸に連絡す。島の北西端は一灣を形成すと雖も干出地に填塞せらる。東西

兩側には常に激瀉あり。【喜連】 大阪府東成郡の村なりしが、大正十四年大阪市の住吉區の一部となる。喜連は即ち矢の稱にして、萬葉集卷二十に見ゆる河内國伎人郷とある地なり。この地はもと河内に屬し戰國の頃に細川兩家記に河内國喜連と見ゆ。近世攝津國に入りしもの。

【喜連】 三河國(愛知縣)の古地名。和名抄岩海部に横禮郷見ゆれども、高山寺本は横禮に作り、何れも訓を缺く。これ或は横禮の誤にして牟禮と訓すべきものならんか。いま轄豆郡の室場村の大字に室あり、或は此邊を稱せしものならんか、記して後致を待つ。

【キレット】 切戸 オキキド・大キレットとも云ふ。日本北アルプス(飛騨山脈)南部の驛。長野縣南安曇郡安曇村と岐阜縣高山市上長村の境に跨り、南岳(三〇三二米)と比叡高岳(三二〇〇米)の中間鞍部に位し、岩稜突兀、弓形に大きく深く割る。鞍部附近を岩角・草根を頼りに迂回して通過す。東西斜面はいづれも急崖をなし、登降し難し。

【キレド】 切戸 京都府與謝郡の天橋立に在る地名。有名な文殊堂智恵寺あり。好色五人女・三・やうやう丹後路に入て切戸の文殊堂につやしてまどろみしに夜半とおもふ時あたりに雲夢あり、大經師普賢下、宮津におちつき、切戸の文殊の法印帳に母方の縁あれば。

三三

キロー 崎瀨

↓湖内庄(臺灣高雄州岡山郡)

【キロク】 木六・木録 越後國(新潟縣)魚沼郡にありし古地名。今の南魚沼郡塩津町の南方の諸村をいふ。今の中之島村の大字木六は其の遺稱なるべし。越後野志「魚沼郡、木六郷、有十八村上に出所の祖泉院の文書に、越後國、上田の莊木郷長慶庵の有寄進狀新潟會津風土記」

キロン 鬼龍野村

↓鬼龍野村(徳島縣名西郡)

【キロン】 徳島嶺 臺灣新竹州桃園郡龜山庄南部の山地。中央山脈の餘派西走して臺北平野との境界を劃する一帯の山地の名稱。其西北に延びたるもの即ち桃園臺地なり。往時平埔蕃族のタマカラン部族に屬するカワム社の根據地たり。龜嶺はその近音譯字なり。カワム社は生蕃の如く兇暴なりし爲め、又一つには山路の險の爲め、康熙・雍正の年代には西麓の海岸を迂迴して淡水河口に出でたり。雍正十一年、臺北平野なる新庄(現新莊街新莊)の發達に伴ひ、桃園より南溪上流の小枋溪を渡り、嶺上なる舊路坑(現龜山庄舊路坑)を経て、十八份庄(現新莊街十八分坑)に出で、新庄に達する道路を開けり。これ龜嶺に道路を通過し嚆矢とす。次いで乾隆十六年更にその南方に、桃園より新路坑(現龜山庄新路坑)を経て、埤角庄(現新莊街埤角)に出で、新

キン 錦

【錦江】 朝鮮忠清北道・忠清南道を流るる川。鴨綠江・漢江・大同江・洛東江等に次ぎ朝鮮に於ける第六位の大川にて黄海に注ぐ。その源を全羅北道と慶尚南道との境にある六十嶺及び、忠清北道の天摩・青山等の各間に發し、諸小流を合せて忠清北道の西南部を流れ、東北方より来る靑川を合して忠清南道に入るまで河流著しく蛇曲し、北方より来る美湖川を合せて忠清に入り、西に折れて公州の西を流れ西南に向つて扶餘を過ぎ、更に東南に轉じて江景に至り再び西南の方向をとり、全羅北道との境界をなして蔚山府を過ぎ黄海に朝す。流域四〇一軒。流域面積九四六二平方軒。錦江は従来蔚山府と奥地とを連絡する最も重要な交通路なりしが、鐵道湖南線の開通によりて水運は俄かに衰ふるに至れり。滿潮時を利用すれば忠清南道の扶餘の附近まで百石積の帆船の通航は容易にして、干潮に於ても百石積以下の帆船は航行自由。蔚山府との間に穀類、殊に湖南平野の米・雜貨・魚類等の運輸に利用さるること少なからず。

キン 錦

【錦山】 朝鮮慶尙南道南海郡にある山。二東面に屹立し標高六八一米。山は怪岩奇石重疊し奇勝に富む。殊に紅門と稱する自然石門は最も奇觀たり。古來小金剛と稱し、來遊するもの多し。

三三

庄に建する道路を開きし爲め、裏に開きし道路自ら廢止せり。新路坑・舊路坑の名稱之より起り、なほ龜山山頂の部落の成りしは此頃の事に屬す。新道は現在縱貫道路の一部にして南北交通の要路なり。【壽山巖寺】 龜嶺嶺上新路坑にあり。乾隆二十八年の建立(同六十年重建)なり。當時慶門南佛院の僧願寂なる者、觀音菩薩の像を携へてこの地に寄寓し、靈驗顯著なりしを以て人民の尊崇歸依する者多く遂に寺を建立するに至れり。

キワ 岐波

山口縣周防國古賀郡の西南部にある地名。東岐波・西岐波の兩村を總稱す。今その東岐波村波羅ヶ濱に近く宇部鐵道の岐波驛設けらる。波羅ヶ濱は、周防灘に臨む白砂青松の海岸にして、海水清く且つ遠淺なるを以て、海水浴の勝地として遠近に名高く、岐波驛はこの波々濱の爲めに設置せられしものといはる。

キワキ 木脇村

宮崎縣日向國東諸郡の東部。宮崎市の西北一〇軒。西に本庄町あり、北に兒湯郡那都郡村、東に宮崎郡瓜生野村、南境に本庄川、西境にその支流南俣川・深年川あり。南部塚原附近には二段の段丘あり、北部は第三紀層よりなる一三〇米以下の丘陵なり。米作付反別三四八町歩、收穫高六二六四石。麥作付反別一〇八町余段(大麥・小麥)、收穫高一四〇石。菜種作付一七九町歩、一八六〇石。其他、甘藷・大豆・粟等を

キワ——キン

産す。此地は和名抄の八代郡の内なるべし。戰國の頃には木脇城あり、一に猪野見城と稱し、伊東氏の一城たり。元祿の頃よりは豊後日田の代官に屬し、明治維新に至りて日田縣の支廳(本莊村)に管轄さる。【猪野見城】 日向縣記に、延元元年正月二十三日、將軍方伊東祐持は宮方伊東藤内祐廣の居城入代に押寄せ焼討ひけるに、殘黨共猪野見城に籠れる由聞えければ、即時に馳向ひ、攻たりしかども引退き、二十九日重て大勢を催し、猪野見城に押寄せ、二月四日まで手痛く攻られしかども、城兵強うして落すべく、却つて味方には土持宜榮同時榮手剣を負ひ、又々勢を揚げて引退き、暫く軍はなかりけるとあり。【赤池神社】 大字木脇字赤池に鎮座。神社。祭神、忍穂耳命・天穗日命・活津彥根命、外敷神。創立年代不詳。藩主崇徳社にて、近郷の産土神。例祭、陰曆十月十三日。【金田神社】 大字三名村字宮本に鎮座。神社。祭神、帶津彥命・譽田別命・息長帯姫命。住吉字佐宮の社領に發生したる古社。古來近郷の産土神として崇めらる。例祭、陰曆、九月十五日。

キワタ 喜和田

↓北河内村(山口縣玖珂郡)

【金山】 神戸市の北方約五〇軒に當る。兵庫縣水上郡柏原町と多紀郡火山村との境界にあり。標高約五三〇米餘にして秩

キン 金

【金山】 神戸市の北方約五〇軒に當る。兵庫縣水上郡柏原町と多紀郡火山村との境界にあり。標高約五三〇米餘にして秩

キンカ——キンカ

峰と呼ぶも故ありと云ふべし。裏廻りは山頂より急坂を下り朝日岩・夜光岩・黄金石・天狗の三石・三日月石・天柱石・御釜石・胎内岩・開上人坐禪石・山形石・影向石・陰陽石を過ぎ、密林を分け芍薬園に至り、これより海岸に出で千疊敷・天狗岩・金波越・銀波越・大平・御路地崎・宮ヶ崎・黄金崎・大御崎・小御崎・掛園石・太鼓石・七神石・賽の河原を通り、阿彌陀尊・愛宕神社より黄金山神社に歸る。表廻りは往復二時間、裏廻りは往復五時間にて終る。この島の沖合附近は黒潮と親潮との合流點にて奥州第一の豊漁場たり。また海面よりは多量の水蒸氣を發上し、山頂に衝突するを以て草樹潤され、山中の赤松・もみ・よな・けやき等鬱蒼と茂り合ひ、其間より泉水噴出し、花崗岩を穿ちて流下し、溪谷四十八を作る。又山麓には神鹿むれ遊ぶ。この山麓には石巻市より汽船にて二時間(一八軒・九)にて至り、又宮城電氣石巻線前より山島渡まで自動車、次で山島渡を越えて到達す。なほ鹽釜より石巻港を経て至ることも得。金華山は鹽釜(四八軒)及び石巻港(三三軒)より汽船の便あり。船が着き鹿山公園に上れば、老若牝牡の鹿群が御土産のマン菓子と與へらるる習慣よりぞろぞろと集り来る。此鹿は日本鹿と云ひ學名は Sika nippon, Temm. と稱す、其分布は北海道・本州・四国・九州・朝鮮・滿洲等にて又向愛種として有

名なるは奈良春日神社の神鹿なり。日本鹿の特徴は體が餘り大形ならず肩の高さ八十五釐位、角(牡のみ有す)の長さ六十釐、體色は冬毛暗褐色にして夏毛は栗色に白斑ありて美麗なり。角は二年目より生え始め第五年目に至りて角に一又を加へ、第六・七年目に二又、第八年目に三又になるといふ。而して毎年脱け代るものにて二月頃脱落し四月頃に復角を生ず。十分成長し視角となるは七八月頃なるも多くは故意に樹幹に摩擦し其皮を剥取る。秋になりて牝の叫聲頗る高し、鹿は近頃著しく減少せしため鹿鹿は保護獸として狩獵を禁ぜらる。現在金華山の日本鹿の頭数は明ならざるも三四百頭棲息すといふ。冬季になれば鹿鹿は食物の不足より鬱林著の造林内に入りて植樹を害する事ありといふ。(黄金山神社) 粘川(金華山)に鹿鹿。鹿鹿。金山昆古神・金山昆古神・天狗八百萬神・地神八百萬神を奉祀す。遠田郡縣社黄金山神社と同じく喜喜式内社に充つる説あり。俗に金華山神社と稱し古來著明なる社。中古佛教隆盛を極め本地垂迹の説唱へられ神佛習合附天を安置し金華山大金寺と稱す。陸奥守藤原秀衡寺領三千石を寄せ堂塔四十八坊を山中に建立して壯觀を極む。その礎石巻城主葛西清重千五百石を寄せ更に隆盛を極めしが、天正の亂に兵火に罹りて頽廢す。文祿二年下野國岩倉成藏坊長俊來りて之を再興し、舊藩主伊達家

になりて一山を村高除地となし大いに保護を加へし結果更に寺塔を建立し祭祀盛んなりき。明治二年神佛分離を布告せらるるや復古して黄金山神社と稱し明治七年鹿社に列せらる。五月初九日大祭は九月二十五日の例祭及び新年祭・新嘗祭と共に四大祭の一にて古來の祭典なり。神輿渡御島海岸御濱神幸ありて日辰り參詣又社務所參詣等最も盛なり。大漁船遊新願祭は初巳大祭に參詣し兼ぬるもの、太平洋沿岸北は釧路より南は四国九州に至る漁船より豫め献酬料を郵送せるもの、對し、海上安全大漁満足の祈禱を行ひ神符神籤開運旗等を授與す。又篝火祈禱とて祭神金の御神徳を稱へまつり古來開運の神と信仰し登山者は靈域に警戒沐浴し祈禱を受け真會の靈に預り神符を受けて下山す。(金華山神の捕鯨) 金華山沖は鯨の群遊地なり。牡鹿半島の南岸にある鮎川港に捕鯨の主要根據地にて、捕鯨船は四時金華山の沖合九〇軒乃至二四〇軒に鯨を探索し之と死闘し、遂に凱歌をあげ汽笛勇しく歸港す。昭和十年當港に揚陸せられし鯨は六百三十四頭にて、價格四十五萬圓を下らす。同港には土佐捕鯨・日本捕鯨・遠洋捕鯨三會社の事業場及び鮎川捕鯨會社あり。

【金華山軌道】 私設軌道。宮城縣牡鹿郡にあり。石巻市より牡鹿郡女川町に通ず。省線とは非連帯なるもカッソン車と自動車並用す。軌道は石巻市石巻港より女川に至る一三・八軒。乗合自動車は石巻市仲町より女川まで一五・九軒にして約三分毎に運轉、四十五分を要す。【金華山瀨戸】 宮城縣牡鹿郡の東方にある水道。牡鹿半島の東南端と金華山島の西北角とに挟まれ、幅約一軒、水深は二・二五尋なり。【金華山】 岐阜縣稻葉郡、飛騨高地の斷層地塊として最南に位し、岐阜市街地の東部に當る。岐阜縣は南方約六軒にあり。附近數峰を總稱して稻葉山と云ひ、金華山はその最高峰にして標高三三九米。古生層の角岩より成り、金山嶽樹に掩む。北麓は長良川に限らる。長良川に臨む斜面は數千丈の斷崖をなす。山頂よりは西南方に長良川の清流を望みまた岐阜市の市街地を俯瞰し、南方には濃尾平野展開し、その中に木曾川西南流するを見る。山頂に織田信長の居城なりし岐阜城址あり。この城は井口城・稻葉城とも呼ばれ、建仁年中、二階堂山城守行政の創業なりと傳ふ。のち土岐家の執事齋藤左衛門尉利長これを修理し、以来子孫の居城たりき。織田信長美濃を攻略するやこの地に移りて西上の本據とせり。信長の安土に移るや長子信忠、次いでその子信孝これに據る。慶長五年八月、關ヶ原の戦に際し、信長の孫信秀、西軍石田三成に味方し遂に滅さる。この役の後松平信昌その城を加納町に移せしに依り廢址となりしが、のち假の天守閣を築けり。此山は推

1000

新設御料林に編入せられたり。いよ西麓には岐阜公園となり、その一隅に有名な名和昆蟲研究所あり。又織田氏の居館跡も残る。長良河畔は納涼遊園地にして動物の池を以て知らる。登山は岐阜驛より山麓まで約四軒、電車の便あり。山麓より山頂まで約二軒。↓稻葉山

キンカセキ 金瓜石

北州基隆郡瑞芳庄の大字。金瓜石鎮山を以て世に知らる。初め田中長兵衛の個人經營なりしが大正七年六月同氏を社長とする田中礦山株式會社これを繼承し、次で同十四年十二月金瓜石鎮山株式會社、更に昭和八年十二月臺灣礦業株式會社の繼承する所となり、現在に至る。明治三十年三月鐵區面積二百六十萬一千二百七十四坪を劃して開採に着手し、翌三十一年金礦の濕式製鍊を開始し、爾後三十餘年間に幾多の金及び銅鐵床を發見し、就中、三十九年には廣大なる第一長仁坑の純鐵銅鐵床を發見、これを開採すると同時に、焙煉製鍊所を新設し、また會社所屬の汽船數隻を鐵區と内地間に往復せしめて輸入の便を圖り、大正二年には武丹坑(牡丹坑)鐵山を併合せり。斯くて其面積三百四十四萬七千六百坪に達し(昭和六年には更に四百五十五萬三千三百七十一坪に、同七年には一躍五百五十一萬三千二百四十二坪に増廣す)、設備・產額共に内地の大鐵山に比し、遜色なきに到りたるも、戦後銅商況の不振に會し、大正十二

キンカ——キンカ

年には生産費の膨大せりと、船運賃の低下したるを機とし、同年八月より自家製鍊を廢し、内地佐賀製鍊所に賣鍊することとなれり。故に統計上にて銅の減退を示せるに反し、金銀銅鐵は頗るその産額を増加し、又昭和四年より金銀鐵をも同所に送ることとなれり。最近製鍊設備の刷新とこれに伴ふ探礦、運搬施設の改良充實を計り、漸次増産の趨勢にあり。最近の鐵產額及び其の價格の概數を示せば、昭和八年には金(三萬二千五百元、八萬圓)、銀(八萬五千七百元、三百七十七萬圓)、鐵(八萬圓、六萬六千六百圓)、銅(百三十六萬圓、二十七萬五千圓)、金銀鐵(七千八百圓、二十五萬圓)、同十年には金銀鐵(六萬五千圓、二百三十三萬圓)、鐵(二百圓、二萬圓)、銅(二百圓、四十一萬圓、三十七萬六千圓)、金銀鐵(一萬一千圓、六十二萬三千圓)。當鐵山はもと瑞芳・牡丹坑(武丹坑)二金山ととも基隆三金山と稱せられ、元來此の方面に於ける産金の初めて漢族に知られたるは年久しく、清の康熙二十三年の諸羅知縣李鼎光の臺灣雜記に、淡藍(基隆)金山に關する記事あり、金山、在碧龍山三朝(即ち三朝)溪後山、土產金、有大如拳者、有長如尺者、有圓扁如石子者、番人拾金在手、則雷鳴於上、棄之則止、小者亦間有取出、山下水中沙金碎如屑、其水甚冷、番人畏高望之、見有金、捧沙疾行、

期運送運送既矣」といへり。然れども爾後「探金必有大故(臺灣志略)の迷信は、之が採取に従事する者を阻止するに至りしもの如くなるも、光緒十六年清國政府臺北基隆間の鐵道を敷設するに際し、基隆河の鐵橋(七堵附近)架設中、偶然河底の砂礫中に砂金を發見したるものあり、會同該工事に使役せられたる福建廣東の住民にして、嘗て米國カリフォルニア及び南洋オーストラリア等の産金地に出稼したる者ありて、忽ちこれに轉業し、採取して利潤を得しより、之に倣ふ者漸く増し、同年九月頃には既に數千の砂金採取者群集、河床の砂礫を浚渫淘金するに至り、漸次流域の上下に發達するものと、頗る紛擾を極め、ために十七年(明治二十四年)基隆通列強諸國は令を發し、其の業を禁止せしむるに決す、翌年砂金抽査局を瑞芳に、同分局を流域間の要地(四脚亭・吸々・五堵)に設置し、税(賣下付料)を徴して採取を准許せり。當時採取に従事する者約三千人以上の多きに達せし、監督官吏の私收甚しく政府の收入豫期の如くならざりしにより、十九年一月改めて其の翌年六月までを期限とし、特許料七萬五千圓を以て、産金地を舉げ四商の請負採行に委したり。此の間、進みて産金地の探査を遂げたる結果、同年(明治二十六年)九月先づ、九份(九分)山(瑞芳鎮區内)の金鐵床發見せられ、試に採掘淘金せしに、一日十二兩乃

至四十五兩の産金ありしを以て、彼に此地に集る者多く、山腹深溪は横坑或は整坑を掘開し、盛に利益を収め、多きは一日二百四五十兩の金を得し者ありきといふ、次で翌二十年(明治二十七年)金瓜石の岩壁及び瑞芳鎮區内の大粗坑・小粗坑・大草林等の鐵床を發見するに至り、更に一段の盛況を呈せり。此年六月、民業の請負満期となり、政府は再び金砂抽査局の制を復し、九份山及び小粗坑に分局を増設し、基隆河流域の砂金と共に、これ等の産金地域内に於ける一切の探採を管掌せり。我が領臺後、明治二十八年九月以來、舊制に倣ひて砂金署を瑞芳に創設せしが、戦後の人心震惧の情に充たされ、隨つて採取者の數著しく減少を來し、加ふるに同年十二月匪徒の蜂起と共に、九份其他の産金地舉げて其軍窟となり、我が軍の勦滅を此一帶に及ぼし、居民散逸してまた探金に従事する者なきに至る。後に砂金署を廢し、一時探採を禁止せしが、次いで二十九年九月、新に鐵業規則を制定實施し、従前の波瀾に依り僅かに三四割の金を収めて其餘を無駄にしたるが如き弊を改めたり。更に三十四年には、武丹坑の溪間に豊富なる金鐵床發見せられ、三十九年には金瓜石鎮區に廣大なる含金鐵床を認め、茲に其隆盛の極に達せり。然るに大正二年に至るや、武丹坑の採掘漸く困難に赴きたるを以て、之を金瓜石鎮區に合併せしめ、終

1001

キンカ—キンキ

大正七年五月を以て其の事業を截止する事になれり。地質は第二紀砂岩及頁岩の五層及びこれを破りて逸せる安山岩より成る。而して第三紀層中砂岩は就中...

キンカワ

新川の故意の著名にて、現今の東京市京橋區新川橋附近に當る。もと酒問屋・酒蔵の多かりしところ。仲街藝談「さん川あたりの酒問屋のばんとう」

キンキ

近畿地方 本州中部地方の西南に隣り日本群島の略中央に位置す。この地方には山城・大和・河内・和泉・攝津・伊賀・伊勢・志摩・近江・丹波・丹後・但馬・播磨・紀伊・淡路の十五ヶ國あり。行政上京都・大阪の二府と兵庫・滋賀・三重・奈良・和歌山の五縣に分かれ、西は中國地方に達し、西南は播磨灘・紀伊水道を隔てて四國に對し、北は日本海に、南は太平洋に對し、東南は伊勢海に臨む。全面積三二九八五・九七方軒、本州島の約一割一分餘にあたる。

この地域もまた第三紀本には一面の平坦面をなし、或は一部は海底にありし地塊にして、且つ隆起の量少なきため、山頂には尙ほ相當廣き平坦面或は丘陵地塊状面を有し、僅に地形境界線に沿うてのみ急峻を生ずるを以て、その平坦なる構造盆地ともよき人類生産の舞臺を作る。この特性は前述の紀伊山系の隆起をうけし後に深く開折せられ、連嶺參差し平地も山頂平坦面もともに缺くものとは大に趣を異にする點なり。この地塊は山城盆地及び大和盆地の東邊を劃する構造線によりそれより東方なる伊吹・鈴鹿・布引の山嶺に至る高原的地塊と、それより西方なる上述の二盆地と攝津・河泉の平原及び生駒・金剛・和泉の山嶺を含む低夷なる地塊との二部に分たる。この二區域は何れも北方より南方に向つて漸次傾斜し、一は琵琶湖に及び、他は淀川に及ぶ。また別に東方地區は東邊より西方に向つて傾斜し、之を生駒地塊に對比すれば、伊勢海及びその西岸の平地は一見大和盆地にも對比し得るが如く見ゆるも、かくの如き比較法は地質構造の大勢を無視するものにて當を得たるものにあらず。いま東方地區なる江賀高原に就いて更に地形及び地質上の特性を觀察すれば、關西編以南の古生代末に進入せる片狀花崗岩・花崗片麻岩より成る和賀山地、關西編と近江盆地との間に横り、古生層と花崗岩との錯雜する南江山山塊及び最北

キンキ—キンキ

に位し中央に琵琶湖を擁する近江盆地より成る。然るに之を離れれば、鈴鹿・布引の山脈は東邊の面上西に傾斜するところの顯著なる地塊をなし、その西邊は小斷層を以て沈降し、琵琶湖・水口・上野の低地を貫る地帯を形成す。然るにその西邊は再び高嶺を増して山城國相樂・大和國山邊の高原に及び、のち突然沈下して山城大和盆地を成す。またこの外、南嶺部には高見山・三峰山・局ヶ岳の峻嶺連立し、その北に至生火山群の錯居するありて、別に特色ある一地形區を形成す。近江盆地・山城盆地・攝津平原の北邊に接する若狭・丹波の山地は、これを遠望すれば、山頂稀れに突然階狀狀に高度を變ずることある外、殆ど一様の高原を保ち、譬て准平原をなせること最も明瞭に推知せらる。この地方がかくの如く一様の高原を保ち得るは、主として硬度の著しく異らぬ古生層の諸地層より構成せらるる爲にして、その花崗岩に貫かれて接觸變質を受け、堅硬なる岩石と化せるものより成る比叡山の如きところにては特に秀でたる山嶺を形成し、また大江山の如く堅硬緻密なる鹽基性深成岩より成るところも特有の圓頂丘となりて獨り高く聳ゆ。更にこの山地に踏み入りて實地にその地形を觀察すれば、遠望したるものとは頗る趣きを異にし、或は軟弱なる地層が侵蝕せられて走向と一致する低地をつくり、或は過去の斷層線上

の幹線より流下する木津川等を含せ、山崎の東陸部を破りて大阪灣に注ぎ、その三角洲上には大阪の市街あり。なほ瀬戸内海新面にては大和川・武庫川・加古川・市川・樺保川、日本海新面にては山良川・朝來川、伊勢海新面にては宮川・徳田川・雲出川等著し。近江の扇状地は伊吹・鈴鹿・比叡・笠置等諸山脈の間にあり、その大部分は琵琶湖となる。これは我が國第一の淡水湖にして、湖中には地塊の殘址たる奥・沖・冬・竹生等の諸島ありて古火成岩より成る。湖水の水面は海抜僅かに八五米にして、その水は瀬田川の峽流を成し、山城盆地に出づ。湖に注ぐ諸川は山地の土砂を運び湖岸に沖積平野を作り、三角洲の發達も著し。教員湖の深き陥没と琵琶湖との間には狭き陸地あるのみにて、この部分もまた幾多の斷層線によつて切らる。鈴鹿山脈は關ヶ原嶺線より南に走り、加太越以北は主に古生層とこれを貫く花崗岩より成り、その東側の町屋川・牧田川の谷を隔つる古生層の葉老山塊に相對す。鈴鹿山脈の南中には片麻岩・花崗岩多く、伊賀・伊勢・大和の接する地方には火山岩の噴出を見る。鈴鹿山脈の東方は次第に低下し、第三紀層及び第四紀古層發達し、遂に伊勢平野の沖積地に横く。伊賀盆地は鈴鹿・笠置兩山脈の間にあり、上野・名張等の小盆地に分る。前者を流るる諸水は伊賀川と成り、後者の水は名張川と成り、香路

INOCHI

INOCHI

大小の地塊と地溝が發達す。特に紀ノ川と瀬田川上流とを連ぬる紀伊半島を東西に横斷するものと、淀川及び琵琶湖を連ぬる東北—西南に走る構造線は顯著なり。この構造線より西北の丹波高原及び南の紀伊半島との間には地形の全く異なる三角形の地塊を對す。地質構造と地形上の特異性により四つの區域に分たる。一は和歌山より紀ノ川を瀆り瀬田川に出でその中流より宇治山田附近に至る線以南の紀伊山系。二は紀伊山系の北に接し攝津平野・京都盆地・近江盆地の北西縁を以て地せらるるほぼ東西・東北—西北の三邊よりなる三角形の地塊にて、畿内盆地と江賀高原に當り地塊と盆地とが錯雜す。三は丹波高原にて主として古生層の丘陵性山地が起伏し、加古川・武庫川及び保津川諸川のの上流部或由良川の沿岸に僅に狭き平野發達す。四は由良川(大雲川)の下流の示す南西線によつて地せられこれより北部の臺地性小地區にして、大江山山塊及び丹後半島よりなり花崗岩を基礎とする山陰部の東方延長部に當る。南部の地形區紀伊山系は山岳部疊し平地に乏し。この山地の構成を考察すれば一は古生代及び中生代地層の走向とその後に進入せし火成岩等の岩石分布の狀態に支配され、二は之より遙か後に發達せる新裂系に支配される。また地層配置は規則正しく結晶片岩・輝岩・古生層・中生層が東西に走り、これ等の地層中軟

層は侵蝕されて多數の河川は東西の流路をとる。この地層配置は第三紀以前に行はれたる褶曲運動の結果として生ぜしものにして、最初の變動は紀ノ川・瀬田川を結ぶ地帯以北に花崗岩の進入が起り古生代末葉の地殼運動期に當る。この變動により陸化せし本地方は三疊紀を通じ陸地として存在せしものと認められ、古生層の南側に直接して球羅紀層が分布し、更にその南に白垩紀層が分布す。第三紀層は紀伊山地の骨格をなすこれ等の地質配置が生じたる後山地の邊縁部に凹地の生ずるに従ひ生じたるもの如し。紀伊山地の南部に分布する白垩紀層の時代は詳ならざるも、和泉山脈に分布する和泉砂岩系は上部白垩紀に屬し地殼變動によつて生じ内海に堆積せしものを證し、また紀伊山地の地層は大體南に傾斜するも勝浦町附近にて古生層の南に下部白垩紀層が分布し其南に再び古生層、更にその南に球羅紀層が露出し覆瓦構造の存在を暗示し白垩紀中頃の變動を證す。火成岩は山地中央部の石英斑岩の大噴出塊がありて南北に延長し、南部には第三紀の流紋岩の流出あり。畿内盆地と江賀高原に紀伊山地の北方に續き丹波高原の南東に位置す。この地方は第三紀末葉以降の地塊運動によりて多數の地塊・地溝に分れ、或は露上地塊をなす山地、坳裂谷の侵蝕作用によりて擴大されたる平地集りて、高低富なき一地域を決定す。併し

淡及び月ヶ瀬の景勝地をつくる。笠置山脈は主として片麻岩・花崗石より成る。琵琶湖の西には比叡山脈あり、笠置・比叡山脈と金剛山脈との間に山城・大和の兩盆地あり。ひとつの陥没帯なりしが、今は第三紀層の低き丘陵によりて、二つの盆地に分る。山城盆地の中部には五輪池あり。諸川ここに集まり、大和盆地の水は皆集まりて大和川となり、金剛山脈を横断し大阪平野に流る。金剛山脈は東西兩側に階層陥没ありて地盤山脈を成し、主に花崗岩と片麻岩より成り、中央より南に二上火山噴出す。生駒山脈の西に大阪平野ありて西方に傾き大阪灣に沈下す。淡路島は大坂灣と播磨灣との間に挟まれ諸ゆる地盤を成す。その北半は主に花崗岩より成り、中央の低地及び周縁に第三紀層あり。島の南部は中生の和泉砂岩層より成り、西國の讃岐山脈及び紀ノ川北岸の和泉山脈と連絡す。和泉山脈は主に和泉砂岩層より成り、南側は紀ノ川の階層陥没谷に臨み傾斜稍急にしてその麓に第四紀古層の丘陵地あり。北側は緩斜して次第に第三紀層の丘陵地に移る。紀伊・志摩の兩半島には一大褶曲山脈の紀伊山脈が東西に連なり、北より南へ三波川系・秩父古生層・中生層・第三紀層が整然と排列す。紀ノ川麓谷の南岸に沿ふ龍門山脈は結晶片岩より成り、主峰龍門山は結晶片岩より成る。日方海岸より東走する製子山脈、有田川北岸の

長峰山脈は共に古生層にてその東方に高さ約一〇〇〇米の平坦なる高野山あり。有田川より南は多くは中生層にて、その側面たる大塔山脈は南北に走り第三紀層より成る。雲取山脈は古生層の上流地方より熊野川の岸に及び、その東部は石英粗面岩より成り那智山屹立す。和歌浦より御坊町までの海岸は、紀伊・西國の兩山地が紀伊水道の陥没により隔たれし所にて、沈降性の海岸多し和歌浦灣・下津灣・御坊町より東南に進めば隆起性の海岸多し海岸段丘が發達す。田邊町附近には沈降性の海岸と成り段丘發達す。潮岬は砂洲のため陸地と連絡し陸架島を成す。紀伊半島の中部には地盤上南北に連る大塔山脈あり。これに北山川・十津川の發達谷に挟まる山地にて大天井嶽・山上ヶ嶽等は古生層より成り、大日嶽・天狗嶽・地蔵嶽等は石英斑岩より成り、佛經ヶ嶽(一九一五米)を最高とす。大塔原山(二六九五米)は北山川・吉野川・宮川の水をなしたる古生層より成る。潮岬より本町までの海岸は多く隆起性海岸にて海岸段丘の高きは東に行くに従ひ減少し、本町町の亀ヶ城の奇巒は岩石段丘なり。志摩半島は山脈概ね東西に走り、古生層最も廣くその間に中生層あり。木本より東北の海岸は沈降性にてマウス式の變入多し。志摩半島の南端の諸ゆる先

志摩地方は、もと海中にありし平地が隆起し海陸交地となりしもの。内帯の北部は中國山地の東端にて、丹波の古生層の山地廣し。中には小盆地多く龜岡・藤山・柏原・福知山等の都邑發達す。老の阪山脈は丹波・攝津の境を走り古生層とこれを貫き噴出したる花崗岩及び石英斑岩より成り、その南側は緩かに大阪平野に降る。猪名川・武庫川はこの山地より出づ。六甲山脈は明石の北方より武庫河川の生瀨近傍に連り、南には急峻なる階層崖を見せ、北は階層谷に接し六甲地盤とも稱せらる。主峰六甲山の東にある甲山は花崗岩中の裂目に沿うて噴出せし輝石富士岩の塊状火山なり。神戸と西宮間には階層崖の急流の作りし複合扇状地發達す。六甲山脈の北西には石英斑岩の帝釋山脈あり。牧川南方の山地は主に古生層より成り北部に四條岩、南部に石英斑岩あり。日本海と瀬戸内海方面の分水嶺をなし、由良川・牧川の北方には大江山塊あり、古生層・中生層及び花崗岩・閃綠岩等より成り大江山(八三三米)は閃綠岩より成る。由良川上流の和知川とその支流の上林川との北には飯飯山脈あり古生層及び閃綠岩より成る。丹波の東半は丹波山地の連綿にて、主に古生層と花崗岩・閃綠岩等より成りまた西半は輝ヶ崎半島その大部を占め、花崗岩第三紀層及び新火山岩より成り、階層たる竹野川畔に小平地あり。丹波の海岸は若狭灣の西部に當る

階層海岸にて出入多く、舞鶴灣・宮津灣等著し。宮津灣に突出する天橋立の砂嘴は有名なり。經ヶ崎半島の東端新井崎より網野町の附近までの海岸は隆起性にして海岸段丘あり。久美濱及び津房山海岸は沈降性海岸を示す。經ヶ崎半島には階層多し、大正十四年六月の但馬地震、昭和二年三月の奥丹波の地震も皆階層運動の結果にて、前者には田結階層、後者には郷村階層を生ず。岡山縣との境には、北はみそぎ峠より南は船坂峠・帆坂峠に至るまで多数の峠あり通路よく開く。播磨の東南部には加古平野あり主に第四紀層及び第三紀層より成る。姫路平野は市川・夢前川・揖保川下流の沖積地なり。但馬は豊岡・出石・江原に亘る盆地の外平原に乏しく山地廣し。朝來川以東には花崗岩・蛇紋岩・流紋岩露出し、所々に玄武岩の小火山あり。田食山・玄武洞の如きは玄武岩の著しきものなり。(氣候) 概して温和過熱の地なるも、位置地形の關係上各地の氣候は多少の差異あり。紀伊半島の高地は夏季冷涼にして、黒潮の暖流に接近せる沿岸は温帯多雨なり。瀬戸内海沿岸地方は概ね温帯快晴なり。夏季は湿度割合高く夕風時間長きため暑し。内帯の各盆地は寒暑の差稍大にして比較的乾燥なり。近江の北西部より丹波・丹後・但馬に亘る地方は冬季北風の影響多く氣候稍も峻烈にて、伊吹山・柳ヶ瀬地方より中國山地の分水嶺以

北は降雪多く、京都・滋賀地方の比叡山脈或は北山山脈はその餘波なり。氣温は瀬戸内海岸、紀勢地方にて年平均一五・六度、東海道より約一度高し。一月平均氣温は大阪約四度、潮岬約七度にて南に進むにつれ氣温高し。八月平均氣温は神戸二六・八度、御坊二七・七度、潮岬二六度餘にて、南紀地方は日射強く濕氣多きため暖國的風色に充つ。日本海側面は冬季雪の多き割合に氣温高く一月平均氣温は零度以下に下ることなし。海岸より内陸に進むに従ひ温度低下し、三月下旬に至り氣温高まり、雪は次第に消え春色加はる。近畿地方の氣温は概して西部に高く、東部に低く、等壓線は東方に彎出する傾向あり。梅雨頃の低氣壓は東支那海を経て北東に進み、夏秋の低氣壓はマリアナ諸島より北々東に進み、本地方を襲ふこと多く、冬季は北西の季節風有力にして、秋季は概して北若くは北東の風多く、夏季は南よりの風多し。海岸地方は海陸風卓越し、風力は概して海岸に強く、内陸部は却つて弱し。近畿地方の降水量は南部と北部に多く中部に少し。南部太平洋方面は夏季黒潮上を吹く南風のため濕氣を受けて雨多く、潮岬にては二六六五耗に及び、四月乃至十月の間に降雨多し。日本海岸にては冬季北風に送られし濕氣は凝結し降雪深く、年降水量二〇〇〇耗内外に達し、滋賀縣北西部も二〇〇〇耗乃至二五〇〇耗に達す。中國山

地の中央より近江・山城・大和盆地に降水量稍も少なく一五〇〇乃至二〇〇〇耗にて、瀬戸内海沿岸は雨量最も少なく一〇〇〇耗乃至一五〇〇耗なり。紀伊半島には驟雨多く一日の最大降水量は田邊町に於て明治二十二年八月二十日に九〇〇耗を算せしことあり。降水量は日本海岸にては十二月頃最多、五月最少。その他の地方にては九月頃最高、一月最低なり。山地に豪雨あれば諸川に急に増水し洪水を起す。熊野沖にては春夏の候旋風起り、海水昇騰して龍巻をなすことあり。中國山地にては夏秋の頃驟雨深く諸ゆる雲海の現象を呈す。降水日数多きは日本海岸地方にて宮津にては二二三日に達す。太平洋及び瀬戸内海方面は一四〇日乃至一六〇日なり。積雪は南紀海岸にては殆ど見ること能ざるも、日本海側面は積雪多く、生野は約三〇〇〇、豊岡西方の西氣にては約二米に達す。伊吹山より滋賀縣の北部にかけて約一・五米に達すること少なからず。山地は概して積雪深く、伊吹山上部にては二米餘に及び、大臺原山・高野山にても三月頃には積雪約一米をみることあり。

(産業) 農業 諸盆地及び海岸平野は、土地肥沃にて農産に富み、二毛作行はる。水利不便の地は古來池溝を多く設け給水に努めたり。耕地面積は兵庫・三重兩縣に廣く、米の産額に内地の約一割四分弱を占め、兵庫縣は約三八八萬石、滋賀縣は約二五八萬石を産す。京都神地方は人口多く、米の消費額大にて、滋賀縣以外地方は米の供給を受く。兵庫縣の米産額は内地中第三位にして播磨の諸平野には良質の播磨米を産し、神崎・武庫兩川の流域の良米は播、伊丹の銘酒の原料となる。三重縣の伊勢米・伊賀米もまた名高し。京都府の産米はその消費高の四割四分を充たすに過ぎず。兵庫縣の小麦産額は内地中の第六位を占め、輸出麥粉の原料とす。櫻葉は約一割七分を占め、兵庫縣の産額は内地中の第四位。大豆・馬鈴薯は兵庫縣に、甘藷は三重縣に多し。製茶は我國の約一割三分を占め、宇治茶の産は古來世に名高く、玉露の産は國內第一なり。大和盆地の東部及びその山地と滋賀縣の南部は共に製茶多く、滋賀縣甲賀郡の信樂・愛知郡の政所は良茶を出す。茶種の産額は全國の一割九分、滋賀・三重・大阪の低地に多く、大蔵は但馬國及び滋賀、緑瓜及び葉菜は三重、蘭は兵庫に多し。和歌山縣其島附近には除蟲菊、兵庫縣朝來川記蓋區域には杞柳の栽培盛んにして全國第一位を占む。甘藷は大阪府、橘は和歌山縣、三椏は兵庫縣、干菓は滋賀縣に多く、葉煙草は兵庫縣に多し。和歌山縣の柑橘類の産額は約六百萬圓にて、我が國第一位を占め、有田・海草地方と那珂・伊都地方を主産地とす。大阪府は國內第三位を占め、和泉山脈の北斜面に多し。三重・奈良・兵庫の蜜柑も

多し。前編に大阪府に廣く栽培せられ、その産額は山梨縣と伯仲の間あり。また京都府の久世・山科、兵庫縣の姫路・川西・伊丹地方にも産す。梅は和歌山縣を主とし、京都府青谷・奈良縣月ヶ瀬はその名所なり。枇杷は兵庫縣津水・淡路の野島地方に多く、栗は兵庫縣川邊郡のものに海外に輸出せられ、丹波栗も世に名高し。蔬菜の栽培は京都府附近に盛んにして胡瓜・豌豆・豆・甜瓜・茄・葱・葱頭は大阪府附近に多く、南瓜・大根・胡蘿蔔・里芋は神戸・明石一帯に多く、大根・漬菜は京都府附近に多し。西瓜の産は全國の二割五分を占め五百萬圓に及ぶ。その主産地は大和盆地の中部にて、花卉の栽培も大都會附近に盛なり。蠶業 桑の栽培面積は内地の八分六厘に當る。三重縣鈴鹿川・雲出川流域及び伊賀には桑園多く、兵庫縣の北播、丹波の山麓山間、京都府の由良川、和歌山縣の紀ノ川流域も桑の産多し。滋賀縣に於ては東部より東部にかけて桑の栽培盛なり。蘭の産額は内地の約一割を占め、生絲産額も一割餘を占む。製絲工場は多きは三重縣の龜山・津及び三重・一志地方、京都府の綾部・福知山・宮津・岡部、兵庫縣の朝來川・揖保川流域及び和歌山縣の西北部、滋賀縣の東北部等なり。牧畜 廣大なる草原に乏しく、牧畜は農家の副業として行はる。牛の頭数は内地の一割八分を占め、特に兵庫縣は國內第一位を占め約十

萬頭を算し、神戸牛の名高し。淡路・播但地方にては五月より十一月まで季節的放牧行はる。三重縣の雲出川の南方員神川の北方には牛の飼育盛んにして、志摩・北牟婁地方には小牛の飼育よく行はる。なほ牛の多きは大阪平野の南部・三島地方・丹波の西北部・丹波地方にては夜久野牛・筒川牛の名高し。和歌山縣の山地は和牛の飼育盛んにして無野牛の名あり。滋賀縣の東南部も牛多く、近江牛としてその名聞こゆ。豚の頭数は内地の五分三厘にて、三重縣の三重・河野・鈴鹿・度會地方、神戸・明石地方、京都・和歌山附近に産す。養鶏は盛んにして、成鶏の羽数は内地の一割三分を占め、兵庫縣の内海方面・淡路島・大阪平野・伊勢平野等に盛んに行はる。水産業 沿岸暖水性の水産に富み、沿岸漁獲高は内地の一割五分を占め、太平洋方面には鱈・鯉多く、また三重の鰯、和歌山の鰯・鮪・秋刀魚は著しく、瀬戸内海方面には、鯛・せぐろ鰯・鰯・鮪・鰯・いかなご多く、日本海方面には鯛・鰯・鮪・鰯・鰯・鰯多し。伊勢海には蛤・紫菜・海藻・鮑・牡蠣に富み、伊勢・榮の産物は内地第一位なり。英虞灣・伊勢灣附近は養殖魚の發祥地にして、現在五ヶ所灣にその養殖最も盛んなり。和歌山縣の石菜花・紫菜はいづれも内地第二位を占め、秋刀魚は東牟婁郡以東に多く、榮・蛤・鮑は海草郡の沿海を主とす。酒類 以東の海

上にては捕鯨盛んにして、大島・串本を根據地とす。播磨海面の家島附近は鯛多く、淡路西岸には冬季鯛の漁獲盛んなり。琵琶湖の淡水性魚類は五十餘種に及び、小鮎・蝦等の鮎・鮎の外、鯉・鰻・鰻・鰻の産多し。京都府・三重縣・大阪府は鰻の産地にして名高し。水産製造物價額は内地の約九分を占め、三重縣には鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻の産地第一なり。京都府及び兵庫縣は鰻・竹輪の産に富み、また京都府に味醂・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻・鰻の産多し。和歌山縣は鰻・鰻・鰻の製造盛んなり。大阪・京都・兵庫は我が國屈指の寒天産地にて、赤穂附近に産地多し。林業 人口増加するにつれ森林は次第に伐採され、原始林は高嶺の山地に残存するのみ。本地方の林野面積及び立木面積は、内地の一割二分を占め、森林伐採価格は、内地の七分二分を占め、兵庫縣は立木面積廣く北播・但馬・丹波には杉・檜・樺の人工林多く、南播地方は黒松の栽培多く、松茸の産地は内地第一なり。三重縣は森林伐採價格最も多く、杉・檜の産に富み、大杉谷・相賀には原始林を見る。中部には椎茸多く、牟婁地方の熊野・紀伊、後産の松茸は名高し。奈良縣の人工林には古野森林ありて杉・檜の産多く、その地域は古野川の上流及び丹生川・小川流域にて東西

三五軒、南北二七軒に互り、借地林業よく行はれ、杉の美林に我が國林業の偉觀にして、其杉材は酒樽の材料に供せらる。大牟婁山より伯母山にかけても原始林廣し。和歌山縣は山地廣く私有林多し。林地は大和・伊勢の國境に及び、高野嶺も名高し。河川を流下する木材は年額百三十萬石に達し、その半は縣内産にて、和歌山・新宮・古座は主なる集散地なり。新宮には特に製材所多し。松材はその産額全國の首位を占め、また牟婁地方は椎茸多く、羊齒類工は米國に輸出し、紀南の黒竹は釣竿に適しその名高し。京都府は松茸の産多し、丹波・山城北部に杉・檜の用材を産し、天田・船井地方は栗・櫻・檜の新築材に富み、丹波栗は世に聞え、また物の産、我が國第一なり。滋賀縣には壯幼の新林多く、杉の老樹は愛知・飯田・高島・東濃井地方に見ることあり。農業 兵庫縣明延は鰻の産内地第一位。生野の銅鑛は金ヶ瀬・明延の産とともに直島に産り銅鑛を製す。竹野には金銀鑛を産す。和歌山縣には硫磺鑛を産し、飯盛嶺は名高し。大阪・神戸附近は製鐵・製鋼盛んにして特に兵庫縣の鋼材産額は二千五百萬圓に上る。石材は三重・京都の花崗岩、兵庫の安山岩、和歌山の砂岩を主とす。鑛物は兵庫縣に多く我國第一位を占め、平野水の名高し。工業 阪神一帯は我が國の大工業地にて、大阪には製鐵・機械器具・化學工業品の産多く、

織工業・電氣・金屬製煉等の特別工業も盛んなり。染織工場は東淀川區に多く、金屬工場は港區・此花區等の新興立地に多く、化學工場は東成區に多く、飲食工場は南區、製糖工場は港區に多し。神戸市の内外には綿織・紗織・麥粉・薄荷・濃・糖・糖・糖・糖・糖・糖・糖・糖・糖・糖・糖の製造盛んなり。京都市は美術工藝の大中心にて、織物・陶磁器・漆器・金屬製品・扇子・小間物類の優雅なるものを多く産す。近畿地方は綿織物の産多く内地の四割一分を占め、大阪・兵庫にて二億三千萬圓に及び、また伊勢松阪の本綿・四日市の廣福綿布・和歌山の綿アラン・松葉綿布・奈良縣の大和餅・滋賀縣八幡地方の砂糖等あり。絹織物内地の二割強を占め、京都の軟織・御召・博多・縮子・蝦子、丹波の縮織、滋賀縣の飯田・東濃井地方の濱縮等あり、長濱(濱縮)は古來名高し。胡蝶交織物は内地の二割九分餘を占め、大阪・滋賀に多く、兵庫・和歌山・奈良の諸縣の産も多し。毛織物及び毛交織物は内地の三割五分餘を占め、兵庫縣の加古川・寶殿地方を主とし、大阪・和歌山にも産す。酒の産額は内地の六割七分餘を占め、大阪は内地第一の産地なり。染物は内地の五割八分を占め、大阪を第一とし、京都・和歌山にも盛んなり。大阪はまたメッキ製品及び硝子の産内地第一なり。陶磁器には京都の清水焼・栗田焼、四日市の大

正萬古織、伊賀の伊賀織、滋賀縣甲賀地方の信樂織、兵庫縣の淡路織・出石織等あり。京都の漆は精巧にて國內第一の産額を示し、和歌山縣黒江産は栗平の名あり。製革は内地の四割八分を占め、兵庫・和歌山・大阪に多産す。大阪はまた皮革製品の産内地第一なり。我が國精製製糖の殆ど全部は兵庫縣に産す。大阪は植物性油の大産地にて、肥料は大阪・兵庫に多く産す。清酒の産額は内地の二割七分を占め、兵庫縣は内地第一の産地にて、池田・伊丹・灘五地・西宮・今津に盛んなり。京都の伏見もその産多し。麥酒は國內の三割を占め、吹田・堺・神崎に其工場あり。兵庫縣は全國靴製高の七割を占め、豊岡地方をその中心とす。木製品は和歌山・大阪・西宮・神戸に多く、製紙は大阪・神崎一帯に盛んなり。

(交通) 此地方の平野は古來文化發達し、北部高原地帯も河谷の聚落、鐵道の交通進歩せるも、南部山地のみは土地險峻にて鐵道の便少なし。此地方の鐵道網は大阪を中心とし、京都を副心とす。鐵道の幹線は東海道本線・山陽本線・關西本線・山陰本線及び北陸本線等なり。東海道本線は東京より神戸に達するものにて、伊吹山脈の狹隘部より滋賀縣に入り、京都大阪を経て神戸にて山陽本線に接続す。山陽本線は神戸より下關に通じ、下關にて連絡船により門司及び朝鮮釜山に連絡す。關西本線は名古屋より桑名・四日市・

奈良を経て大阪港河に通じ、近畿地方の中央部を横斷し、途中島山より多宮縣を分岐して、津・宇治山田・鳥羽に通じ、伊勢神宮參拜者に便し、山陰本線は京都より起り嵯峨・福知山を経て西に走る。この沿線には温泉多く、また出雲大社に參詣するに便なり。北陸本線は米原にて東海道本線より分岐し、御ヶ瀬トンネルを出で、日本海岸を東に走る。この線は阪神地方より真日本を通り青森に達する捷路の一部をなす。なほ中部南部には草津線・奈良線・櫻井線・和歌山線・紀勢西・中・東線等あり。西北部の鐵道には福知山線・舞鶴線・播磨線・宮津線等あり。地方鐵道は大阪を中心として各方面に走り、主要都市・名勝地に通す。また登山用の鋼索鐵道も諸所に設けられ、生駒山・摩耶山・比叡山・朝熊山・吉野山・高野山・雲岩山・男山・成相山・信貴山・妙見山等に於てこれを利用することを得。都市郊外電車線の發達も著しく、京都・大阪の三市を連ねる京阪電氣鐵道、大阪(天神橋)より桂を経て京都に至り、嵐山へ支線を有する京阪電氣鐵道新京都線、大阪神戸間の阪神電氣鐵道、阪神急行電鐵(上本町)奈良間、大阪櫻井間その他大和地方を縱横に走る大阪電氣鐵道、京都奈良間の奈良電氣鐵道、大阪(難波)和歌山間及大阪(妙見橋)高野下間の南海鐵道、桑名大神宮前間の伊勢電氣

鐵道、津井宇治山田間の參宮急行電氣鐵道等は其主要なるものなり。此地方の平野は古來道路發達し、江戸時代には東海道・中山道・北國街道・山陽街道・山陰街道あり道路の幹線をなす。東海道は江戸より熱田に通じ、四日市・鈴鹿・草津を経て京都に達し、中山道は江戸より信濃・美濃を経て近江に入り、草津にて東海道と會し京都に入る。北國街道は鳥居本にて中山道に分れ、樺木峠を越え北國に向ひ、山陽街道は京都より大阪・神戸を過ぎ舟坂峠を越えて岡山方面に向ふ。山陰街道は京都より島岡・福知山を経て鳥取に向ひ、また參宮街道及び熊野街道あり。然して大正八年道路法發せられてより國道は概ね東海道・中山道・山陽道・山陰街道・北國街道の古き道筋により定められ、北國街道と中山道とは關ヶ原にて分岐し、宇治山田に向ふ國道は、三重郡日永村にて東海道と分岐し、また敦賀福知山間・京都奈良間・大阪和歌山間・鳥取徳島間に國道通じ、淡路島にては南北に縱走する國道認定せらる。淀川の水運は江戸幕府時代には重要な位置を占め、伏見・大阪間の交通を助けしが、鐵道開通後はその價值減少し、今は小高汽船及び曳船によりて僅に貨物運送を行ふ。吃水の淺き用船の往來は盛んにて、石炭・木材・砂利等の貨物を運搬す。新宮川にては河口の新宮より浦八丁及び本宮間にプロム船の往來頻繁、觀光客多

り名古屋港と競争の立場にあり、主要輸出品を伊勢海岸の諸港に分配し、更にその海上勢力は三河湾内及び熊野灘の諸港に及び、大阪・名古屋を連絡する船舶寄航す。志摩半島より熊野灘にありては、漁港または遊漁港多く、鳥羽・波切・長島・尾鷲・勝浦・串本あり。中にも勝浦は南紀第一の要港にて、大阪より連絡線入港し、紀伊の西岸にて和歌山港の勢力大なり。日本海方面にては宮津港・舞鶴港が主要港を成し、共に丹波の沿岸より小湊に互り勢力あり。太平洋方面の燈臺は、閃光燈は四日市港・神島・安曇・熊野崎・日の御崎に設けられ、市江崎には二連閃光燈あり。明暗燈は四日市港・小島にあり、霧燈は鳥羽港に設け。また不動の燈は熊野・青島・鶴島・梶取崎・潮岬・友ヶ島に設けられ、特に潮岬の燈臺にては通過船舶の観測通報を行ふ。日本海岸にては三連閃光燈を設け、三本松鼻と博奕岬には不動の燈あり。瀬戸内海沿岸にては鹿瀬と新瀬に閃光燈を置き、明暗燈を瀬本・大阪突堤・神戸港和岬に置き、堺・木津川(大阪)・尼ヶ崎・船場・江崎・高砂・徳島には不動の燈あり。此地方の無線電信所は、海岸局は潮岬にありて横濱神戸間航行船舶通信を行ひ、固定局は大阪にありて、基隆・大連・マニラ・ハノイ・東京・金澤・鹿兒島に通信す。大阪はまた飛行郵便並に旅客空輸の中心を成し、木津川河口の大

阪飛行場より東は東京、西は四國の松山、九州の大分・福岡へ航線す。〔風俗〕此地方は氣候温和、風景優美の影響を受けて概ね温順伶俐の風あり。京都は古風を保存し、優雅の趣味普及す。大阪は商工業盛んにて進取活動の氣風見え、神戸は外人との接觸多く明るき感じを起さしむ。十津川地方は山國の氣風と古武士の面影を存し、強剛の風あり。近畿地方の平野には集村式の村落多く家構には垣内式廣く行はれ、奈良市法蓮の民家特に名高し。町屋には京都風の通廊・格子戸廣く行はる。葺いて土壁多く白壁の夕日に輝くは近畿以西の村落の異觀なり。潮岬等の風強き海岸にては石垣を高くめぐらす。新宮川下流の河原に建てられし小屋の町、橋立附近の舟倉も珍らしきものなり。また、つゆは滋賀縣の伊香郡、京都市の南桑田地方に多し。瓦葺の屋根は都市に多く、農村には稻藁・麥藁葺も見え、山地には茅葺・葦葺・杉皮葺等行はれ、石垣屋根は山田村漁村に見らるのみ。八瀬農家の間取は純粋の四つ目にて、滋賀縣伊香郡高時村の一部には、落し間を設け、寝敷床の所あり。近畿地方には入母屋造廣く行はれ、近江には棟飾の珍らしきものあり。綾部附近にも美しき破風風見ゆ。四河造は滋賀の東部・北部、丹波の南桑田地方に行はれ、京都・大阪・奈良地方には切妻平入の家多く、大和平野・河内地方に切妻の兩端の

防火壁が著しく、棟出は美しき眺めなり。カスを使用せぬ家は立派なる庭を造る風あり。葺入の家屋は宇治山田市、丹波の龜岡・園部・須知地方、和泉具塚町の近畿などに見ゆ。衣服は村落にては質素なるが、商工業地帯は華美にして特に京都は服飾の優美華奢を以て有名なり。八瀬大原の物賣女、白川の花賣女、高尾地方の畑の娘の服装は世に聞ゆ。大原女の婚禮には帯を横に結び、婿人は紺の前垂をつくる古風あり。畑の娘の婚禮には色練にて花模様を刺繍せる手拭を披り、裾の裾目に締縮の縫目止めの入りたる藍の中形木綿の三巾前掛をつくる風あり。頭上に物を載せて歩く風は八瀬・大原・白川地方の外に南紀・志摩の漁村にも往々行はる。近畿地方の農村にては労働の際「ばつち」を履くこと多し。十津川の山地にては頭送または藪藪をばく。滋賀縣の西北の三谷・朽木地方は雪深きため、「かさん」をばく。朽木の一部にては法被の下に履物と稱する一種の甲掛足袋を用ふる所あり。丹波北桑田郡の山奥に行はるる「たつつけ」鞍馬の奥に行はるる「たかけ」は何れも山袴の類なり。食物は概して質素なるが、都會にては食物の料理進歩す。大和・伊賀の茶粥、河内の手擲は世に知らる。志摩より新宮の山奥にかけて甘露を常食とする所多し。年中行事は地方により多少異なる。熊野灘の木本地方にては正月の門松の代りとして椎

の木を立て、河内の枚方地方にては正月に餅花とて木の小枝に餅の薄片を多くつくる風あり。お盆には塔婆を佛壇に安置し蓮の葉の敷物に果物野菜等を供へ、十六日にこれを川に流す風各地に行はる。新佛のある家にては佛壇の外に軒先きに祭壇を作る。京都東山如意嶽に焚かる大文字は八月十六日の聖護院に焚かれ、愛宕の萬燈籠山の火鳥居の點火も珍らしきものなり。奈良の若草山の草燈は一、二月の交に行はる。京都の祇園社にては正月元旦の未明に申杖と稱する十二本の削掛を左右各六本づつ立てかけ同時にこれを焚き、その煙が西にながれば丹波方の不作、東に向へば近江方の凶年を卜ふものとせられたり。多賀神社にては大晦日に「おけら餅」と稱して、人々は元旦の饗用に供する爲に火焼、または提灯に燈明を戴きにゆく。京都府の賀茂神社の祭は世に聞え、石清水八幡宮は武勇の神、北野神社は文學致富の神として尊信せられ、松尾神社は造酒家の信仰所なり。南宮神社は安産の神、稻荷神社は富徳の神、貴船神社は降雨、縁結びの神として崇拝せられ、祇園祭・平安神宮の時代祭など大いに賑ふ。奈良縣の廣瀬神社は五穀の神として信奉せられ、春日神社の大祭・若宮祭等も賑ふ。大阪府の住吉神社は海神・和歌の神として崇信せられ、その末社の楠神社は花柳界の人人に信仰せらる。和歌山縣熊野神社の

牛王神は除夜の尊として尊信せられ、郷の業御守は海上安全のために信奉せらる。大阪の天満の天神祭は大阪第一の大祭なり。神戸の湊川神社は参拜者多く、多武峰の談山神社は風色に富む。此地方は又佛教各派の本山多し。奈良縣には東大寺(華嚴宗)・興福寺(法相宗)・西大寺(眞言律宗)・唐招提寺(律宗)・長谷寺(新眞言宗)・山崎(律宗)等あり、東大寺の大佛殿には善者懸えす。大阪府には大念仏寺(融通念佛宗)、滋賀縣には延暦寺(天台宗)、三井寺(天台宗)門派、和歌山縣には高野山(金剛峰寺)(古眞言宗)、根來の大傳法院(新眞言宗)あり。京都市の内外には寺塔甚だ多く、淨土宗には知恩院を總本山とし、西山派に禪林寺・光明寺・誓願寺などあり、臨濟宗には相國寺・建仁寺・南禪寺・妙心寺・東福寺・天龍寺等の本山あり、眞宗には西本願寺・東本願寺・佛光寺・興正寺等の本山あり。その他智恵院(新眞言宗)智山派、醍醐寺(眞言宗)醍醐寺(教王護國寺)(眞言宗)・泉涌寺(眞言宗)・法相宗(小野派)・妙満寺(顯本法華宗)・本隆寺(本妙法華宗)・壬生寺(律宗)・清水寺(法相宗)等あり。また宇治の萬福寺は黄檗宗の本山にて珍しき堂宇なり。役の行者の聞きたる修験道は山上ヶ嶽より紀伊の熊野にわたり修験者の苦行する霊場にて、山上ヶ嶽には白衣の参詣者が初夏より陸續として登山し、法螺

貝の音山谷にこだます。産業その他の關係にて地方的に信奉せらるる社寺も亦多し。三重縣の香良洲神社は美濃織の神として崇拝せられ、滋賀縣北相の廣徳寺には眞鍮を業とするもの多く参詣し、宇治山の筑田神社は建築關係の信仰所なり。近江の竹生島の辨財天女は美の神、香樂の神として、また淡路の伊弉諾神社境内の岩楠神社は安産の神として信奉せられ、播磨の高砂神社の神符は縁結びに靈驗ありと信ぜらる。丹波國境の愛宕神社は火災除けの神、但馬の養父神社境内の山口神社は盜難除けの神、紀伊の玉津島神社は和歌の神、加太神社は性病の神にて海神として崇めらる。奈良市法蓮の常陸神社、播磨の佐用郡比賣神社もまた性病の神として信ぜらる。姫路の廣峰神社、奈良縣園部村江包の素戔鳴神社は農業の神、明石の人丸神社は安産の神、武庫郡の本住吉神社は商業の神、川邊郡の多田神社は武事の神としてまた信奉せらる。京都紫野の今宮神社にては四月十日「やすらひ祭」行はれ疫神をばらみ、壬生寺にては四五月頃壬生狂言行はる。空也堂にては記念佛行はれ、太秦の廣隆寺にては十月十二日の夜に牛祭行はれ、牛に乗りて摩多羅神に扮するものは奇異の服装をつく。北野神社にては十月四日豊作を喜ぶための瑞續祭行はれ、鞍馬山にては十月二十日火祭行はれ、生田神社にては四月十五日頃提灯祭行はる。更に播

磨の熊野灘の噴噴祭、紀伊土生八幡宮の奴踊、川上村の丹生神社の笑祭、兵庫縣の地方頭八幡社の泣祭、旭陽村宮内の魚吹八幡宮の喧嘩祭もその地方にて名高く、丹波篠山町在の城北村澤田の惣切祭も珍し。奈良の二月堂にては三月一日より修二會行はれ水波の式あり、その行装は古風なり。京都の日野祭師堂にては一月十六日親詣行はる。紀伊の那智にては鳥祭の式後に鳥神靈を参詣者に頒つ。観音・地藏の崇拝も各地に行はれ、三重縣松阪龍松寺内の厄除け觀音・滋賀縣の立木觀音・伊勢白子の子育觀音等も世に聞え、根來の大傳法院身代不動は名高く、大阪府上村の一部にある子安地藏、紀伊高野町花坂の一部にある子安地藏、紀伊の一部にある勢掛地藏、大阪府醍醐寺内の泥掛地藏等も信者あり、關の地藏は古來その名高く知らる。戎は商業の神として尊信するもの多く、一月十日には攝津の今宮の戎、西宮の戎、京都松原通の惠美須社の十日戎などには人出多し。【近畿】近畿とは畿内及び其の附近の地域の稱なるが、地理的區分として近時京都・大阪の二府、奈良・三重・滋賀・兵庫・和歌山の五縣の地方をこれに包含せしむ。併しながら、是は餘りにも現在の行政區劃に拘泥して、古來の慣例と地理の實際とに副はざる遺憾なきにあらず。よりにこには便宜古今の區別を參照して、畿内の五箇國と、其の接續地たる東山道

の近江、山陰道の丹波・丹波、南海道の紀伊とをその範圍となす。即ち今の行政區劃にてはほぼ京都・大阪の二府、奈良・滋賀・和歌山の三縣と、兵庫・三重二縣の各一部とに涉る。畿内とは五畿内の義にして、帝都の所在地なれば帝に上方の稱あり。其の名義は支那周代の王畿千里の義に採りしものなるべく、當初は其の城大和平野の地方のみに限られて、之を内つ國と稱す。神武天皇欲の橿原宮に即位し給ひてより、孝德天皇都を藤原に遷し給ふまで、代々の帝都は大抵此の域内にあり。實に歴代天皇の御座元として、内つ國即ち宮庭の地たりしなり。そもそも我が國家發展の大精神は、「豊原の瑞穂國を安國と平けく治るしめせ」との天神の使命を奉じて、天孫此の國に降り給へりとの確乎たる信念の下に、從來統一なくして諸豪族各地に勢力を相争ひ、民衆其の下に塗炭の苦を嘗めたる諸小國を漸次併合し、悉く之を同化融合して、平安なる大國家を建設せんとするにありき。されば天孫降臨以前にも既に此の國に土着せる多くの先住民族は固より、海外より渡來の歸化諸民族の如きも、悉く其の魂かき懐に抱擁せられて、悉く同一の日本民族となり了るあり。神武天皇御東征以前には、大和平野の地も亦異民族の國として、「大倭日高見國」の稱ありき。日高見とは夷人住居の地方の義なり。かくて神武天皇先づ此の大倭

日高見國を安國と定め給ひて、それより後、皇威次第に遠方の地に及びて、遂に我が大日本帝國の大をなす。よりてヤマトの名は、延いて我が帝國の大體となれり。天皇の大和を定め給ふや、固より先住民を殺戮し或は之を驅逐して其の國を奪はんとはあらず。されば頑迷にして命を奉ぜざる者はやむを得ず武力を以て之を懲らし給ひしも、歸順せる者は悉く之を優遇し、其所領を安堵して國造・縣主等に任じ給ふ。ここに於て當時は此の平野の中に於ても、天皇直轄の御領の外に、倭國造・葛城國造・猛田縣主・磯城縣主等、土着民族の國領あり、又春日縣主・十市縣主の名も傳へらる。然るに皇威の發展と共に是等の地方も何時しか轉々して皇室の御領に歸して、所謂王畿内の國をなし、其の住民は悉く天孫民族に同化融合して、我が國最初の日本民族たるの光榮を有するに至れり。而して當時同化の機に接したる内つ國以外の地方の住民は、取り遣されて所謂内つ國の住民との間に、習俗上まで自から或る差別を生ずるに至れり。今も大和平野及び、其の延長として古代皇室御陵墓の多く營まれたる河内の一部地方に於て、古風の住宅の屋蓋が殆ど悉く切妻式即ち眞流なるに對して、其の以外の地方は勿論、大和の中に於ても山間部地方のものが殆ど悉く四柱式、即ち東屋たるを常とするが如き奇現象の存するは、蓋し是が爲なりとす。併

屋とは通例神社建築に見る所の屋造りにして、是れ實に我が天孫民族固有のものたるべく、之に對して東屋は、先住土着人の屋造りなりしものと解せらる。アマツマの語は古く之に、邊鄙の文字を宛てて、キナカの地を意味す。彼の古へ東國を指してアマツマと稱する事の如きは、我が國が先づ西方より開けて、東國久しく邊鄙の地として遺存せしが爲に起れる第二次的の語義なりとす。されば東屋の名はもと邊鄙の住居の義にして、内つ國即ち歴代帝都の所在地たる宮庭の眞屋に對し、ここに都鄙の差別が住宅建築の上にも判然として存在せしことを示せるなり。かくて世と共に國家の進展著しく、隨つて都の文化も次第に内つ國以外に波及して、遂に大化の改新に際し、大いに畿内の範圍を擴張するに至りて、此の屋造りの差別のみは昔ながらに其の傳統を存し、無意識の間に今なほ其の舊態を保持するなり。大化の改新に際し都は内つ國以外に進出して、畿内に支那式の新都城を經營し、是と共に大いに畿内の範圍を擴張して、東は老鸕の横河、南は紀伊の兒山、西は明石の櫛濱、北は近江の狭々波の合阪山を以て其の四至となす。帝都の地たる大和を出發點として、四方に通ずる道路の要衝に其の界を定めたるものにして、其の境域は後の畿内五箇國に相當す。中に大和・河内・攝津・山背の四國あり。元正天皇皇極元年(592)の爲に河

内の三郡を割いて和泉監を置く。又大和の南部には吉野宮の爲に芳野監あり。監とは郡宮に奉仕すべく設置せられたる特別の行政區なり。後に天平十二年に至り、芳野監亦此の前後に廢して大倭國に併せしが、天平實字二年に至り、もとの和泉監の地を以て和泉國となす。ここに於て畿内五國となる。延暦三年(724)天皇都を山背の長岡に遷し給ふに及び、もはや其の國は「山背」の意義を失ふに至りし爲に、山河帶自然に城を爲すの形勢によりて、之を山城國と改む。而も従来のヤマシロの名稱は依然保存せられて、文字は改まりても國名としてはヤマシロの名が呼稱せられ、はては城をシロと呼ぶこととなれり。ヤマシロはもと帝都の地たる大和平野より、山を隔てて其の背後にあるの稱なり。然るに天平十二年(724)天皇山を越えて都を山背の葛仁に遷し給ふや、一時其の地を大倭國に編入し、國名の文字を大倭と改む。間もなく奈良に復都ありて、境域も復して、後に普通のままに文字を大いに和らぐの義に取りて「大和」と改め、讀みを略して「ヤマト」と呼稱する事となれり。近江は合坂(逢坂)山を隔ててもと畿内の外にあり、東山道に屬し、其の間に逢坂關を置く。而も其の國は四方山を以て繞らされて自から一區域をなし、冷泉(伊勢)・不破(美濃)・愛智(越前)にそれぞれ關を設きて

外つ國との交通を扼す。之を我が國の三關となし、特に重きをなせり。ここに於て近江は關内の國として、畿内との關係特に濃厚なるのみならず、嘗ては成務天皇の高穴穗宮、天智天皇の大津宮其の域内に置かれて、頗る以外の諸國と趣を異にするものあり。次に丹波は其の地山陰道に屬し、山城・丹波の境界たる大江山(老の坂)に關を置いて隔られたる山國にして、其の形勢亦自然に以て西なる中國地方と趣を異にし、殊に近時の行政區劃に於て、丹波と共に京都府に屬するが故に、今便宜此の二國をも近畿に加ふ。最後に紀伊は南海道に屬するも、其の地直ちに畿内に連なり、淡路及び四國とは全く隔離せられて、地理上は亦近畿に加ふべきものとす。平安朝延喜式收むる所國郡左の如し。

- 山城國(乙訓) 葛野 愛宕 紀伊 宇治 久世 磐梯 相樂 大和國(添上) 添下 平群 廣瀬 葛下 忍海 宇智 吉野 葛上 城上 山邊 高市 宇陀 城下(十市) 河内國(錦部) 石川 古市 安宿 高安 河内 讚良 美田 大縣 若江 志紀 交野 滋川 丹比 和泉 國(大鳥) 和泉 日根 攝津國 住吉 百濟 東生 西成 嶋下 豐嶋 河邊 武庫 嶋上 八都 能勢 見原(有馬) 近江國(滋賀) 栗太 甲賀 野洲 蒲生 神崎 愛智 大上 坂田 淺井 伊香 高嶋 丹波國(桑田) 船井 多紀 水上

天田(何遜)丹後國(加佐) 朝野(伴) 渡(竹野) 廣野(紀伊) 郡(那賀) 名草 海部 在田 日高 牟婁) 近畿地方は銅鑄と稱せらるる古銅器埋没地域の中心として、考古學上、民族學上、最も興味ある問題を學界に提供す。銅鑄とは支那周代の銅鑄に其の原を有すと推定せらるる一種の青銅器にして、其の埋没分布の區域は、東は遠江・美濃、北は越前、南は紀伊、西は石見・備中(安藝より)また一箇出でたるも是は器物の移動によるの疑あり)より、阿波・讃岐・土佐に及び、其の明治以來偶然発見せられて、學界に報告せられたる數のみにても無慮百箇以上に及ぶ。更に其の過去に於て發掘せられ、及び未だ発見せられずして土中に埋藏せらるるものを加ふれば、其の數は恐らく數千箇に及ぶものと推定せらる。而も銅鑄の示せる文化は我が古墳時代の文化と殆ど没交渉にして、千數百年前の我が日本民族は之に就いて何等其の知識を有せざりしもの如く、隨つて之を製作使用せし民族繁盛の年代は、蓋く我が日本民族發展の以前にありしものと解せらる。蓋し往古或る支那古代文化を有する民族が大舉我が島國に渡來して、一時近畿を中心とする附近の地方に繁盛し、祖國の技術を傳へて銅鑄を鑄造せしが、後に他の有力民族との民族的闘争に敗れて、族を擧げて絶滅し、若しくは落伍者となりて、祖先の寶器は地中に埋

藏せられたるものと悉く其の存在を忘れられ、祖先の文化は何時しか全く失はれたりしものと解せざるべからず。而して近畿に於ける銅鑄民族の變遷は、此の興味ある問題に對して解決の鍵を與ふるもの少からず。神功皇后新羅を征し給ひてより、韓土我が國に服して其の間孝漸く繁く、難波は海外渡航海の要津となる。應神天皇が難波の大隅島に神宮を設け給ひ、仁德天皇が今の大阪城の地なる高津宮に都を遷し給ひしもの蓋し是が爲なりとす。かくて應神天皇の御代には、王仁、阿直岐等の學者百濟より渡來し、又秦人、漢人の大舉歸化が傳へられ、更に天皇は強く吳國に遣はして、紡績織造の工女を求め給ふ等、大陸の文物工藝盛んに我が國に輸入せらる。タレとは暮の義なり。我が國が日出處にありて朝の國なるに對し、西方日没處なる支那は暮の國と呼ばれしものなるべく、而も當時交通せし所は揚子江南地方に國を成せし東晉にして、古へ三國時代の吳國の域に當るが故に、之を「吳」と書きてタレと讀む。其の後、東晉亡びて宋・齊・梁等、南朝の諸國引續いて我と交通し、聖略天皇復使を宋に遣はして工女を徵し給ふ事あり。古史にこれを「吳」と記す。次に秦人は秦始皇帝の後裔(月君)に引率せられて、應神天皇の十六年に我に歸化したる百二十七縣の人夫の子孫なりと言はれ、又同じ御代の二十年には、後漢の靈帝の曾孫阿

加使主が、其の子孫(加使主)と共に靈廟(七縣)を率ゐて東歸し、漢人の祖となると稱せらる。而も此の秦人と漢人とは、其の後甚しく進歩の經濟を異にす。阿加使主等は大和平野の東南部高市郡の地を與へられて、一族大いに其の地に蕃息し、其の勢甚だ盛んにして、高市郡は我が國の政治・文化の中心地となり、從來殆んど御代毎に遷都するの風習も漸く廢して、推古天皇が飛鳥の豐浦宮に都を築給ひてより以來、元明天皇が都を奈良に遷し給ふまで、歴代の帝都遷に漢人の中心地たる飛鳥に固定するに至る。其の間孝德天皇は難波に、天智天皇は近江に、一旦都を遷し給ひしも、共に久しからずして廢し、帝都は再び飛鳥に復するに至りしもの、一に漢人の勢力の然らしめしものなりとす。又彼の大臣蘇我氏が久しく權力を恣にせし事の如きも、天武天皇が壬申の亂に勝利を得給ひし事の如きも、共に主として漢人の勢力其の背景をなせしが爲なりき。而も其の漢人を背景として成効し給ひし天武天皇が、數回遷都を試みてつひに遷げ給はざりし事の如き、或は蘇我・大津の前代二度の遷都の如き、共に表面上他に種々の理由あるべしとは云へ、畢竟は漢人の勢力圍内より脱出して其の制肘を免れ、自由の天地に理想の政治を施行し給はんとする御意に外ならざりき。其の漢人に對する懷柔と壓迫とは効を奏して、和銅三年の平城遷都は

無事完成を見るに至りしも、奈良朝の本に至りては高市郡の住民中、十の八九は漢人の族なりし程の隆盛を示したり。然るに之に反しては漢人と時を同じうして歸化したたりと言はるる百二十七縣の秦人は、當初大和平野の西南部朝野の被上の地を與へられて、ここに落着きたりと傳へらるるも、其の後久しからずして勢力を失はるるも、雄略天皇の御代の頃には、諸國に分散して臣連等のおの心のままに之を驅使すありて、族を擧げて奴隸の境遇に墮落するに至りしなり。其の後雄略天皇之を其の龍區(秦酒公)に授け、諸國に遷して蠶桑の業に従はしめ給ふ。是より秦人再び勢力を得て、欽明天皇の御代の頃には七千五百三十三戸の多きを數ふるに至る。五十戸一郷の制によりて百四十一郷。之を奈良朝初期の全國四千二百郷なるものに比するも、其の數全國公民の約二十八分の一に達す。然るに斯くの如き優勢なる大民族が、其の渡來當時に於ても漢人十七縣に對して百二十七縣と言はるる程の多數の黨類を有しながら、少數の漢人が上記の如く繁盛に赴けるに反して、約七十倍の秦人が久しからずして悉く奴隸の境遇に墮落せりとは、如何にして奇態なる現象なりと謂はざるべからず。よりて思ふに、漢人の居地たる高市郡に古へ今來郡の稱あり、又其の漢人に新漢人の名ありて、今來とは古より我が國に住する他の漢人、即ち別

種々の支那民族に對して應神天皇朝渡來の阿知使主等の率ふる漢人は、今來と呼

れば古傳説いふ所の天日槍の説話は、其の實、秦韓人の渡來を語れるものにし

に總數の約三分の一を占むるの勢しき數を占むるなり。而して其の中にも、秦氏

疲弊の京都は更に一層の甚しさを加へた。鎌倉幕府滅びて建武の中興成り、京

の死後も諸將兩派に分れて遂に全國の大亂となる。ここに於て従来の階級は全く

が、先人の遺業を悉く掌中に收むるに至りしものなりとす。而して豊臣氏と徳川

られたるを初として、其の後水井・石川・松平(戸田)・松平(大船)の諸氏を以て

二千石青木氏の四藩あり。近江にほもと石田三成二十三萬五千餘石を領して佐和

キンサ——キンサ

キンサ 金沙面 朝鮮京畿道驪州郡の西北部。東には興川面に隣り、東北は漢江を隔てて介軍面・大神面に對し、西北は揚平郡江上面・江下面に、西南は廣淵郡實村面に隣接す。西北境に揚子山(七〇四米)聳え、山嶺は南に延びて西南境を限り、山地は東北に傾斜し、東北境を北西に流るる漢江流域低地に續く。産物は米・麥・豆類・馬鈴薯・甘藷等を主とし、大根・白菜等の野菜も栽培さる。また山中より金を採掘す。三等道路は東南部を掠むるも交通便ならず。

キンサ 銀座 江戸(東京市)の古地名。今の日本橋區本石町二丁目。日本銀行の敷地となれる地に、江戸時代に金座役所のありしに因りて起りし名稱。金座は江戸時代に於ける幕府直轄の金貨鑄造局にして、徳川氏の金座は家康が甲斐國を所領として以来、武田氏の金座たりし松本細野以下四名をこの金座として甲州會も鑄造せしめ、天正十八年、關東入國後も文祿四年まではこの甲州金を使用せり。これ金座後藤の鑄造の行はるるに至りし後、甲斐一國限りその金貨が特に流通せし所以なり。江戸金座は文祿四年家康が後藤庄三郎光次を擧用せしに始まり、先づ武藏墨判を鑄造し、ついで小判分判を造らせしより、元祿改鑄に至る期間に手前吹き又は手前詰め時代にして、元祿改鑄以後幕末に至る期間を金座直吹き時代

INK

とす。手前吹き時代はこれを金座工業下請負時代とも稱すべく、當時は江戸・京・駿河・佐渡にて小判を造り、これに後藤庄三郎の金銀改鑄所にて鑄印を打ち通貨となれり。即ち前記諸地にそれぞれその家に由緒ある鑄印を相傳し、その家々の特權として小判の鑄造を許されたる者が居り、此等が後藤配下に屬し、その鑄造小判を後藤に提出し、彼の檢定鑄印を得て始めて通貨となれり。これ等手前吹きの者どもは地金を下金屋より買入れ、或は特約ある諸侯の産出金を引受け、又は金銀改鑄後藤が渡す幕府直轄の諸山の産出金を材料として小判鑄造を請負ひたり。従つて鑄造所はこれ等手前吹きの特權所有者の家にありしが、彼等は取鑄の便宜と鑄造工程の必要により一所に集まれり。即ち江戸に於ては本町一丁目、即ち現在の日本銀行所在地が金銀改鑄後藤の居宅にして、これに隣接する吹屋町(現在なし)は實に彼等居住の遺跡なり。然るに元祿八年に至り、幕府は財政の窮乏より金貨改鑄を企て、前記手前吹きの諸種の弊害ありして、本郷靈雲寺傍の大根畑(後の新花町)に新に鑄造所を設け改鑄行ひたり。即ち散在せる鑄造工を一所に集中して幕府直轄制度を確立し、且つ鑄貨關係者に悉く秘密を誓約せしめ、又京都の金座人をも江戸に招致し鑄造に従事せしむ。元祿十一年再び本町に鑄造所を移せしが、この直吹き制度を改めず遂に幕末に至れり。即ち元祿八年以来金座の職制は確定し、金座役所及び鑄造所は一所に集中せられ、この座以外に於ける小判分判の鑄造禁止せられ、統一ある組織となり、勅定奉行の下に金座は完全に支配せらるるに至れり。蓋し文祿四年以来後藤庄三郎の金銀改鑄なりし間は、家康に近侍して金銀座を支配せしが、その後その權限は制限せられ、元祿八年以降は勅定奉行の支配に移れり。金座なる稱呼が廣く行はるるに至りしこの時代といはる。爾來江戸の金座は十餘回の火災にあひしも、安政五年十一月の火災後、一時千住眞先の鑄造所に合併せし以外には、常に同一場所に移建せられ、明治二年造幣局の新設により廢止せらるるに至るまで變らざりし。江戸本町一丁目の金座は、奥行凡一三〇米、間口凡八二米の地内に建ち御長屋門に黒板塀をめぐらし内外を嚴重に遮斷し、構内建物には事務所たる金局、工務所たる吹所及び局長官舎たる御金改鑄住所の三棟あり、これ等の建物はすべて御勅定奉行の管理に屬せり。金座長官たる御金改鑄は後藤家累代世襲するところにして、初代庄三郎光次、徳川氏幣制の基礎を築きし功により金銀改鑄を拜して以来、五代廣雅に至るまで同役を繼ぎ、六代光富以来金改鑄と改まり爾來十一代光包に至りしが、彼は私曲を營みしより文化七年伊豆に流され家名斷絶するに至れり。幕府は直に同族銀座年寄後藤三右衛門孝之を金改鑄に命ぜしが、二代光享政治を請せし罪により弘化二年十月死刑に處せらる。幕府は同年十月八日大判座後藤十六代方業の嫡子吉五郎を同職に命じ、明治維新後金座の廢止に至る。金座出張所は京都・駿河・佐渡に置かれしが、京都出張所は元祿年中に二條東洞院西へ入る處に設立せらる。それ以前は江戸と同じく手前吹きなり。元祿より寛政年間に至るまで、京都集古金類並に山出金を以て通用金を吹立てたり。その後鑄貨を停止し、京阪等の金箔及び箔屋・下金屋を管理し取締れり。維新の際、江戸本局に先立ち新政府に徵集せらる。駿河金座は、家康政府に隱居の慶長十二年に設けられ、江戸・佐波・京の判金を檢定鑄印し、且つ小判を鑄せしが、家康改鑄後、江戸へ合一さる。佐渡相川の金座出張所は元和七年に始まり、元祿改鑄に至る間は手前吹きを爲せしが、同九年延金のまゝ、上納を命ぜられ、延享四年再び小判吹き上納を命ぜらる。此時、京都と同じく純然たる金座出張所となる。文政二年再度吹立上納を廢し、爾來鑄貨には従事することなく幕末に至りしものなるべし。

キンサ 銀座

銀座 東京市京橋區の目黒街。詳しくは北は京橋より、南は新橋、東は三十間堀、西は外濠によつて限られたる一帯の地を稱し、銀座・西銀座に分れ、その各々に一丁目より八丁目まであり、他町のそれと比しより高級なり。(銀座の柳)銀座の街路樹は當初種々の樹を植ふしが、松・櫻は直ちに枯れ、結局柳のみを植ふることとせり。かく柳のみとなれるは明治二十年前後のことなり。春より秋の初めにかけて美しき緑の絲を垂れ、瓦斯燈の灯輝々たる情趣はいく都人士の胸奥に感銘を興へ、これより銀座と云へば直ちに柳を聯想するに至れり。しかるに大正十年、東京市は京橋・新橋間の車道擴張のために柳を掘取り、代ふるに公孫樹を以てせしが、これは地元町民の反對に逢ひ、且つ生育もはかばかからず隨る不評判なりしため、昭和七年三月東京朝日新聞社の寄附により柳の植樹を復活せり。現在の地名・區劃は昭和五年三月四日以後の事なるが、それ以前は、銀座なる地名は現在の本町四丁目までを指し、それに尾張町が二丁目まで、出雲町・竹川町・南金六町と分れ、これ等が所謂銀座八街なりき。(銀座)とは江戸時代に於ける幕府直轄の銀貨鑄造局にして幕府發行銀貨の鑄造權を獨占し、且つその鑄造が一種の請負制度たりし點に於て金座と同様なり。古く(足利末頃)泉州堺に銀商・銀工の集りて南銀座または宗陣座と稱する一團をなし、灰吹銀を鑄てこれに自家の鑄印を打ちて通用せしむ。文祿三年、豊臣秀吉が大坂銀吹ども二十名を當是たらしめしは、彼等に當是といふこの種の座の特權を興へしものな

キンサ——キンサ

り、地籍して大銀座といふ。銀座道は會都に於て最も繁華なる街をなし、高級流行品・化粧品・舶來品等を賣る店鋪多く、松屋・三越・松坂屋・伊東屋等の百貨店軒を並べ、飾窓華かに、街衢も清潔快適にして散歩によく、日本の流行は一にこの街より出發するかの觀あり。また表通・横丁に大小のカフェー・喫茶店等點比して、ネオンサイン眩く、新橋附近には數坊に駐歌さざめき、夜は露店賑かに、一大歡樂場を形成す。(江戸時代の銀座)慶長十七年駿府の銀座を京橋以南の地に移し新兩替町と稱せり。寛永圓にれば後所は現在の銀座二丁目に置かれたり。この銀座は寛政十二年觸發町に移轉せしが、地名のみは残存して明治に至れり。銀座町とは元來俗稱にて、公稱となりしは明治二年以後のこととす。この邊一帯は昔は海なりしが、慶長八年日比谷門に至る入海を埋めてこの地を生ず。而してここに銀座を置かれ、また地理的に東海道に面せし等の關係上次第に繁華となれり。有名なる家として尾張町に布袋屋・亀屋・惠比須屋の三吳服屋あり、しがらき新道には休み茶屋「しがらき」あり、金春新道には能樂師金春八郎の屋敷あり、附近には山東京傳・京山・喜多撰言・岸本山豆流・平田萬風・津藤等の文藝の士住みたり。新橋附近の待合は、江戸時代には前記しがらきと藤岡及び新橋南の玉の井の三軒のみなりし

が、安政頃より舊者屋・待合を多く生ぜしといふ。(煉瓦地時代)明治二年十二月廿七日夜半及び五年二月廿六日午後二時の兩度の火災は、銀座一帯の地を烏有に歸せしめしため、時の政府は度々の火災に損害の少からざるを憂ひ、且つは京濱間鐵道の開通に際して東京の支團として裝飾すべき必要より、不燃質の煉瓦造西洋建築に改め、以て文明開化の儀表たらしめんとせり。明治六年起工、七年には凡そ出来し、十年竣工せり。豫算額一八〇萬圓。建築費用は一時政府に於て負擔し、借主に月賦にて償還せしめ、財源の一部には松平榮翁の七分銀を充てたり。英國人オードレスの設計に成り、京橋より新橋に至る大通はすべて一等家屋、横丁は二等、裏道は三等とせり。一階の表には圓柱立ち並び、窓はフランス式にて外開き、全町悉く同一様式にして可也の壯觀を呈せり。道路は幅二七米、これを人道・車道に分け、人道には同じく煉瓦を鋪き、車道は鋪裝をなさず、人道と車道の間には松・櫻・柳・楓等を植ふたり。道路は明治六年の本頃は煉瓦工し、同七年には街路樹と並べて京・新二橋の間兩側に八五基の瓦斯燈を點せしもの蓋し日本に於ける歐風街路照明の最初ならん。當時この地を俗稱して「煉瓦」または「煉瓦地」と稱せり。新橋驛の開通とともに銀座は東京の表玄関として次第に繁華に赴き、築地居留地の外人相手の店も多き

キンサ——キンサ

を加へ、自ら異國好きの街となり、洋服店・洋食店・唐物屋(當時これを舶來屋と稱す)等軒を並べたり。(新聞社街時代)明治の中葉よりその木葉にかけて銀座附近は一種の新聞社街の觀を呈せり。有名なる福地樓の東京日日新聞社は銀座の中心にありて岩谷松平の商會とともに銀座街に君臨し、其他、大同育造の中央新聞社、島田三郎の東京毎日新聞社の相對するあり、これと程遠からざる所に報知新聞社・日出新聞社あり、舊弓町には黒岩周六の萬朝報社あり、日吉町には徳富蘇峰の國民新聞社あり、舊山町には村山龍平の東京朝日新聞社あり、舊南橋町には時事新報社あり、而して京橋際には文學新聞として最も山崎深き讀賣新聞社ありたり。また此等の各社に材料を提供する帝國通信社・電報通信社の外に間接直接に新聞事業に關係を持ちたる秀英社・國文社・築地活版所等、何れも附近一帯に軒を並べ、一種の新聞社街の觀を呈し、現今とは全然趣を異にするものありき。(夜店)銀座の情趣は夜店にあり。夜店は江戸時代より存し、もとは飲食店多く、有名なる天ぶら屋天命もこの夜店より現今を爲せしものなり。實に銀座今日の股賑には夜店與りて力あり。今は表通約二八〇臺、横丁四六臺。平常は東側のみなるも、草市・大晦日等には臨時に西側の出店も許可せらる。骨董屋・古本屋・新發明品賣等多くして、何れも

らん。慶長三年徳川家康が伏見に銀貨鑄造所を設くるや、また堺南條の湯淺作兵衛を招致して、専ら銀貨鑄造に任ぜしめ、大黒常是の姓名を與へしが、常是は文祿三年の由緒に基くものならむ。爾來銀貨には大黒像の極印を打つのならむとなれり。關ヶ原役後、家康天下の大勢を制するに至り、慶長六年六月大津代官末吉勳兵衛利方の建議を容れ、先の銀貨鑄造所を改めて銀座となし、利方をこれが長官に任じ、金銀改役後産光次と共にその管理に當らしめ、從來の切造を改めて銀貨統一のため新たに銀の品位を定め、丁銀及び豆板銀を鑄造して通用せしめ、大黒常是を鑄造方の長たる銀吹人に任ぜり。慶長十一年家康駿府に隱居するや、またここにも銀座を設け、常是は次に次男作左衛門をして鑄造を掌らしめ、同十三年には伏見銀座を京都に移して、常是の長男作右衛門をして同所の鑄造に從はしめ、同年更に大阪にも銀座を設けたり。十七年には駿河銀座を江戸に移し、十九年には長崎にも之を置く。江戸の銀座は初め新井町即ち現在の京橋區銀座の地に置かれしが、寛政十二年五月日本橋區編笠町二丁目十四番地の地に移さるゝ事となり、翌享和元年七月同所へ移轉し、一九アールの敷地を給せらる。次いで文政二年には濱町内に於て添地二五アール、天保十三年には關地内に於て四三アールを給し、文政二年六月には後草場橋

町に四三アールの下吹所を加増せらる。

銀座が金座と大いに異なる點は、金座は時に冥加金を幕府に上納せしむるに納税の義務なきに反し、銀座には明かに正式の運上の課せられたることあり。銀貨鑄造は悉く銀座に於て行はれたるものなるが、元祿改鑄の際に、金座・銀座ともに其制度に改革ありし時に於て、一時金座と共にその鑄造所を本郷に移せしが、その後、再び銀座の吹屋に於て鑄造に従事することとなり。次で寶永・正徳・享保・元文の改鑄を経て、元文二年には幕府は大阪銀座の附屬として道頓堀濱町に放出銀靴吹場を新設し、翌年また銅座を大阪銀座の隣地に置き、銀座監督の下に諸國銀山の出割を買集め、長崎廻船及び寶印に關することを取扱はしめたり。明和・安永の改鑄を経て寛政十二年に至るや、座人等の不正暴露して大改革あり、江戸銀座の大黒屋は歸郷し、京都の大黒屋が江戸銀座に入り、座は新井町より編笠町に移れり。長崎銀座の時廢止せらる。文政二年には江戸淺草橋場町に下吹所を與へられ、ついで文政の吹替に從ひ、天保に至りて同二年大阪銀座の鈴木町へ移轉あり、天保・安政・萬延の改鑄に従事して、明治二年の廢止に至るまで、銀貨鑄造のすべてを司り來れるものなり。

キンサイ 金祭面 朝鮮平安南道大田郡の西北部。平壤府の西北約一四軒、

東は南兄弟山面・龍山面に、南は大寶面に、西は江西郡星臺面・斑石面に、北は平原郡徳山面に各隣接す。萬徳山の山脚一〇〇米余の丘陵となりて南方に延び、中部を大同江の一支南に流れ廣き平地をつくる。産物は米・粟・豆類・棉を出し、苹果も栽培する。平壤府に至る三等道路西北より東南に貫通す。内地人の居住者は多からず。面事務所は院場里に置く。

キンサン 金山

【金山面】 朝鮮黄海道延白郡の北部。東は雲山面に、南は花城面・風化面に、西は牧丹面に、北は平山郡馬山面・積岩面及び金川郡山外面に各隣接す。西北境に雲頭峰(三〇七米)聳立し四周山地を繞らし中部に低地ありて盆地状をなし、體成江の一支中部低地を潤して南部の中央山地を切つて東南に流れ南部平野に續く。産物は米・麥・豆・棉・大麻を出し、林檎・梨も栽培す。街道は中部を南北に通するが交通は便ならず。仙岩里に面事務所を置く。

た西北部山中に金溝面に亘る金溝金山ありて金を出す。街道は西部を南北に通じ北方の金堤邑及び全州府に達す。内地人の居住も五〇餘人に及ぶ。(金山寺) 金山里にあり。金堤を距る一六軒、全州・井邑兩地より各二八軒の中間に位し、三面母岳山脈を以て圍繞し單に一方のみ開け幽邃閑雅匹敵少き天恵の勝地を爲し、今を去る一千三百餘年前(我、推古天皇)百濟法王元年に百濟法王の創建に係る一大古刹なり。新羅善徳王二年慈藏法師勅命を奉じ、唐より釋迦世尊の眞身舍利を奉獻し還り、塔を造り其の下に奉藏す。塔は現存の有名なる松臺石鐘塔なり。又新羅の善徳王二十三年に律師眞表なる者彌勒尊佛外二佛を現出し、三層寶殿を建築し、之を安置せり(一説には此の三佛は李朝初期の傑作なりと云ふ)。後百濟王眞蓋は當寺を尊信すること最も厚かりしが、その長子神劍と不和を生じ神劍父を當寺に幽閉し自立す。眞蓋許に脱して羅州に走り身を高麗の太祖に寄す。後神劍又高麗に降服せり。後百濟滅亡の端を發せし地なるを以て歴史上有名な遺蹟なり。當寺の最隆盛なりしは後百濟朝の時代にして盛時は僧千餘人堂宇數百を以て算せられ、金羅道寺刹第一班地として各寺を統轄せり。その後寺運の隆衰、佛道の推移等により寺財蕩盡し、寺宇類廢の悲運なる状態に陥る。加ふるに文祿元年壬辰の火災に罹り建遺物は悉く灰燼に歸

キンサン 錦山

【錦山面】 朝鮮黄海道海州郡の西北部。東は東雲面・秋花面、南は泉決面・沐東面、西は羅徳面・海州邑、北は載寧郡上柳面に各隣接す。西境に雪雷峰(九四五米)聳え、山脈延びて西境を限り、高山地帯をなし、東部は一二〇〇米の丘陵廣く連るも中間に低地ありて灌溉の便よく耕地拓け、米・麥・豆・棉・大麻を産し、林檎・梨を栽培す。社稷黄海線の上海(載寧郡載寧邑)・龍塘浦(西邊面)間の鐵道道に新酒幕驛・鶴峴驛(共に昭和四年設置)を置き、載寧邑より海州面に至る一等道路中部を南北に通じ交通便なり。面事務所を鶴川里に置く。

【錦山面】 朝鮮全羅北道錦山郡の中部。北は錦城面、東は濟原面・富利面、西南は南二面、東南は南一面に各隣接す。西南部に山地連るも土地東北に傾斜して錦山盆地に續き、盆地は耕地拓け、麥・大豆・大麻等を産し、煙草の栽培も著しく、また錦山人參の産を以て著はる。なほ小規模の製紙・木工等の家内工業行はる。街道は東北部より四近に放射状に通ずるも、郡境を出づるに險坂の箇所ありて交通便ならず。錦山郡廳の所在地にして定期の開市あり、地方物産の集散地となす。

【金山村】 富山縣越中國對水郡の南部。富山市の西約一〇軒、高岡市の東南約八軒。北は黒河村・橋下村・水戸田村、西は柳田村にそれぞれ隣接し、西南は東礪波郡、東南は婦負郡に界す。村内丘陵起伏するも、諸處に小圃點在し且つ小川數流あり、灌溉に便なるを以て耕地よく拓く。主産物は米にして穀肥・鶏卵等の特産す。北陸本線小杉驛(約四軒にしてバス)の便あり。此地古くは和名抄、射水郡柳田郷の内に屬せしものか。村名はカナヤマとも云ひ、いま青井谷・淨土寺・上野・平野入會地の四大字より成り青井谷に役場を置く。

す。其後再建に着手し我が元和元年辛酉三月に略に完成す。是現今存するものなり。其當時に於ては木造建築物の最も雄大なものにて、特に彌勒殿の如き三層なるは最も珍らしき構造にて朝鮮内に於て稀なるもの。爾後殿宇類廢甚しく來拜者の常に數聲を發する所なりしが、大正五年是等遺存物は特別保護建築物に編入せられ、朝鮮總督府補助金を下附し、特に技師を派遣し、原型を變ぜざるやうに留意して之が大修理を加へ、大正十一年完成し、大いに面目を改めたり。なほ遺蹟としては舍利塔・七重塔・十三重塔・石蓮・刹竿支柱・大鐵釜・彌勒佛・五百羅漢・彌勒殿・銅鐘・大寂光殿・深淵庵・七星閣及び石碑等あり。

キンサン 琴山面

【琴山面】 朝鮮慶尙南道晉州郡の中部。洛東江の一支南江の右岸に沿ふ。東南は文山面、東は晉城面、東北は南江を隔てて大谷面、西も南江を隔てて集賢面・道洞面と相對す。東部に三〇〇米餘の山地南北に連れども、西部は南江による沖積土の低地にして地味肥え氣候溫和、また灌溉の利多くして耕地よく拓け、農産地として著はる。産物は米・麥・豆・棉・大麻等を出し、養蠶も行はる。主要街道は面内を通じざるも、南隣文山面に出づれば馬山府に至る街道及び總督府鐵道の慶全線葛村驛・南文山驛に近く交通不便ならず。内地人居住者は未だ多からず。

【錦山面】 朝鮮全羅南道高興郡の西南海上。居金島・小鹿島、其他の小島より成る。東北は海を隔てて道陽面・古邑面・道化面に對し、南は蓬萊面、西は莞島郡余日面の諸島嶼を望む。居金島最も大きく高度四百米餘の山地起伏し、西北部海岸に僅に低地あり。海流の影響により氣候溫和にして起伏面も比較的よく拓け、耕牧漁鹽に富む。農産物は米・麥・大豆・棉、牧畜は牛・魚類には鱈・鱧・石首魚・鯛等あり。海苔・牡蠣の養殖も行はる。島内は海岸に沿うて街道通じ、海上は古

【金山庄】 金山庄(臺灣臺北州) 【金山面】 北海道後志國全市郡大江村にあり。函館本線の一驛(明治廿八年設置)。

れば南北に走る羽州街道に沿ふ尾花澤町に達し、東降すれば小野田村宇内野にて中羽前街道に合し、更に中新田町にて南北走する羽後街道と直交す。この西麓地方に慶長年間銀鑛開かれ、寛永年間に採掘行はれたり、因りてこの地名出づ。いま玉野村宇山新加に温泉湧く。この道は大野東人の開きし往還にして、古人は延津口と稱せり。奥羽水産軍記に、敵は、彼屋に、關山越、輕井澤口より寄來る人に候、幸ひに候へば、輕井澤の敵をば延津の切所に防留候べし云々とあり。【銀山平】 越後駒ヶ岳(二〇〇二米)の東方、尾瀬沼の北方、新潟縣北魚沼郡湯之谷村に屬する小盆地をいふ。陸地測量部發行地形圖には只見川に沿ふ一小部を指す如く記されあれど、只見川支流北ノ又川と赤ノ川との沿岸、四〇軒餘の總稱なり。南方は日光尾瀬の山々、西方に駒ヶ岳・奥利根の群山連發す。而して北ノ又川に沿ふ村杉・清水・細越等は主として湯之谷村宇津の人々の私有地にして、夏より秋にかけて養蠶のため此處に移住し、冬季は自村に歸還す。又赤ノ川に沿ふ須原口より浪井・鷹ノ巣に至る間は凡て銀山拓殖株式會社所有の開墾地たり。須原口は北ノ又川の只見川に合流する地點に在り、ここに銀山拓殖株式會社の事務所あり。須原口より只見川に沿ひて進行すれば、助湯と稱する奇景あり。昔時ここに大野を捕へたりと傳ふ。此湯より

り上流の地點を浪井と稱す。此地は廣き高原地にして千軒原と呼び、往時は千軒の家ありしと云ふ。ここに銀山寺あり。この寺は銀山平唯一の寺にして、又、湯之谷村折立尋常小學校分校並に山宿を兼ね、銀山寺より三百二十、三十米上流の赤ノ川畔に温泉湧く。銀山寺の對岸には一枚岩の大岩壁あり、巖に數條の鐵あり、浪の形に見え、正面の一奇岩を虚空藏岩と稱す。これより浪井の名稱出づ。寺より約一〇〇米離れたる何畔に虚空藏菩薩を祀る堂宇あり。この地の鎮守社なり。傳説に依れば、長寛元年尾瀬三郎房利郎を以て越後魚沼郡敷島に流さる。後、銀山平を経て尾瀬沼に遇れて死す。京都より持參の守本尊虚空藏菩薩を此對岸の奇岩に祀るとあり。浪井より西南約一軒の地、懸ノ岐津左岸に懸ノ岐温泉湧く。浪井より南方約二軒の平地を買石原と稱す。陸地測量部地形圖にはここに銀山平と記しあるなり。買石原の名は往時銀鑛の賣買せられたりしり出で、上田銀山製鍊所の址なり。この銀山は明暦三年幕府の手に依りて採掘し、次で元祿年間川村瑞軒、第三次には安政年間正田利右衛門發掘す。その中最も盛んなりしは川村瑞軒の時代とす。この對岸にも白峯銀山と稱せらる。その頃の銀山の址あり。併しこの銀山はその後産出量漸減し、廢鑛の運金に遺ひ、今は僅に幾十の墓石と供養塔殘るのみ。銀山平は廢鑛になりし後幾

十年顧みる人も無く訪るる人も無かりしが、明治の末年に至り、銀山平一帯は湯之谷村村民に拂下げられ、大正の初期に小出町の櫻井庄平氏、この地開拓の目的にて銀山拓殖株式會社を設立し、移住開墾を計る。今は養蠶を始め、馬鈴薯・玉蜀黍・蕎麥・麥等の農産物栽培せらる。又、尾瀬・奥利根方面より登山者、この地の長野縣神内(上高地)に似たる幽邃たることを賞讃して世に傳へしに依り、今はハイキング・キャンピング等の遊地として推稱せらる。殊に紅葉期は美し。探勝路には上述北線小出驛より枝折峠を経て至るものと、尾瀬ヶ原より只見川に沿ひて建するものとあり。【銀山】 玉野村(山形縣北村山郡)【銀山】 中ノ岳(新潟縣)の別稱。【キンシチヨ】 錦糸町 東京市本所區の町名。徳武本線の錦糸町驛(明治二十七年設置あり)。【キンシヤ】 金砂村 愛媛縣伊豫國宇摩郡の東部。石越郡屋頂の南側、湖山川の谷に沿ふ。東に新立村、西に富郷村、北に寒川村、中ノ庄村、中曾根村、松根村、妻島村、南は高知縣長岡郡大杉村及び岡吉野村に各隣接す。南境に大森山(一四一六米)、佐々連尾山(一四〇四米)、カガマツ山(一三四三米)の結晶片岩より成る高峯あり、東部に黒藏川、西部に上小川河北流して湖山川に注ぐ。湖山川は村の北部を西より東に流れ、北端水波峠(八

九二米)より平石山(八二五米)に至る平坦なる石越層屋頂の背面に急斜面を作る。羽瀨・河口附近に大規模の侵入曲流をなす。村内、山林多く良材・薪炭を産し、煙草・三穂等の畑作行はれ、また銅硫化鐵を出す。街道は湖山川に沿うて走り、高知縣方面とは中川峠(一二二二米)より通ずるも輪路ありて交通便ならず。湖山川に沿ふ別子山・富郷・新立・上山諸村の地と共に山背と稱せられし所、古くは小川山村といひしが、のち湖山川より砂金を拾ふより金砂村と名づくるに至れり。(佐々連尾山) 佐々連尾山の北斜面にあり。我國重要鑛山の一。岩城鑛業株式會社の經營に屬す。昭和十年含銅硫化鐵一〇五五〇噸、硫化鐵七一〇三噸を産し價格總計二五五萬圓に達す。附近一帯は三波川層に屬する綠泥片岩より成り、鑛床はそれらの間に挟り、數枚のレンズ狀をなし、何れも主として黄鐵礦及び黃銅礦の緻密なる集合より成る。そのうち黃銅礦に富む部分は、銅一・五乃至二〇%内外、硫酸四五%前後を含み、之を賣出して先づ硫酸を製造し、その殘滓より銅の製鍊に供す。【キンシヤク】 銀尺面 朝鮮慶尙北道尙州郡の西北部。東は慈雲面、東北は利安面、南は外西面に接し、西北は開度郡龍岩面に界す。面内概ね山地連り、山地を刻む順江の支流城に僅に低地ありて耕地拓げ、麥・大豆・大豆・棉等を産す。

キンシヨ—キンシ

三等道路北部を東西に通じ利安面・龍岩面に達するも交通便ならず。【金州會】 關東州全州民政署の都市。滿鐵の沿線に在り、大連の北方二〇、一哩。此地は古昔高句麗の領土に屬せしが、唐の時支那の版圖に入り、ここに南蘇州を設け、遂は蘇州と改め、金の時、化成縣又は金州と稱し、元の時州を廢し、明代には金州衛を置き、清初改めて寧海縣とし、更に金州廳と改め、撫遠副都統をここに遷し、滿漢蒙の旗兵を其下に管領し、遼東半島の重鎮とす。日清戦役に我が軍の攻略する所となり、次でソ聯邦の租借に歸し、ゴーツマス條約の結果我が關東州の一部となり今日に至る。現在民政署を置く。市街は城内及び新市街より成り、物産は林産・梨・桃・櫻桃・蒜・苜蓿等を産とし、附近には雄雞・瓜子(西瓜の種子)・落花生・蕪菜等も夥からず。本産に魚・鹽、鑛産に石炭等あり。附近一帯には名勝古蹟多く、北門外の永慶寺、天齊廟、西門外の玉泉廟及び鐵牛、大和山の諸寺等舊有のもの外、日清・日露の兩戦役もありて、日清戦役に於ける山崎・館崎・蘇崎の三志士に因る三崎山、日露役の激戦地たる南山、乃木少尉の陣歿地に於ける石碑等あり。今、滿鐵の外金福鐵道もあり。又、大連・金州間には乗合自動車の便あり。戦跡遊覽の人も少からず。

キンシヨ—キンシ

【金州會】 關東州西岸中部の港。渤海東部の一支灣にて、南は營城子半島、北は鹿島・東鷓鴣島・西鷓鴣島等との間を東方に灣入し、東岸に金州會あり。その名出づ。灣口廣く、遼東の金州會附近は水淺く且つ西北風に直面するを以て港灣として適當ならず。【キンシヨ】 錦緋 山縣 愛本村(富山縣)【キンシヨ】 金生山 山縣 金山セイヤンとも呼ぶ。大垣市の西北方約六軒に在する山。岐阜縣不破郡赤坂町と岐阜郡八幡村との境界に在り、西濃鐵道赤坂本町驛より北方一軒半の地點に時つ。標高二一七米。西方は菩提山・合川山を経て伊吹山(三七七米)に連り、東面は岐阜平野に急斜す。標高高からざれども山頂よりの眺望に富む。山麓に秩父古生層に屬する石灰岩より成り、山背突瓦として風雨に剝蝕せられ大小の奇岩群立し、奇觀を呈す。又、洞穴・洞窟もあり、石灰岩臺地の特色を示す。此石灰岩は紡錘魚石灰岩にて上下二部に分る。上部はフリズナ石灰岩層と呼ばれ、本邦古生層の標準化石、即ちフリズナ・ジャボリカ其他の有孔蟲の化石を有し、下部はシユロゲリナ石灰岩層と稱せられ、シユロゲリナ層の有孔蟲化石を蔵す。又此上・下部も色彩・岩質の相違に依り、數箇の帯に區別せらる。臥水教授に依れば次の八帯に分たる。下部は鼠帯・霞帯・蟹帯の三

帯、上部は雲帯・白帯・下部大理帯・花斑帯・上部大理帯の五帯、合せて八帯となり。化石は主として山の南方及び東方に於て石材を切出し、石灰・セメント材料採掘の際に見えられ、特に下部シユロゲリナ石灰岩層より發掘せられたる二枚貝及び巻貝は學界に珍重せらる。山頂東面に明星輪寺あり、新義眞言宗の一寺にして、赤坂虛空藏として知らる。地藏堂の菩薩半跏像は國寶たり。この山より採掘せらるるものは石灰・セメント・大理石等にして、赤坂町には日本一の大理石工場あり。【キンシヨ】 金松 朝鮮咸鏡北道吉州郡英北面にあり。咸鏡本線の一驛(昭和二年設置)。【キンシヨ】 金勝山 關東山脈秩父山塊に屬する一峯。埼玉縣熊谷市の西南方約一五軒に當り、比企郡竹澤村の北方に時つ。標高二六四米。西麓に、東南方の小川町より西北方の大里郡寄居町に通ずる道路走る。北麓は東流する荒川に阻られ、南方には槻川東南流し、荒川支流越邊川に注ぐ。【キンシヨ】 金丈 朝鮮慶尙北道慶州郡見容面にあり。東海中線の一驛(大正八年設置)。【金城山】 越後山脈清水山塊の一峯。清水峠(最高點一四四八米)の西北方約一三軒、各川岳(一九六三米)の北方約二〇軒

に當り、新潟縣南魚沼郡上田村と五十澤村との境に時つ。標高一三六七米。山體第三紀層より成る。東北は坂戸山(六三四米)に續き、東南は湖引山(一九三一米)・牛ヶ岳(一九六二米)に連る。東麓を五十澤川・三國川、西麓を登川、共に西北流して信濃川支流野川に合す。西北麓に名刹雲洞寺あり。金城の名稱は山形金字に似たるを以て附せりと。金崎點然山瀧邊、禪心底事變曾樓、泉流似僧所時別、相送源深出茂溪、曾海雲。【金城】 石川縣金澤の別名。【金城】 愛知縣西春日井郡にありし村。大正十年、名古屋市に編入せられて村名を失ふ。【金城面】 朝鮮江原道金化郡の西部。北は遠北面、東は遠東面、南は遠南面・近東面・近北面、西は淮陽郡龍谷面にそれぞれ隣接す。白岩山(一一〇米)・白易山(一一〇九米)及び五聖山(一〇六二米)の山脚四周を繞らし中部東西に僅に低地あり北漢江の一支金城川之を潤して東に流る。低地には耕地拓げ、米・麥・粟・豆類等を産す。社稷金剛山電氣鐵道東部を掠め金城驛(大正十四年設置)・度坡驛(大正十五年設置)を置き、一等道路また之に沿うて通じ、之より更に中部低地を東西に走る三等道路を分枝す。【金城面】 朝鮮慶尙北道義城郡の南部。東は佳音面・春山面、東北は合谷面に隣接し、北は義城面、西北は鳳陽面、東は

キンシー—キンシ

軍威郡女保面・孝令面・軍威面にそれぞれ隣接す。飛風山(六七二米)・金城山(五三一米)等の山嶺連りて四周を繞り、中部に盆地的なる低地あり、四圍の山地の諸水を集め西北に流るる洛東江の一支渭川により僅に開く。産物は棉・麥・大豆・大麻等を出し、特に棉の栽培は朝鮮に於ける最初と傳へらる。三等道路南北に貫通し北部義城面に達す。〔景徳王陵〕大黒洞にあり。召文時代の遺蹟たる古墳にして、新羅景徳王陵と稱す。數百年來邑人慶守毎年十一月之を祭祀したるも明治四十二年廢せらる。今古墳を圍繞する老松獨り往時を物語る。〔棉作記念碑〕塊梧洞にあり。朝鮮棉花の濫播は晉陽の人文益漸先生善愷朝登第して使を奉じ元に至り、偶々南荒に遇せられ歸途棉種子數粒を兼管に入れ持ち歸りたるに始り、その後地方巡視の任務を以て本道を巡歴するの途次本郡に至り、偶々地勢・土質恰も支那交趾に似たるを見受け、孫たる當時の縣令(現在の郡守)文承善をして今より五百六十餘年前地梧洞に始作せしめたり。これ朝鮮に於ける棉花栽培の濫播たりとして、文益漸先生の高徳を追頌するため、此の記念碑を建設したるなり。〔召文五重塔〕善里洞にあり。新羅中期召文國の建立に係るものにて、高さ二十五尺の花崗岩石を以て成る五重の塔にて、その築造方法甚だ巧妙なるも本年放逐せられし關係上若干傾斜せるを、大正十三年

附近有志に依り臨時召文古蹟保存會を設け寄附金を得て修繕せり。〔金城山〕海拔五三一米、山形スフィンクスに似て汝岩及び火成岩より成り、初て此地を旅行する者には、特に印象せしむる奇形山なり。其山頂に無名墳墓二基あり、此の山頂に先祖の墳墓を置くと其の子孫必ず繁榮すと云はるるも、また同所に死體を埋葬すれば必ず早敷起るとも云はれ、一切墓地を設くることを禁ぜられたる靈峰なり。〔水淨寺〕金城山麓にあり。昔住持庵と稱し、新羅の古刹。境内老樹鬱蒼とし、殊に境内一角より湧出する冷水は漢藥服用の効果ありとし、夏季避暑を兼ねて服藥のため、此の寺を訪ぬる者多く、又、月影樓の附近は景色の見るべきもの多し。〔金城〕朝鮮古代の都府。皇紀六〇四年(崇神天皇四年)朴赫居世新羅國を建設し、それより約一千年間首都たりし地。神功皇后征韓の時には大矢田宿禰ここに駐屯す。地は海岸に遠からず、四方山に圍まれたる盆地にして、農産に富める沃野を有し、國都として洵に相應しき土地たり。當時民戸十七萬九千餘を収め繁華を極むといふ。今その地に金冠塚、其他當時の諸王・貴族の榮華を物語る莊麗なる古墳並にその發掘物残る。今の慶尙北道慶尙都慶州邑の邊に當る。〔金城郡〕朝鮮全羅南道潭陽郡の東北。潭陽面の西に隣り、南に貞面・武面、

北に龍面、東は全羅北道淳昌郡金果面にそれぞれ隣接す。北部・東南部に山地連るも中部は榮山江の上流龍川の流域なる潭陽平野の一部をなし、灌溉の便よく地味肥沃にして耕地拓げ、米・麥・大豆・棉を出し、養蠶行はれ吠を造る。潭陽面より淳昌面(淳昌郡)に至る二等道路中部低地を通じ、潭陽面に出づれば總督府轄の光州轄あり。内地人居住者は未だ多からず、二十餘人を數ふるにすぎず。〔金城山〕頂上にも陸軍鎮守地たりし所。内外石城を以て繞らし其延長、内城千二百餘尺(約三三〇米)外城四千九百餘尺(約一五〇〇米)巖然たる城郭たり。城内建造物は往時三十餘棟ありしも制度の改革と東學亂の火災に遭ひて全く類廢し、現に基地を存するに過ぎず。而して當地一帯は邑内居住者山田小太郎氏に於て十餘年前國有林の貸付を受け、銳意造林を経營したる結果、今や鬱蒼たる森林地帯となれり。

地連り概れ山地なるも、中部南北及び南部の漢江流域に低地ありて耕地拓げ、耕地面積も鳳陽面・塊川面に次で多く、米・麥・棉・豆等の産あり。又、楮は特に多く本郡下にて最も卓越す。塊川面に達する三等道路は西部山嶺を繞りて南北に貫通す。西事務所を九龍里に置く。〔錦城面〕朝鮮全羅北道錦山郡の中部。錦山面の北に隣り、東は郡北西、北は秋富面・福壽面、西は珍山面に各隣接す。北西の二方には山地緩やかに連るも、中部・南部の大部分は錦山盆地の一部にして錦江の上流之を調し、麥・大豆・大麻等を産する外、煙草・人参の産を以て知られ、人参は特に錦山人参として有名なり。尙、製紙・木工等の各種の家内工業も行はる。街道は錦山面及び珍山面に達するも船政ありて交通便ならず。本面の義塚里に義塚あり、文祿の役、即ち豊臣秀吉の朝鮮征伐に際し趙童(重峰と號す)義兵を起して日本軍と戦ひ七百人の義士と共に此地に死す、後に其の義士の骨を集め一塚を作りしを以て義塚と稱するに至るといふ。〔錦津川〕朝鮮咸鏡南道定平郡を流るる川。咸州郡の西南隅下朝陽面の北境に發立する天依川(二八五米)の南斜面に發源し、定平郡に西境に達する日峰(一七四九米)・白山(一八三七米)・洞水山(一七四七米)と中部南北に互れる白雲山(一〇七八米)・中倉嶺(四六五米)・

キンスイ—金水

道成山との中間を流谷をなして南流し、定平郡の南部長原面に來りて汝路を東方に轉じ、歸林面の東北部にて日本海に注ぐ。流域約六五軒。〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

キンズ—キンセ

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

キンズ—キンセ

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

〔金水〕一名金明水。富士山上の西方、火口阿彌陀ヶ窪の東北に湧出する清水にして、御殿場口上なる銀明水と並稱せらる。共に登拜者の渴を癒し、元氣を恢復せしむ。↓富士山。〔金水面〕朝鮮慶尙北道星州郡の西部。東は大家面、東北は佛珍面、東南は伽泉面、西北は金泉郡助馬面・知禮面、西南は同慶山面にそれぞれ隣接す。西北部及び西南部に約八〇〇米の山地聳立して概ね山地をなし、洛東江の一支會川は西南山地に發源して東に流れ、僅に沿岸に低地ありて耕地拓げ、米・麥・大豆・大麻等を産す。街道は會川に沿うて通じ、星州面及び假山面に達す。西事務所を假山洞に置く。

キンセー——キンセ

し、西は新北面・徳津面、東は長興郡有治面、北は和順郡道徳面及び羅州郡茶道面・鳳凰面、細枝面に各隣接す。東北部及び西南部に山地連り、東南部の六〇〇米餘の山嶺は分水嶺をなし、榮山江の一支西北に流れ西北の金井盆地を貫通す。盆地内は耕地よく拓け米・麥・大豆・棉を産し、副業として吠の製造、養蠶行はれ、牛・豚の飼養盛なり。街道は中部盆地を東南部の峠を越えて貫通す。内地人居住者約六〇〇人餘を數ふ。

キンセー——金生

【金生村】 山梨縣甲斐國東八代郡の中央部を占む。東に黒駒村、南に花鳥村、西に高家村、北に錦村あり。地は甲府盆地南縁断崖下に相當し、信吹川の支流金川の造れる扇狀地にして、南部に山地、中央に桑園、北部に木田あり、米・蕎麥・桑等を産す。この地は和名抄、山梨郡井上郷と稱し、兼合・蕎麥塚・下野原・八千倉を合併して金生村と稱す。〔先國寺〕大字下之原にあり。淨土宗。歸命阿彌陀山と號す。本尊阿彌陀如來。慶長三年の草創なり。延寶三年、九世英譽上人現今の地に移し、十六世教譽上人、本堂を再建す。境内には彈智上人堂・毘沙門堂あり。

キンセン

【金生村】 愛媛縣伊豫國宇摩郡の東部。西は川之江町・二名村、東南に川邊村・金田村、南に上分町・妻島村、北は香川縣三豐郡和田村に各隣接す。村域は讃岐

キンセー——キンセ

山脈西端にあり、和泉砂岩層にて構成せられし中山性小地及び丘陵より成る。北の縣境に金見山(五九六米)・大谷山等あり、西南部金生川の流域には沖積地をもつ。米・麥・蕎麥等の農業と、金生川畔に於ける地下水を利用し歴史的地理的習慣に依り和紙の製造盛大に行はる。部落は山田井・下分・石ノ口・切山・肥後等に分る。省營自動車川連線は下分を通ず。此地古くは和名抄、宇摩郡山田郷の地、大字山田井はその遺稱なるべし。もと山田井・下分の二村なりしを明治二十三年合併し村名は中央を貫流する金生川の名より起るといふ。大字下分には古墳あり、古くより人の住居せしことを物語り、切山部落は平家の落人の子孫と傳ふ。〔切山部落〕金見山の南麓窪地にして西開と隔絶せる地形なり。この部落民は平家の落人の子孫と稱し、安徳均・院の墓などと稱する地名あり、平家に關係あるものといふ。〔下分の古墳〕大字下分にあり。村の西南部にして古墳散在す、その一は、義道の長さ七間、高さ八尺、横一丈、屋の廣さ六席ばかり、石柵堅牢なりと。

キンセン

【金川郡】 朝鮮黄海道十七郡の一。道の東端に位し、東南は江原道及び京畿道、西は平山郡・延白郡、北は新義郡・平山郡と界す。面積六二・二〇八方里、東西約一三三里、南北約七三三里にして地形東西に長く南北に短し。山岳は到る處重疊し、

キンセン

よく肥沃にして農耕に適し、米・麥・大豆・蕎麥・棉・繭を産し、又、畜産、紙・漆・蠶業品・藥・干鮑・金屬製品・木製品等の工産物も多し。本郡は大正二年總督府令第百一十一號を以て道の位置・管轄區域及び府郡の名稱・位置・管轄區域を定めたる結果、もと金泉郡一圓を併合して金泉郡と稱せり。金泉邑及び慶南・南・牙浦・谷梅・開寧・位良・求所・井川・金陵・鳳山・代項・果谷・石峴・釜項・大徳・鳳山・知禮・助馬・甘川の十九面を含み、郡廳を金泉邑南山町に置く。

の傳説あり。

【金川郡】

朝鮮全羅南道羅州郡の中部。羅州邑の西に隣り、東北は山浦面、東南は鳳凰面、西南は榮山面、北は老安面に各隣接す。東部・南部には約一〇〇米の丘陵緩やかに連れるも、市内の大部分は西北部を西南に流る榮山江流域の沖積土より成る羅州平野の一部を成す。近年米作・麥作の改良奨励により農業經濟充實しつつあり。米・麥・棉を産し、養蠶も行はれ、吠の製造も少からず。羅州邑より光州府(光山郡)に至る一等道路北部を東西に通じ、羅州邑に出づれば總督府線の湖南本線の便あり。

キンセン

【金泉郡】 朝鮮慶尙北道二十二郡の一。道の西隅に位し、鐵路京城を距る南二五五軒、釜山を距る北一九五軒にて、東南は星州郡、東北は漆谷郡・善山郡、北は尙州郡、西は忠清北道永同郡及び全羅北道茂朱郡、南は慶尙南道居昌郡に各隣接す。面積六五・五方里強。東境には金島山(九七七米)、西境には黃鶴山(三二七米)に伽耶山脈に屬する修道山(三二七米)を聳立し、北方には耶會山連立し、郡内には智德嶽屹立し、概ね山地をなすも、郡の西方より東流し来る直指寺川と知禮の山中より北流する甘川とは金泉邑附近に於て合流し洛東江に注ぎ、その流域には沖積土の地積ありて平野をなす。所謂金山開墾平野是なり。土地一帯に灌溉の便

キンセー——キンセ

キンセー——キンセ

平野に乏しく地味概ね肥沃ならざるも、東端には臨津江、西端には咸成江の二大河川北より南流し、また咸成江の支流たる九淵川・昔助川・九水川あり、此等の沿岸地帯は地味肥沃にして灌溉の利及び一部舟楫の便あり。産物の主なるものは米・麥・豆・棉・林檎・梨・繭等にて畜林工業等もあり。勸業共済組合よく發達す。郡廳を金川面金陵里に置き、面積は十五あり。本郡は大正二年十二月廿九日朝鮮總督府令第十一號を以てもと金川郡及び兎山郡を合併し金山郡となる。もと金川郡は孝宗三年牛峰・江陰二縣を合し金川郡と改む。牛峰縣は號を岑城と稱す。もと樂浪郡に屬せしが漢の獻帝の時代地方に隸屬し、新羅景德王の時牛峰郡と改め、李朝太宗十三年牛峰縣に陞せらる。現在郡の東北約半分の地なり。江陰縣は號を江西と稱し、現在郡の西南約半分の地なり、高麗東川王の時始めて屈陽縣と稱し、新羅景德王の時江陰と改め、高麗顯宗の時平州に移屬し、李朝太宗の時陞して江陰縣と爲す。もと兎山郡は號を月城と稱す、高句麗の時烏斯奴城と稱し、新羅景德王の時兎山と改め、李朝太宗の時陞して縣と爲す。もと金川郡の邑治は孝宗三年牛峰・江陰二縣を合し金川郡と爲しし時現在の古東面紙洞里洞水洞に定めし、肅宗四年土質及水質惡しき故を以て現在の金川邑に移せり。其後英祖廿九年同様の理由を以て更に古東町舊

キンセン

經濟的の地方中心邑にて郡廳・地方法院支廳・高等普通學校等あり。内地人の居住者も約二千人に近き數を示し、農業・商業に従事す。郡廳は南山町、面事務所は錦町に置く。此地の内城山脈、即ち南山公園の山脊に過夏泉あり。嘗て明時李如松此地に入りし際、同山麓より湧出する清水を嚙下し、この清水は明の過夏酒を醸造する原水過夏水と同一味を有すと稱し、同水にて醸造せしに優美なる過夏酒を得たりといふ。今も騎同水にて過夏酒を醸造す。(金泉神社) 無格社。祭神、天照大神・豐受大神。昭和三年七月十八日、朝鮮總督府令を以て神社創立の事を官許せらる。社殿は本殿・拜殿にして、境内五千二百九十坪。例祭、四月十六・十七日。十月十六・十七日。氏子、内地人五百戸、鮮人二千五百戸。

キンセン

【錦川面】 朝鮮慶尙北道清道郡の東部。郡管内九面中の一。大邱の東南約四〇軒にあり。東は雲門、北は移道、西は梅田、南は慶尙南道密陽郡山内面に延び、北境に聳立する鶴日山(六九七米)・筒内山(六六〇米)の各山麓は城内に前者と相迫り、其樹合に東食川の低地を形成す。本郡中最も高峻地域に屬して山東地方の別名を有し、險坂多く、車を通ずるもの少く交通一般に不便なり。産物は麥・蕎麥・大豆等にして殊に大豆は

キンセン

邑洞に移し、正祖二十年に又復同様の理由に依り現邑金泉に移り現今に至れり。【金川面】 朝鮮黄海道金川郡の南部。咸成江の左岸に沿ふ。南は古東面、東北は縣内面・白馬面に隣り、西北は咸成江を隔てて平山郡金岩面に對し、東は京畿道開豐郡嶺北面と隣接す。東境には帝釋山(七五〇米)聳え、北部に小丘陵錯るも咸成江は西北境を南に流れ、市内の諸溪流之に注ぎて流域に低地を造り、地肥え灌溉の便よく耕地拓け、米・麥・豆・棉を産し林檎・梨をも栽培す。總督府線の京義本線南北に通じ金郊驛(明治四十一年設置)を置き、また開城府に至る一等道路之に沿うて通じ交通便なり。此地は郡廳所在地なると共に毎月定期の市開かれ地方の中心邑をなし、内地人の居住者も約二百人以上の多きに及び面事務所を金陵里に置く。〔慈惠洞〕金川・温井院間街道の路傍にあり。今を距る三百餘年前冬季の亂に際し、季重老將軍戰死したる古戰場なり。今より百六十餘年前其武節を表彰する爲め祠宇を建設して享祭を行ひたりしも、其後腐朽滅失し、今は石碑を止むるのみ。〔廣水驛〕面の中心邑の南約五〇〇米鳳堂山麓にあり。羅存院壁を以て清洲なる咸成江の支流昔助川に臨み夏季の清遊に適す。今より六十餘年前郡守柳卓然、廣水驛と命名し、其三字を岩壁に刻せり。尙此頂上鳳堂山には昔時粟三箇を埋め、此粟の潤滑するときは草穀とし

キンセン

良質を以て著る。而邑明浦は河の畔に中央、東食川左岸にあり。人口、昭和五年六五・一七、同十年一〇二六四。【銀川面】 朝鮮黄海道延白郡の西部。東北は雲山面に隣り、南は小川を隔てて柳谷面・道村面、西は花城面と相對す。東北に山地連るも西部・南部は沖積土より成る沃野にて咸成江の一支之を潤し、米・麥・豆・棉・大麻等を産し、特に大豆は此地にて集散し、白川大豆として知らる。社稷黃海嶺の海州(海州郡海州邑)・土城(京畿道開豐郡中西面)間の鐵道は南部をほぼ東西に通じ、白川温泉驛・星湖驛(共に昭和七年設置)を置き、三等道路は中部を南北に通じて交通便なり。此地は昭和二年の白川温泉の發見更に昭和七年の黄海嶺の開通により温泉業落として著しき發達を見し所、又一に岳城ともいひ、文祿の役に黒田長政の戦ひし所、當時此地の白川城に據りし長政は敵將李時言の弟應季と堤上に相み、轉々水中に没するも敵の虜敵を判じ、彼亦突かれて絶息せし後發見せられて漸く蘇生し、李時言を攻むといふ。面事務所を蓮南里に置く。(白川温泉) 白川にあり。泉質アルカリ性単純泉にして、外傷諸障害・婦人病・神經痛等に效能あり。昭和二年發見當時は面事務所にて小規模の共同浴場を設け、附近住民の入浴に便する程なりしが、朝鮮黄海嶺土城驛(京畿道開豐郡中西面)より開通するに及び、白川温

キンセン

良質を以て著る。而邑明浦は河の畔に中央、東食川左岸にあり。人口、昭和五年六五・一七、同十年一〇二六四。【銀川面】 朝鮮黄海道延白郡の西部。東北は雲山面に隣り、南は小川を隔てて柳谷面・道村面、西は花城面と相對す。東北に山地連るも西部・南部は沖積土より成る沃野にて咸成江の一支之を潤し、米・麥・豆・棉・大麻等を産し、特に大豆は此地にて集散し、白川大豆として知らる。社稷黃海嶺の海州(海州郡海州邑)・土城(京畿道開豐郡中西面)間の鐵道は南部をほぼ東西に通じ、白川温泉驛・星湖驛(共に昭和七年設置)を置き、三等道路は中部を南北に通じて交通便なり。此地は昭和二年の白川温泉の發見更に昭和七年の黄海嶺の開通により温泉業落として著しき發達を見し所、又一に岳城ともいひ、文祿の役に黒田長政の戦ひし所、當時此地の白川城に據りし長政は敵將李時言の弟應季と堤上に相み、轉々水中に没するも敵の虜敵を判じ、彼亦突かれて絶息せし後發見せられて漸く蘇生し、李時言を攻むといふ。面事務所を蓮南里に置く。(白川温泉) 白川にあり。泉質アルカリ性単純泉にして、外傷諸障害・婦人病・神經痛等に效能あり。昭和二年發見當時は面事務所にて小規模の共同浴場を設け、附近住民の入浴に便する程なりしが、朝鮮黄海嶺土城驛(京畿道開豐郡中西面)より開通するに及び、白川温

キンセー—キンタ

皇族式会社は鮮内務の豪華なる旅館を此處に建設す。京城府を近くに控へ、頗る地の利宜しきを以て爾來日に増し繁盛して旅館種々と建設せられ立派なる温泉町となれり。尙、附近に起雲亭・無雙亭・南山公園等の勝景ある外、毎年冬季に五れば田圃に無数の鶴渡來するを以て鶴の名所ともなり、其美觀を見んものと近郊より往く者多し。

キンセントー 金泉湯

富山(山梨縣北五郎郡) 朝鮮京畿道坡州郡新洞面にあり。京義本線の一驛(明治四十一年設置)。

キンリン 金村

河郡岩國町岩國川に架せる橋。岩國川を一に錦川と云ふにより此名あり。形状よりして俗に錦橋ともいふ。日本三奇橋の一にして指定名勝。五條の連絡せる穹窿状の木橋にして、橋臺は六基を敷へ、左右の兩岸に接する二つの橋は橋脚あれども、中の三橋にはこれを用ひず。橋の全長は橋面に沿うて二一〇米、直線にて一九六米、幅五米、各橋の長さは東方よりして、第一橋四〇米、第二乃至第四橋各四一米、第五橋四二米なり。反橋の裏面より川床まで一〇米三、橋臺の高さ五米なり。此橋は特に奇を好んで造りしものにてはなく、頗々たる洪水に對抗し得る爲にと、延寶元年岩國藩主吉川廣嘉公の全橋倒壊の計畫したるものにて、廣

キンタイ 錦帯橋

嘉一日か餅を焼きたる時、その反曲せるを見てアーチの理を悟り、工匠に命じて架せしめしといふ。然し此橋は翌二年一部を除きて洪水の爲に流されしが廣嘉之に届せず、橋臺に意を用ひ、同六年一月再び工を起し十月二十五日竣工、十一月三日渡初式を行ひしものといふ。文政の頃錦繪として對外に出してより橋名一世に名高く、日本三奇橋の一に數へらるるに至りしものなり。橋脚は洪水の時水の流れを激せしめず、且つ流水等によりて崩壊せざるやう、其水上の方の先端を尖らしあり。また橋まねある石と石との間は互に太柄を以て繋がれ且つ鉛を以て固められあり。橋脚の周囲の河床の部も同様の方法にて互に繋がれたる石にて張り詰め、橋脚に接する部最も高く、橋脚より遠ざかるに従ひて低くなり、洪水によりて橋脚の周りの掘られぬやうになしてあり。其上に架けられたる木造のアーチ形はアーチの原理をよく把握して構築しあること、全く驚歎の外なし。即ち、橋脚より視の木材を次第に重ねて少しづつ積出してこれをアーチの主材となし、これに鐵物及び木の斜材を用ひて、横たへられたる材と材との間に接合を施し、且つ其間に彈形の板止めを施す等、今日の構造學の原理に全く合致するものにて何等構造的知識も無く、又これ等の工法の傳統も無き時代に全く獨創を以て之を考案したるのみならず、架し終へたる

技術に至りては世界の橋梁史上に誇示すべき偉業なり。形態も頗る優美にて前河に架橋を控へ、朱楹の欄干は長虹の連れるが如き姿を示し、又兩岸の樓美し。近年この名橋も朽腐甚だしきを以て、新たに築造を行ひしが、形状・手法は全く古に習ひ、昭和十一年を以て竣工、昔ながらの優美なる姿を傳へたり。

キンダイチ 金田一村

岩手縣陸奥國二戸郡の最上部。東南は福岡町との間に留徳村を隔て、西南は牛米村、北は青森縣三戸郡留徳村・牛川村、東は同郡名久井村に各隣接す。東境に北上山脈の三〇一四〇〇米の山脚南北に延び、西境は高島谷山(三七一七米)の山脚東に延び二〇〇米餘の丘陵性山地をなし、中間を馬淵川曲流をなして北に流れ、北部にて西部山地を侵蝕し、東流し来る金田一川を穿れて侵入蛇行をなし、南部に積廣き沖積平地を作る。農業を主とし、多くは稗の栽培をなすも其他米・麥・大豆を産す。土壤は温泉の作用により地温温暖、且つ頁岩中の石灰・燐酸は溶解せられ、爲に五穀・野菜の生長は近村に比し早く又收穫も多し。省線東北本線は馬淵川に沿うて通じ金田一驛(明治四十二年設置)を置き、縣道また省線沿ひに走り交通便なり。村は金田一・釜澤・野々上の大字より成り、金田一に役場を置く。古くは海底なりしもの如く、其面影を思ふべき化石多く発見せられ、中にも燐の化石

三三三

を多量に出せるは著名なり。中世は南部四戸氏の族此地に金田一氏を稱す。今居城の址を存す。もとば金田市とも書き、奥州街道の宿驛たり。(「金田一城」)村の西首丘上に址あり、中節と呼ぶ。規模頗る廣闊なるも、今や悉く養蚕の田となれり。中に大石あり、牛石と云ふ。傳によればもと四戸氏の庭石なりと。四戸氏、南部藩祖光行の四子宗朝に出づ。宗朝、邑を四戸に賜ふ。依りて氏となす。現今四戸の地名無きも今の三戸郡淺水七崎の地ならん)十五世宗泰に至り、晴政公の時金田一の郷數箇村を賜はりて金田一城に移す。其子宗元に至り、九戸政實に奪すと謀する者あり、藩主信直公宗元を誅せんとす。宗元人をして異志無きを誦言せしめ聽されず、依りて家累を從へその臣十餘人と共に出羽に走る。政實四戸氏の通るるを開き兵を遣はして金田一城を攻む。藩主之を開きて宗元の冤を知る。既にして宗元秋田に死す。その子松長、慶長四年福岡に來りて父の冤を訴ふ。藩主利直之を許してその藩邑金田一の郷を復賜す。松長幼にして明を失す。故にその邑を父に從ひて亡命せる忠臣等に分給せんことを乞うて許さる。而して己は八戸氏に寄食し、のち田名部に移り、更に越前に赴き新保に住して武田と改め、五十七歳にて歿せりと云ふ。(「八坂神社」)郡社。祭神、武運領佐能男命、天照大神、八幡大神。創立年代不詳。もと牛頭天王

キンチャク 錦若山

栃木縣栃木市の西北部に横ばる丘阜。いま公園の一部をなす。↓栃木市

キンテー 金堤

【金堤郡】 朝鮮全羅北道十四郡の一。道の西に位し、南は萬頃江を隔て益山・沃溝二郡に對し、東は完州郡に隣し、南は井邑及び扶安郡に接し、西は黃海に面す。面積三二・七〇六方里。萬頃江は郡の北境を、東津江は郡の南境を何れも西に流れて黃海に注ぐ。郡東方に小白山系に屬する母岳山屹立し地勢自ら西に傾斜し、所々に丘陵起伏するも概ね平坦にして、一望無涯、謂はゆる全北平野の一部をなし、地味肥沃にして農業に適し、金堤米の聲價全鮮に冠たり。昭和四年六月東津水利組合完成以來、旱水害の憂は除去せられ土地改良行はれ、將來益々農業の盛況を見るに至るべし。農産物の主なるものは米・麥・豆類・棉等にてまた桑田開け繭の産額多し。本郡には農場多く多木農場・樹宮農場・東津農業株式會社・橋本農場・中榮産業株式會社・株式會社阿部市商店・金堤農場・加賀美農場・石川縣農業株式會社・清手農場・井上農場・井上農事合名會社等主要なるものなり。其他、商工業最もよく發達し、市場ありて一ヶ年賣買高、農畜水産物等を通じ六十萬圓に達す。交通・通信の機關もよく備はり、鐵道は一三軒七に及び、金堤・芙蓉には驛を置く。教育施設としては内地人教育公

キンチヤク 錦若山

立尋常高等小學校一・公立小學校二・朝鮮人教育公立普通小學校一三・公立技藝女學校一・私立學校一・書堂三九等あり。郡には金堤邑新豊里に置く。本郡はもと馬韓の地にて、百濟時代に勇骨郡と稱し後新羅の朝初めて金堤と改め、高麗の初朝に及びて全州の屬縣となり、仁宗王二十一年更に縣令を置き李太王三年に至り郡に復せり。而して明治四十三年總督府設置當時は金堤月村・竹山・白山・龍池・白崎・扶安の七ヶ面を包括せし、大正三年三月府郡廢合の結果、萬頃郡と金溝郡を併合して十七ヶ面とし、昭和六年十一月一日金堤面は邑に昇格し、現在は一邑十六ヶ面とす。

【金堤邑】

朝鮮全羅北道金堤郡の中部。群山府の東南約二〇軒、北は白山面に、西南は月村面に各隣接す。中部南北に一〇〇米餘の丘陵繞るも大部分は土地低平謂ゆる全北平野の一部にして、東津水利組合の灌溉水路は甚盤日の如く整然と走り、地味肥沃にて農場の大なるもの多く、米・麥・大豆・棉・大麻等を産し野菜を特産す。米は特に金堤米として好評を博し、米の主産地なるを以て精米工場も十數箇所あり、市況は益々發展の狀勢にあり。街道は中部より放射狀に四近に通じ群山府・全州(全州郡伊東面)・扶安(扶安郡扶安面)等にバスの便あり。地方交通の核心に當り物資の集散處にて毎月定期市開かる。内地人居住者もその數多く

約一五〇〇人を越ゆる狀勢にあり、郡廳、動物検査所、地方法院出張所、技藝女學校等あり。【蕪菜】 純粋嗜好食品たる蕪菜は本邑の特産。蕪菜は千年以上を経過したる古酒以外には生育せずと云ふ俗傳をもつ水草の嫩葉にて、此地を中心として散在せる大小十數箇の沼澤より採取さる。通常採取に従事するものは朝鮮婦人にて、一日の採取高一升乃至三十錢にて、一日に業者に賣込みするもの、多きときは百人或は百五十人にのぼることあり。需要先は朝鮮にては京城は第一なれど、内地に迄かに多く群山府理由にて大阪・名古屋・下關・横濱等に送らる。(「東津水利組合」) 鮮内最大の水利事業にて工事費約一千萬圓を費し蒙利區域は金堤、井邑、扶安の三郡に互り二萬町歩に及ぶ。貯水池は任實郡雲岩面にあり、龍津江の水を堰止め貯溜し、周圍七〇軒の廣大なるものを、その餘水を以て水力發電所を設け全州・群山・裡里等に送電す。池上に舟を浮かべ山容の美を賞でつ釣魚に好適の場所なり。(「金堤神社」) 無格社。祭神、天照大神。大正十三年三月十日、朝鮮總督府令を以て神社創立のこと官許せらる。社殿は本殿・拜殿にして、境内地二千六百九十四坪。氏子、内地人六百戸、鮮人三萬戸。例祭、十月十日。

キンテー 銀鏡山

甲都大甲街にある銀鏡山の別名。

キンチ—キンテ

と稱す。江戸時代には領主南部氏の屋敷を受く。また近郊の産土神。例祭、九月十七日・十八日。(「明治天皇金田一御小休所」) 明治九年、奥羽御巡幸の御、七月十日、岩崎孫七宅に御小休あらせらる。次いで明治十四年、山形・秋田・北海道行幸の御、八月二十三日、前記岩崎宅に御小休あらせらる。今よく舊規を保存す。(「明治天皇釜澤御小休所」) 明治九年、奥羽御巡幸の御、七月十日、小笠原吉三邸宅に御小休あらせらる。次いで明治十四年、山形・秋田及び北海道行幸の御、前記小笠原宅に御小休あらせらる。今よく舊規を保存す。(「湯田鏡泉」) 村の東部にあり。馬淵川河岸の水田に湧出す。泉質、ラザウム含有鹽類泉。温度は攝氏二十九度にて加熱浴用。寛文十年の發見と傳へ、明治の初年、盛岡藩老橋山五左衛門、偶々賜暇を得て湯治せしといふ。附近に大沼・四戸城址・大沼の瀧等あり。

キンチ 金池面

朝鮮全羅北道南原郡の西南部。東は豆洞面に、北は周生面に、西は帶江面に、南は全羅南道谷城郡谷城面と各隣接す。西境に高麗峰の山嶺南北に連るも西部は低地にて膠川、東境を南に流れて之を洞し耕地拓げ、米・麥・大豆・棉を産す。地質府鐵道全羅線東部を南北に通じ金池驛(昭和八年設置)を置き、二等道路また之に沿うて走り南原面に達す。内地人の移住は未だ多からず、僅に二〇餘人を數ふるにすぎず。

キントー

近東面 朝鮮江原道 金化郡の中部。東は遠南面に、南は近南面に、西南は金化面に、西は近北面に、北は金城面に各隣接す。西境に五嶺山(一〇六二米)聳立し、東南部は大成山(一七五米)・注坡嶺の山脚に當り、中間を小川流るるも、概ね山地にして低地に乏し。産物は黍・粟・大豆・大麻等を産す。社線金剛山電氣鐵道中部をほぼ南北に通じ下所驛・杏亭驛(共に大正十四年設置)及び光三驛(大正十五年設置)を置き、道路また之に沿うて走り交通便なり。

金糖

朝鮮全羅南道莞島郡にある島。金日面に屬す。此島は得根河口に於て居金島の西隣に位し、南北の長さ約三・七哩、幅二哩弱なり。其の最高點は北西部に位し高さ二二三米にして島内秀山多し。島の南側に一大湖あり、北入約一・三哩にして其全部低漕に干出す、又西側は單岸六鐘中間淺水地擴張す。金糖島と其南東側に接在せる飛見島(飛鏡島)との各南側と忠島及び身島(新島)との間は一水道を形成し、水深八尋—二十四尋にして無碍なり。

【金糖水道】 朝鮮全羅南道莞島郡にある水道。此水道は東側に居金島と西側は金糖島との間、南北の長さ約四哩、幅約一哩半にて東側に偏し敷小湖あり。南口中央に近く許牛島あり、又水道の略中央に中央島ある處、此部の可航水道の幅約四哩に過ぎず。西事務所は老昔里に設く。(清泉峯) 杏谷里にあり。河水を凝りて深潭を爲し夏季清冷洵すべきものあり。臺後に金東峯・吳西波・任萬休三賢の遺碑あり。(天穰巖) 白蓮峯東南麓間にあり。岩内に一個の石窟あり、口碑によれば元曉大師居住せし時に石窟の傍の石窟より朝夕白米二升を産するを以て天穰岩と稱せり、然るに元曉大師歸去の後一貧僧來居し其の穴を深く掘りたる爲め遂に米の出でざるに至れりと云ふ。米庫を改めて今は杏谷と稱す。(聖遊窟) 九山里にあり。高さ數十丈の石壁下に小穴あり、穴口は狭きも入りて十五六歩下降すれば約一町歩の平岩あり、左右の石狀特に奇形にて、尙數十丈入れば溜水あり冷氣骨に徹す。所々に天作佛形あり、なほ四五歩にして佛像または僧侶の形せるものあり、最奥に溜水ありて深き懸を洩し清冷甘露に絶す。全岩鍾乳石にて杖を以て打てば響音全窟に充つ。而して此の窟を一名仙遊窟と稱す。

キンナン

金南面 朝鮮慶尙南道河東郡の南端。北は辰橋面・古田面に隣り、東は一支洞を隔てて、泗川郡西浦面に對し、南は狭小なる水道を以て南海郡雪川面に對し、西は瞻津江を隔てて全羅南道光陽郡津月面に相對す。中部に金雲山(八四九米)屹立し、西部瞻津江岸にも小丘陵雖も中部及び東部海岸一帯に低地あり、海岸は屈曲に富み漁船の好泊港あり、

キンナン

と成る。水深は一—二五尋にして、岩底の處多しと雖も暗礁なく安全なり。此の水道に於ては高潮後約四分に壺湖となり直に落潮流を始む。而して潮流の速度は大潮に於て最強三節とす。

キンナン

銀南峰 部子山(福井縣)

キンナ

昔渡り・觀不知・八間登り・四ッ這等を經て筆頭岩に達す。金洞谷に引き返し、第一・第二・第三・第四石門・蟹ノ横道・片手登り・東山狭ノ橋を經て大砲岩に着す。第四石門より別路を取れば日暮と呼ぶ岩壁に達す。この附近に鷲洞窟あり、又見晴しよし。次に金洞山の南方突起朝日房の突端に至れば海あり。等々力中將が申時代この岩の頂にて倒立せしよりこの名ありと。更に蟹磨岩・西山狭ノ橋・鞍掛・葛籠岩等を過ぐれば日本武尊・大國主命を祀る中ノ岳神社に着く。この山はまた岩登の練習場として興味深し。妙義町より山頂まで約五軒餘、登降に約五時間要す。↓妙義山

キンナ

金時山 公時山 箱根 火山外輪山中の最高峰。神奈川縣足柄上郡北足柄村と足柄下郡仙石原村と靜岡縣駿東郡足柄村との境界に跨る。標高一二一三米。北方は足柄峠(七五九米)、南東は明神峠(一六六米)、西方は長尾山(一四四米)に連る。山形猿の鼻に似るを以て猿鼻岳とも呼ぶ。金時の名は傳説に靈龜金時即ち坂田金時住居せりと云ふに依りて出づ。このこと太平記に記しあり。山頂に小祠あり。頂上よりの眺望は廣帯にして、箱根山塊を一時に収め、南方に蘆ノ湖を望み、西方に富士の麗峯を仰ぐ。毎年陰曆三月十七日に猿鼻祭あり、賽者多し。登山は仙石原越ヶ茶屋より頂上まで約四軒。尾根を修り乙女峠を経て長尾

時に出づる小徑あり。 近徳面 朝鮮江原道三陟郡の東部。三陟面の南に隣り西南は慶谷面に、東南は遠徳面に、東北は日本海に臨む。西南部に山地連貫し山脚の一部は海岸に沿うて連る。一般に海岸地帯は低地にして耕地拓け、米・黍・大豆・小豆・大麻・棉を産し梨も栽培され、漁族も少からず。三陟面に至る二等道路海岸に沿うて通す。内地人居住者は約二〇餘人に及ぶ。

キンナ

近南 朝鮮江原道金化郡の南部。北は遠南面・近東面・金化面に、西は西面に、東は華川郡上西面・春川郡史内面に各隣接す。東北境に大成山(一七五米)聳え山嶺延びて東境を限り山地は西北に傾き、小溪流は山地を刻みて西北部に集り金化面に出て、流域に僅に低地をつくる。産物は米・黍・大豆・粟等を産す。社線金剛山電氣鐵道の金化驛(金化面内)に近く、金化面に至る街道北部を東西に通す。

キンナ

近東面 朝鮮江原道蔚珍郡の東部。蔚珍面の南に隣り、西北は西面に、東南は箕城面に、西南は温井面に各隣接し、東は日本海に臨む。一一三〇米の丘陵起伏し丘陵を縫うて主道川流れ海岸及び流域に狭長なる低地あり、米・黍・大豆・大麻を産し外に棉・粟あり。蔚珍面に至る二等道路海岸に沿ひ丘陵の首尾を南北

キンナ

西は三峯面に、南は八峰面に各隣接す。西北境に彌勒山の主峯彌勒山(四三〇米)屹立し南部は緩やかな丘陵起伏するも、腰橋湖の灌漑の便を俟て耕地拓け西岡農場・宋農場等あり、米・黍・豆・棉・大麻・苧麻等を産す。街道は東南部を掠り内道の道路また之に合し交通は便なり。(彌勒山城) 彌勒山にある城址。周圍十六町、百濟時代の築造、一名箕準城と稱し、箕準の築造と傳ふ。山は約四三〇米に過ぎざるも全山峻々たる岩石に富み中腹に獅子庵あり、眺望絶佳なり。(彌勒寺址と石造瓦塔) 彌勒山の麓にあり。今は大方廢廟して、礎石・支柱・石造六層塔等を残存するのみなるも規模の雄大を想見するに足る。殊に六層塔は一に彌勒塔ともいひ、花崗岩を以て築造し高さ約一四米、徑約八・五米、實に中島第一の瓦塔にて、今より約一千二百年前の創建にかかるといはる。

キンナ

禁牌嶺 朝鮮咸鏡南道にある山。赴嶺嶺山脈の一端。豊山郡と新興郡との境上に聳え安水面(豊山郡)及び下元川面(新興郡)に跨る。標高一六七六米。東北方の希沙城(二一七米)と西南方の明堂峰(一八〇九米)のほぼ中間にありて鞍部をなし、南方咸興府より北方豊山(豊山郡里仁面)に至る二等道路この峠を越す。

キンナ

錦南面 朝鮮忠清南道燕岐郡の南端。錦江の左岸に沿ひ、北は錦江を隔てて東面・南面に相對し、西は公州郡反浦面に、東南は大徳郡炭洞面・九則面に、西北は忠清北道清州郡天容面に各隣接す。西南部に兩傘山聳え山嶺延びて南境を限り山脚に北方に走り、溪流は山脚を刻みて錦江に注ぎ此等溪流沿ひに低地ありて耕地拓く。郡下にて最も農耕盛なる所に米・黍・豆類・大麻を産し特に棉の産出最も多し。西北部錦江沿岸の大平里には定期の市開かれ地方物散の集散行はれ商業的繁華をなす。北方鳥致院邑に達する一等道路西部を南北に通じ自動車の便あり。西事務所は大平里に設く。内地人の居住者もや多く七〇餘人を算す。

キンナ

金日面 朝鮮全羅南道莞島郡の中部。西は王宮面・礪山面に、北は朗山面に、

キンナ

蔚珍郡の東部。蔚珍面の南に隣り西南は慶谷面に、東南は遠徳面に、東北は日本海に臨む。西南部に山地連貫し山脚の一部は海岸に沿うて連る。一般に海岸地帯は低地にして耕地拓け、米・黍・大豆・小豆・大麻・棉を産し梨も栽培され、漁族も少からず。三陟面に至る二等道路海岸に沿うて通す。内地人居住者は約二〇餘人に及ぶ。

キンナ

蔚珍郡の東部。蔚珍面の南に隣り西南は慶谷面に、東南は遠徳面に、東北は日本海に臨む。西南部に山地連貫し山脚の一部は海岸に沿うて連る。一般に海岸地帯は低地にして耕地拓け、米・黍・大豆・小豆・大麻・棉を産し梨も栽培され、漁族も少からず。三陟面に至る二等道路海岸に沿うて通す。内地人居住者は約二〇餘人に及ぶ。

キンナ

蔚珍郡の東部。蔚珍面の南に隣り西南は慶谷面に、東南は遠徳面に、東北は日本海に臨む。西南部に山地連貫し山脚の一部は海岸に沿うて連る。一般に海岸地帯は低地にして耕地拓け、米・黍・大豆・小豆・大麻・棉を産し梨も栽培され、漁族も少からず。三陟面に至る二等道路海岸に沿うて通す。内地人居住者は約二〇餘人に及ぶ。

キンハ——キンホ

村と田澤村との境界に時つ。標高一三五四米。西麓を中津川北流す。東南麓は日...

キンパンヨ

古地名。漢初、古朝鮮王箕子、衛滿に逐はれ馬韓に走り、其地にて王となり武康王と稱せし地。金馬郡ともいふ。今の益山郡の地なるべし。

キンア

【金峯山】 關東山脈秩父山塊西方部に属する一峯。キンブセンとも稱す。甲府市の北方約二十五軒に當る。山梨縣北五摩郡増富村と中五摩郡宮本村及び長野縣南佐久郡川上村の三村境界上に時つ。標高二五九五米。この山を中心として黒雲母花崗岩噴出し、一部は鬼御影と稱する瓦晶花崗岩をなす。又岩脈中より長石・黒雲母・電氣石等の瓦晶、その他白鐵礦・磁鐵礦・銅軸雙晶水晶等を多く産す。西...

CHINA

キンホ

金浦郡

朝鮮京畿道の郡。京畿道の西部に位し、東南より西北に向つて突出する半島部の地域にして、東部は漢江を隔てて高陽・坡州の兩郡に、北もまた漢江を隔てて開豊郡に、西方は江華水道を隔てて江華島に、西南の一部は海に臨む。面積三八五平方軒。地勢は漢江下流のデルタの地域を占め概して低平なれど、西南部の陸に接する地方は丘陵起伏す。交通は水陸ともに便利にして、三浦水に圍まれ、殊に漢江には京城方面に航行する帆船ありて本郡沿岸の要地に寄港し、陸路は江華街道・富平街道・金浦街道等の坦路あり。農産は米を第一とし、金浦・通津は良米にて名高し。その他、麥・豆類・棉花・烟草・花等あり、水産物には鱈・鰻・鰻魚・鰻等を漢江沿岸に、鮭・石首魚・鰻等を南方の海に産す。慶田は二五ヘクタールを超え、煎茶法による製菓業西南の海岸に行はる。行政上郡内は九面に分たれ、金浦邑は郡内面にありて郡政の中心たり。本郡は高麗時代に野浦郡と稱し、新羅景徳王金浦郡と改め長堤郡領と爲し、李朝太宗時代陽川と併せて金陽縣と稱せしが、間もなく陽川を割きて野浦(給浦)に移し、富平に合せしが、のち縣を廢置し仁祖王の時金浦郡となし、大正三年三月通津郡・陽川郡を合併し一行政區域となせり。

相に於て盟主たるの山容を有す。山體は母・楡の密林を以て掩はれ、秋日の紅葉の美觀はその名高し。山頂に五丈岩あり、花崗岩層より成り、甲斐國志に「御影石、高さ二十五間、横一間、その頂に小池あり、形給の如し、其水元早にも濡れず甲斐眞美と稱せり」と見ゆ。この五丈岩に小祠あり、御岳金標神社の奥院とす。五丈岩は良く淺間山・富士山を始め各方面より望見せられ、好目標とせらる。金標山は古來修験道者が吉野の金標山に擬したる靈場にして武藏藤王権現を祀れり。之を近世金標神社と改稱す。また景行天皇の御宇日本武尊ここに至り、素戔鳴尊・大己貴尊を配祀し給へりと傳ふ。山頂にはガンカワラン・コケモ・ウルコケモ・ゴセンヤチバナ等の高山植物繁茂す。山上より展望すれば北方に小川山千曲川流域より崛起し、その雄大な裾を曳き、東方に朝日岳・國師ヶ岳・甲武信岳(四八三米)・龜冠山(二二二二米)等並立ち、これ等の山々への鐵道路の通するを見、西北方には八ヶ岳・北アルプスの連峯をも遠望し得らる。登山路は甲府より昇仙峯・御岳神社・龜崎(標高とも云ひ最高點一三三八米)・黒平・楡坂とす。北麓川上村秋山より兜岩澤・シホサア澤・ヨバア澤を通行して至る道も通じ、又西南方の北五摩郡時崎町方面よりラサカム温泉にて名高き金泉湯・銀泉湯を経て、或は瑞巖山の奇勝を探り、連頂する道もあり。更に東方甲武信ヶ岳・國師ヶ岳方面より鐵道も興味深し。

【金標山】 奈良縣吉野郡にある山。吉野町に聳立す。吉野郡の南北を縦貫する大峯山脈が北走し、吉野川の盡きんとする最終の崛起點に當り、その高さ七六〇米、吉野川より上ること八軒餘にあり、山上嶽を中心とする吉野連峯に分け入るべき山口の地點に當る。櫻花の名所、また史蹟として世に著しき吉野山は、これより麓の方、吉野川に至る間の汎稱なり。吉野川に沿ふ吉野地方が政治上重要な場所として古來朝廷より重んぜられ、また名勝として喧傳さるゝに従ひ、その奥に位する金標山も自然に時人の注意を惹きしもの如く、萬葉集にも「三吉野の金の御嶽に ひまなくぞ 雨は降るてふ時なくぞ 雪は降るてふ 云々の歌を収む。又この山に金標を藏すとの説もあり、この後平安朝の盛時に及び、黄金の産地として世に知られたり。山名を金標といふは蓋し之が爲なり。山中の金標神社・金標山寺は有名なり。奈良吉野町。吉野道滿大内職・五・鈴掛取つてちりん、いちじきりん金標山、藤王権現、立像権現、葛城七體金剛童子、義經千本櫻・三・三芳野は丹後武藏に大和路や、わけて名高き金標山、藤王權現の御寶物、御開帳として野も山も賑ふ道の傍に、茶店構へて出花波む」

【金標山】 越後山脈朝日山塊に属する一

キンボリー

金包里

【金包里】 臺灣臺北州基隆郡の舊堡名。管轄區域は現在の金山・萬里二庄及び淡水郡石門庄の一部下角を包括せり。大正九年地方制度改正に依り廢止せらる。金包里の名はいま金山庄大字下中股の小学名として残り庄役場・信用組合・郵便局・警察課分室等ありて金山庄の中心市場を成す。

金包里炭礦

【金包里炭礦】 臺灣臺北州基隆郡金山庄頂角字三界壇に在るも著名なる炭礦に非ず。金包里炭系は背斜炭層にして二層より成り、厚さ上層は一尺二寸、下層八寸あり。北五十二度東に走り六十五度西北に傾斜す。其の東端露頭は金包里の西北約一里中角字西勢に現はれ、三界壇礦區の北方山脚を過ぎて頂角字曲尺坑子の丘地に露す。此の延長約二軒内外なり。之と背斜せる炭層は金包里の東北約五六町下中股字横港の海岸附近に厚さ僅かに八寸に過ぎざる薄層一枚のみを露出す。其の走向南北十二度東方に傾斜して再び下中股字水尾の崖地に露はれ、遂に眞深溪附近の沖積地に没し、以西は大屯山火山塊に絶たる。

キンホク

近北面

【近北面】 朝鮮江原道金化郡の西部。東北は金城面に、東は近東面、金化面に、南は西面に、西は平康郡南面に各隣接す。東境に五嶽山(一〇六二米)聳立して山脈南北に延びるも山地西に傾

キンボク

金北山

【金北山】 新潟縣佐渡島なる大佐渡の中央に當り、佐渡郡吉井村・金澤村・高千村との境界に聳ゆ。標高一七三米、輝石安山岩より成る。古くは越前嶺といひしと。西南麓は妙見山(一〇四二米)に續き、東北方には祖傳堂山(七五一米)時つ。東斜面より長江川源流し、東南流して加茂湖に注ぎ、西斜面より石花川源流し、西北流して日本海に注ぐ。この山標高大ならざれども氣象上の關係よりして山頂附近に高山植物茂生し偉觀を呈す。山頂は佐渡島の最高點にして古より一鳥の嶺として尊敬せられ、頂上なる龜具突智命・大産命を祀る神社へは、男子七歳に至れば御山詣と稱して必ず登山せしめ、山上に群生する石楠花の枝を持ち歸らしむる風習あり。又北方の金剛山(加茂村にありて七八九米)と共に三山と稱せられ、この三山に登るを三山がけと稱せらる。昔の修験道場たり。頂上より風望は極めて廣闊にして、殆んど島の全容を見渡し、又遠く新潟・山形縣方面の連山をも望見し得らる。山麓に牛馬

【金標山】 キョー山とも讀み、朝出山・一ノ岳・徳託山の別名あり。阿蘇火山脈に屬する一峰。熊本市の西方約六軒、熊本縣鹿野郡芳野・松尾二村の境界に時つ、島原海海岸より東方約四軒に當る。東方の阿蘇山(一五九二米)、西方の雲仙岳(一三六〇米)の中間に位す。標高六六六米。コニャア型の火山にして、消火山と見做され來りしも、文政九年に六十日もの山に鳴動ありと記され、又明治二十二年七月二十八日熊本市の大地震の原因はこの山の活動なること判明せり。朝出山なる山名は、此山は上古の或朝突然噴起せしに因ると云ふ。此山を中心として長標六軒、短標四軒の周上に外輪山立並ぶ。即ち三ノ岳(聖徳寺山)・二ノ岳(熊ノ岳、六三五米)・小森山・平山岳等なり。然れどもこれ等の山々は、外輪山の輪郭

キンホ——キンホ

【金標山】 キョー山とも讀み、朝出山・一ノ岳・徳託山の別名あり。阿蘇火山脈に屬する一峰。熊本市の西方約六軒、熊本縣鹿野郡芳野・松尾二村の境界に時つ、島原海海岸より東方約四軒に當る。東方の阿蘇山(一五九二米)、西方の雲仙岳(一三六〇米)の中間に位す。標高六六六米。コニャア型の火山にして、消火山と見做され來りしも、文政九年に六十日もの山に鳴動ありと記され、又明治二十二年七月二十八日熊本市の大地震の原因はこの山の活動なること判明せり。朝出山なる山名は、此山は上古の或朝突然噴起せしに因ると云ふ。此山を中心として長標六軒、短標四軒の周上に外輪山立並ぶ。即ち三ノ岳(聖徳寺山)・二ノ岳(熊ノ岳、六三五米)・小森山・平山岳等なり。然れどもこれ等の山々は、外輪山の輪郭

キンメー——キンリ

放牧場あり。夏季は登山者多し。冬季は積雪深く登山困難。春季は吹雪の危険あり。登山は東麓兩津町乃至西南麓相川町より行ふ。兩津町より山頂まで約十二軒なり。

キンメー 金名鐵道

石川縣能美郡にあり。石川郡河内村の社線金澤電氣鐵道の神社前驛より起り能美郡鳥越村に入り手取川の河谷に沿うて白山麓の同村大字白山下驛に至る。全長一六・八軒、軌間は一・〇六七米、大正十五年に開通す。現在一日七往復、所要時間五十分。

キンメー 欽明路跡

關防國現現郡現現町の東北にある。一に金明寺とも稱す。この時は海抜二〇七米餘に過ぎざるも、古の柱野驛(師木野村)と現現驛(現現町)との中間に在り、舊山陽道第一の險所として知られしが、現在山陽本線この間に於て欽明路遺道を通じまつて便利となれり。欽明寺の稱は山上にある日蓮宗金明寺(寶光山)に因れるものにして、同寺は天文十三年の創建に於けると稱せらる。

キンヤ 禁野

大坂府河内國北河内郡北部の地。桓武天皇此地に狩獵し給ひしより皇室の御獵場となりて此名あり。當時は山田・岡本・田宮等の三郷に互る廣き地を包含せしが、いま山田町の大字に其名残る。また天ノ川と稱する小流流るるを以て此地を天野川ともいふ。伊勢

物語「狩りくらしたなはたつめに宿からん天の河原にわればきにけり。蓬平」好色一代男・七「此橋のうちに、交野きんやも跡に、淀の小橋は霧こめて、鳥羽の懸架、合點すやと見覺し、ほどなく四ツ塚の茶屋」

キンヤン

臺灣臺北州蘇澳郡の舊社。大濁水溪の上流地方にあり。南澳郡に屬する高砂族部落なり。戸數六一、人口二八五あり。

キンラクジ 金樂寺

兵庫縣川邊郡小田村の大字。省報福知山線の金樂寺驛(明治四十五年設置)を置く。

キンリュウ 金立

佐賀市の北六軒。東に久保泉村、南に高木瀬村、西に春日村、北に松梅村・神埼郡春振村あり。春振山塊南麓に在り、北半は斷崖に相當し、中部は斷崖下層下層山(五〇一)あり、崖下層地は原・若宮原の原野草地にして、射撃場あり、又この附近に堰止池多く、南部水田地域に灌溉す。標高實・米・麥・野菜等を産す。村名は金立山・金立神社に因むらんと。この地は和名抄の佐嘉郡深溝郷の一部なり。大字千布は肥前軍記に云ふ、筑後の神代對馬守と云ふ人没落して、肥前に來り、小佐賀の千布の村長、陳内氏に知りて爲り、其子を新次郎勝利と曰ふ、勝利兵衛を稱古し、北分山内を語り、四百餘

人の弟子を取り、後に弟子と心を合せ、山内を領したり、勝利、龍造寺隆信と數年敵對の後卒去しければ、隆信の臣納富但馬守の計ひにて誓書を渡し、和平と爲る、然るに納富、千布を夜討しければ、勝利の子長良逃れ出て金立山に入り、畑に龍り、諸方へ働き、神代二代二十年の間、龍家の爲めに山内を侵されざりしも、のち鍋島信生公に就きて歸伏したりと。(金立神社)大字金立に鎮座。郷社。祭神、保食神、阿彌陀佛、奉祭。創立年代不詳。早く貞觀二年從五位下を、元慶八年從五位上を授けられし國史現社の子孫たり。徐福は秦始皇の臣、始皇の命を受けて不死の藥を求めんが爲め此の山に入りて身を葬へしを以て、後祠を墳上に建てて祀りしと云ふ。社殿は上宮と下宮の二殿より成り、上宮は寶殿石造、寶殿の後に寶石あり、本縣第一の大石と稱せらる。例祭、十月二十日。(金立山)肥前古志に、佐嘉郡金立山雲上寺は孝靈天皇七十二年、秦始皇第三皇子、徐福太子の乗船にて、三社權現と顯れ給ふ、權現來朝の時、金銀珠玉を飾樂船、童男童女七百人、歌舞音樂を調へ、肥前國寺井津に御船着有り、御人際を奉て變するに、太子喜て玉を浮べて興させ給ふ、其時一鳥となる、今の玉津是なり、寺井津より白布千端を引ばへ、其上を踏つて御輿を通し、金立山に移奉る、此千端布を集て塚を築き千布里と云ふと。(古古古古)大

門にあり、金立神社一ノ華表の北方、今は荒廢し遺跡を残すのみ。附近に古賀堂・素堂・竹里等の墳墓あり。靜古館記、靜古前在粟郡北二十里金龍山麓白華表右折數十歩爲館岑野蒙蒼翠湧瀉一泓之池横貫園中清泉注焉池内外岩石橫擊小紅架水松筠檜梅雜色澗澗雅潔可愛館不甚廣而足容十數人不事形飾極汚澆澆然無長物余每出王到此或澄生撫景或龍輻對客終詆語默變化無窮而一以幽靜爲主然後其樂有不可勝言因取手唐子西山靜如太古語名館。(鏡子塚)金立にあり、形狀圓形、古昔國造等の墳墓なるべし。今はその上に戦死者記念碑を建つ。(金立山)筑紫山脈の峰。金立山といふ。筑紫平野の北端に在り、佐賀市の北方約十軒に當る。即ち佐賀縣佐賀郡金立村の北方に在り、北麓は松梅村に互る。標高五〇二米。西南麓は春日山に連り、北方に春振山脈の連山峙立す。西麓に嘉瀬川、東麓に筑後川の一支何れも南流す。山中に金立神社あり。不老不死の藥を求めて藥より來朝せしといふ徐福を祀るといふ。

キンリュウ 金龍

【金龍山】東京市淺草區野天町にある小丘。一般には特乳山(眞土山)といはれる。丘山に大聖觀音天を祀る堂あり、これを金龍山本龍院といふ。丘の名はこれより來る。好色一代男・七「金龍山を目前に、淺草門の二挺立、駒形堂も跡になして、

日本境にさし懸り、色里三所會帶・江戸巻「なげふしの小唄に目を傾け、七つ鐘のれ金龍山より告流れば、西鶴賣土産、四「近き比金龍山の茶屋に、壹人五分づつ奈良茶を仕出しけるに、うづは物のきれいさ色々調へ、さりとはすへん、の者の勝手よき事となりし人間萬事慮計す、前「ア特乳山の眺望、奇絶、金龍山上一圍の雪だ」

キンリュウ 銀龍面

海邊郡郡の西部。南に上野面・下野面に、西に長野面・清川面に、北に三江河及び風山郡楚隊面に、東は風山郡楚隊面に各隣接す。西南境に滅忍山脈に屬し、白色砂岩より成る長壽山(七四七米)聳立し山嶺東に延びて西南境をなし、北境に萬岐山(四五二米)の山脚に載奉江岸に及び、東南境の載奉江の右岸に銀嶺山(三〇五米)聳え、この間載奉江は曲流をなして東南部より長壽山を迂回して中部を西に流れ、更に北に流路を變じて三江河に出づ。社線朝鮮鐵道黃海線の上流(三江河)・龍崎浦(海州郡西邊面)間の鐵道西北部を載奉江に沿うて通じ石澤驛(大正八年設置)・花山驛(大正十三年設置)を置き花山驛より銀龍嶺山ある内土驛(大正八年設置)に至る線を分岐す。街道は各溪間沿ひに通じ西近に出づ。地味肥え灌溉の便多きを以て耕地拓け、米・麥・

キンリ——キンロ

豆・梅を産し林産を栽培しその外銀龍嶺山より織、銀龍嶺山より金・銀・鉛等を産す。銀龍嶺山は内土洞にあり。三菱鐵業會社の經營に屬し鐵を出し年産額は約一萬六千噸にて鐵夫二五九人。銀龍嶺山は銀嶺山の西麓にあり、三成鐵業會社の經營に屬し金・銀・鉛・銅・鐵・重晶石・螢石を産す。主として亞鉛(年産約二千噸、鐵夫一六四人)・重晶石(年産約千七百噸、鐵夫六八人)・螢石(年産約二百噸、鐵夫三人)を採掘す。(長壽山)黃海金剛とも稱し朝鮮八景の一。長壽山驛より南一軒、海抜七四七米。寶嶺峰・寶嶺峰・觀峰等起伏嶺數里に亘り脚下には載奉江長蛇の如く東南流を噴み北流し廣漠たる載奉平野を成す。山の造成は主に雲母花崗岩等全山麓にて果樹園地等々として噴岩露岩奇形を極め怪僧と見ゆるもの、女姿に似たるもの、或は佛陀の如きもの、虎・猿と疑はるもの、千姿萬態奇を盡し妙を極む、實に神祕の峯に三嘆なき能はざるものあり。春は紅紫白新銀へる野花滿山を彩り、夏は碧流臨崖に懸りて千仞の瀑布となり清流絶ゆるなく、秋は楓葉紅を呈し滿山これ錦繡と化し、冬は萬岳巖々たる白布を裝ひ凛々たる寒風に愜まさる、懸崖の古松、春夏秋冬佳ならずなく幽邃古雅の風趣自ら仙境の感あらしむ。山内には古米五大伽藍ありしも、東學黨騷亂の際不幸觀嚴の災厄に遭ひ今は僅に妙音寺・慈庵・首庵の

三寺を残し佳時を偲ばしむ。山内探勝すべきもの頗る多し。

キンリョウ 金陵面

尙北道金泉郡の中部。金泉邑の北に隣り、東は開寧面・農所面に、北は樂傳面に、西は風山面に各隣接す。西北部に山地連るも南部は土地低平、洛東江の一支甘川は東部を流れ神積平地をつくる。地味肥沃灌溉の利多く米・麥・大豆・楮・棉等を産し特に米・麥・大豆の産出多く金泉邑に出して取引す。金泉邑より發する街道、南北或は東西に通じ金泉邑に自動車の便あり、社線朝鮮鐵道慶北線中部を南北に走り金泉驛(金泉邑)に近し。

キンロワン

東郡の舊社。風山溪の上流地方の山岳地帯界にあり。キナドリ等に屬する高砂族の部落なり。戸數二七、人口一三五(昭和十一年末)。

クー クーセ

ク

ク 九島

愛媛縣北宇和郡にある島。宇和島市に属す。宇和島灣内に浮び宇和島港を南北二港區に分つ。東西及び南北の長さ約二・五軒、ほぼ圓形をなし中央に標高三二〇米の山聳立し、島内平地に乏しく東南海岸に墾地あり。本島は宇和島港南岸一帯の本陸と共に九島村と稱せし昭和九年宇和島市に編入す。

ク 久村

鳥根縣出雲國益川郡の西南海岸。北は西濱村、東は江南村、東南は窪田村、西南は田代村に隣り西北は日本海に面す。面積六・七平方軒餘の小村。全村一・二百里米の臺地状の丘陵地多く、北部より西北海岸に狭小の低地ありて田畑存するも全村の大部分は林野をなす。美並行はれて藪を主産し米その他の農産及び工業あり。國道(山陰道)と省線山陰本線、北部の低地を東西に走り、後者の小田原(田代村)に近く、また同線と出雲今市間の國道にはバスを通じ、交通不便ならず。此地古くは和名抄、神門郡多伎郷の地、村社國村神社は延喜式に見ゆる國村社にして村名蓋しこれより起りしものなるべし。明治二十二年町村制施行に際し、田代・田代兩村の組合を分離し本村は獨立して現在に至る。

ク アイ

九合村(アイ) 群馬縣上野國新田郡の東南部。太田町の南、澤野村の東に隣り、東は山田郡休泊村・邑樂郡小泉町に、南は同郡大川村に界す。面積一〇方軒餘なるも土地平坦にして耕地多く拓け田約四五〇町歩、畑約三〇〇町歩あり、米・麥の産多く、また蠶業榮えて繭を出し、綿織物を産す。縣道南北に通じ太田町と熊谷市(埼玉縣)間を通ずるバスの便あり。和名抄に新田郡石西郷あり、蓋し本村等その中に屬せしならんか。大字に新井あり、新田系國義重より三代、義房の次子に新居師範義といふものあり、蓋し此地にありて在名を唱へしものならんといふ。また新田系國に義重より四代、政義の三男を谷島三郎信氏といふとあり、即ち大字矢島に居して在名を負ひしもの。村内に天神山古墳・女體山古墳ありて女體山古墳は今指定史蹟たり。(八幡宮) 大字新井字八幡に鎮座。郷社。祭神、氣長足姫命・品院和氣命・武内宿禰。創立年代詳ならず。上野國神名帳に「從四位新池明神」とする説あるも明かならず。古來近郷の産土神。例祭、三月十五日。(天神山古墳) 大字内ヶ島にあり南面せる前方後圓形を呈し、壯大にして封土に雜木繁り、一見、自然の丘陵かと思はる。前方部と後圓部の接觸點に兩側に各々圓形の造出ありて、謂はゆる車塚をなす。周圍には廣き濠を繞らせしもの如く、今は田圃となりたるも、畦畔

ク アイ—ク イシ

クーガン 島

Chusan I. 南洋の我國委任統治島の一。マリアナ群島中の一にして火山島。

グーゲ 郡家

武藏國(埼玉縣)の古地名。和名抄足立郡に郡家郷あり、其地今の北足立郡大宮町・三室村等の邊に當る。蓋し往時足立郡家ここにあり、因つて名づけしものなるべし。【郡家】 武藏國(埼玉縣)の古地名。和名抄、入間郡に郡家郷あり、その地いま評ならざるも、入間郡古谷村・南古谷村・福岡村・高階村等の地に當るか。一に入間川町・堀兼村等の邊に當るともいふ。蓋し入間郡家は此處にありしものか。【郡家】 武藏國(埼玉縣)の古地名。大里郡に郡家郷あり、その地今の大里郡久下村・佐谷田村及び北埼玉郡太井村にあたる。中世以降、荒川の河道變じて地形變化したりと雖も、本郷は市田郷の北に接し、本郷と埼玉郡玉郷との間を荒川は初め流れしものなるべし。【郡家】 加賀國(石川縣)の古地名。和名抄、江沼郡に郡家郷あり、其地今の江沼郡大聖寺町・南郷村・三谷村等の地に當る。此地は江沼郡司の治せし所にして、後宇多院御領目録に「加賀國郡家郷」とあり、建武三年の勅修寺門跡御領目録にもこの郡家郷を載す。近世は専ら西庄と稱す。【郡家】 美濃國(岐阜縣)の古地名。和名抄、厚見郡に郡家郷あり、其地いま詳か

ならずも稻妻郡厚見町・北長森村・南長森村等の地に當るか。此地は往時、加納領長森莊と稱せし地なり。

【郡家】 美濃國(岐阜縣)の古地名。和名抄、大野郡に郡家郷あり、その地今の掛妻郡川合村の邊なるべく、大字郡家はその遺稱なるべし。蓋し往古の大野郡家のありし所。土岐系國にれば美濃光俊の子光繼は郡家三郎と稱せりと、即ち此地に居りしものか。【郡家】 美濃國(岐阜縣)の古地名。和名抄、可兒郡に郡家郷あり、その地今の可兒郡中村・御嵩町等の邊に當る。蓋し可兒郡の郡家のありし地なるべし。中村の大字額戸は郡家の遺稱なるべし。【郡家】 攝津國(大阪府)の古地名。和名抄に西生郡郡家郷あり。蓋し西生郡の郡家の置かれし處。地は今の大阪市北區天満の地に當る。【郡家】 攝津國(大阪府)の古地名。和名抄に東生郡郡家郷あり。即ち往昔、東生郡の郡家(郡衙)のありし處。應永雜波古圖には、郡家郷は生玉莊の西にあり、攝津郡に郡家は即ち生玉郷と見ゆ。その地詳ならずも大阪市天王寺區、上町丘陵の中部にて夕陽丘の北、高津の南の邊なるべし。雜波大郡は此地にありしもの如し。【郡家】 攝津國(兵庫縣)の古地名。和名抄に河邊郡郡家郷あり。蓋し河邊郡の郡家ありし處。地は今の川邊郡伊丹町か。

グーシ 郡司山

軍治山・空地山とも作る。阿武隈山脈準平原地帯に起る一丘阜。福島縣平市の西南方約四軒、石城郡飯野村に属す。西方は湯本町の傾城山に連る。謂はゆる常磐炭田の地にして、多くの炭坑四圍に點在す。維新の際に薩摩の兵士、この地に據る賊軍を討たんと攻めしが賊兵強くして大砲を發砲して抗戦し、西方湯本より來援せし官軍に四圍を包圍せられし後よく應戦し、激戦を展開せし地なり。西に常磐線と陸前濱街道南北に並び通ず。

グーセン 隅川面

朝鮮江原道横城郡の南部。東北は井谷面に、西北は横城面に、南は原州郡所管面隣りに各接す。東南境に梅花山(一〇八四米)、西部にも五〇〇米餘の山地あり、中間は約二〇〇米の丘陵連り、鎭江の一支流川これ等山地に發する諸水を集めて西北境を西南に流れ、本面の中部溪間に僅に低地あり。産物は米・麥・大豆・棉・苧草等あり。二等道路は東南部梅花山の山麓を通じ三等道路は之より分れて前川に沿うて走る。

等の關係にて規則明かなり。後圓部の頂には石塚發かれ、その石材散亂するに委したるが、規模の雄大な點に於ては下層指なり。一に男體山と呼べば、隣接せる女體山古墳の對稱なりと思はる。(女體山古墳) 大字牛津にあり。指定史蹟。朝子塚とも呼ばる。前方後圓形の一異體とも見るべき特異の形式を呈せる古墳にして、圓形の封土を主體とし、其前面に略々方形の低き造出を附設せるものにて、その形より見れば帆立貝式とも命名すべきものなり。南を正面として營まれ圓形部の封土は徑約八二米、高さ約四・五米、造出の部分幅約一八米、長さ約一五米ありて、周圍に濠を繞らせる形迹、四周の水田の模様依りても窺はる。墳上は雜木林となりたるが、未だ發掘の厄に遭はざるもの如く、善く保護を保存す。

クイ 久井村

廣島縣備後國御調郡の北西部。三原市を距る北西約一四軒、南は坂井原村に接し、北は世羅郡甲山町と界す。北境に宇根山(六九九米)の山嶺東西に延び、東・南部にも三―四百米臺の山地あり、西部は南北に低地ありて田畑拓く。三原市と甲山町を繋ぐ縣道南北に村を買きバスの便あり。農家は全戸數の八三%に上り(農家戸數四七七、商家戸數五六、工家戸數一八、交通運輸業者戸數九、其他一四)米・麥等の農産のほか、工業多く林産また少からず。毎年秋

開この地に牛馬市開かれ久井の牛馬市として著はる。市は、稻生神社の神徳によりて初まること稱し、舊廣島藩取調法を定め、これを保護奨励せしを以て盛況を呈す。明治維新後一時衰へしも明治六年再興し、昔日の面影を偲ぶに足る盛況を示すに至る。村名は此地中世杖莊に屬しその遺稱なるべしと。また備後後後度(宇津戸村地内)より安藝高良(豊田郡高坂村地内)の中間に當り、杖莊と稱せしに起因すといふ。(稻生神社) 大字江木に鎮座。村社。祭神、宇治之御魂神。和久産日神、外敷神。天慶三年の創立といふ。伏見稻荷社の社領杖莊に發生したる古社にて同庄の守護神として尊信を受けし外、江戸時代には藩主淺野氏の崇敬篤く、社殿の造營・社參・代參・祈願・寄進等のことあり。また近郷の産土神。

クイ 區毗岳

山城國(京都府) 總持郡の古地名。一に昨山ともいふ。また馬昨山・まぐひ山ともいひ、歌枕として著はる。類聚國史・一八二、天長十年十月に、此岳一處を以て圓提寺の地とすとあり。圓提寺は相樂郡鹿背山(持山)にある寺。區毗岳はいま同郡草内村の木津川西岸に孤立せる飯岡を稱せしものか。この岡は平地を抜くこと約三〇米にて、遠くより之を望めばその状恰も鳥の如し。山頂に一洞あり、延喜式神名帳の總持郡昨圓神社は之なりといふ。萬葉・九「春草を馬昨山ゆこえくならる那の使はやり

すくなり」とある馬昨山は、この岡をいひしものにして、八雲御抄に「まぐひは按ずるに飯岡をいふかと見え、仙覺萬葉抄には「むまぐひ山といふはいつみ川にそひたる山也」とあるを見ても明らかなり。山城名勝志に「區毗岳、類聚國史云仁明天皇天長十年十月辛卯、勅山城國、觀音郡區毗岳一處爲圓提寺地」とあるも此山なるべし。

クイコー 抗甲山

栗子山(山形・福島縣境)の別名。

クイシ 工石・食石

【工石山】 劍山山脈西南方餘脈の一峯。高知市の北方約十三軒、高知縣土佐郡土佐山村・地蔵寺村との境界に跨る。標高一七七米。東北麓は三辻山(一一〇九米)・櫻山(九三六米)に連る。南麓は鏡川に限られ、東南斜面よりその一支發して南流す。【工石山・食石山】 四國山脈の一峯。高知縣と愛媛縣との境界や高知縣寄りに峙つ山。高知市の東北方三十餘軒、別子湖山の東南方約二五軒に當り、高知縣長岡郡吉野村と大杉村との境界に跨る。標高一五一六米。全山結晶片岩より構成せらる。北方に四國山脈主脈東西に走り、東北方にカガヤン山(一三四三米)・櫻尾山(一二三二米)連り、西北方に中川峠最高點(一二二二米)を経て佐々連尾山(一四〇五米)續く。登山は大杉村字立川上名より行はる。

クイシ—クエ

クイシ 昨石岳。比治山(京都府)の古名。

クイシキ 九一色 甲斐國(山梨縣)の古地名。西八代郡に中世置かれし地名にして、今の上九一色村・下九一色村の地に當る。甲斐國志に「大山の間耕田乏ければ諸商賣の役免許の御朱印壬午七月十二日大久保新十郎奉之、武田の例の如く賜はり、他邦へ移る者毎人禮札を帯びて貨物を駈行す、本州四方の山に居る者多しと雖も狹隘如、是の地を視ず、所謂高萩・三帳・下蘆川・梯・古園・鶯宿・精進・本橋・西湖九村なり。後枝分して中山・折門・華・知徳・八坂合して十四ヶ村となる」と見ゆ。

クイセ 杭瀬川。岐阜縣にある川。揖斐郡宮地村にて始川より岐れ、不破・安八兩郡境を南流し、西方より来る相川と合して牧田川に入り、これより東流して揖斐川に入る。流域約二〇軒。一に揖斐・七瀬にも作り、古書に揖斐とするものあり。往古は揖斐川の水、神戸町の西を南に流れ赤坂町の東に於て此川に入りしを以て水量頗る大なり。この合流點は杖瀬の渡といひ、東山道の津津たりき。揖斐川の何時の頃よりその流路を變へしものかは詳ならず。東國紀行「杖瀬川といふ所にとまりて、夜更くる程に、川端に立ち出でて見れば、秋の最中の晴天、清き河面にうつろひて、照る月なみも數見ゆばかり澄みわたれり。二千里の外

の古人の心遠く思ひやられて、旅の思いとどおさへがたく覺ゆれば、月の影に筆を染めつつ、花洛を出でて三日、杖瀬川に宿して一宵、屢爾吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつがつ遠情を先途千里の雲に送る」など、ある家の障子にかきつくる序に「知らざりき秋の半の今夜しもかかる旅の月を見んとは」。

クイセケ 杭瀬下村。長野縣信濃國埴科郡の西部。千曲川の右岸に沿ひ、屋代町の南、埴科村の西に隣りし、西は川を隔てて更科郡埴科山町に相對す。面積僅に二・五平方軒の小村なるも土地平坦にて耕地よく拓け、米・麥・蕎麥の産あり。省線信越本線の屋代驛(埴生村小島)に近く、屋代町・埴科山町へハスの便あり。此地は和名抄、埴科郡埴科山郷のうちなるべく、王政維新前は幕領にして中之條陣屋の治下たりしが、明治元年九月以降は縣の管下に歸し、其間合併又は組合村となり、明治二十二年杖瀬下村・新田村の二箇村を合し村制を施行し以て今日に及ぶ。

クイチガイ 喰違口。江戸城外郭の一。四谷見附と赤坂見附との間にあり、紀國坂の上、赤坂見附東御門前より龜町に入る所をいふ。一名、喰違土橋。狂言の囃しなりし時、右大臣岩倉具視の要撃せられし所。御府内備考「喰違御門清水坂より紀州御中屋敷へ行く喰違土手の前なれば、かく名付しならん」。

クエンヒラ 崩平山

阿蘇火山脈の一峯。阿蘇山の北東方約三七軒、大分縣玖珠郡飯田村に峙つ。標高一二八八米。北西方に鹿伏岳連り、北東方に野稻岳(一〇三八米)、南東方に花平山(一一七三米)等聳立す。南西麓を玖珠川北流に流る。

クエンヒラ 崩平山。阿蘇火山脈の一峯。阿蘇山の北東方約三七軒、大分縣玖珠郡飯田村に峙つ。標高一二八八米。北西方に鹿伏岳連り、北東方に野稻岳(一〇三八米)、南東方に花平山(一一七三米)等聳立す。南西麓を玖珠川北流に流る。

クエ 九會村。兵庫縣播磨國加西郡の東南部。西は下里村、北は富合村に接し、東は加東郡河合・來住の二村と、南は印南郡平荘・東志方二町と界す。東半は吉野ヶ原の南部に當る林野、南境には一・二百米臺の丘陵山地もあるも、中部は土地緩かに南方に下る低平地にて加古川の一支七郷川南流し田畑よく拓く。農を主業とし米・麥(裸麥・小麥)・粟・蕎麥・蔬菜等を産し副業に吟瓶の製品あり、また双物・木製品の工産を出す。縣道四通し、姫路市・社町(加東郡)間にはハスの便あり。また社橋丹波道北條線通じ、細引驛(大正四年開業)、田原驛(大

正八年開業)を設け、交通便利なり。九會は村制施行の際、中野・田原・細引・榮・桑原田・繁昌・上宮木・下宮木・鶴野の九箇村を合併して名付けし名稱とす。中野は村の特色にて役場あり。また中野の清庵寺に御首塚あり、古城記に長祿二年赤松の遺臣中村小四郎吉野の南帝の御首を賜はり此處に葬るといふ。寺は正徳二年の創立にて、淨土宗たり。田原及び細引の南嶺に周遍寺山あり。山中の古刹周遍寺は眞言宗にして南海の影響あり、石造の刻佛九十餘軀を安置す。「手塚原神社」大字繁昌に鎮座。神社。主祭神、大國主命、相殿神、大物主命、住吉神、少彦名命、菅原道眞。創建年代不詳。延喜の制に小社に列せられ、明治七年二月郡社に列し、其後、同村八幡神社及びその境内神社三社を當社に合祀す。例祭、三月二十五日。

クエ 九會村。兵庫縣播磨國加西郡の東南部。西は下里村、北は富合村に接し、東は加東郡河合・來住の二村と、南は印南郡平荘・東志方二町と界す。東半は吉野ヶ原の南部に當る林野、南境には一・二百米臺の丘陵山地もあるも、中部は土地緩かに南方に下る低平地にて加古川の一支七郷川南流し田畑よく拓く。農を主業とし米・麥(裸麥・小麥)・粟・蕎麥・蔬菜等を産し副業に吟瓶の製品あり、また双物・木製品の工産を出す。縣道四通し、姫路市・社町(加東郡)間にはハスの便あり。また社橋丹波道北條線通じ、細引驛(大正四年開業)、田原驛(大

クウ 久宇

出雲風土記に見ゆる船根郡の島。鳥根半島の東部、鳥根縣八東郡片江村の海岸にある九島がそれならん。風土記前後の記載とも符合す。出雲風土記・船根郡・久宇島、周一里卅歩、高七尺(有梅樵白木小竹藪頭高都波乎)。

クウ 久宇。出雲風土記に見ゆる船根郡の島。鳥根半島の東部、鳥根縣八東郡片江村の海岸にある九島がそれならん。風土記前後の記載とも符合す。出雲風土記・船根郡・久宇島、周一里卅歩、高七尺(有梅樵白木小竹藪頭高都波乎)。

クエ 九會村。兵庫縣播磨國加西郡の東南部。西は下里村、北は富合村に接し、東は加東郡河合・來住の二村と、南は印南郡平荘・東志方二町と界す。東半は吉野ヶ原の南部に當る林野、南境には一・二百米臺の丘陵山地もあるも、中部は土地緩かに南方に下る低平地にて加古川の一支七郷川南流し田畑よく拓く。農を主業とし米・麥(裸麥・小麥)・粟・蕎麥・蔬菜等を産し副業に吟瓶の製品あり、また双物・木製品の工産を出す。縣道四通し、姫路市・社町(加東郡)間にはハスの便あり。また社橋丹波道北條線通じ、細引驛(大正四年開業)、田原驛(大

クエ 久江村

石川縣能登國鹿島郡の南部。七尾町と羽咋町(羽咋郡)の中間に位し、西南は御嶽村、北は能登郡村、東北は瀧尾村に接し、東南は富山縣水見郡八代・碓氷兩村と界す。謂はゆる羽咋地帯の中部に位し、東半南部は二三百米の丘陵山地なるも西北半部は土地低平なり。面積僅に六方軒餘に過ぎざるも水田拓けて米を産し、麻織物・繭を産す。七尾街道に當り、また省線七尾線の能登郡驛(能登郡村地内)にも近く交通不便ならず。往古の事は以て假すべきものなき

にあり。玉垣を以つて圍繞せらる。毎夏八幡宮の祭典に、神輿、この松下に安置せらるる爲、この稱あり。松は黒松の代表的名木にして、その高さ一五米を越えず、幹も約六米に過ぎず、根本の周囲約三五米、地上一一・二米弱、即ち枝の發出部直下に於ける幹の周囲は約四・九米なれど、互枝縮縮八方に延び、その枝の多くは垂れて地表に達し、枝の延長、長さは一五米、短かきも一六米、誠に稀有の老松なり。(覺法寺)眞宗本願寺派。平等山と號し、伊豫國河野氏の臣、藤木利部介信茂の二子信雄、重なる近親の死に無常を感じ、准如上人の弟子となりて正慶と號し、本寺を開創す。爾後法燈連續たり。(大洲櫻然)覺法寺十世雪道の二子。字は後樂、石堂又は九香と號す。妙圓寺月性に師事す。文久年間學壇の講起るや、慨然壯士を募り眞武隊を編制し、尋て輔佐を糾合し護國團を組織す。慶應二年幕軍長州に入る時、率先之に當り功あり、明治初年、本派本願寺參政となる。九年冬薩州巡撫中、開議と號はれ國團に投せらる。勅使到り放されて京都に歸り、天願に咫尺状を奏す。のち本山執行長に累進す。二十七日日清の役、諸僧を統率し朝鮮の布教に力む。歸郷靜養中三十五年寂す。年六十九。大正五年、正五位を贈らる。(伊藤惣兵衛)嘉永外費以來、僧月性等と尊稱を唱ふ。私財を捐つて肚丁に武術を奨めしむ。文久三年、馬關攘夷に

の新年祭。史料に充てらる。その後も武門の尊信厚く、弘治三年當國管領高山義綱は大に社殿を改造し神封を増加せらるると云ふ。天正年間の兵亂に古文書重寶の或ひは紛亂し或ひは焼失して現存せるもの甚だ少なし。境内三千坪。例祭、七月二十六日。なほ三月十一日・十二日は醍醐天皇御規定の祭祀いまに傳はると云ふ。

クエン—クカ

クエン 久賀町。山口縣周防國大島郡屋代島の西北部。東は日良居村に隣り、西は蒲野村に、南は安下庄町に接し、西北は海を隔てて玖珂郡に相對す。西南部には嘉納山(七三〇米)・嶽ノ山(六〇九米)等の山岳連り、三箇山地に圍繞せらるも、北部海岸沿ひに平地ありて水田拓け、農産に米・麥・甘藷・蜜柑・ネーブル等を出す。蜜柑は謂はゆる大島蜜柑の一にして、廣く市場に供給せられつゝあり。養蠶業また盛にして、水産も乏しからず。製造乃至加工業品には、木綿・清酒・醬油・農具・造船・瓦・軽木織物・木製品・菓子類・水産加工品等を有す。町民中には米國その他に移住し巨富を積

日的新年祭。史料に充てらる。その後も武門の尊信厚く、弘治三年當國管領高山義綱は大に社殿を改造し神封を増加せらるると云ふ。天正年間の兵亂に古文書重寶の或ひは紛亂し或ひは焼失して現存せるもの甚だ少なし。境内三千坪。例祭、七月二十六日。なほ三月十一日・十二日は醍醐天皇御規定の祭祀いまに傳はると云ふ。

クエンヒラ 崩平山。阿蘇火山脈の一峯。阿蘇山の北東方約三七軒、大分縣玖珠郡飯田村に峙つ。標高一二八八米。北西方に鹿伏岳連り、北東方に野稻岳(一〇三八米)、南東方に花平山(一一七三米)等聳立す。南西麓を玖珠川北流に流る。

クエ 九會村。兵庫縣播磨國加西郡の東南部。西は下里村、北は富合村に接し、東は加東郡河合・來住の二村と、南は印南郡平荘・東志方二町と界す。東半は吉野ヶ原の南部に當る林野、南境には一・二百米臺の丘陵山地もあるも、中部は土地緩かに南方に下る低平地にて加古川の一支七郷川南流し田畑よく拓く。農を主業とし米・麥(裸麥・小麥)・粟・蕎麥・蔬菜等を産し副業に吟瓶の製品あり、また双物・木製品の工産を出す。縣道四通し、姫路市・社町(加東郡)間にはハスの便あり。また社橋丹波道北條線通じ、細引驛(大正四年開業)、田原驛(大

糧食を輸送し之を助く。元治元年、大洲...

クガ 久我

【久我村】茨城縣常陸國筑波郡の東南端...

阿太加と見ゆるは、大字足高の地なるべ...

クガ 久我

【久我】群馬縣利根郡にありし村。明治...

る縣道、東部の臺地の縁に沿うてほぼ南...

【久我】群馬縣利根郡にありし村。明治...

して之を討たしむ。成氏敗れて本州河...

【久我】群馬縣利根郡にありし村。明治...

日孫八・三谷新十郎・寺本彌七・中野興...

クガ 玖珂

【玖珂郡】山口縣十一郡の一。縣の東北...

クカ——クカ

根尾郡足部と号し、東は廣島灣に臨む。

クガ 玖珂

【玖珂町】山口縣周防國玖珂郡の西部。

正天皇の養老五年に起りしもの、及び河の二重石現出せるに因ると稱せらるるも、勿論傳説に過ぎず。江戸時代には岩國吉川藩に属す。當時玖珂本郷は中國街道の一帯にして關戸(玖珂郡藤河村の大字)より四里、高森驛(玖珂郡高森町)は二十八町。明治四年廢藩以後、同七年には第四大區第四小區と改められ、尋いで明治十二年玖珂本郷村と稱し、翌十三年更に玖珂村と改め大正十三年八月一日町制を布く。(鞍馬城)蓮華山下にあり。鞍馬または倉掛にも作る。創設年代詳かならざるも文明の初大内氏の屬城たり。天文中杉藤春ここに據りて毛利氏に降りしが、のち富田氏に内通せしを以て弘治元年遂に毛利氏の軍に攻められ城陷る。(岩國八幡宮) 縣社。祭神、應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、神武天皇、三毛入野命、玉依姬命、外八神。社傳によれば、和銅七年宇佐神宮より勧請すと云ふ。もと當郡祖生村に鎮座せしが、元祿四年に現神域に奉遷す。古くは熊毛宮と稱せしに因り或は式内熊毛神社を本宮に擬するものあれど確證なし。熊毛の名は往古三毛入野命、祖生郷岩熊山に天降りしに因るものと傳ふ。社領は八箇國分限帳に、十八石岩國八幡と見え、古來、大内・毛利・吉川諸侯の崇敬篤かりき。明治六年郡社に列し同四十年に同村の大歳神社・金刀比羅神社・須賀神社・生永神社・菅原神社等を併合し、のち縣社に昇格す。今の社殿は大内氏の造營に係る。例祭、十月九日。此日は神幸の行列あり、なほ流鏑馬の神事あり。(比叡神社) 谷津にあり。一名山王神社。近江日吉神社の分靈とす。無格社なれど、境内に櫻樹多く、櫻花の名所として近郷に著はる。(善住寺) 大字玖珂にあり。曹洞宗。正法山と號し、天明四年岩國城主吉川豊功の發願の間に傳り、寺領四十石を附す。寺寶に後醍醐天皇の御數物、靈元天皇の勅筆等あり。

クカイガシマ

苦界島 江戸新吉原遊里の異稱。鬼界島と苦界島を合せもざりしもの。青樓日記「御當大江戸之北、有一箇島國、名而呼苦界島」

クカシヨ

九個莊村 大阪府河内國北河内郡の北部。大阪市旭區の東北界より東北約六軒を隔て、淀川の左岸に沿ひ、東北は友呂岐村に、東南は淀川の一支流屋川を界に豊野村・辰屋川村に、西南は庭窪村に隣る。面積六・八六方軒。土地平坦にして田畑多く拓く。米・麥・粟種等の農産の外、綿織物その他の工産少からず。京阪國道の當り大阪市方面への交通便利なり。九個莊は村制施行の際、池田・葛原・大和・神田・高柳・對馬江・黒原・仁和寺・熊野の舊九個村を合して名付けたる名稱とす。古くは和名抄、美田郡池田郷の地に、いま大字池田は郷名の名残りなるべし。池田首の

クガナワテ

久我繩手・久我暇 久我村(京都府乙訓郡)

族が和泉國池田郷より移住せる處といふも今詳ならず。恐らく池田は美田池に關聯ある地名ならん。美田池は本村大字池田及び友呂岐村大字平池・石津との間の低田その遺址なるべしと。皇極天皇の二年七・八・九の各月、池水異變ありて、十月清澄せしこと、日本書紀に見ゆ。又嘉祥元年九月、左中辨藤原嗣宗等を遣はして築かせし事あり。

クガミ

國上・久我躬 新潟縣越後國西蒲原郡の南西。北は彌彦村、東と東南は信濃川の支流西川を界として栗生津村・地蔵堂町に對し、南はほほ信濃川分水路により三島郡大河津村に、西南より西北は同郡寺泊町と界す。村の西南は彌彦山脈の南部の山地にして、その北部に國上山(三一三米)聳え、山上に眞言宗の互利國上寺あり。東半は越後平野の一部にて至るところ低平にして水田拓く。南隣大河津村に起る信濃川分水路は村の西南部を横ぎり寺泊町の北部にて日本海に注ぐ。米の産多し、また蕎麥を産出す。國道(北陸道)寺泊町より來りて西部山地の東麓を北に走り彌彦村へ入るの便あり、またこれより分岐する縣道は東南隣地蔵堂町に通じ交通不便ならず。古の事は詳にするを得ざるも嘉祥式に見ゆる伊弉比木村邊を指せしものならんといふ。國上は國神、即ち

し給ふといふ。近世寺領百石を有す。本尊阿彌陀如来は光明皇后の寄進に係る行基の作と傳ふ。西坂參道の途中に良寛の隠棲せし五合庵あり。
【國上山・久我躬山】彌彦火山群の一峯。長岡市の西北方二五軒、三條市の西方十數軒に位す。新潟縣西蒲原郡國上村に屬す。標高三一三米、山體は火山岩より成る。北麓は、主峯彌彦山(五八六米)に連り、南麓を新信濃川西北流す。東麓を寺泊町方面より彌彦村に通ずる道路走る。山上に國上寺あり。國上寺彌陀堂の後方總堂のもとに風洞あり。山中に歌僧良寛の隱棲せし五合庵あり。
クガワ 貢川 山梨縣中巨摩郡にありし村。昭和十二年甲府市に編入。村名は貢川と稱する清名より取る。

クキ

九鬼 中央本線大月驛の南方約四軒、猿橋の西南方四軒餘に當る一峯。山梨縣南都留郡米生村・盛里村と北都留郡猿橋町との境界に跨る。標高九七一米。西麓は北流する桂川に限られ、南麓は西流する桂川支流朝日川に流はる。北方はサツカ峠最高點を経て馬立山(七六二米)、大松山(六七五米)等に連る。山頂よりの眺望は比較的優れたり。登山路は西麓沼津往還の通ずる米生村より至るものと、東北方中央本線猿橋驛より猿橋町を経て達するの二路ありて、ともに登高容易。
【九鬼村】三重縣紀伊國北牟婁郡の東南

論。尾鷲灣の南方熊野灘に突出する半島の東面を占め西面の南半牟婁郡北輪内村と腹背をなす。東北端に九木浦突出し南のナサ崎との間に狭長の九木浦をなす。至る處山地にて山脚直に海に迫り、耕地少く米・蕎麥の産あるもの額云ふに足らず。水産に富み林産これに次ぐ。北隣尾鷲町本町へ汽船の便ある外、陸上の交通は不便なり。鰻漁の本場として知らるるも、近時は尾鷲にその地位を奪はるるの感なきを得ず。中世海賊を以て名高き九鬼氏の發祥地。初め熊野別當長快法印の裔、藥師丸、足利尊氏に仕へて此地に住し、貞長丸を稱す。文和年中、その裔隆良、志摩國波切に移る。曾孫泰隆、岩倉村内田城を領し、伊勢の國司北畠氏に屬し、二見七郷をも合せ領す。その孫嘉隆は織田氏・豊臣氏に屬し、征韓の役には舟軍の先鋒となりて功多し。慶長五年關ヶ原の役に嘉隆は西軍に屬し子守隆は東軍に従はしむ。守隆は功を以て二萬石を加へらる。同十九年向井將監と淡路に赴き、西國大名の五百石以上の兵船を収めて徳川氏に獻す。寛永十一年久隆、標津の三田城に移り、子孫相承けて明治維新に至る。此地はもと志摩國美濃郡に屬せしが、天正十年、紀伊國新宮城主堀内氏善に侵略せられ、長島・錦浦・尾鷲と共に水く牟婁郡に併合せらる。(九木浦) 大字九木浦字小名地に鎮座。祭神、菅原道眞・大同主命・少彦名命、外數神。もと

天満宮と稱す。始め九鬼隆信伊勢國佐倉に居住せしが、貞治年中家臣の謀叛にてこの地に逃れ營居す。これ九木浦九鬼家の祖といふ。永和年中九鬼隆治天満天神の加護を蒙り急難を免るを得しより、據城西北隅に一祠を建て弓箭を奉つて守護神と仰ぐ。これ本社創立の起原と傳ふ。江戸時代寛文二年九鬼忠房現地に社殿を造營して遷祀す。大正二年式年遷宮に依り社殿改造のことあり。例祭、七月二十五日。社地は九木浦に面し、突兀たる岩壁と蒼鬱たる古木は崇高なる神域に相應す。(九木神社樹叢) 指定天然記念物。九木浦に突出せる山嶺にあり。ホルトノキ・ミサチノキ・カンザアラウノキ・マキノ等暖地性樹種多く、樹下にはクサマカハチ・イハヒトア・ヌリトラノオ等の羊齒類發生す。附近の地方に見る能はざる珍奇の種類を産するによりて著る。

クキ

久喜 埼玉縣武藏國南埼玉郡の北部。古くは郡とも書く。東北より東は太田村、南は江面村、西北は清久村・鷲宮町に隣接す。面積僅に三・六三方軒。土地平坦、中部は臺地、その他は低地にて水田をなす。省線東北本線と社線東武鐵道の交叉點に當り、前者の久喜驛は明治十八年の開設に係り、これより東は幸手町(北葛城郡)、西は高浦町へ各バスの便ありて交通上の一要點をなす。農商工業行はれ、農産に

タニツカミにして、國神は地神、即ち土倉なりといふ。東麓には久我躬、曾我物語には九上と見ゆ。また越後名寄に「昔聖德太子、この山に登り、雲上記を製作あり、御手づから大慈悲を安置し給ひ、孝謙天皇の勅宣、國中上一とのたまふに、より國上と書く」と見ゆ。また袖中抄、一九一弘仁十三年壬寅、國分寺之尼法光建布施屋於古志郡波戸濱、施・樂田四十四餘町、置・波給二隻、令・往還人得・濟度之便」とある。波戸濱は大字波部の地とも西北隣寺泊町の地ならんといふ。その泊は延喜式の伊弉比戸と同じく即ち伊弉比の泊なり。源義經、北陸を経て奥州落の時、直江津より舟出して寺泊に上陸せしこと義經記に見ゆ。また袖中抄に國分とあるは伊上の誤にして、蓋し國上と同一ならん。北越後記に依れば、昔大宇中島に住せし彌三郎なるもの、母奇異の惡行を爲し、人を捕り食ひ蒲原郡の山野を横行したり。時に石濱青龍寺の僧、この老母を濟度すといふ。いま彌彦神社の境内の阿彌陀本尊の傍に据置く沙多羅天は此老母の木像なりと。(國上寺) 新義眞言宗豊山派。雲上山・雲高山・國上山と號し俗にがみ寺と稱す。和銅二年彌彦大神の神託に依り金地大徳の草創に係り當國第一の古刹と稱す。天平勝寶年間孝謙天皇の勅に依り諸堂造營せられ七堂伽藍整備す。往古聖德太子此地に登りて雲上記を製し、手づから大慈悲千手の像を安置

覺寺派。永安心と號し古河公方足利政氏... 覺寺派。永安心と號し古河公方足利政氏... 覺寺派。永安心と號し古河公方足利政氏...

峻なりしを以て親不知子不知の稱あり... 峻なりしを以て親不知子不知の稱あり... 峻なりしを以て親不知子不知の稱あり...

の瀧頭に注ぐ。河口沿岸には若松市・戸畑... 市・八幡市等の工業都市ありて樺太林立... 市・八幡市等の工業都市ありて樺太林立...

【葦】 駿河國(静岡縣)の歌枕。その地... 今評ならざるも、庵原郡藤山(山尾の... 今評ならざるも、庵原郡藤山(山尾の...

地にして最高所も二五米内外に過ぎず... その間牛久沼の兩段、中部並びに西南端... 地にして最高所も二五米内外に過ぎず...

【久木野村】 熊本縣肥後國阿蘇郡の南... 阿蘇南谷の西南端を占め、北は白... 阿蘇南谷の西南端を占め、北は白...

御所にして歴谷は蓋し下ノ御所ならん... といふ。歴谷には深さ六七丈の穴あり... 御所にして歴谷は蓋し下ノ御所ならん...

肥後縣栗野郡を連ぬる山野嶽(昭和... 十二年十二月)開通し、大字久木野に阿... 肥後縣栗野郡を連ぬる山野嶽(昭和...

クキノーククノ

傳へらる。これは村内に塚原の姓あるを以ての牽強附會の説ならんも、餘程古き墓にて其附近を汚すと謂あるとし、石碑を建てて祀り年一回祭典を行ふ。

クキノウミ 洞海

↓久喜宮村

クギミヤ 久喜宮村

名、和名抄球磨郡に球磨郷あり、その地名、一説に球磨は球麻にして、延喜兵部省式に肥後國球磨郡馬五正とあるは此地にして、郡家此處にあり。譯傳を兼ねしものなりといふ。

ククイ 來食池

出雲風土記の神門郡の條に見ゆる池。和名抄神門郡古志郡の地、即ち今の益川郡古志村及び布智村邊の池なるべし。出雲風土記・神門郡・來食池、周一里一四十四歩、有、粟。

ククイ 郡々

但馬國(兵庫縣) 城崎郡の古地名。延喜式兵部省式に縣名見え、騎馬八疋とあり。神祇志料にこれに式内久々比神社は但馬國城崎郡三江村大字下宮にありといふ。さすれば郡々譯の地は比附近に求むべく、丹後國に通ずる今の河梨峠の南麓にあたる同村の大字馬路の邊に其詳址を擬すべきか。

クグイド 鶴戸沼

茨城縣猿島郡の南部にある沼。七重村・岩舟町・中川村・長須村・善戸村に亘り、一に長須沼ともいふ。南北約五軒、形狀あたらかも鹿の如し。蓋し利根水の水溜りせしものなりといふ。

ククシ 久々子

福井縣三方郡西郷村の大字。海水浴場を以て知らる。地は久々子湖の東方若狭灣の外海に面する一帯の砂濱なり。濱は東方の松原を経て其川口に至る間約二・五軒横き、砂は清く水は澄く風光また明媚にして海水浴場として好適なり。鐵道開通後は殊に著名となる。

クク子 福井縣三方郡西郷村の大字

【久々子湖】福井縣三方郡の西北部にある湖。面積は一・四五平方軒、湖岸線七・七軒、深度は二・五米。この二・五米の等深線は南北二部に分け各々湖の長軸に沿つて南北に延ぶ。この等深線の南北二部に分れたるは東岸の中部に注ぐ金山川神積物のためなり。水月湖の水が浦見川により、本湖に入り、ついで日本海に注ぐ。鹹水湖にして水温は冬季は四度、夏季は三〇度以上に達す。此湖はもと今の金山川の流域に當り、東方に横がり、東耳川の日より西の久々子觀音の山に至る松原の砂丘に圍まれたる大なる潟湖たりしが、次第に埋没せられ、いまは僅にその西方に偏して水月湖の餘水を受くる水道の膨脹部として存せり。湖中、銀、錳を産す。

ククク 菊多(國)

國造本紀に見ゆる陸奥の國名。應神天皇の朝建許呂命の子屋主刀爾を國造に定め給ふとあり。大化改新の際國を停めて常陸國の多珂郡に併せられし、元正天皇の養老二年に至り多珂郡を割きて菊多郡を置き石城國に屬せしむ。乃ち今の磐城國(福島縣)の東南部に當る。※菊多(郡)

ククチ 久久知

兵庫縣川邊郡小田村の大字。元弘三年三月赤松則村勤王の軍を起しし時、此地に陣し六波羅勢と戦ひてこれを破り京都へ攻上る。

ククチ 鞠智城

續紀文武天皇の二年紀に大率府に命じて大野・基肆・鞠智三城を繕治せしむとあり。鞠智城は後の菊池城なるべく其築造の時期亦明かならざれども、恐らくは天智天皇の頃なるべし。文德實錄天安二年の條に肥後國菊池郡城院の兵庫自鳴云々とあり。城院とは蓋し鞠智城の倉院なるべく、而かも其遺址は今明かならず。或は熊本縣菊池郡限府町の東方に位する河原村の大字木庭の城山ならんといふ。

ククツ 來履

書記安用天皇の二年備後國に置かれし屯倉の一。その地未だ詳ならず。或は岡山縣備中國後月郡の出郡村の地名の九履を以て來履の遺稱の轉訛ならんといふ。後世の研究を俟つ。

ククノ 久々野村

岐阜縣飛騨國大野郡の南部。高山市の東南隣にて、西北は宮村に接し、東は益田郡朝日村に、南は同じく小坂町に界す。廣く處にて東西は一三軒を越え南北は一四軒に達し、面積一〇七方軒餘を占む。東境には日ノ観岳(一一〇六米)・黒手山(一一三二五米)・

六郎洞山(一四七九米)等、境には洞山西(一〇八九米)・船山(一四八〇米)等の諸峯北より南に連り至る處に山地をなす。益田川の上流村の中部を北より南に貫流し、その川筋に沿ひて幅狭き低地あり。農林業を主とし前者に米・蕎麥、後者に木炭・木材の産あり、畜産また少からず。益田街道は益田川に沿ひて北上し、村の略中央部なる無數河部落にて河道と駘れ、西北地上の宮崎を越えて西隣宮村の一ノ宮部落を経て高山市に達し路上バスを通ず。省線高山本線またこの街道と並行し諸・久々野の二詳、昭和九年(一九三〇)を設け近來、交通の便大いに良好となれり。本村は和名抄、益田郡秋野郷のうちなりといひ、また斐太後風土記によれば大野郡大原郷の内なりといふ。近世は大野郡久々野郷(宮・山梨・久々野・無數河・山之國の五大字これに屬す)・河内郷(引下・小坊・本願寺・長後・清・有造・阿多船の大字これに屬す)に分れし、明治三十二年久々野・河内組合村を廢し、本村を置く。歌枕の名所として知られし位山は本村にあり。大字宮は此地。一宮水無神社舊座の地なれば宮と稱せり。飛騨志によれば此地に往古廣橋大納言の居りしといふ白邊城ありきと。また一に本郡鶴山の城主、鶴山豊後守安室の父、平野右衛門尉が此地に居りきと。大字山梨は山梨の木が此地によく生ぜしより山梨の名生ぜりと。大字久々野は此地の久々野八幡神社

たどり着くといふとあるは非なるべし。 【菊麻】國造本紀に見ゆる國名。成務天皇の朝元正天皇(武烈)國造祖久毛比命の子大鹿國直を國造に定め給ふ。のち國郡制定の時國を停めて市原郡とし、之を上總國に屬せられしものと思はる。和名抄に市原郡の郷名菊麻あり。これ國名の遺稱とす。 【菊池】上總國(千葉縣)の古地名。和名抄、市原郡菊池郷あり、久々萬と訓す。諸本は菊を誤つて葉に作るも高山寺本及び舊事本紀によりて正す。郷城はいまの市原郡菊間村及び千葉縣生濱町・椎名村の地なるべし。

クグミヤ 久喜宮村

福岡縣筑前國朝倉郡の東南部。筑後川(千歲川)中流の北岸に沿ひて東は杷木村、西は志波村に隣接し、南は川を挟みて浮羽郡大石村に對す。面積七方軒餘。北境上に時つ米山(五九一米)の山脚南方に延び村の北半は山地なるも、南半は次第に平かとなり、川の北岸は平坦にて耕地よく拓く。米・蕎麥等の主産物の外に葉煙草の特産あり。甘木町より日田町(大分縣日田郡)への街道に當りバス便あり、また隣村杷木・志波兩村には社線朝倉軌道の驛ありて交通はさのみ不便ならず。この地古くは、和名抄、上座郡杷木郷の内に屬す。村名の起源は詳ならずも、昔、久喜宮山神社といふ神社ありしに起因すといふ。明

ククメジ 久久目路

京都府東山區にある汁谷(瀧谷)邊の古名。一に苦集滅道に作る。東山の一峰香羽山・阿彌陀峰との間、山科へ通ずる道路ここに照る。

ククリ 久々利村

岐阜縣美濃國可兒郡の中部。御器町・中村の南隣、平牧村及び土岐郡多治見町の北に接す。東と南の境には三百米臺の山地あるも、その他は概して平坦なる高臺狀の地にて西部

には低地ありて耕地拓く。農家の兼行はれて米・蕎麥を産す。御器より多治見に至るバスの便あり。此地は和名抄、可兒郡大井郷の内なるべく、もと泳・國直に作り、後宇多院御領日録には久久利庄とあり。清和源氏、土岐氏の族此地に居り久々利氏を稱す。また幕末の醫者にして國學者・掌櫃の士たる西山謙之助(贈正五位)は本村の出身者なり。村内に景行天皇沐浴宮址・八坂入彦命御墓・久々利城址・岡本山横穴古墳等の名所舊蹟多し。【久々利村さくらみさう自生地】指定天然記念物。珍奇なる腐生植物、本邦中土の一小局部のみに發生す。(八坂入彦命御墓)字大萱にあり。明治街道をば約一軒餘も山間に入りたる所なり。八坂入彦命は崇神天皇の皇子にて御母は尾張連の祖大海(又八坂振天某邊)。この地風く尾張との交通あり、御母の縁にて當地經營の任を以て此地に御住居ありたれば、景行天皇の行幸もあり、八坂入彦の入内もありたるものなり。皇子薨去の後御墓を營み奉りて千八百餘年、里俗に皇子塚として残りしが、明治二年以後有志御墓を修め、同八年十二月公建あり、墓家を置きて管し、兆域を定めて木柵を繞らし同十一年二月宮内省の管理に屬せり。同十三年六月明治天皇下街道御通祭の際勅使奉幣の儀あり。大正三年更に兆域を修め石玉垣・大鳥居等成る。周圍一一八米内廓六〇米あり。(景行天皇沐浴宮址)字

ククマ 一 ククリ

三三四

三三四

御殿の地にあり、今俗に御殿様と云ふ。
景行天皇の即位の四年春二月、當國に行幸あり、この地泳宮に駐り給ひ八坂入彦命の女八坂入媛を納れ、冬十一月還幸あらせたまへり。今なほ天皇の御魚を放ちたまひしと云ふ池の址も僅に残り。宮址に石を建て萬葉集泳宮の歌を刻せり。これに隣れる大木の樹下に立石あり。夫木集の「たのめたたくりの池に住むとさくこひこそ道のしるべとはなれ」の歌を刻せり。今久々利古蹟保存會にて一區を劃し樹木泉石を配し新に池を掘りなどして風致を添へ、周圍に石橋を繞らして高北の、八十一間の宮に、日向ひに行きなむ宮をありとよきとて、吾が通道の於吉野山、美濃の山、藤と、人は踏めども、かく依れと、人は衝げども心無き山の、於吉野山、美濃の山、日本書紀、景行天皇四年二月、天皇幸美濃、左右奏言之、扶國有佳人、曰、弟媛、容姿端正、八坂入彦皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸、弟媛之家、弟媛聞、乘輿車駕、則隨、竹林、於是天皇權令、弟媛至、而居、于泳宮、此云、區、或、利、利、池、魚、浮、池、朝、夕、臨、觀、而、遊、時、弟、媛、欲、見、其、鮮、魚、遊、而、寄、來、臨、池、(久、利、城)大宇、藥師堂の城山に址あり。土岐親清の孫久々利太郎行春の初めに城く所なり。久々利氏は代、五郎、參河守を通稱す。天文年中書藤三郎を拜領する

頃、兼山城に奇正正義、崛起して優勢なり。第五代悪五郎、同十七年二月正義を誘殺せしが天正十一年に至り義長可に滅され城廢せり。關ヶ原役後徳川家康、千村平右衛門等木曾衆に此地の食邑を與へて久々利に館居せしめたる邸址は別に存せり。(岡本山横穴古墳)岡村の淺間山より西方に連亘して、久々利・平牧兩村の北境をなせる丘陵は、土俗サバと稱する。薩灰岩より成り、軟質にして掘鑿し易し。久々利の岡本山の南面山腹に一〇米餘つゝ隔てて十數箇の横穴あり、俚俗塚穴といふ。その入口高さ約二米幅約二乃至三米にして奥行約二米より四米に及ぶ。窟内は六疊敷又は八疊敷程の廣さあり。その西方平牧村分にも存在し、曾ては總數約百餘を數ふといふ。何れも上古の墳墓の址なり。サバは肥料となるが故に次第に掘り崩さるるは惜しむべし。

【久下村】 埼玉縣武蔵國大里郡の東南部。熊谷市の東南に近く荒川に沿ひ狭小なる地域を占め、面積僅に四・八三平方軒。西南は市田村に、東北は佐谷田村及び北埼玉郡太井村に、東南は北足立郡吹上町に接す。土地概ね平坦にして畑地多し。田圃に次ぎ、藪の産を第一にして畑地多し。中仙道東南より西北に貫き、バスを通じて交通便利なり。本村は和名抄、大里郡那家郷の地に於て村名は那家の部訛か。武蔵私市黨の一味、中世此地にて地名を負うて久下氏を稱す。本姓藤原氏、道隆流より出づと稱す。久下權守直光が此地に住せしこと諸書に見ゆ、權守直光とは熊谷直實が嫡母夫なり、直實は嘗て平親盛の家人となりし故を以て直光と稱を生じ、直實源家に歸參の後も互に不和の間柄なりき。これ建久三年の事にして丹波志によれば後程なく當所を去りしもの如く、丹波に子孫相傳いて居住せりと。また源平盛衰記、平家物語に久下次郎と云ふ久下三郎、久下源内等見えたるは直光の一族なるべし。

【久下田町】 栃木縣下野國芳賀郡の西南部。眞岡町の西南方、約一〇軒。西は長沼村、北は中村、東は物部村に接し、南は茨城縣直隸郡河間、中の二村に隣る。町の中部は南北に延ぶる低き臺地をなし、その東は土地平低、五行川は東部を南に流れ、鬼怒川の分流はまた西南部を南流し水田廣く拓けたる産多く、農産も出す。省線眞岡線南北に通じて大字谷田具に久下田驛(明治四十五年設置)を置き、道路また鐵道と略同方向に走り南は下館町(茨城縣眞隸郡)、北は眞岡町方面へバスを通じて交通便利なり。此地は長沼庄内の一邑にして、町名久下田は舊城名、または郷名に呼ばれたり。天文年中結城の被官水谷正村入道頼龍(伊佐下館の城主)長沼庄・中村庄を略あり、更に國寶たり。

に大字谷田具の地に城きて久下田と號せしむといふ。久下田とは蓋し水谷氏の別號なりと。結城家越前へ移封の後も水谷左京大夫勝俊(伊勢守ともいひ、村松の弟にて家を繼ぐ)伊佐・長沼・中村の三庄を安堵せしが、寛永十六年備中國松山へ移封さる。芳賀系國に八木同祖後守高房の後孫は世々、同郡八十岡郷に在りしが、天文十四年九月伊藤貞家の時に下館の城主水谷出羽入道頼龍と久下田郷石島原にて合戦して討死せる由見ゆ。石島原とは蓋し今の大字石島の地とす。いま谷田具・長島・程島・地・下大會・石島・大根田・阿部品の八大字よりなり、谷田具に役場を置く。

クケマチ 公家町 一に公屋御殿とめとして、室町時代以後の皇居・仙洞を初めとして、諸公卿の邸宅のありし一廓にして、明治二年東野東幸の後、建物の大部分を御取替になり其址を芝伏せとし、花卉樹木を植ゑ道路を整理し四圍に土塹を築き以て今日の形をなし名づけて御苑内といふ。地は京都市上京區の東南部にあり、北は今出川通、東は梨木通及び寺町通、南は九太町通、西は鳥丸通によりて圍まる。御苑内に安政年間御造營の御所の一廓を中心として、東南に大宮御所並に仙洞御所址を含む一廓あり。北は桂宮御殿の一部、明治天皇御生誕の地たる舊中山邸址を存する外、宗像神社・白雲神社・内匠寮出張所並に附屬の建物を除き今は全部整理せらる。御所の周圍には皇族公卿の邸宅並び立ち、九門を置き、廓外に通ず。九門とは南面の略々中央にある堺町御門を正面とし東面には南より寺町御門・清和院御門・石藥師御門の三門、北面には今出川御門、西面には北より乾御門・中立賣御門・蛤御門へ正しくは新在家御門、下立賣御門の四門あり、此等の諸門は多少異動して現在の位置に移されしものなり。公卿の邸宅は一々其址を示す煩を避け舊宮家・五攝家の邸址のみ舉ぐるに止めん。先づ伏見宮邸は北面今出川御門外の東にあり、有栖川宮家は御所

の東南大宮御所前前にありて東面し、田院宮邸は御苑の西南隅にあり、今其址に内匠寮出張所あり。中川宮邸も後の久通宮邸は下立賣御門内の北側、桂宮邸は今出川御門内東側にあり。五攝家の近衛邸は桂宮の西にして乾御門内の東北にあり、鷹司邸は堺町御門内にありて西面し、九條邸はこれに相對して其西に東面し、一條邸は乾御門内の南側に於て東面し、二條邸は伏見宮邸の東にありて桂宮の東北に當れり。この内九條邸址と近衛邸址とは其範圍の一部を保存す。五攝家の外清華(華族)以下の公卿約百三十家の邸宅此内外に並びし、一部は東京に移住し、一部は御苑の附近にあり。中には江戸時代の公家邸の外觀を窺ふことを得るものあり。

クケン 九軒 九軒町(大阪市)に同じ。
クケン 駒峴統 朝鮮黄海道黃州郡黒橋・黃州地方に分布する地層。上部原生代層に屬し、主として黒色頁岩より成り、下部カンブリア系とはその不整合面の上下の地層が略平行する層位を示し、謂はゆる非整合に被覆さる。基底は未だ詳ならず。
クケンマチ 九軒町 大阪市西區新町遊廓の町名。中央區葦原町の北方に當る短き町、佐波屋町と通ず、單に略して九軒ともいふ。昔大なる娯屋が九軒ありしより起りし名稱。現今新町北通り二丁目に當る。傾城色三味線・大阪巻・九軒町あげやの分、一あげや、紙屋おまん、一同、川口屋彦市、一同、さかいや市左衛門、一同、井筒屋太郎右衛門、一同、京屋淨清、一同吉田喜左衛門、一同住吉屋榮三、一同、山口屋勘兵衛、一同、住吉屋四郎右衛門、夕霧阿波鳴渡・上一年の内に春は來にけり、一白に薔花開く餅つきの、にぎにぎはしや九軒町、嘉例の日取よし田屋の、傾城色三味線・大阪巻「九軒の住吉やには、八疊、江口、みやまぢ、小藤、浮舟、小太夫、名高き太夫職、かれこれ六人」流麗出世蓮徳・上「今宵九軒の井筒屋の客は何處衆の何とした人、またここに遊んでか」壽の門松・上「筑波根の時より落つる蓮の白玉、一二三四、五六七八、九軒の町に羽交す、此翼の羽子板木櫃子も、磨き入れては色に成る、戀の二葉の充松、枝と枝とを遺羽子も、三四いつも米長に」
クコ 供御瀬 滋賀縣近江國栗太郡下田上村黒津より滋賀郡石山町南郷に越ゆる勢多川の浅沙地なり。供御又買御にも作る。水魚の供所なるに因りて其名あり。此地水石の奇勝と江山の要害なるを以て古來著名なり。古繪圖に依れば廣き

二町とあり。雲を掲げて御るを得べし。されば古へより戦略上の要地となりしこと一再ならず。元暦元年正月木曾義仲の軍、勢多を支へしを以て稻毛入道に謀りて頼朝方の軍この瀬を渉り粟津に向ふ。のち承久の役にも鎌倉の軍この瀬を越え京都に攻め入れること東鑑に見ゆ。徳川の世となりても特にこの地を軍事上の要地に數へたりといふ。

クサ 久佐

【久佐】鳥根郡那賀郡にありし村。大正十二年美又村及び伊南村大字佐野・宇津井とともに今福村を置く。【久佐】石見國(鳥根郡)の古地名。和名抄、那賀郡に久佐郷あり。高山寺本にはこの郷なし。和名抄は瀬を隔くも玖沙と讀むものなるべし。其地今の那賀郡今福村・波佐村・今市村の邊に當り、今福村大字久佐はその遺稱なるべし。

クサ 草川

山城國(京都府)の歌枕。愛宕郡の内なりといふも詳かならず。夫木・二四「夕すすみかへるさやすむますらをのかりてすすげる草かはの水 衣笠内大臣」島 南洋雜考

ナへ支應管内の一島。専ら草井島につくる。東カロン群島の最東端にあり、サナ島を隔る三〇〇哩。面積一六六平方軒、玄武岩より成るも、開析著しく過み珊瑚礁の基底をなす。椰子樹の栽培行はる。内地・群島間東廻線汽船の航路に當り、年六回の寄港あり。人口一二七八人。

クサイ 草井村

愛知縣尾張國の東北に隣り、東海に濱し。淺井町の南に隣り、北は木曾川を隔てて岐阜縣稲葉郡前宮村に相對す。土地低平、木曾川の沖積土の堆積地にして地味肥沃、桑園よく拓げ米・麥・蕎麥を産し生糸・織物も行はる。大山町(丹羽郡)より名古屋に至る縣道村の東南部を貫通し、西方笠松町(羽島郡)に至る街道これより分れ木曾川沿ひに走り、街道は堤防上を過す。此地は和名抄、粟栗郡村國郷の地にして、明治二十八年小草井村の大字草井村を分ちて獨立村となし、餘の大字小帆村・鹿子島村を以て小鹿村と改めしが、明治三十九年に至り小鹿村・草井村・久野村の三村を廢しその區域を以て新に草井村を置く。大字村久野は村國郷の遺稱なるべく尾張名所圖會によれば和名抄の村國郷は後の村久野庄なるべく、曆應元年十一月の沙彌淨阿より當國目代に與へし書狀に村久野とあり、村雲とも書けるものありと見ゆ。また大字草井には往時致尾なる

クサエモン 九左衛門

宮崎縣延岡市の西方約二八軒にある。峠路は東白北郷村と西白北郷岩井川村・諸塚村との境界線尾根筋を氣狀に巡り走る。最高點約一〇〇〇米。最高點の西北後に標高約一〇八〇米の山あり。

クサオ 草生村

三重縣伊勢國安濃郡の中郡。津市の北方約六軒に位置し、北と東は明合村、東南は村主村、西南は辰水村に隣る。面積約一平方軒、西境に布引山塊の一峰經ヶ峰(八二〇米)あり、村の西半はその東斜面にて山地をなし東半は極めて緩傾斜をなす平地地となり田畑よく拓く。米・蕎麥等の農産、

薪炭・木材等の林産を出す。古くは和名抄、安濃郡村主郷のうちなるべし。中世長野氏の一族に草生氏あり、此地の出なるか。もと草谷にも作りしといふ。

クサカ 孔舎衛

【孔舎衛村】大阪府河内國中河内郡の東北隅。布施市の東、大戸村の北に隣り、北は北河内郡四條村、東は奈良縣生駒郡生駒町に界す。面積僅に三・九方軒の小村にて、東半は生駒山の西斜面にて急に傾斜する山地、西半は河内平野の一部にて低平、田畑よく拓げ米・麥等の農産を出し、またメリヤス・織造等の工業あり。東高野街道南北に通じ、布施市・大阪市への交通の便よし。もと日根市村と云ひしが明治四十五年改稱。古の草香邑の一部にして、大字日下は其名稱の名残なるべし。生駒山の北尾を草香山と稱す、孔舎衛村大字善徳寺より登路あり、古の孔舎衛坂は即ち此處にして、一に直感(晴峠)とも稱ふ、神武天皇の長體彦と戦ひ給へる處にして皇兄五瀬命御負傷の地なり。始め神武天皇御東征あらせられ、難波の崎に至れば潮急にして浪疾し。因りて浪濤國と呼び給ふ。一帶の秀嶺遠く東に聳ゆるは生駒山、目指す徳國は山の彼方であり。當時、河海沼湖相連りて波浪裡に山下を浸す。天皇御身を遊めて草香邑に連し給ふ。皇師ここに留まること三旬、更に兵を勸へ、軍を整へ四月九日を以て龍田を越え給はんとす。山險にして

路窄く軍旅並び行くこと難はざるに依りて、師を渡へして更に草香の方より進ませ給ふ。登美の酋長は長體彦と云ひて武勇を以て著はる。初め難波日命の天劍船に乗じて河内國河上峰に降り給ふや、長體彦、配するに妹御炊屋姫を以てし、可美眞手命を生む。乃ちこれを奉じて主と爲し、兵を發して附近を攻略せんとす。今や皇師の近き來り臨むを聞き「天神の御子、此處に來ますば、我國を奪ひ給はんが爲めのみ、寧ろ我が身を以て亡國を待つべき」と歎言し、衆を盡し兵を率りてこれを孔舎衛坂に防ぐ。天皇、乃ち御旗を掲げてこれを討ち給ふ。長體彦險を扼し隘を塞ぎ矢石を飛ばして拒ぎ戦ふ。天皇師を督し衆を勵まして、押寄せ攻め寄せ給ふ。激戦數刻に及べども賊兵少しも屈せず。皇兄五瀬命、會々流矢に中りて御旗を傷つけ給ふ。御旗甚だ重し。ときに敵は東に在り、御方は西に在り、天皇忽然として思はせ給ふ。敵は、日神の子孫なるに、日に向ひて、旗を征めしことこそ、誤りなれ、若かじ、兵を退けて、弱きを示し、更に日を負うて、賊を討たんにば」とて遠く迂回して賊の背後を衝き給はんとす。衆皆これを贊すれば、天皇「然らば、停まれ、復た進むこと勿れ」と令して遂かに軍を返へし給ふ。賊亦敢て進らず。天皇還りて草香津に到り盾を植て、賊聲を發し給ふこと三たび、因りて其地を盾津と名づく。のち

クサカ クサカ

説して草津といふ。また此地草香江といふ。直越より草香江を渡れる津なるべし、即直津の謂ならん。賊は戦捷ちて意滿ち心驕り復た意を加へず。此時、天皇の鬼謀神算、大迂回に迂回して其の背面を脅かし給ふ。草香邑は生駒山下の地なるに、神武天皇の遺徳より、直ちに其地に就し給へることは記記の共に記する所なり。當時の地勢と諸案以上の變化ありしこと察するに足る。仁徳天皇の御時代には山城川(今の淀川)は今の大阪城東より郊南を繞りて西海に注ぎ、河内川(今の大和川)は、東南より來りてこれに合流したるものにして、二水衝突の結果は流勢緩慢を來し、滿潮若くは霖雨の時は河水氾濫し、一大湖面を現出したるもの如し。されば神武天皇の御時代にも、今の河内は河海相連りて遠く生駒山下に近き地點までも舟楫の便ありし所なるべし。思ふに難波津はこの大和・河内兩川の海に注げる處を稱するものにて、神武天皇の御時代には少なくも今の西區小橋町・味原町の邊りまで難波江變入し居りたるものと思はる。因邊福麻呂(聖武天皇の御世の歌人)の味原宮を詠じたる長歌の中に「濱邊を近み 朝はぶる 浪の音さむが夕なぎに 櫻合の聲 聆ゆ」とあり、反歌に「あり通ふ難波の宮は海近み海童女らが乗れる船見ゆ」とあり。味原宮とは味原にありし聖武天皇の皇居なり。其浪の音の騒ぎ櫻の聲の聞ゆるのみ

ならず、海士の乗れる船の見ゆるといふを見れば味原は當時海邊の地にはあらざるも、海岸に程遠からぬ地なりしことを知らる。聖朝原金村も亦同時代の人なり。其味原宮に於て詠じたる歌中にも「客のやどりに梶の音聞ゆ」との句あり。此の如く神代には海岸に接したる味原も、次第に海岸に遠ざかる。これ河中より断えず吐き出されたる土砂の作用に據るものにして、上古、この難波江に注入せる河川のありしこと疑ひなかるべし。單に河内川のみならず、山城川も亦この難波江に注入せしものならん。仁徳天皇の御時代は、神武天皇の御時を距たること一千年、此兩川より吐出する土砂、次第に海面を埋め、既に今の南區難波新地の邊にまで及ぶものならん。然るに同天皇の十三年、北河は北に流して、南水のみを南に留め給はれたれば、爾來土砂の吐出量著しく減少せるもの如く、其れより三四百年後なる兒麻呂、福麻呂の時代に多少の變化こそあれ、驚くべき變化なかりしものと思はる。是等の事實に據りて推考するに、神武天皇の御時代までは、海水深く小橋・味原の邊まで變入して難波江を形づくりに、山城・河内の二川此處に注入せしなり。天皇、乃ち難波江より河内川に入り給ひ、これに聯絡する河川、即ち日下川などを利用して生駒山近くまで航行せ給へるものならん。河内川を和泉國堺浦の北に疏通したるは寶永元

年にして、今より二百五十年前の事なり。是れも長津を以て鳴れる堺浦も、爾來海底次第に埋却して、大船互船に堪へざるに至れり。此事を見て河内川・山城川の如何に難波江の變化に關係深きかを知るべきなり。また此地は仁徳天皇の御子大草香皇子、御妹橘姫皇女とともに住ませ給へる所なり。日本書紀・神武天皇即位前紀「戊午年春二月丁酉朔丁未、皇師東遷、船繼相接、方到難波之崎、會有奔潮、太急、因以名爲浪濤國、亦曰浪濤、今謂難波也(此、此云浪濤奈摩處)三月丁卯朔丙子、週流而上、徑至河内國草香邑吉雲白眉之津、夏四月丙申朔甲辰、皇師勅、兵步趨龍田、而其路狹隘、人不並行、乃更更欲東進、龍田山而入。中洲、時長體彦聞之曰、夫天神子等所以來者必將奪我國、則盡起屬兵、徵之於孔舎衛坂、與之會戰、有流矢中五瀬命歎曰、皇師不能進、我皇愛之、乃還神策於神日、今我是日神子孫、尚向日征、勝此進天道也、不若退還示弱、禮祭神祇、背負日神之威、隱影匿跡、如此則曾不血刃、勝必自敗矣、食日、於是令軍中曰、且停、勿復進、乃引軍還、唐亦不敢進、却還。草香津、植盾而爲障、爲、(兼波、此云鳥多爲障)因改號其津曰盾津、今云草香津也、初孔舎衛之戰、有人險於大樹、而得免難、仍指其樹曰、思如母、時人因號其地曰母木邑、今云

クサカ

低開奇也、五月丙寅朔癸酉、軍至。茅山山城水門、(赤名山井水門、茅山、此云智怒)時五瀬命矢箭精其、乃德劍而...

クサカ 日下

【日下村】鳥取縣伯耆國東伯耆郡の東北に在り、西は石見川を隔てて上北條村に對し、東は花見村、南は西郷村に隣る。面積五・〇四平方町。東境に一、二百米を...

例祭、十月九日。(波佐波神社)指定天然記念物。四千三百餘坪、椎の純林より成り、目通幹圍六米に達するものあり。樹上にはフウラン、テイカカズラ等...

神等旺盛なるも、其松はやや衰ふ。また何時の頃よりか根元に小祠あり、縁結びの神として賽客絶えず。祠は石製にて長曾我部元親の建立との傳説あり。

【孔舎新坂】鳥取縣西伯耆郡の東北に在り、西は石見川を隔てて上北條村に對し、東は花見村、南は西郷村に隣る。面積五・〇四平方町。東境に一、二百米を...

クサカ

クサカ 草香

【草香江】神武天皇御東征の時難波より流を奔りて進み給ひし入江。其後地形變遷して陸地となる。大體今の大阪府中河内郡北部の平地に當る。併し神武天皇御上陸點白眉ノ津を以て今日の枚方に擬定せんとせば草香江の北方の境界は更に北に至り北河内郡を含めるものとなる。萬葉・四「草香江の入江に求食る鹿鶴のあななつたつし友無しにして、大納言大伴...

クサカ

【クサカノタカツ】日下之高津池。垂仁天皇の作られし池。垂仁紀の高石池と同じかるべし。高石は今の大阪府東北郡高石町の地。記・中「故大帯日子彦斯呂和氣命者、治天下也、次印色之入日子命者、作血沼池、又作狭山池、又作日下之高津池。」

クサカノタゴエ

【クサカノタゴエ】日下之直越道。日下の山越をいふ。この山越は生駒山の暗峠を越え草香山を経て今の大阪府北河内郡孔舎新村に出づるもの、即ち大和より難波への直越道なる故直越道といふ。

クサカ

【クサカ】下總國(千葉縣)の古地名。和名抄、阪東郡に日部郷あり、調を聞くも和名國日部郷の例によりクサカと讀むべし。其地今詳かならざるも、香取郡に入り、山倉村の邊に當る。一に府馬町・神代村・中和村等の地に當るともいふ。【日部】尾張國(愛知縣)の古地名。和名抄、愛知郡に日部郷あり、其地今詳かならざるも、仙臺萬葉抄所引尾張國風土記に「同國愛智郡福興寺、俗名三宅寺、南去郡家、九里十四步、在日下部郷伊福村、平城宮御宇天智國押開豐稔命天皇神龜元年、主政外從七位下三宅連藤原所奉造也」とあるにより、今の名古屋市の西北、その郷城なるべし。【日部】尾張國(愛知縣)の古地名。和名抄、中島郡に日部郷あり、諸本日野郷に作るも高山寺本によりて訂す。其地今の中島郡大里村・朝日村の邊に當り、神鳳抄に尾張國草部郡とあるは此地にして近世草部保と稱せらる。妙興寺の文和三年の文書に「寄進報恩寺、尾張國中島郡草部保内田島等事」。【日部】因幡國(鳥取縣)の古地名。和名抄、知頭郡に日部郷あり、調を聞くも、久佐加倍と讀むものならん、後に至りて草部保となる。保名は文安年中の記録に見え、保内に清清水名田あり。専ら山形

郷と稱する地域に當り、今の八頭郡智頭町の大字山形地にある毛谷の川を隔てたる小地名坂清水はその遺稱なるべし。其地今の智頭町山形及び山形村の邊に當る。而して毛谷の某家所藏の文安年中記録に「因幡國知頭郡草部保内酒清水名田之事、云々」とあり。

【日下】因幡國(鳥取縣)の古地名。和名抄、八上郡に日下郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。即ち日下部を修せしものなるべし。國造本紀に成務帝、彦坐命(日下部氏の祖)の子彦多都彦命を稻葉國造と爲すと見え、此地は其族の居せし所にして郷名之より出づ。八頭郡安部村の大字日下部は蓋しその遺稱なるべし。大字日下部の高平城に居りし田公氏は代々守護代にして國造の裔なりと、其地、今の八頭郡安部・牟・大御門三村の邊に當る。

【日下】伯耆國(取島縣)の古地名。↓日下村。【日下】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、上道郡に日下郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

クサカへ 草部

【草部】備前國の莊名。莊名は池田・尾美兩莊と共に永祿九年の記に見ゆ。今皆讚岐國(香川縣)に屬し、其地今の小豆郡草壁町に當る。備前郷莊記に小豆島郡尾美莊・草部莊・池田莊・肥戸莊と見え。【草部村】備前國備後國阿蘇郡の東南部。高森町・色見村の東南に接し、西南に柏村、東北に野尻村に隣り、東南に宮崎町西白井村田原町と界す。面積約五七平方軒。東境には祖母山の西方に位する約一キロの山地あり、西境は阿蘇火山外輪山の東部に最高處は又略一キロあり東方に傾斜す。村内到處草原・山地にして中部・東部の小低地に畑地・田地の發達せるありて米・玉蜀黍・大豆等を産し、又紫煙草を出す。高森町より東北は竹田町(大分縣直入郡)へ、東南は延岡市(宮崎縣)方面へ向ふ縣道、村の南北を横ざり、いづれもバスの便あり。此地古くは和名抄、阿蘇郡知保郷の内に屬す。

【草壁】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、小田郡に草壁郷あり、久佐加倍と訓す。筑前・筑後の草壁郷と同じく日下部を修せしものなるべし。後に莊となる。

【草壁】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

クサカへ 草部

【草部】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

【草壁】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、小田郡に草壁郷あり、久佐加倍と訓す。筑前・筑後の草壁郷と同じく日下部を修せしものなるべし。後に莊となる。

【草壁】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

クサカへ 草部

【草部】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

【草壁】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、小田郡に草壁郷あり、久佐加倍と訓す。筑前・筑後の草壁郷と同じく日下部を修せしものなるべし。後に莊となる。

【草壁】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

【草部】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

クサカへ 草部

【草部】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

クサカへ 草部

【草部】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

クサカへ 草部

【草部】備前國(岡山縣)の古地名。和名抄、山門郡に草壁郷あり、訓を問くも、伯耆の日下郷の例によれば、久佐加倍と讀むものならん。當陸の日下郷、和泉・尾張・下總・因幡等の日下郷と同じく日下部を修せしものなるべし。大日下王の部曲の居せし所。其地、今の上道郡浮田村・玉井村の邊に當り、浮田村大字草部はその遺稱なるべし。

東東の五つ、小弓ひかする所十軒あり、酒のみで酔遊ぶべき家七八軒、湯は七所あり、中にもすぐれて見ゆるは、湯の湯なり、薬師堂に仁王門、本堂、鐘堂、釋迦堂あり、山のそびらをそひて北西三町ばかり行かば金毘羅あり、見わたらし、鬼の家、鬼の住居場、旅行には白根の麓なりとぞ云々、以て山中繁昌のさまを羨すべし。天正十八年、前田利家來り、諸侯よりの見舞狀無數なりしと、滞在六十日、上杉登勢之を後見す、其年草津甚だ賑へりといふ(古文書)。降りて八代將軍吉宗、温泉を江戸城内に取寄せて入浴せりと。かくて幕末の頃には草津千軒と稱し、蓋か江戸表より馬背又は駕籠をかりて游客萬來せしが、明治二年大火あり全町悉く焦土と化し、全く昔日の面影を失ふ。後復興し、倍舊の盛況を呈し、偶々醫學者ベルク等來りて、泉質・氣候の世界無比なることを發表するに及び、その名海外にまで響けり。明治四十四年五月再び大火あり、要地の大屋高樓の大半を失ひしも、近年回復す。

Table with multiple columns listing locations and distances from Kusatsu. Includes entries like '豊太閤温泉行先編', '御座所いし川げんは持', '一遊子がらに下々みたるの儀無之様か', etc.

る爲入浴二週間にも及びは皮膚にただれを生ず。歸途河原湯・津渡温泉に於てこの新たな外傷を醫する必要を感ずる程なり。諸湯の病に効果あるも、皮膚病・微毒に特效あり。又癩病患者専用の浴室あるを以て知らる。草津に發する吾妻川の上流に魚類の棲息し得ざるは、この温泉の流れ込む爲なりといはる。この土地の高さは夏季に冷涼の氣候を著す爲、避暑地としても好適なり。(香草温泉)町の中央より西約三軒、白根登山道に沿ふ所にあり。泉質、酸性硫酸泉。標高約一五〇〇米、既泉絶佳、空氣清澄にして日光浴に適す。(湯畑)町の中央にあり、熱水湧々として湧出し一大熱湖をなす。徳川吉宗の試浴に供したりと云ひ、御汲上げの湯の名ありき。桶内に木桶を通し、湯の花を採取す。(鬼の相撲場)賽の河原を湯川に沿うて木の葉石に出づる途中山麓にある約二〇米の圓形の平地をいふ。このあたり、硫黄のため草木を生ぜず、周邊も雜草僅に生ずるのみにて、丘上より望むに宛も土俵の如し。尙、木の葉石は木の葉の化石したるものを存し、之を採取し得べし。(つじ公園)鬼の相撲場の北方にあり、丘山一帯に多數の藤壘あり、陽春の候美觀を呈す。明治初年までは此邊一帯折日ヶ原と稱し、廣漠たる原野なりき。(賽の河原)琴平神社の麓を西に廻れる河原にして、温泉到る處に湧出す。湯の花を採取す。湯濃あり

又不動堂あり。河原の一角に草津を海外に紹介せしメック博士の記念碑立てり。(殺生河原)温泉の西方山腹、約一六〇〇米の高處にあり。硫黄噴出地面に噴出す。此附近草津硫黄山の採掘場なり。その上方に獅子岩の奇巖あり。又近くに脱武具池あり、建久年間源朝綱、淺間時によりて木曾義仲の殘黨を滅さんとす。この附近に至る、餘額遺れて池畔に武具を捨て、樵人獵犬に委を變へて難を免れたりと傳ふ。義仲に因める古跡今猶ほ存す。(狐仙ノ湯)町の東方約四軒にあり。高さ約六〇米の赤き岩壁より噴つ。附近の名湯として聞ゆ。上方の牧場よりば、淺間山を望み、既泉佳なり。(常布ノ湯)町の西方約四軒、白根山より發して東流する大澤川にかかる。高さ約四〇米。その上流、白根登山道傍に、毒水の標あり。弘化年中、高野長英等ここを過ぎ、溪水に毒性あるを知りて行人の注意に石碑を建てしが、のち白根山噴火の際失はれて、今は標木となる。溪水は硫黄毒を含有す。附近に蟻ノ戸渡り・野嶺ノ岩・ましらノ瀧等あり。又、西方山腹に芳々平ヒユツチあり。(大正公園)町の入口、運茶屋後方の丘上にある記念公園。眺望に富み、スキーグラウンドあり。(閉山公園)白根神社境内にて、北西は近く信達山を望み、東南は遠く甲武東野の雄峰を見る。園内には池あり、丘あり、又庭球コート・野球グラウンドを得

る。境域に芭蕉の「夏の夜やこたよに明けける下駄の音の句傳、平九化げ燈籠・土肥慶慶野の湯碑等あり。(草津鎮山)本邦重要硫黄山の一つ。草津町に屬し、その西方に聳ゆる白根火山の火口湖たる湯釜の底に堆積しつづる泥狀硫黄を採掘しつづるものにして、その産額昭和十年産に於て四、一八八萬(廿五萬圓)、之を鐵索によりて草津電氣鐵道の終點草津津に出しつづあり、硫黄の含有量四五%内外に達す。(谷所鎮山)草津町にある本邦重要硫黄山の一つ。草津電氣鐵道谷所驛の西北六軒の山地にありて、其間車馬を通ず。鐵床は主として安山岩及び其集塊岩中に鑲嵌せる塊狀乃至不規則狀のものにして、特に鑲嵌澤北方に於ては、東南東より西北西に延長するものと凡そ五五〇米、幅約六米に達する脈狀のものあり、硫黄の含有量平均三〇%餘には六〇%を超ゆ。昭和五年始めて鑛區の設定を見、同七年白根硫黄山として採行を始めたが、同七年白根硫黄鑛業所の經營に移りて、谷所鎮山と改稱せられ、鑛夫百數十名を使役して之を採掘手段の上、採取法を以て精製硫黄を得、その産額は昭和九年一、七三四萬(一、八萬圓)、昭和十年三、三三三萬(三、二二萬圓)、昭和十一年三、二一七萬(三、一七萬圓)に漲る。草津に鑛産。地社。祭神。後能命。上野國神明帳に、吾妻郡十二座、從一位白根神明とあるに該當すと云ふ。古

來、白根山を祀れる社にして舊社地は白根山上にあり。今の社地は當時延禰所たりしと云ふ。明治六年地社に列す。境内六千五百三十坪。例祭、七月十八日。【草津時】草津温泉(群馬縣吾妻郡草津町)の西北方約九軒。草津白根火山群(石山(二一〇九米)と横手山(二三〇五米)との中間鞍部を乘越す峠。最高點は一九五六米を算し、吾妻郡六合村と長野縣下高井郡平穩村との境界に跨る。峠路は南橋街道に當り、之を東南降すれば草津町を経て遠く前橋街道に至り、西北降すれば熊ノ湯・湯温泉を経て下高井郡中野町に達す。草津町より草津峠を経て湯温泉に至る間は夏季山歩きに良く、又冬季のスキーグラウンドとしても知られ、一日行程なり。峠路は約三二軒、上り二軒、下り二〇軒なり。【草津白根山】白根山(群馬縣)の別稱。日光白根山・甲斐の白根山等と區別して云ふ。【草津電氣鐵道】私設鐵道。長野縣北佐久郡輕井澤町の新輕井澤驛(舊輕井澤驛)より起り、群馬縣津波郡草津町の草津温泉驛に至る。全長五・五軒。本邦有数の高山鐵道たり。新輕井澤驛にて信達本線に、上州三原驛(吾妻郡嬭村三原)にて吾妻本線自動車に、草津温泉驛にて上州草津線自動車にそれぞれ接続す。【草津町】蓋貫區近江國栗太郡の中郡より稍北に偏在す。東は治田村・志津村、

西は山田村に、南は老上村に、北は笠鏡村・大賣村に接す。草津川が甲賀高原の断崖下を流れて湖南平野に急下し、扇状地を形成せる後に更に侵蝕による平野上に立地し、町の主要部は中山道に沿へる街村にして草津川が流下せる土砂によりて丘陵状をなせる天井川の下底に長さ約四三・六米の隧道を穿ちて町の南北兩部を通ず。古く東海道・中山道の追分宿として著はれし處なり。今も省線東海道本線は草津驛(明治二十二年設置)を設け、また草津線を分岐して關西本線福知山に連絡し交通上の一要點をなす。従つて物資の集散多く、呉服本物その他、日用雜貨品の卸小賣店夥ならず。近時工業も盛んとなり、メカニクス・帆布・酒・醬油・硫化水素等の製造行はる。農業は町の發展に伴ひ減少を來しつゝあるも、地に縣立農事試験場あり。農業榮えて米を多産し、麥・粟・雑穀・綠肥用作物の農産あり。總々餅・竹の根製細工・風車等は古くよりの名産なり。古への治田郷の一部、中世には青地庄に屬す。昔は種々に作ると傳ふ、蓋し種々の物資集散するに起因し、之がいつしか草津に轉化したるか。中山・東海兩道の分岐點として交通の要衝に當り、應永二十九年足利義持參宮途上の休泊所を此地に設置し草津御所と名け、寛正六年足利義政が之を造營せし時は近江國の諸莊園より段錢を徴收し之に充つ。かくて安土桃山時代の御茶

屋、江戸時代の御殿、或は本陣となる。幕末頃の本陣は田中九藏・田中七左衛門の二戸にて兩本陣と稱されしが今は前者は跡なく後者のみ往時の邸宅と多くの古記録とを存す。當時通行の旅客貨物輻輳し旅宿も天保頃一八戸を數へ頗る賑賑を極む。江戸時代には本町の内大字草津と矢倉は關所藩本多氏に屬し、大字大路井は旗本齋藤氏領たり。當時草津宿は東海道五十三次中の要驛として驛傳用の驛馬百匹を備へ、人馬の補助に任ずる助郷は附近の四十一ヶ村二萬石と定めらる。明治に至り、殊に鐵道開通後は市況稍衰へしが、今や栗太平野の中心都市として復興の氣運に向ふ。明治二十八年町制施行。此地は古來、歌枕の名所として知らる。爲村朝紀行「今宵かばる草津の里の歌枕むすびもなれぬつゆぞいぶせき 爲村」爲村朝紀行「草津より濱に出たるかたなれや早目にかかる志賀の浦舟 爲村」伊勢紀行「わげきつる春のくさつの草わかみ刈までもなく駒もすさめし 爲村」西鶴雜記「道中いそぎけるに草津の宿の矢倉といふ所は絶が餅の名物、勢田矢橋の道分なり、近付の茶屋にしばし休みて景色を見るに、麓山の曇明て松に風絶、海に浪の音なくけふこそ渡し舟の乗日和」丹波興作待夜の小室節「さらば此方から打出の濱、大津へ三里、愛で矢橋の舟賃が出舟せよ」旅人の乗りおくれじとさ草津、お経様より先づ絶が

餅」御所堀堀川夜討、四、流石に都道からす、心算の花指衣、千種の錦古帯に、かへすも暫し名に高き、草津の宿にぞ著き給ふ」(乳母が餅、絶が餅) 草津驛の名物。江戸時代近江國栗田郡草津の郷代官の家の乳母が故ありて誅滅せられし主より、貞任の刀と共に近江源氏の正統といふ幼兒を託せられ、養育のたよりなきまま、餅を製して、大名、高家等の草津に宿る人々に賣りしが、後には小店を開き、この地の名物乳母が餅として賞美さる。のち此の由緒ある名を繼ぎて餅を賣る。(顯行寺) 大字矢倉にあり。眞宗大谷派。聖徳太子草創の古刹にて、五體の石佛を安置し、初め石佛寺と號せしが、應永年中、本願寺に屬し現寺號に改む。(光傳寺) 大字矢倉にあり。淨土宗。法照山と號しもと釋迦堂と稱す。寺傳に往昔當郡金勝寺伯耆國後醍醐天皇に遷りて立木森に棄却せられしに、土民大窪某、靈光に依り之を得て當寺に納め、これより光傳寺と號すといふ。本尊阿彌陀如来坐像一軀(木造)は應永末期の作にして、國寶たり。(當義寺) 大字草津にあり。淨土宗。成善院と號し良神の開基に係る。傳ふ。延徳年間足利義尚の御村居館を移して當寺本堂とし之を再興す。慶長五年關原役後徳川家康當寺に陣し、同年九月石田三成捕はられて大勢定まるや寺領五十石を當寺に寄す。其後歴代將軍の歸信殊に厚し。寺寶中阿彌陀如来及兩脇士

像は本造律師、脇士數金文藏あり。鎌倉時代の作、安阿彌風にて國寶たり。(眞願寺) 淨土宗西山派。天正十一年當郡上人の開創に係る。其後、愚博上人鹿島より來り、諸國に眞願寺を建つことを勸請せり。爾後眞願寺と稱せしが、のち訛りて眞願寺と稱するに至る。【草津線】 省線關西線の一部。敵買驛甲賀郡・栗太郡にあり。關西本線福知山(三重縣阿山郡東福城村)より西北方の貴生川を経て、東海道本線草津驛(栗太郡草津町)に至る。全長三六・四軒。なほ京阪地方より伊勢參宮の便を計り、京都・大阪等よりこの線を通じて鳥羽行直通列車を運轉す。貴生川驛(甲賀郡貴生川村)にて省線信樂線・社線近江鐵道に、三雲驛(同郡三雲村)にて省線草津本線自動車・八橋線自動車に、石部驛(同郡石部町)・手原驛(栗太郡栗山村)にて他草津本線自動車に夫々接続す。【草津】 往昔、山城の桂川にありし浚河通の船の發着點。また本津(盛衰記)とも今津(東鑑)とも稱す。其地今の京都市伏見區横大路草津町の邊に當り桂川の東岸に位す。菅原道真の太宰府へ歸國の時も崇徳院讃岐國(御幸の時も、皆此處より船出せしもの。また治承四年高倉天皇嚴島に行幸の際も此地より船出せること平家物語に見ゆ。また慶應四年正月東軍と新撰組の戦ひしも此地なり。保元物語に「新院は讃岐の國へ還し來るべき由定

りしかば、仁和寺を出で鳥羽殿を過ぎ市門を遣り出す、國司奉行朝臣御舟井に武士兩三人を設けて草津にて御舟に乗せ奉る」平家物語に「治承四年、上皇(高倉)嚴島御幸あり。鳥羽に立寄り法皇(後白河)に御對面あつて、草津より御舟に乗玉ふ」とあり。又此地は歌枕の名所にし新拾遺集に「隆信朝臣は美福門院かくれさせ玉ひける御舟の御供に、草津と云所より船にて漕出る、鳴の空のけしき浪の音折から物かなしくて讀侍る、朝ぼらけ漕行跡にきゆるみのあはれ誠に浮世なりけり」。【草津】 廣島縣佐伯郡にありし町。明治四十二年町制を布き、昭和四年本町及び已美町・古田村を設けその區域を廣島市に編入す。此地古くは已美・五日市等の邊と共に和名抄、佐伯郡大町郷の地に屬す。廣島灣に於ける一海港として發達せし所。明治十八年八月一日明治天皇山陽道御巡行の際、此地の小泉甚右衛門宅に御小休遊ばさる。

【草野】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

【草野】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

【草野町】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

【草野】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

【草野町】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

【草野町】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

【草野町】 靜岡縣駿河國安曇郡有度村の大字。久能山の西麓に位し、省線東海道本線の草野驛(大正十五年設置)。昔日本武尊東夷征伐の際、此地に於て土賊に圍まれ西方より火を放たれ給ひしが、寶劍を抜きて草を薙ぎ免れ給ふ古跡とす。今この地に草野神社ありて尊を祀せり。天正十八年徳川家康の再興せしものにて神領五十石を有す。草の賊難に遇ひ給へること燒津・草薙及び相模の小野の三所に傳へらる。或は草薙・燒津の二所に二間の一事となし、一所一件の如く傳へしものとも云ふ。研究を要す。

氏住す。戦國の手に大友氏に降伏せしも、天正十二年の頃、心岳に據れる事ありといふ。のち亡ぶ。いま矢作・紅桃林・草野・吉木の四大字より成り矢作に役場を置く。(發心山(草野公園)) 發心山は耳淵山脈の中の一峯にして屏風の連峰なり。山頂は草野城址にて發心樓の跡あり。こゝより筑後平野と筑後川の流を瞰下するを得。山麓は草野公園にして園内櫻樹頗る多く、花時爛漫たる櫻花は香雪たる松樹の間に交りて、千古の流流貫き走りて風景佳く、筑後嵐山の稱あり。樹下に芭蕉翁發句の塚あり。附近の紙園神社は建久八年の創祀にて社殿宏壯なり。(永壽寺) 吉木島にあり。曹洞宗。光明山と號し、建久年間の開創に係り、大和正宗國師を開山とす。爾來淨土宗たりしが、文龜年中草野城主草野永平これを再興し、若宮八幡社の別宮とし、天台兩部に改めらる。天正十五年豊臣秀吉のため草野氏滅亡して當寺亦廢刹となる。寶永二年に至り千光寺十四世光俊和尚此地に遷して禪林となす。のち再び荒廢して本尊藥師佛のみ草堂に安置せしが、文政四年草野和尙これを復興し、以て今日に至る。(孝念寺) 草野にあり。淨土宗。西向山と號し俗に九州日光の名を以て著聞す。當郡善導寺末たり。元久元年の創建にして開山を聖光房辨長の法弟持願とす。のち六世にして嗣法絶え堂宇荒廢せしが、地頭草野太郎家清これを再興し善

導寺の清嚴を請じて中興開山とす。本堂莊嚴美麗にして林泉また精雅を極む。九州日光の稱ある所以なり。本尊阿彌陀如来立像一軀(木造漆箔玉肌)は鎌倉時代の作にして國寶たり。

クサノ 薔野

地名。和名抄仲津郡に薔野郷あり、諸本に薔見に作るもいま高山寺本により薔野郷と訂す。近世薔野郷と稱せし地にて長保元年の外記日記に莊名見え、彌勒寺喜多院領たり。類聚三代格天平十八年官符に見ゆる豊前國草野津も此地なり。今の京都府行橋町・延永村の一部分に當り、延永村の大字草野は其遺稱なるべし。一に厚川村、第九村の邊ともいふ。

クサノカミ 草上

〔草上〕 播磨國(兵庫縣)の古地名。草上は播磨風土記に互知里草上村とありて、始め韓人巨智賢那、此地を請うて樂田するに一葉草ありて、その根甚だ臭し、因つて草上と名付くと見ゆ。和名抄に勝勝郡草上郷あり、久佐三と訓す。延喜式に播磨國草上郡馬三正とあるはこの地に置かれしものなるべしと、譯地い傳ふるなし。舊高岡村(飯路市に編入)の字名に今宿の名ありしを以つて、この邊ならんとの説あれども定かならず。而して舊郡城は凡そ高岡村・安室村(のち飯路市に編入)の邊に當る。播磨風土記・勝勝郡「巨智里。(草上村、大立丘。)土上下、右(勝巨智者)巨智等始(祖)

遷居此村、故因舊名、所謂謂云草上者、韓人山村(忌寸)等上祖勝巨智賢那、謂此地一而變田之時、有一葉草、其根尤臭、故號草上。所以稱大立丘者、品大天皇立於此丘、見之地形、故號三大立丘。〔草上〕 丹波國(兵庫縣)の古地名。和名抄に多紀郡草上郷あり、久佐乃加美と訓す。後宇多院御領目録に丹波國草上莊の名あり。また中世村雲莊・大字莊と云ふもこの邊を指させるもの。地は凡そ今の多紀郡村雲村・大字村の邊にして、村雲村の大字に草上之名存す。

クサノヨコ 草横山

九千部山(福岡・佐賀縣)の古稱。

クサバ 草場

愛知縣海部郡にありし村。明治三十九年、勝橋村・藤原村・諸古村・川瀨村と共に廢せられ新に依輪村を置く。

クサハラ 草原

越前國(福井縣)の古地名。和名抄足羽郡に草原郷あり、久佐波良と訓す。續日本紀・天平神護二年の越前國莊管に、草原郷戸主酒部牛養と見え、天曆四年東大寺封戸目録に足羽郡道守莊草原、田三百二十六町とあり、當時道守莊は本郷より中野郷・岡本郷・上家郷にも亘るといふ。其郷城は今の足羽郡内なるも何れの地なるか詳かならず。

クサフカ 草深

石川縣龍美郡にありし村。明治四十年、中島村・砂川村と共に廢せられ、新に川北村を置く。

クサワ 久澤

靜岡縣富士郡久澤郷の大字。この地の福壽寺には曾我祐成・時致の墓と稱するものあれども信すべからず。藤原毛・二中「それより久澤の善福寺といへるに、曾我兄弟の石牌あるをながみて、北八、今曾我に續縁をむすぶれば、ほかに一家も一も人もなし」

クシ 久志村

神龜縣琉球國頭郡の南海岸。西北は羽地村・名護村と界し、西南は金武村に、東北は東村に接し、南北は海に面し中部に大浦灣灣入す。面積六九平方軒餘を占むるも地東北より西南に延び、西北界には國頭郡の春雲山地連り、中部にヨニヤ岳、西南部に久志岳あり、それらの山脈派出して東南海岸に迫り、殆ど山林にして耕地少し。農産に甘蔗・米・甘蔗あり、また黒糖を出す。交通便利ならず。久志間切は延寶六年の新立に係る。クシは背面の義にて、此地山嶽重疊して驛路を通ぜず、自ら孤立の狀を成せしより起りしもの。大字久志の東方に久志觀音堂あり。方二間の古堂にして中に觀音菩薩の石像を祀る。當堂は尙貞王代貞享四年(皇紀二三四七)久志間切領主向經(豐見城王子朝良)の創建に係るといふ。また大字汀間の舊部落上村集は、傳説に據れば、尙國王、國頭間切にて追害に遇ひしが、此地に逗留して二男一

女を擧げしが、其報、汀間ノログモイになりしといひ、いまもなほ舊宅の址及び遺跡金丸井あり。汀間郡「汀間と安部郷のかつ下の濱に、無藏といふやかれのムのかれしや」

クサマ 日部

和泉國(大阪府)の古地名。和名抄に大島郡日部郷あり、久佐倍と訓す。日部は日下部の略略。延喜式に、和泉國日部郡馬七疋とあるは本郷に置かれしものなり。地は今の泉北郡福泉町の邊にて、大字草部に郷名の遺稱なるべし。

クサマ 草間村

岡山縣備中國阿曾郡の東南隅。高梁川中流の左岸に位し、高梁町上房郡の北方、新見町の東南に當り、西ははば川を界として石蟹郷村に、北は美観村に、東は豊永村に隣り、東南は上房郡中井村に界す。南部に五百米臺の高處あるも、其他は概ね二三百米の高度を有し波狀を呈する處地をなす。山林廣く畑地これに次ぎ田地は最も少し。農産に麥・米・蕎麥を主とし、苜蓿芋の産多く、林産に薪炭・木材少からず。省線伯備線と伯耆に至る街道は石蟹郷村との境界を越えて北上し、前者の井倉・石蟹の兩郷(石蟹郷村内)に近きも交通は便ならず。此地は古くは和名抄、美賀郡林部に屬せしが、のち草間莊に屬し莊名は建武元年の文書に見ゆ。曾我實朝の隱栖せし所。支賀は曾我實朝の族人にして道體の稱徳天皇に類ふるを潔しとせず、潜かに伯州の山中に入りしを桓武帝の時、勅命により京都に上り天皇の御病を治し奉り、のちに備中湯川寺(宇土橋)に住すとす。〔藤生門〕指定天然記念物。大字草間字馬繁にあり。石灰洞窟の天井の一

クシ 串

石川縣龍美郡にありし村。明治四十年八月本村及び未佐美・今江の二村を廢し新たに御串村を置く。

クシ 山口

山口縣周防國佐波郡東北部の農村。西北は八坂村に、西南は島地・出雲二村に接し、東南は和田村、東北は都賀郡鹿野村と界す。西北境に中國山脈の一峰石ヶ岳(九二四米)、南境に千石岳(六三〇米)聳立し、村城巖れ山地をなすも、各開折谷に沿ひ狭長なる低地ありて水田拓く。米・麥等を主産とする純農村にて木材・木炭・山葵等の産も少からず。昔は廣大なる森林を有し良木に富み、文治年間東大寺再建の際當村より木材を採取せしことありと。中世上得地保に屬せし所か。村は粟山・鶴ノ河内・串の三大字を含み、役場を鶴ノ河内に置く。(法光寺) 大字鶴ノ河内にあり。曹洞宗の古刹。もと瑞光寺末にて本尊は大日如来なり。當寺の由来は、初め俊垂坊重源、文治年中東大寺再建の材木を探らんがため得地の楢に入りし際、創建せしものにして、當時運山安養寺と號し、往昔塔頭七坊を有せし互利なりしが、文龜年中に至り廢類に及び、のち仁保中郷の萬安園秀な

部が崩壊して天然橋をなせるものにて、約二五米を隔てて南北二門あり。北にあるものは洞門の幅一・二・七米、高さ約二七・三米、長さ約二七・三米、南にあるものは洞門の幅一・四・六米、高さ約二七・三米、長さ約三〇・九米。門上香鬘梨滴の樹木を生じ、遠望すれば恰も山の如く顯る蓋致に富み。〔草間村間歌冷泉〕指定天然記念物。大字草間字馬繁佐伏川の右岸にあり。馬繁の瀬といふ。一日二回乃至三回間歌的に噴出す。川の水而より約七・三米、石灰岩の断面に沿うて幅約四・五米、高さ約九〇〇の洞あり。洞口より清泉湧出して高さ約三米、幅六〇程度の瀑布をなし、その瀑の湯干りに依りて影響せらるるを以て、潮漉の名起りしものなりと云ふ。湧出時間は殆ど五十分。冷泉は地中の洞窟内に滲溜する地下水の滲布となり、外部に流出するもの故、雨量の多少及び四季により間歌時期の差異を生ず。

クサミ 朽網

福岡縣豊前國金毘羅にありし村。明治四十年五月、霧岳村・

クサミ 朽網

福岡縣豊前國金毘羅にありし村。明治四十年五月、霧岳村・

クサミ 朽網

福岡縣豊前國金毘羅にありし村。明治四十年五月、霧岳村・

クサミ 朽網

福岡縣豊前國金毘羅にありし村。明治四十年五月、霧岳村・

る所再建して瑞光寺とす。明治三年に至り、安養寺と附近の瑞光寺の兩寺とを合併して、之を法光寺と稱す。境内にある阿彌陀堂は重源の創建と傳へらる。尙ほ寺内には重源自作の木像(高さ二尺三寸)・上人の書大般若經一字一石塔(十三重、高さ三間)・五重塔千人塚(上人採材の供養塔)などあり。後乗坊の當寺を誅せし時に、山崎白雲中、山上千里光、山客塵世外、山春金花紅」とあり。

【串島】長崎縣肥前國南松浦郡の一島。中通島の西方に浮び濱ノ浦村に屬す。本土の約二〇〇—三〇〇米の西にあり。東西約一・八軒、南北約一軒、西南部に野首ノ鼻、西北部に水足ノ鼻突出す。島内稍高く闊葉樹多く、周囲は殆ど海崖を以て繞らる。

【クシ】串崎、櫛崎、山口縣豊浦郡長府町の東南方にある岬。下關海峡の東角に當る。城址あり、大内氏の臣内藤隆春の居りし處と傳ふ。岬端を距る東約二軒に滿珠・千珠の二岩あり。

【櫛ヶ峯】奥羽火山脈岩手火山群に屬する一峯。十和田湖の北方約一三軒、青森縣南津輕郡山形村・竹館村と東津輕郡荒川村界地との境界に峙ち、標高一五一七米。山體火山岩より成る。東北稜は駒ヶ岳(一四一六米)、西南稜は下岳(一三四二米)、東北稜は前岳(一一九九米)、

横岳(一三四〇米)に連りて、東北方には八甲田八峯の聳立するを窺見す。西斜面より中野川發源して西北流し、南斜面より龍ノ敷川(淺瀬石川の一支)源流して西南流す。

【櫛ヶ峯】磐梯山の一峯。謂はゆる大磐梯(一八一九米)の北東方、沼ノ平を距て時つ。標高一六三六米。↓磐梯山

【櫛島】出雲風土記嶋根郡の條に見ゆる嶋。今の島根縣八東郡加賀村・大蔵村の海邊にある島なるべし。出雲風土記・嶋根郡・嶋嶋、周二百廿歩、高一十丈、有松林茅澤海。

【クシ】久慈 國造本紀に見ゆる國名。成務天皇の御代久自國大國造を定め給ふとあり。大化改新にては之を常陸國の一郡となし久慈と作る。國造本紀・久自國造、志賀高穴穗朝、物部連祖、伊香色雄命三世孫、船津足居定、賜國造久慈郡

【久慈町】岩手縣陸奥國九戸郡東海岸の庄に中央。東太平洋に面し、西は大川日村、南は長内村、北は夏井村に隣接す。地形西南に細長く、東西を縱貫せる久慈川に沿ひて沖積平野あり。地勢は平垣にして山嶺と稱すべき程のものなく、ただ北部夏井村と界する所に丘陵西南に走るを見るも、高さ二〇〇米を出でず。久慈川、源を山形村に發し、大川日村を経て久慈平野を灌漑し、河口を過る二軒の地盤に至りて長内川を、河口附近に於て夏

井川を合せて久慈灣に注ぐ。海岸は久慈灣の一部を占む。火山岩深成岩古生層第三紀層・第四紀層より成り、丘陵地は主として第三紀層、川の流域は沖積層なり。交通に於いては郡内の要路をなし、省線八戸線の終點に當り、附近數箇村の物資の集散地をなし、盛岡久慈線・盛岡久慈港線・久慈八戸線・岩泉久慈線・葛巻久慈線・小本久慈線の六線、街の中心地より放射狀に發す。從來これ等には幅員不十分、路面粗悪、橋梁不完全なるもの多かりしが、漸次改修せられてその面目を一新し、現在には自動車の便大いに開け、地方文化の發達、産業の開發に資欲しつあり。久慈町全戸數一四九八中、農業に従事する者、専業三一五戸・主業二六四戸、うち自作農九九戸、自作兼小作三九九戸、小作一三二戸にして、米・大豆・大麦・稗等を産すれども、耕作田畑の平均當反別は遠く全國の平均に及ばず。従つて全食糧の三分の一は之を移入す。水産業に於ては、之を主業となすもの五六戸、副業となすもの一四三戸にして漁・藻類を主となす。從來は漁撈、個人として只一つあるのみなりしが、昭和十二年、久慈海部協同出資の動力船二隻を建造す。工業を専業となすもの一六八戸、主業となすもの一四四戸、副業一六七戸なれども、工産物に於ては移出の域に達するもの未だなし、上古は荒蕪の地にして、國府の所轄に屬せし年月

は不詳。永承年中は安倍頼時が横領地たり。康保・文治年間藤原四代の管領に屬す。文治年間南部光行の封地内にあり。寛文中南部直秀分封せられし際その封地内なり。明治二年六月八戸藩に屬し、同四年七月八戸縣、九月弘前縣、同五年一月岩手縣管轄となれり。舊藩時代は代官の所在地にして、明治以降郡役所所在地となる。大正十五年六月郡制廢止後は昭和七年三月に至るまで九戸支廳の所在地たり。現今、官衙に稅務所・警務署・警察署・裁判所出張所等あり。町村制實施の際、下大川日村・門前村・長久寺村及び長内村の一部を併せ久慈町となせるものなるが、町名は當時の町村廢置分合調査に依れば、下大川日村は舊藩治より久慈町と稱し而して久慈港は接續せる沿海近傍各村の總稱にして廣く世に通ず依て町名とす」とあり、また「久慈光興太郎は父朝清藩領南部三郎光行三男太郎三郎と稱し邑を七戸に食ひ因て七戸太郎三郎朝清と稱す光興家を承くるに及び邑を久慈に移さる因て以て久慈氏と稱す」などの記録あり。即ち往時の久慈郡より久慈町なる地名起り、現町名に轉せられしものなり。【久慈港】指定港灣。久慈町の東方二・五軒、久慈灣の奥、長内村の海岸、嘗て同町内に久慈灣といひし部落ありしが、河川の勢力により位置する海港たりしが、河川の勢力により海より一軒餘も隔てたため、此地に構築したるなり。地

さば一尺乃至四尺、太さ一尺乃至三尺に及ぶ。古來其の尖端を削削し煎用するに産婦の乳刺を治癒すと傳へらる。地方稀有の巨木たるのみならず全國の名木たり。この公孫樹につきては長泉寺後記に「當寺を此處に卜するや初世長參和尚祖德高知の人、錫を止めて一庵を結び長久寺と名づけて(現時の大字長久寺は其處址なり)と修業奉化に勤む。或夜枕頭に異裝の表現はれ和尚に語りて曰く、公孫樹の精靈なり、老翁古根徒に凡俗の斧鋸に削らるるを厭ふ。和尚は近代の有徳者なり、余其人を持ち以て靈徳を布かんと欲す、希はくは和尚一字を其側に着み以て佛徳を水劫に垂れんことを乞ふ」と、和尚則舉つて問ふ所あらんとせば形意已に消え唯夢なる感あるのみ、爾來心密かに是を尋ねれども知ることを得ず。和尚一日托鉢して山徑を過ぐ。偶々、怪禽あり、大樹の梢頭に鳴くこと三度、和尚往みて樹下に至り叩頭禮視するに遺音耳に存して、怪禽更に見るべからず。根脚に座し默然たること少時、計らざりき此樹即ち公孫樹なり。和尚忽ち靈夢を回想し感應尋交是に至りたるを知り、遂に梵園を現在の地に移し銀香山と稱し、其の麓に水流あるを以て長泉寺と名づく」と。(長福寺)大字下大川の谷地にあり。松峯山號とす。曹洞宗。下閉伊郡津輕石村瑞雲寺末にして本尊は釋迦如來・文殊菩薩・普賢菩薩、瑞雲寺六世本室和尚(寛永六

方漁船の繫留地として、又沿岸地の遊樂地として利用され、時に鐵道枕木・薪炭・木材等を積出す。附近は砂礫の埋藏豐富なれば再び砂礫製鐵開始の日には此港の利用大なるべし。【巽山公園】町の東端に位する丘。丘上に巽山神社鎮座す。上部は一帶の芝生にて、丘の頂に立てば久慈・長内兩平野廣く眼前に展げ、其間を縫々、久慈・長内の二川蛇行し、又口に於て相合し久慈灣の東面を走り久慈灣に注ぐ。右方蓋に化鶴を果とし大尾崎の奇勝を望み、左方に白波を噴みて海中に飛突せる牛嶋あり。之と相俟ち平野を同視する連峰のなだらかなる起伏、散見する村落の風情等、萬端の風光の一眸の中に收めらるる眺望佳麗の地なり。近時城内に忠魂碑建てられ、公園としての各種の施設も漸次向上せり。(高館)町の西方大字下大川目の高臺上に其址あり。約二百米餘の半路たる坂を上りたる所、東は眼界限りなき太平洋に臨み、陸面は數町村に亘る山川・田圃を一眸の中に收め得る景勝の地なり。天正年間高館藩と云へる者ここに住せしも同十九年播磨、九戸政實の叛に與し政實の居城なる九戸城を守備せりと傳ふ。それよりのちの史實及び館の建築人物は詳かならず。(御陣屋敷)久慈川・夏井川合流點附近にあり。現在畑地なり。幕末の頃、八戸藩の、官軍に備へて兵を屯せし陣屋の跡と稱せらる。或は又、安政の頃薩摩忠右衛門なる

もの居を稱へし跡とも云はる。久慈港の鹿寺釋迦堂には同氏の奉納せる圓形の鐘現存す。同氏の一族に饒志津津といふ者あり、河川十四代將軍の時、愛宕山一番乗りの譽を得たりと傳ふ。(八戸藩石炭庫址)大字門前字久慈港開屋河岸曲戸河岸にあり。榎本武揚が前館に向ふ途次、こゝより、部落民を強制的に使役して石炭を積込みたりといふ。(古館址)(左神館址)久慈町・夏井村の境界にあり。天正年間、九戸政實の殘黨の據りし所と稱せられ、二重の濠跡及び土壘現存す。(大崎館址)久慈町・夏井村の境界にあり。大崎義隆の居城と稱せられ、景勝の地なり。(長泉寺)大字門前、京の森にあり。銀香山と號す。曹洞宗。下閉伊郡津輕石村瑞雲寺末にて本尊は釋迦如來・阿彌・迦葉なり。明細帳に寛永六年瑞雲寺六世本室和尚とあるも、久慈備前守 系譜に依れば十八世備前守政隆の冥顯を祈るため其子治繼、銀香山長久寺等三寺を建つとあり、三寺中他の二寺は別書により長福寺・長泉寺なりと思はる。城内に公孫樹の巨木あり。樹下に小堂ありて二體の古佛像安置せらる。毘沙門天の像にて得難き珍像なり。文化年中、閉伊の口より運搬せしものと傳へらる。(長泉寺の公孫樹)指定天然記念物。寺の左側にあり。高さ三〇米、且通り周囲一五米。推定樹齡一〇〇〇年と稱せらる。樹幹に巨大なる乳狀狀の塊附數十あり。長

年十月示説)の關基に係る。本堂は蔵十間、横八間、境内に藥師像あり、明治初年神佛混淆を禁ぜられし際長内村懸子神社より移されしものと傳へられ古像たり。【廣野牧場址】本町大字下大川日村にあり、古昔に於ける馬匹數は詳ならずも、寛文五年二月、佐衛門佐直房が分封の時僅か四十牝の放牧地にて、之に野守一人を置かれしも八戸領となるに及び之を馬守と改めらる。八戸藩史料、享和二年四月二日の記に「廣野牧場十九頭同月九日公の乗用馬名録(名久井出)八頭(葛巻出)村雲(堂町出)と命名せらる」文化元年四月十九日の記に「廣野を休牧と爲す」とあり。又、八戸藩舊記藩費二牧の記に載せられたる記録中廣野に關するものは次の如くなり。「廣野、九戸郡久慈にあり、宗家三崎野と接し開牧年代詳ならずれども三崎と略ぼ大差なかるべし。分屬以前の舊記は正保元年八月二十一日久慈廣野御野守助右衛門御役儀御免被下訴出代官接待總兵衛より差出云々」とあるを見れば、助右衛門は御累代野守たりしを知るべし。八戸藩領收となりて以後寛延三年三月久慈御野守高六十石之處三十石に減ぜられとあり、又最近文久三年二月久慈廣野高二十七石御免高有之候處三十石に加増被仰付とあり、其石數等不同にして且つ野守の氏名を違へる等甚だ明評を缺くと雖免高のありたるは事實なりし、牧地は三崎牧と隣接せしを以て野馬屋・隣牧

クシイ

に逸したることありしと云ふ。因みに幕府献上繪圖にはその地界見ゆ。

【久慈川】 岩手縣九戸郡山形村に發源し多くの支流を合して東に流ること三二

【久慈郡】 茨城縣一市十四郡の一。當國の一部にて縣の北西部に位し、東は多

三三五

當る。東部は阿武隈山地の南端部なる花崗の臺地性山地にして、中部に立割山

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈郡】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

三三五

造と定め給ふとあり、大化改新にはこれを郡となし、久慈に作る。風土記によれば

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

三三五

は和名抄、久慈郡高市郡の内に屬す。此處は古く砂鉄を出せしもの如く諸書に見ゆ。

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

クシカ

池・青柳・菅澤・上中後・鈴倉・寺之部・東戸野・水草の十一大字より成り、

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

【久慈町】 茨城縣常陸國久慈郡の東南端。久慈川に當り東は太平洋に面し、南は

三三五

クシカ—クシキ

光寺領十五石餘の寺印を寄す。本尊地藏菩薩坐像は俗に御監院地蔵と稱し、夜神作と傳ふ。(功雲寺)大宇根小屋にあり。曹洞宗。太舟山と號し、應永十五年津久井城主内藤左近將監定の創建に傳り、大綱明宗を開山とす。慶長四年徳川家康本領五十石を寄す。現在末寺三十餘箇院を擁する中本寺にして、郡内隨一の名刹たり。(光明寺)大宇青山樺野にあり。臨濟宗。金徳山と號し、夢窓國師の開創に傳り、中興は徳叟(天正六年寂)、再中興は文翁和尙とす。慶安元年徳川家光寺領十六石餘の寺印を寄す。舊寺境内に八院を有し、寺運隆盛たりしも、漸次廢絶す。天保五年焚上し、講堂灰燼に歸す。現堂宇は其後の再建に傳る。

クシカウ 具志川

【具志川村】 沖繩縣島尻郡の一村落。地方にてはダシチャーと發音す。久米島の西北半部を占め東は仲里村に接す。面積二六平方軒に近く、東半は山地にて高嶺は三百米に近きも、西半はこれを圍む隆起環瀾の臺地向つて緩傾斜し、概ね平坦にして畑地・田地折け、沿岸には不毛の地あり。西南岸に沿ひて珊瑚礁よく發達す。農産に甘藷・甘藷・米あり。また黒糖を産す。大字大田に具志川村役場、大字山里に具志川小學校あり。なほ敬王直筆「世濟其美」の額を家寶とせる舊家上江洲に大字西宮にあり、八重山征伐の時殊勳を現げせし女傑神皇御前直風の家に大

クシキ 串伎

古地名。和名抄、給那羅に串伎郷あり、諸本は串占或は串良・串上等に作る。その地今も軒馬郷に入り、東串良町・串良町に當る。仙覺萬葉抄所引、大隅國風土記「大隅郡串卜郷、昔者造國神勅使者一遣此村、令見消息、使者報言有愛枝神、云可謂愛枝村、因曰久四良郷」と

クシキ 串木野町

郡界にありしを以て鹿ヶ村城に遷遷ありしもの如し。中世大字上名・荒川は日置郡に其他は薩摩郡に屬したり。頂峰院文書に承久二年薩摩郡内串木野領主平忠道等見ゆ。昭和十三年四月町制を布く。大字羽島に健御名方命・事代主命を祀れる諏訪神社あり。創建年代不詳文祿元年朝鮮の役に島津義久肥前名護屋に赴く際、此地に留り當社に詣り順風を祈り神樂を奏し一首の歌を詠じて神前に納むと。薩摩日地理纂考「文祿元年五月廿三日連日有逆風、順風風(干時義弘有朝辭)以故祈順風於串木野諏訪社以神樂且復爲法樂一詠一首、夕涼み御山おろしにさそわれて繁きし船の出るみなとえ(串木野城)大字上名にあり。建久年中薩摩六郎忠直の第三子串木野三郎忠直、串木野を領し當城に據る。忠直は平姓にして累代國命に應ぜず、忠直より五代薩摩七郎忠秋に至り島津貞久當城を抜く。忠秋は即ち知覺に遇る。文和四年九月二日阿多北方の領主島津義久・知覺忠世(忠世は忠秋の後裔也)等三條春幸に從ひて串木野城を攻む。島津師久、知覺城より兵を率ゐて來り救ひ連戰五日遂に是を破り走らす。島津立久に至り川上又八郎忠憲に串木野を與へ當城に移り、忠憲の孫上野介忠克の時出水城主島津實久に屬して島津に反す。天文八年六月島津實久これを伐ち八月忠克降る。既にしつ元龜元年島津中務家久に領之城を與へ

クシケ

クシケ

串木野を管轄せしむ。天正七年家久は日州佐土原に移り、のち地頭を置く。(三井串木野領山)本邦重要領山の一。鹿兒島本縣串木野領より北方凡そ四軒に位す。安山岩中を貫く含銀石英脈を採掘するものにて、主脈を西山脈と稱し、西南より東北に向ひ延長凡そ二〇〇米、厚さ最大三五米に達す。脈は主として石英より成り、之に少量黄鐵礦と、輝銀鐵等を鑛狀に伴ひ、特に東北部に位する富鐵帶に於ては、黄石一題に對して金一〇乃至四〇瓦、銀一〇〇瓦以上に達す。その發見は萬治年間と稱せらるるも、盛に探採せらるるに至れるは、明治三十九年三井礦山株式會社の經營に歸せし以來にして、大正二年青化製鐵場を設けて、その製鍊を開始するに至り、本邦有数の金山となれり。その產額は昭和十年は金九一九九(二八〇・一萬圓)、銀六九三四(四八・八萬圓)、昭和十一年は金一〇〇四一(銀八七六二)に達す。即ち本邦諸金山中大分縣洞生・北海道鴻巣につぎて第三位を占め、これに茨城縣日立・大分縣佐賀關・香川縣直島・秋田縣小坂の四大製鍊所の產金を合して、本邦第七位の優位を占む。(日置領山)本邦重要領山の一。鹿兒島本縣串木野領の西北四軒、同本場茶屋野の東南二軒に位し、大正六年以來久原製鐵場の後日本製鐵株式會社の經營に屬し、中生層砂岩、粘板岩等を貫きて噴出せる安山岩中に發達する數條

の含銀石英脈を採掘するものにして、梅嶺・銀嶺・向田嶺等、何れも東北より西南に延び、幅一米内外、黄石一題に對して金一五瓦瓦内を含み、之を佐賀關製鍊所に送つて合併製鍊しつゝあり。クシケ 串毛村 福岡縣筑後國八女郡の南部。福岡町の東南方に位し、南と西は邊春村に、北は川崎村・豊岡村に、東は本屋村・熊本縣鹿本郡野村に隣接す。面積約二五平方軒あるも肥筑山塊の中部北斜面に當り概ね山地をなし、ただ南部より東北端にかけて幅狭き低地あり。聚落は多くこれに沿ひて發達す。農林業行はれ米・麥・蕎麥等を産す。北隣の豊岡村に出づれば四方福岡町方面へパスの便あるも、村内の交通はなほ不便なるを免れず。古くは和名抄、上妻郡桑原郷に屬せしものか。中世は黒木庄の内たり。いま土宮・田代・鹿子生の三大字よりなり、土宮に役場をおく。クシケ 匣丘 播磨風土記に見ゆる古地名。防府郡の伊和里にある十三丘の一。大夜命の舟難破し棹屋の落ちし所を稱せりといふ。姫路市附近の丘の一なるべけれども詳かならず。クシケ 櫛田 富山縣越中府射水郡の西部。西北は浅井村、東北は水戸田村、東南は金山村に接し西南は東瀧波郡般若野村に隣る。面積七・一平方軒なるも東南部に金山丘陵地の一隅ある外は土地平坦低夷

にて、全有租地の約七割は田地、一割弱は畑地をなす。農産には米多く外に蕎麥あり、また賣藥製造行はる。北陸道沿線の大門町・小杉町に近くいづれもパスを通じ交通不便ならず。此地古くは淺井・金山・水戸田・櫛下條の諸村と共に、和名抄射水郡櫛田郷(久之多と訓す)の地にして、本村大字串田に延喜式内社櫛田神社あり。三代實錄貞觀十八年の條に越中國櫛田神社に從五位下を授けたり。中世は櫛田荘に作り、天曆四年の東大寺封戸日録に田百三十町八段百九十二歩と見ゆ。近世は東條郷と法内荘とに分れたり。東條郷は東條保とも稱せり。町村制施行の際串田村外七ヶ村を合して櫛田村を建つ。いま串田・串田新・串田新田・圓池・圓池新・小泉・堀内・黒河又新・黒河新・當國・布目澤・生原寺新・島市井・圓池又新の十四大字よりなり串田に役場を置く。櫛田神社の社は櫛田社と稱し歌枕の名所として知らる。越中名所歌合「夏くれとくしたの杜の下草はげつらめにこそしけありけれ」。クシケ 三重縣伊勢國飯沼郡の東北。櫛田川下流の左岸に沿ひ西は松阪市東南部と朝見村に接し、東は川を隔てて機殿村・漕代村に對す。面積八・二平方軒餘、西南部に丘陵ありて山林をなす外は土地平坦にして田地よく折れ畑地も少からず。米・藁・麥を主産物として工業・畜産・養蠶等をなす。參宮道、中部を東西

クシケ—クシタ

クシケ—クシタ

クシケ

クシケ

クシケ

クシケ

クシケ

クシケ

の山波打ち並び、南方には遠く鶴島・市房・國見より阿蘇五岳、東方彼方には日向の山々、大崩・祖母・傾・大船・平治等凡て四・五十座の巨峯双峰に集る。この山は一名高岳とも云はれ、又昔は大和山とも呼ばれし、延暦以来久住と改稱せられたり。尙萬葉集卷十一に「くたみ山夕居る雲の立ちていなば我は戀ひむな春が目を欲り」とある朽網山はこの山なり。久住主峯より下りて西に尾根を横断すれば右側に岩塊の崩れ積りし深さ約八十米、急斜せる圓窟あり、空池と呼び、典型的火口跡なり。これには奇しき傳説あり。即ち昔靈師この山にて直を射止め、其血をこの神池にて洗ひしが、池は忽然と湧いて空地となり、之に代つて上段の今の御池出来たりと傳ふ。此御池は空池の西を左に少し登りし天狗ヶ城と中岳とに開かれし所にあり。御池を形成する熔岩は緻密なる爲、下の空地より上位にあるに拘らず雲水を濡々と流ふ。昔は雨乞ひの爲この池に登りたりと云ふ。此池は九州最高位の火山湖なり、眞冬にはスケートのリンクとなる。天狗ヶ城は、久住御池の西岸を北へ尾根を傳はりて至る。御池北岸に時ち、岩塊をたらし山なり。標高一七五〇米。頂上に地蔵尊安置せらる。中岳は天狗ヶ城の東麓に連る山。標高一七六〇米。頂上は巨岩と草にて掩はる。白口山は中岳の東方に連る。東岸形は獨立峯にて標高一七二〇米。前

星山は久住主峯の東方に設ぶ赤褐色の山。標高一七六〇米。一名本山とも云はる。東麓は壯大な原始林なり。九重山は星生山とも呼ばれ、標高一七六四米。久住山の北西方に當る。東方尾根積りに硫黄山あり。硫黄山は、九重山群中唯一つの活火山にして、硫黄孔多く、白煙常に立昇り、轟音耳を聳するばかりなり。硫黄は純粋にして、往時は年額三百萬斤の産出あり。近年はやや衰微せり。黒岩山は九重山の北西方にある山。黒色の巨岩中腹に堆積し、其だ壯大なる山容なり。標高一五〇三米。上泉水山・下泉水山は黒岩山の北麓に連る二山。上泉水山は標高一四八〇米、下泉水山は標高一三〇二米。これを下れば長者ヶ原のキャンプ草原あり。靈師岳は久住山群西方に時つ標高一四二・三米の山。大森林を有す。筑後川はこの山より源を發す。湯釜山は久住山群の北西端に座し、コニエ型にして、一名小國富士とも云はれ、山形良く整ひ、久住山群にて最も秀麗なる峯。冬期全山白雪に覆はれる時はアルプスのシュレツケルンにまがふとも云はれ、飯田方面の人々は納帽子山と呼ぶ。標高一五〇〇米。山頂は東西に延びし草原にして、東部に小石祠二箇あり。頂上部は久住山群主要部の展望臺にして、また南西方の阿蘇山を真正面に仰望するを得。大船山は久住山の北東、久住山群の東方に時つ。北針面に大船の御池と稱する大窪あり、

又美しき舊火口跡あり、氷窟と呼ばれる。山頂よりの展望は久住山のそれよりも美し。この山の冬季の氷水は久住山群第一と稱さる。又スキーゲレンデとしても好適なり。北東方に黒岳時つ。黒岳は塊状火山にして山頂に爆裂火口を存す。久住山群中唯一の密林を以て掩はるる山。昔は人が登れば降り得ずとの傳説ありき。又一名をチチアツ山とも云ふ。竹田方面より眺むれば恰も阿蘇の面を上向けたるが如く見ゆる故なり。三俣山は硫黄岳の北東麓、スガモリ越を經て連る原始的なる山にて標高一七四五米。山頂は四峯に分れ、その間に大鍋・小鍋の舊火口跡なる空池二箇あり。山中に高山植物特にコケモモの大群落あり。以上の山々の山麓・山腹・山間部には多くの温泉・冷泉湧く。即ち法華院温泉・七里田温泉・白水温泉・釜口温泉・窓の池・冷泉・星生温泉・中野温泉・筋湯ヒセン湯・湯坪・寶泉寺温泉・城湯・新湯・黒川温泉・奴留湯等なり。この中特に法華院温泉は、坊がつの高原帯に位し、この山麓乃至九州第一の高所に當る山の湯として知られ、また附近の連山への登山根據地をなす。登山は多く豊後竹田にて下車して行はれ、山麓の久住町まで十三軒、自動車便あり。久住町より登山道、自動車の第一路は南登山口にて久住町より登山口まで尙六軒、自動車通ず、ここより久住山山頂に久住高岳を一直接に登るも

のにして、登高容易なり。第二路東登山口は久住町より湯河内を過ぎ一本松、鍋割坂を經て法華院温泉に通ずる道を佐渡ヶ窪にて左折し、稻生山より東千里ヶ窪を經て連頂す、山頂まで約十二軒。第三路は最近開かれたるものにして、右の中間より登高し、久住町より大分種畜場まで約四軒、この間自動車を通ず、種畜場より山頂まで約六軒、その中約三軒は久住高原放牧地にして見事なる草原の緩傾斜地なり。別路本山登山道は指導標附近より森林帯の谷合に入りて行けば稍々急斜面を登るも山毛櫛・水枯などの森林美しく、木藪を行くを以て他路より日光の直射を避け得る、本山登山道入口より約三軒にして森林帯過ぎ、キリマツツの群落を過ぎ、イハカケミその他の高山植物の草木帯となり、稻生山と久住山の鞍部に出づ、そこより賽ノ河原の石室より御池・空池を廻りて頂上に達す。以上は南方よりの登山口なれども西方、産山村・南小國村・北小國村よりするもの並びに東方別府市方面よりするものあり。久住山一帯は、阿蘇國立公園の東部を占む。阿蘇國立公園

クシュユ——クシュユ

は海上郡飯岡町の行部岬より南は長生郡太東村の太東岬に至る約六六軒の砂濱海岸なり。濱は弓状の圓窟をなし此兩端を結ぶ直線は、圓窟のほぼ中心地長生町(山武郡)の神倉約一二軒といふ。砂濱の幅は八軒或は一二軒にして背後の丘陵に沿うて數列の砂丘と沼澤と並行す。而して沼澤は海濱より東岸背後の砂丘の内側に多く、その邊が海濱よりも土地低き事を證し地形上興味あり。この地形はこの地方の産業の基礎をなし、即ち丘陵近くの田野の拓けたるところは農業を主とし、砂丘の内側の湯の乾上りて水田となりしところを發達せる豪落は半農半漁の生活をなし、砂濱にては専ら漁業に従事す。沿海は遠淺のため以前は有名な地曳網の漁業地たりしが近年は揚陸網が盛んに使用せらるるに至る。沿海數里の間は深度・水温・鹽分・プランクトン等が蟹の棲息に好適なるを以て、漁獲物は蟹が大部を占め、赤貝・鱒・鯛等これに次ぎ、最近一箇年の總漁獲高は百萬圓を超す。鱒加工業もまた甚だ盛大にして日刺・煮乾・味噌乾・田作及び乾鰯等の産多く、一箇年の産額約百五十萬圓に上り、鱒加工品産地として我國第一に位し其販路は東京を主とし、輸送は多く貨物自動車による。九十九里の大漁は昔より有名にて、鏡子附近のみにて、約百九十年前の元文四年には合計百二十七張の地曳網を有し、且つ一張數千兩も要せし事業

より見るに如何に新業が盛んにして、且つ如何に漁成金の多かりしかを知るに足る。この網の持主は細且那と呼ばれ偉大なる勢力を有せり、細且那は比較的他國人に多く紀州・攝津などの遠方より遷り移住して漁業權を掌握し、また自力にて立派なる漁止場を築造し、また紀州侯へ五千兩、一萬兩と御用金を納めるなどの豪勢のありしを見ても、當時、網の大漁たりしを容易に首肯し得、然し土地の網主の多くは平常は野良にて耕作し半農半漁の生活をなせり。而して漁のある時にのみ農村より海濱に赴きしを以て、地曳網は海濱に納屋を建てて藏せり。のちにはこの納屋を中心として豪落が形成され、親村の名の下に「納屋」の名を附したる子村を見るに至る。然るに與島地方にては子村に「濱」の名を用ひ、その地名の分布の境は九十九里濱にては山武郡成東町の東の海岸にある南濱(蘆沼村)・納屋(鎌海村)の兩地を境として、それより東北の海上郡飯岡町まで「濱」の名を用ひ、これに反してそれより西南の長生郡一宮町に至る間を「納屋」の名のみにて、全く「濱」の名を用ひざるは頗る興味あることなり。漁業の中心地げ時により變遷ありしが現今にては中央部の片貝町を第一とす。近時東京人士の別荘地及び海水浴場として海岸一帯が利用せらるるに至る。此の濱を九十九里濱と呼ぶは往昔、源頼朝が此地に來り臣下に命じ六

了毎に矢を立てさせしに太東岬より九十九本目で東端の飯岡町に達せしを以て、六町一里に數へて九十九里の名稱が生ぜしと稱せらる。また一に、つくもがげま・玉浦とも稱せり。【九十九里鐵道】私設鐵道。千葉縣にあり。山武郡東金町大字東金にある東金線東金驛より九十九里濱に近き上總片貝驛(山武郡片貝町片貝)に通ず。全長八・五軒。ガソリン車を運轉す。軌間は〇・七六二米にて省線と連帶運轉をなす。クシュユコタン 九春古丹 また捕漁の字をあつ。樺太泊居の舊稱。蓋しアイヌ族の附したる名にてコタンは部落(村)の義。クシュユナイ 久春内

【久春内】樺太泊居支廳管内の一部。久春内村及び三濱村に分る。邦領南樺太の西海岸中部にて魚形の尾端の首に當る眞鍮地嶺の西側を占む。西樺太山脈の分水嶺を以つて元泊支廳・榮濱支廳に界し北方には鶴城郡・南方は泊居郡に界し西方は日本海に面す。而して略々中央を北緯四十八度の緯線が通過す。面積六三・一六八方里。今より二百六十餘年前、慶安年間松前藩主その臣頼崎傳右衛門に命じ本島を視察せしめ、明和年間於て家臣を派し統治に任じたり。徳川末期より明治初年に至り仙臺藩、今の久春内村間に運上屋を設け家臣を駐屯せしめ、現在の天端牧場の高臺に物見櫓を置き見張

クシュユ——クシュユ

動車道は海岸に沿ひ村内を縦貫す。別に久春内より東岸前線に至る山道も亦兼合自動車を通ず。久春内川に沿ひ寶澤以下は約一〇〇戸の團體農民移住入植し耕作地を散見す。尙海岸附近には天満等の牧場あり。山林は大部分伐採されたれども尙北方には北海道帝國大學演習林があり、その出張所は久春内に置かる。漁業は一時盛大を極め流網と共にその繁華を誇りたれども今は不漁にて衰へたり。海岸には船入洞を有す。久春内は樺太南部の自主と共に樺太開拓の最も古き歴史を有し各種の遺蹟を残す。

【久春内川】 樺太中部の川。樺太山脈の西側に發し南西流して久春内に至り開宮海岸に注ぐ。流程約三五軒、寶澤以下の沿岸は農耕地多し。この地南樺太の地峽部を形成し、東岸直線より西岸久春内村に通ずる道路を直轄山道と稱し東西交通の要路はこの河に沿ふ。この地峽部は古來日露國界として國際的にも重要な地點とし、年次不詳なるも幕府時代福山藩の支配下に隸屬し勤番所を置きて警備せし地なり。

クシヨ

【九條大路】 平安京の東西に通ずる最南の大路。幅十二丈。その南側は所謂福城にして其中間朱雀大路の末端に羅城門あり平安京の正面とす。九條大路は應仁・文明の亂を経て荒廢せしが、いま京都市下京區大宮通以西に僅に九條通を建て舊大路を復す。

路の一部を存する外、東九條にも一部を存す。關白藤原忠通の三男兼實も九條陶化居に住す。故にこれを九條殿と稱す。**【九條】** 大阪府西成郡にありし村。明治三十年大阪府西成郡に編入す。嶺南島

に米・麥・大豆・甘藷・高橋芋・芋麻等あり、蠶桑業を以て蠶・生絲の産出多し。八幡・白鳥の二町の外十五ヶ村を含む。第五十五代文德天皇、齊衡二年閏四月十九日武儀部を削り都上郡を建つ。文德實錄に「齊衡二年閏四月己卯朔丁酉分美濃國多處武義兩郡爲多處石津武義郡上凡四郡」とあり。義に大化の新設郡を分ちてより奈良朝に至り美濃國十六郡あり。桓武天皇都を平安城に遷し給ひて大に前代の幣政を改め給ひしより紀綱大に振ひ、皇室益々隆昌なると共に地方の政治善く行はれ庶民化に當り鼓腹太平を樂しむことを得たると共に、愈々戸口の濫増を見るに至る。かくて大化改新後正に二百年にして石津・都上二郡を分建し合せて十八郡となり、是より明治三十年迄變更するところなし。都上郡の名は蓋し都上郡に因りて之を修するもの、所謂好字を撰めるなり。延喜式には郡上郡に作り、高山寺本和名抄・拾芥抄共に同じ。和名抄一本に郡上郡に作り、美濃國神名帳また之に同じ。而して後世専ら郡上の字を濫用せり。而して和名抄に郡上・安郡・和良・栗國四郡を置く。郡家は郡上郡に置かれたるものなるべし。令の制に依れば本郡は下郡に屬し、郡司は大領・小領・主帳各一人ありて郡内の行政を統ぶ。而して郡領は遷替の官にあらずして専ら舊國造の才幹あるもの又は郡内名家の嫡長を擔任し長く任ぜしむるの制なり。

【郡上八幡】 省嶺越美南嶺の一驛(昭和四年設置)。岐阜縣郡上郡相生村にあり。**クシヨ—ジマ** 嶺南島 嶺南島 九條島 嶺南島 嶺南島の古地名。國花萬葉記五ノ五に「嶺南國西生郡 嶺南島 此處、寬永年中に香西曾雲と云ふ人開發の地に於て、竹林寺と云淨院有之、然るに元禄の初めに公命を受けし人ありて、淡大川筋を川口のすまてことごとく堤改め助水の堤を築く。嶺南島の中を切堀し川となしたり。右、今は此島南岸となり」とあり。古くは淡川の「砂洲にして島の形をなせるより九條島と呼べるものなり。由來大阪の地は難波の八十島の名が呼ばれる程、淡川・大和川・河内川等より流下する土砂が漸次その入海に堆積して處々に砂洲を作り、それが後に陸続きとなれるものにて、九條島もその八十島の一なりしものなるべし。近世は村名に呼び九條村と云ひしが、明治三十年大阪府西成郡に編入し、村名を失ふ。古への九條島は淡川河道の變遷により、今詳かにし得ざるも、寬永年中創建と傳ふ竹林寺は今の西成梅本町にあり、されば此の處一帶の汎稱と見て然る可きか。

クシラ

【申良町】 鹿島縣大隈郡申良町の北部。東は東申良町に、南は高山町に、西は鹿屋町及び高隈村に隣り、北は檜原郡野方村に、東北は同じく大崎町に接界す。面積六・〇五平方軒を有す。肝屬平野の中部に位し、申良川北部を東南に流れ、次ぎて町の東端を劃して南に下りて、町の南端を東流する肝屬川に合す。土地は北部より南部に緩かに傾く平地地にして、東南部と川沿には田地よく拓げ、其他は畑地・原野廣し。農産に米・麥・繭・甘藷等あり、林産・工業・畜産また少からず。省嶺古江西線町の東南部を採り小原・申良の二驛(大正十一年設置)を置き、従者は古江西線の接續驛をなす。また縣道中部を東西に横断し西は鹿屋町、東は志布志町(嶺南郡)へバスを通ず。本町及び東申良町の地は和名抄、始羅郡申良町、即ち諸本の申古或は申ト・申良等に作れる地の地に當り、建久八年大隈國田帳には申良院九十丁三段二丈云々と見ゆ。肝屬郡は後一徹天皇の長元九年以來世々肝村氏の領地にて兄弟親族分領し、建久の比其一族、北原又太郎兼通申良院を領す。のち北原周防久兼に至り應永年中島津家に歸し、島津元久に従ひ上京して將軍足利義持に謁見し右馬介に任ぜらる。文明年間に至り平田右馬宗申良の院司となり、其子兼宗は申良岩弘の城主たり。明應四年乙卯四月十五日島津豊後忠朝(日向武隈城主)軍

を發して岩弘の城を攻め、兼宗即ち降を乞ひ、城を出つ。忠朝は叔父平山通俊忠康を城主とす。永正十七年辰辰八月朔日肝付兼興大軍を發して岩弘城を攻む。平山近久(忠康の嫡子)城を出でて戦ひ、大に兼興の軍を破る。ここに於て兼興は新納近江忠勝(志布志城主)と合謀し、大軍を發して海陸の通路を斷つ。忠朝領兵を救ふに路なく止むことを得ず和議して、申良を忠勝に讓る。忠勝は二男新納安千代忠常をして城主となす。もと申良村と稱せしが、昭和七年五月申良町と改稱す。**クシラ** 檜原 奈良縣南葛城郡にありし村。大正四年、本村は七箇村を合併して新に大正村を建て、今はその大字なり。↓大正村

クシラ 鯨波村 新潟縣越後國羽前郡の西岸。東は柏崎町・高田村に隣り、西南は中頸城郡米山村・上米山村に界し、北は日本海に面す。面積約一五平方軒。米山東北方の山地南麓に横り山脚に浴び申狭きものあるのみ。海岸には所々に突出山脚あり風光佳し。米を主産しまた繭を出す。國道(北陸道)と省嶺信越本線、海岸平地を往り東西に走り、後者には鯨波驛(明治三十七年設置)を置き交通不便ならず。此地古くは和名抄、三島郡三島郷の内に屬す。青梅川と柏崎との衝路に當り、天正十二年藤田能登守信吉陣屋を構へ佐渡を征せんとす。また明治戊辰の亂に桑名藩兵の官軍を拒ぎし所なり。初め桑名藩の陣屋柏崎にあり。戊辰正月藩主定敬、伏見大阪の敗後江戸に出でしも、兵食の依るべきところなきを以て新潟に至り柏崎に寄寓す。官軍の高田

に及びが家老吉村又右衛門これを迎へんとせしが、定敬憤りて遂に之を殺害し、小千谷の會津兵と協力し藤原の來歴を拒ぐの謀を定む。閏四月下旬官軍米山に退却す。桑名兵服部半藏を推して隊長となし山崎十左衛門を軍事掛とす。而して兵士を神風隊・雷陣隊・地陣隊の三隊となし鯨波・鬼穴山・小河内山等に築壘し官軍を米山の麓地に誘はんとす。廿七日官軍雨を冒して米山を登り一隊先づ鯨波驛の南大江大黒岩に進み驛中を襲ふ。地陣隊火を驛中に放ち小河内山に據り應戦せしが、薩・長・金澤・富山の諸隊路を分ちて襲進するに及び遂に支へ難く柏崎を棄てて北走す。此地は明治十一年北陸東海御廻寺の御九月十三日御野立所となりたることに於て、いま明治天皇東ノ輪御野立所として指定史蹟たり。其址は明治十二年の建設に係る「駐蹕之碑」と題する碑あり。また本村附近の海岸は勝れたる風景と、遠淺の砂灘を持ち海水浴場として知らる。**クシラ** 久慈理岳 久慈理岳とも、また遠山とも云ふ。水戸市の北方およそ十五軒、茨城縣久慈郡戸村字中野に所在する丘陵なり。丘の形骸に似て、タウラより久慈理と誤り、山名これより出づといふ。往時遠山氏なる者ここに邸宅を構へんとして丘を削りしと云ふ。南部は東流して鹿島灘に注ぐ久慈川の流域たり。↓郡戸村

クシロ 久代

【久代村】 阿蘇山麓中国吉備郡の西南部、...

クシロ 鋼代

【鋼代】 徳中国(岡山縣)の古地名、和名抄、下道郡に鋼代郷あり。...

クシロ 鋼路

【鋼路】 北海道本道の一國、土語のクシロ(道路の義)に據るといへば、...

り。地積せる石灰岩・輝綠岩の岩塊中を二・三〇〇米の間、伏流する細流は...

鋼路國が設置され、更に白糠・足寄・鋼路・阿寒・網走・川上及び厚岸の七郡に...

西半にて、最高の位置は約二〇〇米。第三紀層を切る隆起海面は開拓も餘り進...

川の改修工事行はれたれば、割合に早く...

【鋼路】

北海道鋼路國支那管下六郡の一。鋼路國南部の中央を占め、西は白糠...

【鋼路平野】

北海道鋼路國にある平野。鋼路川・阿寒川の本支流の中流以下の沖...

クシロ—クシロ

主・ヤチハセウ・ベコノツタ等を生じ、...

【鋼路川】

北海道五大川の一。扇針路火山区中の扇針路湖に源を發して、扇針路...

【鋼路市】

北海道東南部の開港にて、また鋼路國支那の所在地。鋼路川の河口に...

接し、南は太平洋に面し、東半の高嶺、...

【鋼路支線】

北海道支線、北は網走支線、西は河西支線と接続し、南は太平洋に面す。...

【鋼路支線】

北海道支線の下支線。東は根室支線、北は網走支線、西は河西支線と接続し、南は太平洋に面す。...

クシロ——クシロ

二年七月本道を十一國八十六郡に制定する...

内國主要輸出品、洋紙・石炭・木材等...

くの諸島を産す。耕種は稻の紅化するもの...

とはアイヌ語の誤列・裁列、協議の意にて...

クシン 狗神岳

北海道、駒ヶ岳(一一四〇米)の西方約...

クス 玖珠

北朝の寒ノ地獄、浦島山東谷の精園、大...

クシロ——クス

知らる。本村は大正九年開拓町を分けて...

神、素戔嗚尊・田心姫命・味耜高彥根命、外敷神。社傳に依れば延仁年間疫病猖獗のため紙園社を勧請すといふ。もと牛頭天王とも稱す。天王潭の地にありしが歷應年間の洪水に依り今の地に遷祀せりといふ。古來領主の崇敬篤く、又近郷の産土神と崇めらる。明治五年現社境に改稱し、同十年郷社に列す。例祭、陰曆六月十五日。(願成寺) 唐澤山麓にあり。臨濟宗建長寺派。梅秀山と號し、藤原秀郷の開基に傳り、のち佐野源左衛門常世は、十二坊を築き八木八水の名譽を定むといふ。境内に佐野基綱開基に係る釋迦堂あり。傍に佐野當世の母・佐野當世・當世の妹比尼寺開基妙永尼・朝日長者の男太田旭丸・夕日長者の女大河戸浪姫の五石碑あり。明治十五年伯野佐野當民、玉垣を造進す。

クスウラ

楠浦村 熊本縣肥後國天草郡の中郡。天草下島の東北部にて北は本浦町との間に熱湯村・福宇土村を挟み南は宮地村に接し東は上島の西南端なる下浦村に相對しその間に内海を隔す。面積二〇平方軒、南北西端には約三百米の山地東西に連るも、中部は東西に幅狭き低地あり、また東北部海岸に沿うて稍廣き平地ありて村の主要地区をなす。全戸数の約三分の二は農業を營み米・麥を産しまた養蠶は郡中の首位を占め外に畜牛も榮ゆ。その他の三分の一は漁業に従事す。工業には土器・硝子瓶等製造の富

業と製材行はる。横新前は天領にして幕府の直轄地たり。明治初年まで十五社宮境内に大塚ありて、其切株の面積は八疊敷程にも及び海上四一五里の遠方より之を運見するを得たりと、蓋し村名楠浦は之より起りしものといふ。今其切株の一部を残す。村内には帯に鬼塚と稱する古墳二、三残存す。奈良朝以前の古墳なりといふ。また此地に豊太閤朝鮮征伐後鮮人來りて楠浦(阿蘇)を築く。其品質は良好なるも殆んど村内になし。今その遺跡を存す。

楠浦村 愛媛縣伊豫國桑原郡の東北部。東南は壬生川町との間に三芳村・國安村を隔て西南は庄内村に接し、西北は越智郡上朝倉村に、北は同じく楠井町に隣り東は豊浦に面す。面積五・六平方軒の小村なれども、西北部に二一三百米の山地ある外は全村低平にして田畑よく拓け、農業の業行はれて米・麥・麥等の産あり。壬生川町・令治市間の道路南北に貫き、また各線鐵道線(伊豫三芳線(三芳村内))に近く交通不便ならず。大字楠に世田城址あり、建武年間大館氏明の國の守護として吉野より來りここに據り、官軍の成に大敗ひしも、興國三年細川頼春に滅ぼさる。今此地の梅檀寺の境内に五輪塔の基及び殉死者十七人の墓一基あり。墓碑銘に大館伊豫守源氏朝臣之墓、背側に天保八年三月氏明十七代孫大館堂堂氏時諱と墓誌

を刻す。殉死者の碑は大館氏明に殉死せし十七士の名と天保八年三月西條區馬彦銘併録す。五輪塔は國分寺の脇屋義助の墓のものと同形同時代なり。(世田城) 大字楠の世田山上にあり。山腹は上中下の三境に分れ、登路頗る險難とす。河野出雲城四十八のうちの十八本城の一なりといふ。延元四年大館氏明伊豫守護となりて吉野より來り、得能氏等と共に賊を討ちて官軍大いに振ふ。興國三年五月藤原義助伊豫に卒するやこれより四國の官軍振はず、同年九月細川頼春來り攻め氏明を此城に圍む。氏明此城に戰死すと、或は走りて備後に至るともいふ。(道安寺) 大字楠にあり。眞言宗御室派。大化三年惠顯上人の開創に係り、小千諸師御室を營み、本尊彌勒如來を安す。孝徳天皇の勅願寺と定められ勸成寺と號せり。天智天皇の朝現寺に改む。延暦年間小千賀藤本堂を再建せしが、貞治二年兵火に罹りて焼亡す。現堂はその後の再建に係る。(道場寺) 河津津にあり。臨濟宗東福寺派。天平八年南海道諸國に疫病大に流行す。朝廷行基菩薩の像を刻み大楠の下に安置して祈禱す。のち惠覺大師來り此地に堂宇を興して河原道場と號す。藤原純友滅びて後再び疫流行す。仍りて天曆元年伊豫警固使橘遠保、越智好方と相謀りて河原道場を再建祈願せしに、疫患止まりと。建武年間河野通治これを修營し

クスカワ

楠河村 愛媛縣伊豫國桑原郡の東北部。東南は壬生川町との間に三芳村・國安村を隔て西南は庄内村に接し、西北は越智郡上朝倉村に、北は同じく楠井町に隣り東は豊浦に面す。面積五・六平方軒の小村なれども、西北部に二一三百米の山地ある外は全村低平にして田畑よく拓け、農業の業行はれて米・麥・麥等の産あり。壬生川町・令治市間の道路南北に貫き、また各線鐵道線(伊豫三芳線(三芳村内))に近く交通不便ならず。大字楠に世田城址あり、建武年間大館氏明の國の守護として吉野より來りここに據り、官軍の成に大敗ひしも、興國三年細川頼春に滅ぼさる。今此地の梅檀寺の境内に五輪塔の基及び殉死者十七人の墓一基あり。墓碑銘に大館伊豫守源氏朝臣之墓、背側に天保八年三月氏明十七代孫大館堂堂氏時諱と墓誌

クスカ

高士佛社 臺灣高雄州恒春郡の中央部山地にある蕃界。パイラン族の中のパイシャイシャオに屬する高砂族の部落。牡丹社等とともにパイシャイシャオの代表的蕃社なり。明治七年琉球蕃民の殺害事件に牡丹・クスカス兩社の蕃人によるものにて、西郷從政の討伐を受けし事は有名なり。戸數七百、人口四四九(昭和十一年末)。蕃稱 Yuchak。

グスク

城邊村 沖繩縣宮古支廳管内宮古郡の一村。宮古島の東南部三角形の地域にて西北は平良町、西南は下地村に接し、南と北は海に面す。面積六〇、九二平方軒、三角形の頂點に當る東端は東平安名岬と呼ばる。全村陸地珊瑚礁より成り高さ一〇〇米内外を有する平坦なる丘陵地をなす。沿岸珊瑚礁よく發達す。如地・山林多く田地は畑地の三〇分の一に及びず。甘藷・甘蔗の産多し米も少額

クヅツカ

葛塚町 新潟縣越後國北蒲原郡の西部。新潟市の東方約一四軒を距て、新發田町の西約一〇軒、それと佐々木村を挟む。東南部に福島湖を控へ中浦村・本田村に接し、南は長浦村、西北は本崎村に隣る。面積約一九方軒、土地低平、最高處も一四、五米を超えず水田廣く米の産多きたた藪を出し、木綿織物の産多し。福島湖の餘水新井郷川となり南西界を流れ河野野川に注ぎ、その下流と信濃川を繋ぐ通船川に通ずるを以て新潟市へは水運の便よし。此地は湯瀨新田にして近世の開闢たり。略風土記に葛塚は七八十年前まで沼にて草原多かりしを開墾せしものにして今人家數百軒、田畑甚だ廣闊なりとあり。明治三十四年町制を施行す。新井郷川はもと新郷川といひ、これに架せる橋を葛塚橋といふ。其長さ三十間餘。此橋もと船渡たりしが、寛政中新に橋を架けたり。また古く此地に金治郎なる孝子あり。越後野志(下)「蒲原郡葛塚市實民太郎之子、金治郎(幼名春松)性實直實(豆腐)爲業、妻安生(一子)而妻死不(再嫁)矣、父太助有足疾、而久不能起、金治郎常負(幼兒)而勤(家業)事(父)盡(孝)宗(祖)之奉養無(所)不(至)、獨(執)寒(苦)一(教)二(渡)而(不)見(色)一、且(與)近(隣)親(善)矣、甲(主)錄(其)狀、率(水

クズツカ

原官府)府吏錄上(之)東郡(文化乙丑(二)年)九月、執政松平伊豆守受(上)命(賜)銀七千兩(而)賞(其)行、水原縣令前澤郡十郎亦(與)金(而)賞(其)焉。

クズツカ

楠根 大阪府中河内郡にありし町。昭和十二年鋼刀村・小阪町等と共に布織市に編入せらる。

クズツカ

伊豆國の南部にありし私稱郡名。今の買茂郡下河津村大字御地、上河津村大字梨本の地。のち楠庄とも稱せられし地なり。増訂豆州志稿(一)「私に稱せし郡名あり。楠木郡、梨本、御地也。」

クズツカ

久須婆渡 和名抄の河内國交野郡葛葉郷の地にて、今の大阪府北河内郡樟葉村にありし淀川の渡場。對岸山崎方面への通路たり。繼體天皇の踐神せられし樟葉宮もこの附近にありしもの如し。古事記崇神天皇の段「爾皇追其逸軍、到(久須婆)之度、皆(被)追(擊)而(出)出(於)其(處)、故(號)其(地)謂(之)星(標)、今(者)謂(之)久須婆(云々)。」

クズツカ

葛葉 樟葉村 大阪府河内國北河

クズツカ

和名抄の河内國交野郡葛葉郷の地にて、今の大阪府北河内郡樟葉村にありし淀川の渡場。對岸山崎方面への通路たり。繼體天皇の踐神せられし樟葉宮もこの附近にありしもの如し。古事記崇神天皇の段「爾皇追其逸軍、到(久須婆)之度、皆(被)追(擊)而(出)出(於)其(處)、故(號)其(地)謂(之)星(標)、今(者)謂(之)久須婆(云々)。」

クズツカ

和名抄の河内國交野郡葛葉郷の地にて、今の大阪府北河内郡樟葉村にありし淀川の渡場。對岸山崎方面への通路たり。繼體天皇の踐神せられし樟葉宮もこの附近にありしもの如し。古事記崇神天皇の段「爾皇追其逸軍、到(久須婆)之度、皆(被)追(擊)而(出)出(於)其(處)、故(號)其(地)謂(之)星(標)、今(者)謂(之)久須婆(云々)。」

積は約二八〇ヘクタール、そのうち米作地は耕地面積の六五%に當る。然し中央平坦地は排水不良にて特に瓦礫池沿岸は顯著なり、故に二毛作利用率は五〇%にすぎず。裏作は麥の他に豌豆を主とし、砂質壤土なる本地域は豌豆栽培好適地にして耕地面積の三五%を占む。畑作地は東部丘陵地、木津川筋の謂はゆる島畑に多し。此等畑のうち果樹園・茶園が卓越するは本地域の特色なり。京都市に近接する佐山・御牧・美豆・横島等の諸村は野菜栽培の核心地域をなし、主として大根・牛蒡・甘藷・西瓜・菜・胡瓜・トマト等を産す。果樹栽培は府下に於ける卓越地域にして桃・梅・梨等を主とし、桃・梨は砂質壤土に恵まれたる寺田村を中心とする奈良電線沿線及び淀町を中心とする舊木津川河床の二部分に限らる。殊に梨は木津川畔の水田の土を感土し島畑の景觀をなし、富野莊村の枇杷の産は名高し。茶は宇治茶の本場にて産額は静岡・三重等に及ばざるも、品質の優越と傳統を誇る。然し近年は機械化製茶に轉ずるもの多く、手製は漸次影を没す。茶園は東部洪積層の丘陵地を主とし木津川筋堤防外に部分的に分布し、山城盆地西側の丘陵地の竹林と著しき對照をなす。茶は砂質壤土、またば壤土・礫質壤土等の日光に恵まれし緩斜地を好適地とし、氣候・雨量等の自然的要素の上に人文的要素を加へて新葉を發達せしむ。茶畑は二一〜

クセ 久瀬村 岐阜縣美濃國掛妻郡の中郡。掛妻川中流の山谷を占め、東南は横瀬村、南は北方村・春日村、西は坂内村、北は藤橋村に接し、東北は本郡郡根尾村に界す。東北には花房山(一一九〇米)・權現山(一一五八米)の山嶺連り、東境には西臺山、西南界には月山(一二三四米)、南部には飯盛山等時ち殆んど山地をなし、ただ中部を東南流する掛妻川の谷に沿ひ僅に幅狭き低地ありて多少の田畑拓く。米・麥の農産の外に木材・木炭を出す。川に沿ひて道路通ずるも交通の便なは開けず。本村は坂内村・徳山

一族の發祥地とす。郡名は地名の久世より出で、續紀天長十年(山城國久世郡)とあり。東大寺奴碑には久西に作る。延喜式・和名抄は久世と註し、和名抄は竹瀝・奈美・那羅・水主・那紀・宇治・藤原・羽栗・栗隈・富野・拜志・久世の十二郷を説く。本郡の平坦面は條里制が施され、地割・溝渠・道路・聚落の形態等これに從ふ。その代表的聚落は佐山村の田井・市田・林・寺田村等なり。瓦礫池沿岸には條里式聚落は見えず、これは條里施行當時、湖底或は卑濕地なりしものなるべし。木津川・宇治川流域の諸聚落の形態は非條里式なるも、これに河川氾濫により消失せしものなるか。

クセ 訓世・國背 久世村(京都府)の西北に接し、北は向日町の東北、久我村の北に接し、北は京都市右京區に、東は桂川によりて京都市下京區に隣る。山城盆地の一部にて土地平坦、面積僅に三・五三平方野なるも重なる處田畑拓げ、農を主業として米・麥を産し竹材を出し、また桂川對岸の京都市の地域は近時工業地帯と化しその剩餘を受け工場物を見らるに至る。また古來野菜栽培の業著はれ、久我李特に名高く、また京都向きの葱・胡瓜・牛蒡等を出す。平安時代より名高き西國街道に當り桂川には對岸京都市吉野院との間に久世橋を架す。また省縣東海道本線向日町驛に近く京都市へも交通の便よし。村は榮山・上久世・下久世・大敷・東土川の大山

現今、寺の北方約二〇〇米の地にある板井の清水はもと當寺域内にありしものと思はる。また此地、僧徒法師の歌林苑の庵の地にして、同法師の詠みし「古里の板井の清水水草生之月さへすますなり」にける哉の句名を刻みし石、今も當寺の本堂南東の庭園の一隅に存す。因みに板井の清水は約方三米の井にして、往昔飲料水として珍重されしも、今は水田の灌漑用に食せらる。

クセ 久瀬村 岐阜縣美濃國掛妻郡の中郡。掛妻川中流の山谷を占め、東南は横瀬村、南は北方村・春日村、西は坂内村、北は藤橋村に接し、東北は本郡郡根尾村に界す。東北には花房山(一一九〇米)・權現山(一一五八米)の山嶺連り、東境には西臺山、西南界には月山(一二三四米)、南部には飯盛山等時ち殆んど山地をなし、ただ中部を東南流する掛妻川の谷に沿ひ僅に幅狭き低地ありて多少の田畑拓く。米・麥の農産の外に木材・木炭を出す。川に沿ひて道路通ずるも交通の便なは開けず。本村は坂内村・徳山

クセ 訓世・國背 久世村(京都府)の西北に接し、北は向日町の東北、久我村の北に接し、北は京都市右京區に、東は桂川によりて京都市下京區に隣る。山城盆地の一部にて土地平坦、面積僅に三・五三平方野なるも重なる處田畑拓げ、農を主業として米・麥を産し竹材を出し、また桂川對岸の京都市の地域は近時工業地帯と化しその剩餘を受け工場物を見らるに至る。また古來野菜栽培の業著はれ、久我李特に名高く、また京都向きの葱・胡瓜・牛蒡等を出す。平安時代より名高き西國街道に當り桂川には對岸京都市吉野院との間に久世橋を架す。また省縣東海道本線向日町驛に近く京都市へも交通の便よし。村は榮山・上久世・下久世・大敷・東土川の大山

クセ 久瀬村 岐阜縣美濃國掛妻郡の中郡。掛妻川中流の山谷を占め、東南は横瀬村、南は北方村・春日村、西は坂内村、北は藤橋村に接し、東北は本郡郡根尾村に界す。東北には花房山(一一九〇米)・權現山(一一五八米)の山嶺連り、東境には西臺山、西南界には月山(一二三四米)、南部には飯盛山等時ち殆んど山地をなし、ただ中部を東南流する掛妻川の谷に沿ひ僅に幅狭き低地ありて多少の田畑拓く。米・麥の農産の外に木材・木炭を出す。川に沿ひて道路通ずるも交通の便なは開けず。本村は坂内村・徳山

梅花の名所として著る。此地古くは和名抄、都濃郡生屋郷の地。のち豊原庄に屬し大内聖書に豊原庄妙見山の名見ゆ。當町の名稱は、文獻に散見する所を綜合するに、遠く推古天皇の十七年に始まるが如く傳へられ、即ち其の年、北辰妙見大星、百濟の排華太子(大内氏の祖)の來朝を守護すべく、當地の松樹に降下せしにより、大星降下の浦を下松浦と稱せりといひ、從つて下松は一に降松(また管松に作るもあり)とも書するものあり。或は曰く、下松は百濟津の轉訛ならんと。いづれにしても此の地は、當時以來、朝鮮往來の要津たりしことは之を想像し得べく、後年には下松郷と稱せられ、從來は今の下松町の外、隣近の地域を含みし如く、而して下松そのものは、明治維新以前には周防三港の一に算へられ、毛利氏、一時、之に船手組を置きしことあり。明治以後にも種々の變革を経たる後、明治二十二年四月町制施行の際、東豊井・西豊井の二村を併せて豊井村を設け、明治三十四年三月一日下松町と改稱せり。歌枕として著はれし久多松浦・下松浦は今の下松浦の埠頭を指せるもの、了俊道行振に豊後の高崎の城より、宗久といふ僧、此方に渡持らんとて、夜の夢に周防のくだ松に着きわと語られしとあり、また日向書記に伊豆國の伊東八郎左衛門尉直然、伊東直持幸し嫡子直夜又丸の向は並きに乘じてその家督を承はんとし、見

利家に申立てて日向國檢非違使の職を命ぜられしが、正平三年八月伊豆より日向への途中、周防國下松の灘にて藤島に遭ひ溺死せりと見ゆ。鹿苑院の鹿島詣記に「にみの濱を過ぎ過て、くだ松といふとまりにつかぜ給ふ、大内左京大夫はこゝにぞ参りたまへ、御旗のつかれ飯。きなどさまん、まゐる、あま乙女しづはたおらぬくだ松も浪の白糸よりやかくらむ。貞世」(下松港)指定港灣。笠戸島の北西側と大島との間になれる港。港内大半は水深五尋乃至八尋、混濁にして船碇き善く、港灣北部及びほぼ中央なる三・四尋の所を除く外は、到る處好碇地をなす。港口の中央にツツカセ・古島・妙見出・上コーズセ・下コーズセ等の小嶋岩礁東西に並列し、港灣に入る水道を二條に分つ。笠戸島の北端と陸岸、宮の洲鼻の間に宮瀬戸あり、水深も頗狭し。古來内海航路の船舶寄港し、周防三港の一に數へられ、大阪・下關間定期往復船の寄港地として旅客貨物共に多かりしも今は寄港せず。昭和四年日本石油會社下松製油所設置以來内外貨物汽船の寄港多く本町の工業化と共に益々重要性を加ふ。輸出の主なるものは礦油(約一四萬噸)・關東(約二千噸)・食鹽(五百噸)・燃料(三千噸)にして神戸・門司・別府諸港に出し、輸入の主なるものは礦油(約二五萬噸)・紙(一萬七千噸)・機械類(二百噸)・藥材(五百噸)・石炭(二萬噸)等にして大

阪・門司・八幡・秋福・宇部・三池等の諸港と取引す。(郡松)宮の洲にあり。一に叶松とも書す。降臨の松・連理の松・相生の松の三本樹立せるによつて名づくといふ。傳説上の謂はゆる北辰妙見大星降臨の松は其の一にして、宇上郷に存す。その處にも降松神社あり。(宮の洲)一名青柳浦と呼ばれ、町の東南に於ける砂洲なり。松林蟬鳴、白砂青松相映じ、風光明媚を以て天の橋立に比せらる。明治維新以前には船舶風待の港をなし、當時繁榮を極めしといふ。(魚が邊)當町より虹ヶ濱に通ずる街道一帯の瀬戸内海沿邊を稱す。眺望開豁、奇石削岩の妙趣を有し、中國三景の一に算せらる。(降松神社)東豊井懸ヶ濱に鎮座。祭神は天御中主神にして、久保村鎮座、縣社降松神社の攝社なり。舊號は妙見社、明治三年祭神及び社號を改む。(豐原寺)中市にあり。古義眞言宗。妙見山と號し現眞言宗仁和寺末たり。推古天皇の御宇、百濟國排華太子の創建に係り其の傳來の靈像妙見菩薩を安置す。北辰妙見宮とも呼び俗に妙見様と稱す。當寺はもと妙見社七坊の一、開闢井坊にして、妙見社の別當たりしが、のち之を宮司坊と改め後年更に現寺號に改稱す。太子の末裔大内氏累代の信仰頗る厚く社運隆盛を極めしが、慶長十三年災厄に遭ひ七坊焼亡す。次で毛利氏歴代亦崇敬厚く堂宇を建立す。明治三年神佛分離により妙見社と分けし、

なほ舊地久保村に在せしが、同十二年十二月現地に移建す。下松妙見様の名は廣く遠近に知らる。(澄泉寺)大字宮之洲にあり。臨濟宗妙心寺派。桂城山と號し、享保二年北運和尚の創建に係り、藩主毛利家の歸依寺なり。明治三十七年矢島氏防州小天神の勝地を遷び、徳山町より移轉再建せしものなり。(周慶寺)大字下松にあり。淨土宗。麟祥山と號し、天文年中大内氏の閉基に係る。當時西福寺と稱せしも、大内氏滅亡後、漸く衰頹せしが、寛永三年領主毛利日向守就隆之を再興して亡母周慶大姉の菩提所とし、其法號に因みて寺號を今の如く改めて寺領若干を附す。(千人塚)當町背面の高丘上にあり。山頂に古墳多く、弘治二年三月陶晴賢對毛利軍の古戦場の一とす。

クタミ 久田見村

岐阜縣美濃國加茂郡の中部。八百津町の東北隣に東は福地村、東南は瀬南村に接し、北は飛騨川を挟み武儀郡上原生村に對す。謂はゆる東濃山地の中部にて四・五百米の高度を有する高原性の地をなし、南部木曾川の支流と西北流をなす飛騨川の谷に向つて急斜す。養蠶を主とする農業行はれ、また炭鑛業に従ふもの多し。交通なほ便利ならず。此地は和名抄、賀茂郡美和郷の内なるべく、明治三十三年村制施行に際し、久田見村・上古田村及び武儀郡上原生村の一部を合併して、久田見村を建つ。(寶藏寺)臨濟宗妙心寺派。光明山

と號し永正二年の創建に係り、開山を太極宗師とす。のち衰頹せしを、寛永十二年愚堂定輝師之を再興す。本尊釋迦如來を安す。

クタミ 久多美

【久多美村】鳥根縣出雲國廣川郡の東北。平田町の北に隣り、京は檜山村、西は西田村、北は日本海に濱し佐香村に界す。面積約一三平方町に近く、北境に鳥根半島西部の香壁山地(高度二一三〇〇米)東西に横き土地南方に向つて傾斜し、中部には低平面ありて耕地よく拓く。米を主産し外に鰯・鱈・青魚等あり。また久多見石を産す。平田町より東方松江市に至る縣道南部を東西に通じ、平田町へはバスの便あり。此地古くは和名抄、檜麓郡玖波郷の地、村名は蓋し其遺稱なるべし。大字久多美に玖波神社、大字野石谷に熊呂志神社(風土記には乃利神社)あり、共に式内の古社。出雲風土記、檜麓郡玖波郷、郡家正西五里二百步。所造天下大神命、天御飯田之御食將。造給。並更巡行給。爾時夜夜佐雨久多美乃山詔給之。故云久多美。(神龜三年改字玖波)「玖波神社」大字久多見に鎮座。郷社。祭神、大穴平瀨大神外數神。延喜式神名帳所載の神社なれども、創建年代山緒ともに不詳。現社地の北方に鎮座ありしが、明應五年火災に罹り社殿・古記等悉く焼失せしとき、現地に遷座せりと云ふ。明治四年十二月郷社に列す。境内社

に若宮・金刀比羅・八坂の三神社あり。例祭、四月三日。(豊久寺)大字東郷にあり。本門宗。法光山と號し京都要法寺末たり。日大上人の開基とす。寺名は久なる者の建立により出づといふ。(高野寺)大字野石谷にあり。古義眞言宗。檜山と號し俗に出雲高野と稱せられ本宗大覺寺末たり。天長年間空海の開基に係るといふ。仁治寛元の比、紀州高野山の法性阿闍梨當國に配流せらるゝや入りて中興となる。正平年中尼子氏の兵變に罹りて今は本堂・奥の院を存するのみ。本尊地蔵菩薩は行基の作、又胎藏界大日如來坐像は最澄の作、千手觀音坐像は空海の作、四天王は定朝の作と傳ふ。(東瀧寺)大字東郷にあり。本門宗。東光山と號し京都要法寺末たり。明應年中要法寺貫主日大上人の開創に係る。當時東坊・西坊・下大乗坊などの寺坊、他末寺九箇寺を有す。文明の頃は東郷忠光の菩提所として寺運隆盛を極めしが、のち漸次衰頹し、一時廢滅す。寛永年中日體上人之を再興して今日に至る。

クタミ 朽網

【朽網山】久住山の三山即ち九重山・大

【朽網川】大分川上流の稱呼

クタミ 來民町

熊本縣肥後國鹿本郡の東部。西は山鹿町との間に大道村を隔て、北は三玉村、東と東南は稻田村に隣る。面積僅に四・九平方町なるも、東北より西南に極めて緩かに傾斜する平坦面を占め田畑よく拓く。農産に米・麥等あり、また團扇の特産あり。省線鹿兒島本線熊本驛に起り山鹿町に達する社線鹿

クタミ 玖潭 球草

【玖潭】出雲國(鳥根縣)檜麓郡の古地名。風土記に郷名見ゆ。古くは起美に作りしが奈良時代には玖潭に作る。和名抄にも郷名見ゆ。其地いま廣川郡久多美、北濱

兩村地方に當る。出雲風土記、武津郡 郡 家正西五里二百步、所造天下大神命...

【球草】豊後國(大分縣)直入郡の古地名。風土記に地名見ゆ。書紀景行紀に見ゆる...

【球草峰】豊後國(大分縣)直入郡の古山名。風土記に其名見ゆ。今の阿蘇郡境...

【クタムラ】久陀牟羅塞。書紀欽明天皇十五年紀に見ゆる百濟軍の新羅に攻め入りて築きし塞。また管山城にも作る。

【クダラ】俱多樂湖。北海道釧路國白老郡敷生村にあり。その山腹に登別温泉...

【百濟野】大和國(奈良縣)の郡名。今の北葛城郡百濟村の地をいふ。村上忠順の名所案に...

【百濟川】奈良縣奈良盆地の西南部を流るる重取川の別稱。北葛城郡百濟村の東部を流るるを以て此名あり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

クダラ——クダラ

河も排水口もなく、従つて水位の年較差は一丈以上にも達す。湖盆は楕圓狀を呈し、中央より稍東に偏し一四七米に達する最深點あり、日本にて第八位の深淵なり。

【百濟川】奈良縣奈良盆地の西南部を流るる重取川の別稱。北葛城郡百濟村の東部を流るるを以て此名あり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

濟の名は應神天皇の朝、百濟・新羅人等來朝して住居したるより、此名あるものなるべし。敏達天皇の元年、百濟の大井宮を營まされしを、或は河内となすも、此地なるべし。

【百濟川】奈良縣奈良盆地の西南部を流るる重取川の別稱。北葛城郡百濟村の東部を流るるを以て此名あり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

の民は太皇太后に從事せしむと傳ふ。その地は百濟大井宮の故蹟かと云はる。百濟大寺址。大宇百濟にあり。いま百濟寺の地。百濟大寺は初め聖德太子が熊襲(いまの生駒郡和村町)に建ててこれに遷し、百濟大寺に遷し、天皇その地を遷つて百濟川即ち今の重取川の側に移されしもの。日本紀に十一年大宮及び大寺を造作し、百濟川の側を以て宮處となす云々、とあるは即ちこれ。然るにこの際附近の子部社の樹を伐り、その根に於ては焼失し、皇后即ち皇孫天皇遺志を繼ぎて再興に着手せられしが、未だ完からざるに當明天皇の御代筑紫に親征して朝倉宮に崩じ給ひ、皇太子即ち天智天皇、遺詔に於て更に大に百濟大寺を造營して、丈六佛像を設かせ給ふといふ。のち天武天皇の御宇、これを高市郡夜宿に移し、封邑寺田を加へて高市大寺とも大宮大寺とも稱し、郡の奈良に遷るに及んで更に之を新宮に遷せり。これ即ち大宮寺にして南都七大寺の一に數へらる。百濟寺大宇百濟にあり。眞言宗高野派。始め聖德太子が熊襲に建て、のち舒明天皇これを百濟川(いま重取川)畔の現地に移して百濟大寺と名づけ給ひしを創めとす。のち炎上し、天智天皇再建し給ひしが、やがて荒廢し、弘仁中、空海中興せらるも、數度の火災にあひて衰微す。江戸時代修補再興す。三重塔は鎌倉時代の再建と推定せられ、三間三層塔婆、屋根木瓦葺、

【百濟川】奈良縣奈良盆地の西南部を流るる重取川の別稱。北葛城郡百濟村の東部を流るるを以て此名あり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

【百濟】省級西本線の一驛(明治四十二年設置)。大阪市住吉區枕木町にあり。

【百濟】朝鮮に於ける三國鼎立時代の一國。その歴史を徵するに足る史料は主として...

び、茲に百濟は唐羅兩國の兵を蒙つて滅亡す。即ち六六〇年唐の高宗は蘇定方を將として海路百濟を攻めしめ、新羅の武烈王は自ら將として陸上よりこれに策應し、泗水に向ふ。百濟の將塔伯新羅軍と黄山原に戦ひて破れ、熊津江口(錦江)に據り唐軍を防ぎしも百濟軍敗れ、泗水は水路より包圍され、義慈王は降り百濟は滅亡せり。大唐平百濟塔(扶餘東南百里)はその記念碑なり。蘇定方は義慈王以下王族を捕虜として凱旋し、劉仁願を留めて占領地を鎮めしむ。唐軍去るや百濟王族鬼神信は兵を挙げ復興を計り、日本に賈たりし王子豊璋を迎へて主となし、周留城(扶安)によりて勢盛んなりしが、内訌により周留に殺され、唐の援軍再び海上より來り新羅軍と力を併せて水陸より攻むるに及び敵し得ず、加ふるに日本の救援軍は白江口(唐の水軍と戦つて敗れ、遂に周留城は陥り、豊璋は行くところを知らず、百濟は此に全く滅ぶ(六六三)百濟が上古文化の上にて我が國に及ばせし影響大なるものあるは偏く人の知る所にて、佛敎を始め大陸の文化が先づ此國を通じて日本に輸入せられしも、これがためなり。その國人の我國に渡來歸化せしもの頗る多く、日本と南方支那との交通もまたここに胎動す。(建築)遺物の様式上支那南朝の様式に影響ある所深しと思考せらる。又我が飛鳥時代の建築及び彫刻は百濟の聖明王に依り大

陸風の傳來せる結果に因るものなるが故に、以て飛鳥建築及び彫刻の源流を思ふべく、百濟建築及び彫刻の日本に對する貢獻を知るべし。百濟の都は、廣州・熊津(今の公州)・泗水(今の扶餘)等に三遷せしを以て、建築及び彫刻の中心も亦三處にあり。時代的には前・中・後期として觀察するを便とす。都城、宮室初期の都廣州に關しては、殆ど闕明するところなきも、中期の都熊津、後期の都扶餘は其址を止む。殊に扶餘は西北より西南に彎流する錦江を控へ、北より東に亘る丘上は泗水山城(半月城)にて固め、更に東北方に扶蘇山城を經營して鎮と爲せり。また宮室は文獻上支那の制度に依るところ多く、各王は壯麗なる樓閣臺榭、苑池造山を宮中に經營し、殊に武王は扶餘の宮南に池を穿ち、兩岸に楊柳を植ふ、水中に鳥を築き、方丈仙山に擬せり。佛敎建築、統德王元年嘗より始めて佛敎が傳へられしより佛寺の建立相繼ぎ、特に法王二年創始、武王三十五年完成の玉興寺の規模實觀は史上著名なり。然し現代の地上遺構は扶餘の大唐平百濟塔あるに過ぎず。右は義慈王二十一年百濟滅亡の際、唐將蘇定方その功を記念せんがため、塔の初層塔身に大唐平百濟塔碑銘を彫りしに様式上百濟時代の建築となすべきものに於て、五層石塔にて初層八尺に及び、兩柱あり。軒は重直と對しと單純なる持鈴を以て深く突出し、勾欄極めて緻く、第二

層以上また同様なるも初層より低く、上に從ひ大きさを減す。簡古雄健、而も新羅石塔と異趣ある美塔なり。(陵墓)最も重要なものは扶餘陵山古墳にて、百濟王陵と傳へらるる岡墳六箇がそれなり。石槨構築は三種あり。(一)玄室長方形平井にて、東下塚は四壁を水磨し、四脚を横きし痕跡あり。最後に一大石を載せし梯形穹窿を爲す(中上塚)。(二)長方形玄室の四壁を大小の切石にて築き、筒形穹窿を上げる(中下塚)。何れも平面の長方形なれば新羅・伽耶と類似するも、構造形式は獨特なり。(三)瓦塼・裝飾。瓦は巴瓦・鳥尾の殘缺を出すも、瓦當ある唐草瓦は皆無なり。塼は質軟に文様隆起に、云ひ難き風格あり。高句麗式の男性美に對し百濟は女性美なり。巴瓦文様は蓮花文にして飛鳥時代瓦と様式を一にす。此様式のものばまた最近南京より出土せる點、鳥尾また類似する點及び公州出土の塼が漢唐文の系統なはたとどめたる上に蓮花文を表はしたるものと同様の塼が最近南京城外より出土せる點より支那南朝及び我が飛鳥時代の様式との間の密接なる關係が窺はる。(繪畫)純粹繪畫は遺存せるものなきも、東下塚の玄室天井壁畫は唯一の繪畫にて、蓮花に雲文を配せる流麗強勁なる筆致は欣賞すべきものなり。[彫刻]小佛像數箇、扶餘博物館及び個人所有としてあり。何れも金剛製なり。古

損なる手法、表情、比例、衣袂の壁等、正しく支那南北朝の様式を傳へ、飛鳥時代と親密なる關係にあること、之を以て首肯する。飛鳥時代の彫刻の百濟傳來、若しくは既に百濟觀音等と稱せられしものの中に、既に百濟佛も混在すべくこれまた注目すべき事實なり。(工業)遺品稀少にして、中には支那より輸入せられたる物なも交へ居るもの如し。金工品の初期のものには、廣州郡風納里土城より出土せし銀針、後期のものにては扶餘中土塚出土の金製製の冠飾金具らしきもの、及び指輪金具らしきもの等あり。これ等の透彫・文様等は明かに飛鳥時代文様に發見し得る共通のものにて純粋なる南北朝様式のものなり。また陶工藝として、先述せる瓦塼の外、都城址より出土する素燒の壺・皿の類の何れも薄手にて質軟く、新羅産ともまた別種の特質あるものなり。

クダラキ 百濟來村

熊本縣肥後國葦北郡の北東隅。日奈久町の東南に於て西は二見村、南は吉尾村に界し、東は球磨川の峽流を隔てて八代郡上松求麻村に對す。面積三七平方町に近く、東南部に五〇〇米臺の山地、中部より西南境にかけて二〇〇米臺の小丘陵連り概し山地をなすも、唯中部を西南より東北に流るる小流の谷に沿ひ部落發達す。農林業を主とす。村の東南部球磨川西岸に沿ひて省線肥後線通じ瀬戸石橋(明治四十二年設置)

を設くも、村の東南に偏せるを以て村内の交通は便利ならず。村名百濟來は一に久多良木にも作る。村内に百濟來地蔵堂あり、日蓮自作の地蔵尊を安置して其の墓標とせしものといふ。日蓮は葦北國造阿利斯登の子にして、宣化天皇二年父に隨ひて百濟に渡海し、居る事久し日蓮の賢に其材を愛せらる。敏達天皇は日蓮の賢にして男あるを聞き及び、之を呼び歸さんとて使を百濟に遣はせしに國王は惜みて歸さず、然し再度の勅使に畏れて之を許す。日蓮歸國するや僧を賜はり朝に仕へて對百濟政策に與るに及び、百濟人思率の懇むところとなり、終に其の部下徳爾を留めて難波の館に於て日蓮を殺さしむ。天皇御悲歎あらせられ、使を葦北に遣して日蓮の眷屬を召し其警を討たしめ給ひ喪を葦北に移葬せしめらる。この地葦堂の西側山麓權現社の背後に、俗にお地蔵様の杉と稱する大杉あり。根廻一八米、地上二米の幹圍九米七、樹高三七米。クダラテラ 百濟寺 ↓角井村(葦賀縣愛知郡) クタワタ 來田綿 近江國(滋賀縣)の古地名。市邊押野皇子横死の地なり。皇子は履中天皇の皇長子にて、安康天皇位を押野皇子に傳へんと思召し給ひしため、大泊瀬皇子(允恭天皇の第五皇子、安康天皇の同母弟、のちの雄略天皇)深くこれを懇み、肩輪王が安康天皇を執し奉りし變に乗じ、謀りて、これを殺し給

はんとす。即ち十月朔日、大泊瀬皇子、人を市邊押野皇子の御許に遣はして、遺囑を勸め給ひ、「近江の來田綿の牧屋野に山猪、野鹿、甚だ多く、其角は、枯木の如く、其脚は、樺樹の林の如く、其吐く息は、朝霧の騰るに似たりと、城ヶ城山君轉侍の申し來りぬ、馬を牽風に乗じて、歌を廣野に獲らぬ、賜あらん」と促がし給へば押野皇子これを諾し給ふ。兩皇子、頷て轡を並べて、來田綿に至り、各々別に假宮を作りて宿り給ふ。翌朝押野皇子、御馬に召されて、大泊瀬皇子の假宮に到り給ひ、御伴人に向ひて、「尙、猶もまさめにこそ、天は早明けぬ、疾く驅馳へと申せ」と言ひ置き、其儘、出て行き給ふ。御伴人、この山を大泊瀬皇子に申せば、急ぎ御衣の下に甲を着け、刀を佩き、弓を執りつゝ、馬を驅りて馳せ出で給ふ。進んで、牧屋野に到れば、馬蹄、ゆたかに打たせる一騎あり、此れぞ正しく押野皇子、それと見たる大泊瀬皇子は近づき、に、「素破、猪よ」と號びつゝ矢を射ぎ、弓を響きて、押野皇子を馬より下に射落し給ふ。皇子の從者佐伯部賣輪なすと云ふを知らず、大泊瀬皇子、賣輪をも殺して二屍を馬腰に入れその儘土中に埋め給ふ。いま蒲生郡日野町・西大路村・鐵掛村・南比都佐村・北比都佐村に即ち古の來田綿の地なり、西大路村大字北畑は來田綿の轉訛ならん。牧屋野は來田綿の別名とも謂ふべき廣大なる山野にして、鐵

クチ

久地村 廣島縣安藝國安佐郡の西部。可部町の西方約一四町、太田川中流の右岸に沿ひ、北は川を隔てて小河内・飯室二村に對し、東は日浦村、南は作村・戸山村に隣り、西は佐伯郡水内村、西北は山縣郡安野村と界す。面積約三二平方

クチイズ

口伊豆 北海道の西南部、即ち今の濱島・後志・膽振地方の汎稱にして、奥蝦夷に對してかく呼ぶ。時代により多少の相違あり、樺葉岬附近を境として、日蝦夷・奥蝦夷と稱せしことあり、石狩支那千歳村を界とし、本州に近き方を口蝦夷と稱し、遠き方を奥蝦夷と呼び、地域的には不明なるも比較呼稱に用ひしもの如し。

鷺郷を割きしものか。其地今の宇賀荘村、鳥田村の邊に當り、宇賀荘村大字九重は久能布と同じ口鏡の轉じしもの。

クチノエラフ

口永良部島 薩南諸島中の一火山島。鹿児島縣魚毛郡上屋久村(屋久島の北半部)に屬し、村の西端永田岬の西北約一二軒の海上に横ばり、東南より西北に延び長さ約一四軒、幅五軒餘。東南部に古岳(六四九米)、新岳(六〇〇米)の兩火山南北に峙ち四方に急傾斜をなす。島の西部は半島狀をなしその南岸に木村の鎮地あり。

クチノスキ

口枳 丹波國(京都府)の古地名。和名抄に丹波郡口枳郷あり。口枳は口周の周を省略せるものにて、久知領殿と訓むべし。地は即ち周枳郷に遷接する中郡新山村・長善村の邊なるべし。

クチノツ

口之津 長崎縣肥前國南高來郡(鳥原半島)の南端。東北は南有馬町、西北は加津佐町に隣り南は海に面し、西南部に早崎・瀬崎の半島突出して天草下島の北端と相對して訓ゆる鳥原嶺と天草嶺を劃する早崎海峽を擁す。半島の東北側に口之津港の小灣入ありて、特別輸出港たり。西北端に愛宕山(二九一米)あり、東北部にも二一三米の山地ありて南方に傾斜し、市街地との間に如地田圃拓け、甘藷・米等の農産あり、製絲工場ありて生絲の産多く、漁業また榮ゆ。口之津港

(明治三十二年開港)はもと三池炭の積替港として繁榮せしむ、三池港の開港(同四十二年)以來衰はず。社線口之津鐵道通じて東大屋驛(昭和四年開業)・口之津驛(昭和三年開業)・女學校前(昭和七年開業)を設け、また西北小濱町方面への縣道上にはバスを通じ交通便利なり。口之津港の西角に口之津燈臺(明治十三年設置)あり。燈質は不動白光にして光達距離は一七・五哩なり。此地は天正・慶長

クチハ

口羽村 鳥根縣石見國邑智郡の東南端。西は阿須那村に隣り、東北は廣島縣雙三郡作木村に、南は同高田郡川根村に界す。西端に興次郎山(四九八米)聳え、村内五〇〇米内外の山地連り、東北端を可愛川西北流し、興次郎山の南斜面を曲流して、東北より流れ来る支流出羽川を合するも平地に乏し。山間の溪流沿ひに水田發達し米・藁を主産し、酒の醸造も行はる。街道は中部南北及び各溪流に沿うて通ずるも交通便ならず。村名は出羽川の口、即ち口出羽の略なりといふ。毛利元就に仕へし口羽下野はこの地の人なり。

クチハヤシ

口林 備中國(岡山縣)の古地名。淺口郡に口林莊あり。莊名は正平九年の文書に見ゆ。其地今の里庄村の邊に當り、大字里見字口林はその遺稱なるべし。

クチマス

口益 肥後國(熊本縣)の古地名。和名抄、合志郡に口益郷あり。合志郡は明治二十九年、其の地域を菊池郡に合併せられしを以て、郷地は今の菊池郡内ならんも詳かならず。一に上益城郡白水村の地ならんといふ。

クチミナミ

口南村 廣島縣備後國比婆郡の西部。東は山内北村に、北は比和村に隣り、南は西城川を隔てて山内西村に、西南は細川村に、北は加東郡中東條村・上東條村に各隣接す。北端に赤土山(一九二米)、南端に石上山(二九米)聳え、中部を美濃川曲流して西南に流れ廣き氾濫原をつくり、沖土積を堆積す。美濃川の沖積平地は水田よく發達し米・麥(大麥・小麥・裸麥)を産し外に蔬菜・花卉・果實あり、製製品・竹製品等を出し多くは神戸市に供給す。縣道は中部美濃川に沿うて通じバスも便あり。もと美吉川・中吉川の二村と共に、和名抄、美濃郡吉川郷の地なり。

クツ

杵島 京都府加佐郡東大浦村、成生坊の北方約九軒、若狭灣に大小二個の無人島あり。其の中北にある稍々小さき杵島(二に離島とも、小島ともいふ)と云ひ、南にあるを冠島と呼ぶ。又島の群棲地たり。宮津府志、杵島はあくり二十三町、鷹・雉此に集く、年々田邊の人行きて之をおろすとなり。

クツカ

笏賀 伯耆國(鳥取縣)の古地名。和名抄、河村郡に笏賀郷あり。訓を問くも久那加と讀むものなるべし。此郷は河村郡の東北端にして因州赤谷驛の西に連り兵部省式、伯耆國笏賀馬五匹とあり譯傳を穿りしもの。のち長く因幡路の驛站をなせり。その地、今の東伯郡泊村の地。旭村に大字笏賀あるも同名異所とす。

クツガ

久津賀 鳥取縣東伯郡にありし村。大正七年木村及び三橋村と共に

村に對し、西は口北村及び雙三郡君田村に界す。北部には七〇〇米内外の山重疊し山脚は南に延び、南部にも四〇〇米餘の山ありて南端を西に流るる可愛川の支流西條川岸に急斜す。低地は中部溪間にありて水田拓げ、米・麥を主産し養蠶も行はれ木村また少からず。街道は中部をほほ南北に貫通するも交通便ならず。本村は金田・永田・常定・湯水(いま何れも大字)の合して成れるもの。

クチミヨカタ

口明方村 岐阜縣美濃郡上郡の中部。八幡町の東に隣り、東は和良村に、東南は西和良村に、北は奥明方村に、西は川合村に各隣接す。東部に京塚山(八六三米)聳え、東端には一〇〇〇米内外の山留連り、西端にも山地ありて山岳重疊し、中間を長良川の一支出田川西南に流れ、流域に狭長なる低地ありて耕地拓げ、米・麥・藁を産し薪炭も出す。街道は吉田川の右岸に沿うて通じ八幡町へバスも便あり。此地は和名抄、郡上郡和良郷の内なるべく、明治二十二年初納・小野・旭・市島・有徳の舊五箇村は組合町村をなししが、同三十年町村制施行の際、舊五箇村を合し、明方郷の南部なれば、北明方村と名づく。(安立寺) 大字市島にあり。眞宗本願寺派。松雲山と號す。仁平元年の創建、開基は大坪太郎左衛門たり。もと天台宗なりしが天文三年遺書和尚本願寺十一世證如上人の弟子となりて改宗す。因つて和尚を中

クツカケ

杵掛 諸俗の樹または村墟などの樹梢に、通行のものが草鞋または馬の香等を掛ける習俗より生じし語。近世はそこに神佛の祠などのある場合多く、その動機は一種の手向の氣持より生じたり。履き古せる草鞋の類を用ふることもあるも、多くは新しきものを用ひ、片方のみ掛け捧ぐることもあり。土地により履め目を定めて行ふむきもあるも、その對象となる神は道祖神の場合多く、その他庚申とか山の神等之に次ぐ。その理由は未だ不詳なるも諸國の神社・佛團の山門等に、巨大なる草鞋を上ぐる習俗はその一の變形と見らる。各地にある杵掛なる地名は、この習俗より出でしものにして、有名な信濃縣木崎の四輪の杵掛宿なども、山道にかゝる旅人が、先づこゝで神を祀りしを意味す。之を通行人が一種の群集心理より、同じ場所に来て古香を引掛けしなりとか、或は香を掛けて賣る店、即ち一つの驛亭のありし意とするは單なる想像説なり。

クツカケ

美城縣下徳園郡鳥部の東部。南は岩井町との間に弓馬田村を挟み、西は七重村に接し、東北は結城郡飯沼村と界す。面積九・六平方軒、飯沼川に沿ふ低濕地の西に當る平坦なる臺地にて畑地廣く田地これに次ぐ。農村にて、麥(小麥・大麥)を主とし米の産あり。社線常盤鐵道石下驛(結城郡石下町)へバスも便あり。

クツカケ

境内に本堂・東棟・寺門・太鼓堂・鐘樓・土藏等あり。

クチヤマ

口山村 徳島縣阿波國美馬郡の東部。吉野川の支流穴吹川の谷に隣り、南は古宮村、西は瀧山村、西北は三島村、東北は穴吹町に隣り、東は麻植郡三山村・中枝村に界す。面積四〇〇平方軒に餘るも石鏡山脈に屬する友内山(一〇七三米)は西南端に、奥野山(一一一四米)・高越山(一一二三米)は東端に聳えて殆んど山地をなす。ただ穴吹川は南隣古宮村に發して北流し東西山地の中間を流れて穴吹町に出で、川の谷に沿ひて多少の田畑拓く。養蠶を主とし藁を産する外に麥・米を出し煙草・巻煙を産す。穴吹町より古宮村を経て木屋平村(麻植郡)に至るバスの道路に當り交通不便ならず。此地に延喜式、美馬郡伊射那美神社あり。また住時忌部氏の居せし所といひ古くより居住に適せし所。宇野野の穴吹川流域に首野の御堂といふ井戸の如き竅穴あり、俗に御堂と稱し畏敬す。(巻煙) 此附近山村に産するも特に木村宇赤松名と一字村大字一字とが最も著はる。數十年前までは、これを製して貯藏し置き、來客ありたる際菓子代用として饗應せしに過ぎざりしが、現時にありては一の名産として縣内に於て販賣せらるるに止らず、他府縣に移出さるるに至る。製法は皮を割き細に換み竿にかけ、二十日あまり陽乾となし硬さを感ずるに至りて

クチヨカワ

口吉川村 兵庫縣播磨國美蓋郡の北部。東は中吉川村

クツカ

クツカ

この地古くは和名抄、鹿島郡塔尾郷の内...

【香掛】長野縣信濃國北佐久郡輕井澤町...

クツキ

【香掛】愛知縣愛知郡にありし村。明治三...

【香掛】↓青木村(長野縣小縣郡)...

クツカワ

【香掛】↓大枝村(京都府乙訓郡)...

【香掛】↓品野町(愛知縣春日井郡)...

クツキ

【香掛】↓大枝村(京都府乙訓郡)...

【香掛】↓品野町(愛知縣春日井郡)...

クツキ

南は霞貫郡葛川村に接す。面積一六五...

【香掛】↓大枝村(京都府乙訓郡)...

クツキ

【香掛】↓品野町(愛知縣春日井郡)...

クツキ

【香掛】↓品野町(愛知縣春日井郡)...

INOH

INOH

共に中筋地方と呼称する。西北部は山勢峻嶇として平地に突出し頂上平坦、渡川の兩岸を俯瞰し形勢要害を極め、ここに栗本城あり。天正二年一住氏渡川合戦の古跡として著る。土佐國司一住五代兼定卿は晩年政に倦み、泰元親のため土佐國を逐げ九州に落延び歸翁大友宗麟に頼る。宗麟も兵を以て授け、卿を伊豫地に渡したれば南豫の諸城風を望みて之に味方し、卿も勢を得てまた土佐國に入り栗本城を奪ふ。泰元親は七千の大兵を率ゑ直にこれに向ひ渡川を押渡りて戦ふ。兼定卿の軍よく防ぎしも、泰家の諸將勢烈しくかかれば伊豫の兵城下に討たるも二百餘人に及び、兼定卿も今はかなはじと、三日の後に栗本城を明け渡し、再び南豫の地に退却せられたり。元親が橋多の郡を全く席捲し四國經略の素地を作りしは實にこの一戦の功なりといふ。〔橋行李産地〕本村及び平田・中筋・東中筋等の諸村はゆる中筋地方は近年行李柳の栽植盛に行はれ、橋多行李として世に知らる。此中筋地方は良田多きも昔より渡川大水の時氾濫のため損害多く例年收穫殆ど播種の一割に過ぎず。然るに明治十年前後橋村(いま東中筋村)戸長中平重茂之を嘆き水田利用の法を考へ、但馬國崎郡の風に水田に行李柳を植ふ利潤極めて大なりと聞き、親ら其地に進き實地を視察し、苗木を携へかへり之を窪田に植ふ付たりしに果して好成績を得

得、或は大水の時浸水芻旬に及ぶも樹性少しの被害をも認めず。是に於て愈々其業を擴張し、明治二十年頃但馬より行李製造教師を雇入れ、當所に於て柳行李製法に取かかりしに、品質強度、城崎の本場より劣らず愈々評價を博し橋多行李の名は俄かに知らるに至る。(須賀神社)大字入田に鎮座。神社。祭神、須賀之男命。創立年代不詳。もと既開牛頭天王と稱す。寛文十二年以來敷地社殿造営のこゝとあり。また當村内下組部落の産土神と崇めらる。明治元年現社名に改稱す。例祭、七月十七日、十月二十三日。

クトニシ 久努西村

静岡縣遠江國周智郡の南端。山梨町・宇刈村の南隣にて、東南西は磐田郡久努村・袋井町・今井村に界す。面積約七平方町あり、東部北部は東隣久努村西北部の丘陵のつづきなれど、その他は太田川中流々域に屬する平地の一部に當り田地廣く拓く。米を主産し、茶も出さず。社縁静岡電鐵の可勝驛あり、また袋井町より森町・二俣町(磐田郡)方面への道路に當りバスの便あり。村内に袋井神社燈臺あり。此地は和名抄、山名郡久努郷の地なり。中世久能と稱せしが、今は久努西村と稱す。大字城越の地に今川氏の館址あり。今川了俊は横西探題たりしが、幕府の疑を受け駿河に遷り後幕府より此地を賜ひ相模縣澤より此地に移りて遷る。辨要抄・落書録類などは此地に於ける晩年の逸作なり。

クドヤマ 九度山町

和歌山縣紀伊國伊都郡の中部。高野山の北麓、紀ノ川中流の南岸に位し、東は學文路村・河根村に、西は天野村・見好村に隣り、北は川を隔てて高野町町・應其村に對す。面積約二・五平方町、大部分は山地なるも北部の傾斜面と紀ノ川南岸の平地には耕地拓く。柑橘・繭糸の農産物あり。社縁南海鐵道(電車)高野線通じ大字九度山に九度山驛(大正十三年開業)・推出に高野下驛(大正十四年開業)を置き、社縁高野山電鐵は高野下驛より起り下古澤・上古澤驛共に昭和三年開業)を設け高野登山口として著る。古くはこの地の慈尊院

クナシロ 國後島

〔國後島〕北海道千島列島の西南端。根室支庁管内國後郡を成す。泊・留夜別の二村に分る。面積一五二〇平方町。幾多の火山屹立し高峻なる地勢を呈す。即ち東北に茶々登・メルイ岳聳え、西南に羅白嶽・泊山あり、何れもコニーテ型の火山。是等諸山の間に裾野發達し沼澤も多し。海岸線の出入乏しく、ただ南端の計羅武夷崎の砂嘴に據せられ、根室海峡に面する泊灣が、錨地として利用さるるに過ぎず。氣温低く、頻繁なる海霧の襲來は耕作を不適當とし、住民は漁業に従事するもの最も多く、鱒・鮭・昆布・帆立貝等の産あり。道路は泊より東海岸沿ひに乳岩路に至るもの以外は車馬道せざるも、發動機船の便あり。泊港・根室港との間に應命令の定期船發着す。(重松ノ井)泊村にあり。享和元年七月幕府日付封太政官還回して泊に至る。此地會所の所在地なるも水質不具飲料に適せず。政變屬東重松五郎に命じて井を造らしむ。熊五郎地を相し一井を鑿つ。其水清潤、人大に喜ぶ。蝦夷古より井を鑿つことを知らず。始めて見て驚嘆し和人の智巧測るべからずとなす。正義、井を名づけて重松の井と稱し國風を諷す。いく世々も飲て知るらんつくりにすいたる水の深きめくみよ。(チヤチャヤ)國後島の東北に聳ゆる休火山。海拔凡そ一七〇〇米。一の富士形の頂上に覆た一の

クナド 久那土村

山梨縣甲斐國西八代郡の西部。市川大門町の南方約一二軒、富士川峡谷の東岸にて、川との間に鴨狩津向村を隔て、南は共和村・富里村に、北は宮原・落居・山保の三村に、東

四十二歳の厄除の爲に彫刻すといふ。寺城より紀ノ川邊の院望頗る佳なり。(高野山町石)慈尊院より高野山奥の院に至る間に町石二百七基・里石四基あり、花崗岩を以て造り高さ三米餘、上は五輪形にして五大の梵字を刻し塔身に慈尊院よりの町敷又は里敷及び施主の官職姓名を書す。この町石はもと弘法大師が登山者の爲に木にて卒都婆を作り道筋に建てられしを濫觴とす。その後約四百五十年岡山豊敷上人の發願により、上は後醍醐天皇を始め奉り、下は鎌倉北條家その他大名以下の寄進を得て、拮据十餘年水元年間に至り遂に完成することを得たるものにて、その願文は今も現存す。往昔天皇御臨幸の際に皆この道に據らせ給ひ、殊に後宇多法皇の如きは風傘を捨てさせ給ひて町石毎に玉歩を停め、御念誦あらせ給ひしとぞ。正和二年法皇高野山に御幸侍りし時、僧上道順「高野山みゆきの跡はおほけれどまことの道は今ぞ見えける」と詠す。(眞田屋敷)傳へいふ、眞田昌幸その子幸村閑居の地なりと。眞田氏は代々信州上田の城主にして、關ヶ原の戦に昌幸父子は石田勢に屬し、上田城を守りしが、軍敗れて高野山に逃れ、のち九度山に移り、慶長年中、昌幸死しこの地に葬る。幸村討死の後、土人等これを寺となし、善名稱院といふも、今に眞田屋敷の名を存す。眞田氏閑居の時、紐を製してひさざしが、是れ今の眞田紐の

遺類なりと。クナ 久那村 埼玉縣武蔵國秩父郡の東南部。荒川の左岸に沿ひ、秩父町の西南方にてこれと影森村を隔て、南は中川村、西北は長若村に隣る。面積僅に五・六三平方町、大部分は西北端に連互する山地の斜面にてただ東部川邊に小低地あり。農産を主業とし繭を産し外に多少の養蚕を興す。秩父町に近くまた秩父鐵道の影森・浦山口・武州中川の諸驛に近きも荒川を隔つるため交通の便なほよからず。本村はもと中川村に屬せしが荒川を隔てて不便なにより、明治二十六年大字久那を分割獨立して久那村となす。(久昌寺)(久那岩井堂)曹洞宗。紫林山と號し、開山眞言正觀たり。秩父三十三所第二十五番札所久那岩井堂(池堂)を管理す。久那岩井堂は本尊聖觀世音にして中古、岩屋山御手判寺と號せり。御詠歌「水上はいづくなるらん岩井堂あさひもくなく夕陽輝く」(橋立寺)大字影森にあり。曹洞宗。石龍山と號し俗に橋立觀音の名を以て著る。秩父三十三所第二十八番札所にして、本尊は馬頭觀世音なり。寺域武甲山西麓にありて橋立の清流を前にし寺背に懸崖高く聳え、石灰岩の洞窟あり、洞窟奇巖怪石多く、鐘乳石・石筍・石柱の奇形に富む。この洞窟に入るを穴窟定と云ひ、一年の入洞者三萬を越すといふ。御詠歌「露の海立ちかきなるは雲の浪類ひあらじとわたる橋立」

紀海中津を開山とす。往時國內末寺二十八年設置を述べ、寺領五十四貫を有せし、

【國東郡】 開設後遺。大分縣國東半島にあり。遠見郡八坂村にある日豊本線

クニサキ 國崎(郡) 國崎 國崎郡佐賀市村の

大字。省縣兩毛驛の國定驛(明治二十二年設置)を置く。幕末の俠客國定忠次の

クニシ 國司 安藝國(廣島縣)の古地名。高田郡に國司莊あり。

クニタ 柞田 柞田 香川縣讃岐國三豐郡の南部に

クニタカ 國高村 福井縣越前國今立郡の西南部。日野川中流の右岸に

クニタチ 國立 東京府北多摩郡谷保村にある文化村。行政上の町制にあ

高師泰等と戦ひて敗り、延元二年金時城の救援に向ふ途次師泰等の軍に捉せられ

クニサキ 國崎(郡) 國崎 國崎郡佐賀市村の

クニシ 國司 安藝國(廣島縣)の古地名。高田郡に國司莊あり。

クニタ 柞田 柞田 香川縣讃岐國三豐郡の南部に

クニタラ—クニト

年設置)ある爲か其名つく。東京驛より五十分の時間距離にあり。此地はもと鎌木・赤松等の繁茂せる武蔵野の一部なりしが、昭和四年二月十五日省線電車の開通に伴ひ、東京高等音楽学校・東京商科大学等移轉し、更に国立小學校も建設せられ、文化住宅地は學園都市として發達を見るに至り。

クニタテ

国立 山梨縣東八代郡にありし村。明治三十六年一櫻村・清野村と共に廢せられ、宮村を置く。

クニツ

國津村 三重縣伊賀國名賀郡の南部。名張町の東南に近く、その間に西隣の箕曲村を隔て、北は比奈知村、東は穰生村に隣り、東南は一志郡太郎生村、西南は奈良縣宇陀郡曾爾村と界す。面積約二七・四平方軒あるも、南境に國見山(八六〇米)ありて村の南半はその北面の山地をなし、中部以北は二一三〇米の山地をなし、西北に傾斜する平坦面をなす。また東境には尼ヶ岳の西北山麓に延び、その西側を長瀬川北流して溪谷をつくる。山林多きもまた田畑ありて、米・藁及び林産を出す。名張町へ道路通ずるも交通は便利ならず。古くは和名抄、名張郡夏見郷の内なるか。中世は六箇山郷と呼ぶ地に屬せり。村は神屋・奈垣・布生・長瀬の四大字を含む、神屋に役場を置く。

クニト

國富 省縣管内の一郷(大正二年置)

水原津野國引きとせる時、引き来れる國土の動かざるやうな石(現存す)を打立てられしより國引の村といはれしを、後世國引村といふに至れりと傳ふ。此地古くは和名抄、出雲郡美津郡及び宇賀郡に屬す。大字美談・宇賀はそれぞれ之の遺稱なるべし。のち國富郷・宇賀郷に屬す。宇賀郷社・都武自神社・縣神社は何れも式内社・記内社なり。出雲風土記・出雲郡・美津郷、郡家正北九里二百四十歩、所造天下大神御子、和加布都努志命、天地初創之後、天御領田之長供奉坐之、即彼神坐郷中、故云三太三(神龜三年改字美談)即有正倉、同・宇賀郷、郡家正北一十七里廿五歩、所造天下大神命、神座神座命御子鏡日女命、爾時女神不音、遙臨之時、大神向來給所、是則此郷、故云宇賀、即北赤濱有磯、名磯磯、高一丈許、上生三松木、雲蓋、磯色人之朝夕如往來、又木枝人之如攀引、磯西西方有宮戸、高廣各六尺許、宮内有穴、人不得入、不知深淺也、夢至此磯窟之邊、者必死、故俗人自古至今、號云黃泉之坂(泉之穴也) 鳥取國書に「出雲國宇賀地頭職、所管寄附國寺根本堂師堂也、可事御祈禱者、天氣如此、悉之以狀、建武二年三月十八日、宮内權大輔・伴兼光三年文書に出雲國富郷の名見ゆ。(縣神社) 大字國富宇賀場に鎮座。村社。祭神、若御座命、太玉命、手力雄命、外敷神。一に天德日命を祀る

クニト—クニフ

とすの流あり。延喜式内社、近村の産土神と崇めらる。例祭、五月、九月十六日。(縣國寺) 大字國富にあり。臨濟宗妙心寺派。富興山と號し、古昔富郷の居城たりしが、のち孤峯覺明を請じて道場となす。爾來寺門隆盛を極め今日に至る。近在縣に見る瓦刹にして風光絶佳、殊に楓樹を以て著ばる。(興源寺) 大字美談にあり。臨濟宗南禪寺派。仙洞山と號す。本堂阿彌陀如来。小早川氏の創建、開山は月庭和尚たり。弘治元年小早川隆景、因幡の戰に敗れ主従八騎にて安藝に歸る途次此地にて自刃す、後隆景の裔孫來りてその遺廟のため一寺を創すと。按ずるに、隆景は豊公五奉行の一人にて慶長二年に没せり、恐らく何等かの誤なるべし。(三支寺) 大字日宇賀にあり。臨濟宗妙心寺派。正定山と號す。本堂釋迦如来。草創年代不詳。もと天台宗の瓦刹たりしが、近古雲樹寺の僧來りて禪宗に改む。本堂(八間四面)・庫裡・支園・新座敷・土蔵・觀音堂・地藏堂・秋葉社等あり。本堂後の中中には弘法大師八十八箇所を安んず、明治年中中興、滋州和尙の建立に係る。境域廣闊、檀家六十戸を有し近郷の名刹たり。

大府のため山崩崩壊し堂宇悉く埋没す。同二年雲居寺郡藏寶所靈夢によりて此地に來り、尊像を泥中に得たり。天皇親臨の餘り輪旨を給ひ三箇年間國稅を造替料とせらる、故に伽藍の修葺成り輪奐の美稱時に倍す。時に寺務料として田地一萬六千五百歩を賜ふ。建久元年源朝親先世成佛果のため三重塔を建立し國富郷にて田五町を寄進す。延文四年國下河沙彌朝佛願主となり國司細川相模守清氏及び庶下に依頼して大に堂宇の修葺を加ふ。同年勅使勸修寺大納言下向、入佛供養あり。時に寺門派に屬す。應永五年一山火災に罹るや、後小松上皇、將軍義教に命じて再建せしめらる。この時栗田口日蓮陀末となる。永享七年再び火災に遭ひ本尊・繪卷を除くほか他は悉く燒失す。後寶徳二年天皇勅して定宗師を當山に住せしめ再び真言宗に改む。永正十一年尊傳法親王堂宇の類證せんことを受ひ自ら願主となり、地頭武田元信・領主長井兼業頭等と戮力して修葺を加へ給ふ。大永四年後柏原天皇、人見丹後守に勅して、先皇後土御門院二十五回聖忌のため七百二十日間本尊を開闢して大法會を設けせしむ。爾後この例に準じて三十三年毎に開帳供養を行はる。文祿四年秋山城之介實春に勧じて堂宇を修葺せしめらる。寛永

クニナカ

國中村 鳥取縣因幡國八

クニノフ

國延 伯耆國(鳥取縣)の

十四年德川家光山門を建立し、次いで正保三年鐘樓を再建す。現在山門・寶藏・庫裡・客殿・講堂・鐘樓等ありて壯麗を極む。寺域三面山を繞らし風致幽邃にして前に平野折れ後天ヶ城址時つ。寺寶中十一面觀音立像一軀は木造極彩色、鎌倉末期の作。羽賀寺縁起一巻は紙本書、陽光院太上天皇御ち誠仁親王、跋文は後陽成天皇宸筆、長十四尺五寸五分、堅一尺七寸、共に國寶たり。(正林庵) 大字太良庄にあり。曹洞宗。草創年次第不詳。觀音堂安置の如意輪觀音半圓像一軀は國寶にして總高一尺二分、半圓思惟の形相をなし、奈良中宮寺・京都廣隆寺の諸像と同形にして天平期を下らざる作と推定せらる。此地方の古傳として珍重すべきものとす。

クニハラ

訓原 愛知縣西春日井郡

りて本流に合し、この本支流の合流點以南に平地ありて田畑よく拓く。米を主産し、牛之に次ぐ。鳥取市より南方智頭町への智頭街道は千代川の東岸に沿ひて上り、バスを通じ、また省線因美線も略ぼ之に並行し、大字釜口に國英群(大正八年設置)を設け交通便利なり。此地古くは和名抄、八上郡石田郷の地。のち石田荘に屬す。大字郷原字柏谷に柏尾越あり、此地は兵部省式の因幡國柏尾驛馬八匹とある驛址ならん。大字高福に御座する多加牟久神社は式内社。(最勝寺)大字片山にあり。古義眞言宗。靈石山彌勒院と號し御室末たり。和銅二年行基の圓朝に係る。天曆元年良源御堂及び四十二坊を造營し天台宗を奉ぜしが、快樂の時眞言宗に改む。建久五年源範頼の長子範國寺領五百石を附す。天正九年兵火に罹り全燒せしも後幾許もなく再建せり。池田氏入國以來寺領若干を附せらる。

【國見】 御明神村(岩手縣岩手郡) 鎮村と河邊郡豊岩村との境界に位し、標高一二二米。西方斜面には沼湖散在し、西麓秋田平野を地物川流々と北西流す。一水西斜面より發源して南流し、鮎川に合す。標高低けれども西方日本海岸より三軒の近くに起り、視界相當に廣し。山頂より西方に洋々たる日本海の碧波を眺め、北方に秋田市の街衢を俯瞰し、東麓地物川の銀蛇を望見す。

【國見】 厚徳山(福島縣)の別名。 【國見山】 阿武隈山脈南端部の準平原地帯に隆起する一峯。水戸市の北方約二五

【國見山】 富山縣中新川郡にある山。日本北アルプス立山群峯中の一峯。標高二六二米。山體輝石安山岩より構成せらる。南東方に立山群土山(二八七二米)聳立し、北西方は地獄谷を隔てて奥大日岳(二六〇六米)對峙す。西方には彌陀ヶ原打嶺く。山頂より東方に立山群峯を仰ぎ、西方には越中國の山河を望見す。西麓立山村(舊)村に北山堂を築いて立山本峯への登山路は、北斜面を西方より東方に通じ、立山温泉より室堂への麓路は南方斜面を南西より北東に曲折す。

【國見山】 白山火山脈の一峯。福井市の西方約一二軒、日本海に面して時々山。福井縣丹生郡國見村・西安居村と坂井郡本郷村との境界に跨る。標高五六六米。西南方に金尾山(六二五米)、北方に聖里山(高須山四三七米)時々。山中に大塚と稱する土臺あり。高さ約五米にして石を以て築く。古の烽火臺なりと。この上に數十箇の檜の木あり。この山は日本海に臨むを以て附近航海者の好目標なり。

【國見山】 泰山山脈南部に於ける東方山脈の一峯。大臺ヶ原山塊の北北東約一二軒、三重縣多氣郡大杉谷村に時々。標高一二八三米。北西方に池ノ木屋山(一三九六米)時々。池ノ木屋山との樹合より大和谷の淡水を流して東流し、北東流する宮川に合す。山體森林を以て掩れ、又山中到る處瀑布あり。この山は毒蛇の棲息地なる故登山には注意を要す。池ノ木屋山の北西麓に聳立する國見山(一四一九米)と區別し、この山を大杉谷の國見山と云ふ。

【國見山】 泰山山脈の一峰。奈良縣吉野郡四郷村と三重縣飯南郡森村との境界に時々。標高一四一九米。北方は泰山山脈を東西に横斷する縣道伊勢街道に當る高見峠最高點を経て高見山(一四九米)に續き、南麓は池ノ木屋山(一三九六米)に達す。東斜面は柳田川の上流地にして、西斜面は吉野川の一支出川の發源地たり。山頂よりの眺望は雄偉にして、南方に大臺ヶ原山の群山、西方に大臺山脈の連嶺を眺め、北方に曾爾の山々を望む。山頂は平坦なる草生地にして、皇祖御嶺國見岳と大書せる大いなる標柱立つ。

【國見山】 四國山脈の一峯。徳島縣美馬郡西祖谷山村に屬し、北麓は延びて三好郡三郷村に亘る。標高一四〇九米。山體結晶片岩より構成せらる。東麓を祖谷川、西麓を吉野川共に北流し、北方約七軒の地にて合流す。この附近の祖谷川は祖谷溪と稱せらるる勝地をなし、又、吉野川の沿岸には大歩危・小歩危の溪筋路通す。この東麓地方は平氏落人部落としてその名を知らる。祖谷溪・大歩危・小歩危。

クニミミ——クニミ

【國見山】阿蘇火山脈多良火山群北西部の一峯。佐世保市の北東約一・一軒、長崎縣北松浦郡世知原村と佐賀縣西松浦郡二里村とに跨る。山體火山岩より成る。北東は鳥帽子山に接し、南方は東西に走る山路果ノ木の越最高點を経て西岳に達する。西斜面より佐々川源流し西流して海に注ぐ。東麓は有田川に阻まれ、川は北流して伊萬里湖に注ぐ。山頂よりの眺望頗る雄大、また紅葉の名所として知らる。登山は多く西麓佐世保鐵道世知原驛より下車して行はる。紅葉期は登山者夥からず。

本縣球磨郡人吉町の南南東約一五軒、宮崎縣西諸縣郡加久藤村にあり。標高八六一米。北麓は熊本縣球磨郡重田村に臨む。西麓に加久藤村方面より人吉町方面に通ずる縣道南北に走る。この縣道の西方彼方に百貫山(六九三米)對峙す。

【國見山】八代灣(不知火海)の東岸より東方二三・四軒、熊本縣球磨郡五木村に屬する山。標高一二四一・一四一・一四一・一四一(一四四米)に連る。北麓は白髮岳(一四四米)に連る。球磨川支流川邊川は東麓を流して南西流し、西麓を南東流する支流をこの山の南方にて併せて南流す。

【國見山】熊本縣球磨郡人吉町の南東方約二〇軒に當り、同郡上村に屬す。標高一二一七米。北麓は白髮岳(一四一七米)陀峯水岳(一四〇四米)に連る。北東方には小白髮岳(一一八三米)、南東方にはクニヨゴ岳(九八〇米)對峙す。クニヨゴ岳との結合より大流川の一支岩瀬川源流して南東流す。

【國見山】熊本市の北北東、大牟田市の東北東いづれも三六軒前後に當り、熊本縣本郡岳間村・内田村と福岡縣八女郡矢部村との境界に跨る。標高一〇一八米。東麓は三國山(九九四米)、北西麓は休鹿山(八五七米)に連り、北方に支嶺南門岳(九二二米)續く。南東方八方ヶ岳(一〇五二米)との結合より菊池川の一支出内田川源流して西南流す。山形秀麗にして、山名の如く眺望廣闊、眼前・豊後・筑後の三國の山河を見渡し、阿蘇・九重・英彦・脊振の諸岳を指し、遠く有明海を隔てて雲仙岳を望見す。頂上部は三・四坪程なり。山中の溪流には岩魚多し。登山は通常西麓岳間村茂田井より行はる。この山、麓上りの俗稱あり。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】熊本縣球磨郡人吉町の南東方約二〇軒に當り、同郡上村に屬す。標高一二一七米。北麓は白髮岳(一四一七米)陀峯水岳(一四〇四米)に連る。北東方には小白髮岳(一一八三米)、南東方にはクニヨゴ岳(九八〇米)對峙す。クニヨゴ岳との結合より大流川の一支岩瀬川源流して南東流す。

【國見山】熊本縣球磨郡人吉町の南東方約二〇軒に當り、同郡上村に屬す。標高一二一七米。北麓は白髮岳(一四一七米)陀峯水岳(一四〇四米)に連る。北東方には小白髮岳(一一八三米)、南東方にはクニヨゴ岳(九八〇米)對峙す。クニヨゴ岳との結合より大流川の一支岩瀬川源流して南東流す。

伊豫三芳野(三芳村内)にも近く交通不便ならず。文獻の載すべきものなく史蹟詳ならず。大字桑は昔の桑村郡名の起源地といふ。郷社周敷神社は式内社。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

【國見山】九州山脈山塊の一峯。主峯山房山(七二二米)の南東方約二二軒に當り、宮崎縣兒湯郡三村村・三村村・西米良村の三村境界に跨り、標高一〇三六米。山體中生層より成る。北麓は一ツ瀬川、西麓をその支流三財川流し、いづれも東南流す。南西方三財川を隔てて婦部岳(一一二三米)對峙す。

次ぎ多少の産品を出す。縣道低地を西南より東北に通じ、また高岡市へパスの便あり。此地或は和名抄、瀧波郡川合郷に屬せしものか。中世には國吉郷と稱し、村制施行の際國吉村と改む。村内の小矢郡川の間に頭川温泉あり。泉質は炭酸泉にして加熱浴用なり。概して發熱向なり。夏は涼しく、秋は鬱鬱・茸等等に逸し、附近には赤丸公園・馬場平古墳などあり。

クヌー 久努

【久努(國)】國造本紀に仲哀帝印播足尼を久努國造となすと見ゆ。大化改新の際國を併めて遠江國山名郡に屬せしものか。和名抄、山名郡の郷名に久努あり。久努國の地は大體周智・山名(いま磐田郡の一部)の二郡の地に當るもの如し。いま磐田郡に久努村、周知郡に久努西村ありて相隣る。以てその位置の大體を知るを得。久努村はいまグドと訓むも大字に國本あり、國本の國は即ち久努の遺稱の轉と見るべし。また久努西村も同じくグドニジと稱するも、大字の久努は即ちグドの轉と見るを妥當なりとす。

【久努】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓すること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

宮文和四年文書に遠江國久野郷と見ゆるは即ち本郷を稱せしもの、のち久能にも作る。其地いま周智郡久努西村に當り、大字久能は其遺稱の轉なり。

クヌガノミチ 北陸道

神紀・十年「九月丙戌朔甲午、以大成命(皇孫)北陸に景行紀二十五年、遠武内宿禰、命(皇孫)北陸及東方諸國之地形且百姓之消息也」崇峻紀・二年「遣阿部臣於北陸道、使(皇孫)越等諸國地」

クヌギヤマ 桐山村

下新川郡の北部。黒部川下流流域平野の東北部に位し、西へ入善町に接し、北は日本海岸との間に横山村を隔て、東は大庄村、南は新屋村に隣る。面積五・一平方軒の小村なるも土地低平にて全村田地拓け、山林・原野は僅に八町歩餘に過ぎず。米の産多し多少の麥を出す。國道(北陸道)北部を横ぎり、入善町・舟見町間の道路は南部を對し走り、いづれもパスの便あり、また省線北陸本線の入善驛にも近く交通は便利なり。いま桐山・小杉・寛又・桐山新・田ノ又・日吉の六大字より成り、桐山に役場を設く。

クネ 久根

【久野牧】上野國(群馬縣)の古地名。延喜左馬寮式に見ゆる御牧の一。その所在詳ならず。或は久野は長野の草體の誤ならんといふ。長野牧は日本後醍醐天皇二年十月の條に上野國利根郡長野牧と見ゆ。長野牧の地はいま利根郡の古馬牧村ならんといふ。大字に上牧・下牧あり、古來牧場なりしを知るべし。拾芥抄・中・本朝國郡・牧名・利處・有馬・沼尾・群志・久野・市代・大鹽・豊山・新屋、已上上野。

クネベツ 久根別

省線江蒸線の一驛(大正二年設置)。北海道渡島國上磯郡上磯町にあり。

クノ 來村

愛媛縣伊豫國北宇和郡の中央部。宇和島市の南隣にて、東南は清

く、明治廿二年簡易水道敷設を見るまで流水を以て飲料水とせり。下橋澤は湧水地を中心として發生せる聚落にて水神の傳説あり。上橋澤には應仁年間葛西氏の居りし館あり故方形の聚落をなす。現在兩郡落とも稻作・養蠶を主とせるも、副業として梨・桃・櫻桃等の果樹栽培行はれ、殊に林檎は大正の末期まで青森林檎に匹敵する隆盛を示せしも現今は殆ど消滅せり。

【久野牧】上野國(群馬縣)の古地名。延喜左馬寮式に見ゆる御牧の一。その所在詳ならず。或は久野は長野の草體の誤ならんといふ。長野牧は日本後醍醐天皇二年十月の條に上野國利根郡長野牧と見ゆ。長野牧の地はいま利根郡の古馬牧村ならんといふ。大字に上牧・下牧あり、古來牧場なりしを知るべし。拾芥抄・中・本朝國郡・牧名・利處・有馬・沼尾・群志・久野・市代・大鹽・豊山・新屋、已上上野。

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

の道路は西は靜岡縣、東は江尻驛より自動車の便あり。南方屋下の地域は冬季早生麥の栽培を以て著る。海岸の道路に沿ひ石と石との間に蔦を栽培し、石垣栽培と稱して久能獨特のものとする。前方暖流流るる海に臨み、背中には有渡山絶壁の南南東に面するあり、冬季は北風を防ぐと共に太陽熱を十分に吸収し、且つ輻射する等、天然の條件悉く備はる。さればこの地方は海濱にして而も漁業者殆ど無く、蔦のみならず、豌豆・胡瓜其他の蔬菜を不時栽培して東京其他の市場へ搬出し以て生計を立つ。近年石垣の代りにコンクリート壁を設けて栽培の合理化を圖ること始まり、この地一帯之に倣ふ。貞應源遺記「宇波の濱を過れば浪の音風の聲珠にこころすむ所なり。濱の東北に雲地の山寺あり、四方たかくはれて四明天台の末寺たり。……僧堂の名を聞けば、行基菩薩の建立。……僧止住のみね三百餘字の禪院置ゆたかなり。雲船の石神山腰に護りて惡障をふせぎ、天形の木容は寺内に納めて善業をなす。千手觀音の山より石船に乗て此地にくだり給ひけり、其身善神と成て、山路の大阪に石船護法と號す。彼海岸山の千眼は南方より北へ飛で有縁を此山に導く、宇度濱の品天面を地を得て舞樂を此濱にまなべり。むかし稻河太夫といふ人、天人の濱松の下に樂をしらべて舞けるをみて、まなび舞けり。又人の見るをみて鳥のごとくに

足利市を距る東南約六軒、渡良瀬川の南岸に沿ひ、西は堂田村に達り、北は川を挟みて毛野・富田・吾妻の三村と相對し、南は群馬縣邑樂郡渡瀬村・多々良村と界す。面積六・二平方軒に近き小村なれども土地概ね平坦にして田畑よく拓け、純農村にて米を主とし藁・麥の産あり。足利市・館林町間の縣道中部を對し通過バス往來して交通不便ならず。此地或は和名抄堂田郡深川郷の内に屬せしもの如し。明治二十二年久保田・野田・瑞穂野を合せて本村を建つるの際、各一字を取りて久野村と稱す。鎌倉大草紙に足利庄高橋野田の域と見ゆるは此地ならん。また同書に堂田氏と相並びて古河公方の羽翼たりし野田氏は此地の住人ならん。金山新田老談記に、上杉謙信は新田の早鐘の音を聞き、急ぎ渡良瀬川を越え、佐野足利の境なる岡崎山に著す。新田氏も筒胡・市場・野田・堂田・川崎の邊まで人数を出し、隣邊の勢を集めて之に對すといふ。この野田は蓋し此地なり。

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

【久能山】靜岡市と清水市との境上にある山。廣義には有渡山(三〇八米)を含む一小山塊の稱にして、狹義には有渡山の南方にそれよりやや低く孤立せる一小丘にして東照宮の存在する山をいふ。この小丘は標高二八〇米。形勝の地なるを以て、久能寺と稱する天台宗の互利ありしが、永祿十二年武田信玄使して山東に置き、その地に城を築く。元和二年徳川家康薨するや遺命して此山に葬らしめ、翌年日光に改葬後壯麗なる廟を建立してその靈を祀る。東照宮即ちこれにして、別格官幣社に列し、社殿門廊は特別保護建築物に指定せらる。什寶類頗る多く、刀劍にして國寶に列するもの十三口に及ぶ。久能地塊の東に三股の砂嘴より成る三保松原あり。地形的には久能地塊は約三〇〇米の階層を有し、北に傾斜せる傾動地塊なり。南方の急崖は退却せる海崖にて、下に東西に亘る有渡濱あり、三保松原の砂嘴は、沿岸潮流によりて生じたる堆積物なり。有渡山の頂上は平坦なる原形を存し、其處に茶畑あり。こゝより三保松原の鳥瞰的眺望は、三分數を明かに區別して認め、絶景たり。久能山へ

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

【久野】遠江國(靜岡縣)山名郡の古地名。この地は國造本紀に見ゆる久努國の、國郡制定の時郷となり本郡に屬せしものならん。和名抄に郷名見ゆ。而して諸本には久度と訓ずれど、高山寺本には訓を缺く。努をドと訓ずること他に例なきを以てよろしくグドと訓むべし。また磐野新

幣社。祭神、徳川家康。元和二年四月十七日家康の戦府に遷するや、大内記稱照久は遺命を奉じて齋主となり、城を廢して此處に葬り、墓前に廟社を建つ。同三年十二月社殿落成、二月勅して權現號を賜ひ、正一位を贈らる。三月十五日改葬の儀ありて遺骸を下野日光山に移す。時に天河正の歌あり、あはれあるなればなしとするかなる久能の御山の神うつしかな。正保二年、宮城宣下あり、爾後東照宮と稱す。舊社領三千石。初め榑原氏神職たりしが、照久の子照徳の時辭して榑原となり、其後裔世襲その職を奉じ、與力八騎同心三十人これに附屬して此地を護る。社壇壯麗精美を極む。日光に比すれば固より遜色ありと雖も、また金碧輝煌たり。社後に廟所あり、長さ二十五間の石欄を廻らし、中に一丈五尺の石塔を置く。當時侯伯の獻進せる銅石の燈籠凡そ六十七基あり。社壇の傍なる寶庫には家康の遺愛品を藏す。もと山下に別當徳善院ありしが、明治初年に廢せられ、今は僅に大師堂の一字を存し、獨立の一箇寺となれり。社殿は本殿・石ノ間・拜殿(權現造)・唐門・東門・廟門・渡廊・玉垣にして何れも元和三年の建造物にて國寶に指定さる。なほ社寶には國寶に指定されしもの甚だ多し。境内一萬六千五百七十坪、前面に渺々たる大洋遠く天窓に達り、右手には安倍河口・徳津・大井河口、左手には伊豆群山を衝へ展望

極めて雄大ななり。例祭、四月十七日。クノウラ 來浦町 大分縣豊後國東國東部の東北部。富來町の北、熊毛村の南にて、西は上伊勢村に隣り東は伊豫灘を望む。面積約十七・三平方軒、兩子火山東北側の一放射谷を占め、西境にある文珠山(六一四米)・千燈岳(六〇六米)の山稜南北界に延び、中央を東西に谷地延びて耕地拓く。米・麥・七島蘭等の農産あり。東南國東町方面より西北竹田津方面への道路東部に通じバスの便あり。往古の事は微すべしものなし。大正十年町制を布き來浦町と稱す。いま來浦・岩戸寺・濱の三大字より成り久浦に役場を置く。(八坂神社)大字來浦に無座。祭神、建徳須佐之男命・迦具土神・大歲神・大靈尊。創立年代不詳。往昔出雲國日野崎より勧請せりと云ふ。江戸時代には舟築藩主松平家の崇敬社にして、社殿の造營、社領の寄進、祈禱、代參の事あり。また近郊の産土神。もと本郡岩戸村宇葛原に大楠樹ありてその傍に鎮座せりと云ふ。(岩戸寺)石塔。國寶。大字岩戸寺の岩戸寺境内にあり。一大巖石上にたつ石造寶塔にして、基壇・塔身・蓋・相輪に至るまで當初の儘を存し、塔身に左の銘あり。

如法經奉納石塔一基
右志者爲富山平安
佛法興隆廣作修善
乃至法界平等利益

弘安六年大歲九月 日
大勳進金剛佛子尊忍
遺立者 惠日坊

形意完好、大分縣下に於てこの種の現存石造寶塔中の最古にして、かつ最も優秀なるものに屬す。

クノツボ 九之坪 愛知縣西春日井郡にありし村。明治三十九年本村は上拾個・下拾個の二村と共に廢せられ新たに西春村を置く。

クノへ 九戸 岩手縣二市十三郡の一。陸中の國に屬し、縣の東北部を占め東は太平洋に面し、西は二戸郡、南は下閉伊郡に、北は青森縣に界す。面積一七八二方軒、人口八二五八八、一平方軒平均四六六に當る。北上山脈の北端は此の郡内にて終り、餘波を殘すに留まる。南方下閉伊郡との界には、男和佐藤比山・遠馬山・遠別嶺等屹立し、河川は長内川・久慈川・有家川等何れも東流す。その他馬淵川は南流し、酒雲谷川・月内川は北流す。交通は久慈を中心として八戸との間に鐵道通じ、福岡との間に街道開かる。海路は北は八戸との間に、南は宮古との間に内海航路開かる。海岸地帯よりは耕地を出す。高麗地方には牧畜業行はれ、耕地廣く北部よりは米・麥・豆類・馬鈴薯等を産す。殊に神は他地方に於て次第に廢れつつあるに、此地方及び其の附近に多く栽植せら

る。は注目し値すべきである。古の諸郡九戸に久慈郡を合せ、近世九戸郡と稱するに至る。南部文書に依れば、久慈郡は既に鎌倉時代に見え、他の閉伊郡・糠部郡と相分たる。建武中興の初めに南部師行を此の地の代官となす。南部氏の根城に於ける勤王事蹟はこれより始まる。明治十三年これを南北の二郡に分けしが、同三十年舊に復して今日に至る。

クハ 調芳 安藝國(廣島縣)の古地名。和名抄、沙田郡に調芳郷あり。調を調くも久波と讀むものなるべし。のち久芳保となり、保名は建武中の文書に見ゆ。調芳の文字何時頃に久芳と改稱せしや明らかならず。其地今の豊田郡久芳村・竹仁村の邊に當り、久芳村名は此遺稱なるべし。本國寺造營文書に「建武中、安藝國久芳保、國城寺文書に「寄題國城寺、石見國小石見郷、上田羽郷、下田羽郷、安藝國郡戸郷、戸郷郷、久芳保、越前國宮成保、近江國山賀郷等頭職事、右所奉寄之狀如件、文和元年十月六日、參議左近衛權中將源朝臣、(義澄)。

クバ 久芳村 廣島縣安藝國豊田郡の北部。西條町(賀茂郡)の東北方にて東は乃美村、南は戸野村、西は竹仁村に隣り北は高田郡向原村と界す。面積二一・九平方軒。西北界上に鷹ノ巣山(九二二米)峙ち、村の西北半部は其の東南對面の山地に當り、東南半部は所々に二一三百米

の山地あるもその間に小低地あり田畑拓く。米を主産物とし茶・木炭の特産を出す。省縣山陽本線八本松驛(賀茂郡川上村)より志和堀村・竹仁村および本村を経て川源村に至る道路にはバスを通ずるも、村内の交通はなほ便利なりといふべからず。此地古くは和名抄、沙田郡調芳郷の内。のち久芳保に屬す。村名は蓋しその遺稱なるべし。

クバ 玖波町 廣島縣安藝國佐伯郡の南部。廣島市の西南界より西南約二〇軒、南は大竹町との間に小方村を挟み、北より東北は大野村に接し、東は大野河川の南部を隔てて嚴島の南部と相望む。面積約一二・一平方軒、大部分は山地をなして東方に傾斜し東南部沿岸にや、低地ありて耕地をなす。全町戸數の各三分の一はそれぞれ農業・漁業・商業に従事し、農産に米・麥等、漁業に鰯の煮乾・貝貝等の名産を出す。國道(山陽道)及び省縣山陽本線は共に海岸近くを通じ、後者に玖波驛(明治三十年設置)あり、南隣小方村へはバスを通じ、交通不便ならず。古くは久芳にも作り、中古本場の字を用ひ木材の集散地として知られ、のち現名となる。古來宿驛として發達し、了俊道行殿にも其名見ゆ。長州征伐の際全町兵火にあひ、その兵火をまわがれしもの僅に一軒なりといふ。玖波浦は北西に山を負ひ東南に海をひかへ、夏涼しく冬温く、風光明媚にて保養地となりまた海水浴場

の設備あり。隣近の大歳神社は天文年間再修と稱せられ社宇莊嚴、境内は櫻樹多し。西山の山腹に西山神社あり眺望よきを以て知らる。粟谷川に滑り船・魚切等は奇岩・怪石を以て著る。大正十三年町制を布く。

クバヤン 社 臺灣花蓮港蓮花蓮部にある舊社。タツキリ溪の上流、タロコ峽の奥地にてアタヤル族中、タロコ番に屬する高砂族の部落。番稱(Calibayan)戸數二九戸、人口二三〇(昭和十一年末)。

クハラ 柞原 廣後國(廣島縣)の古地名。和名抄、御調郡に柞原郷あり。美波良と訓す。柞を美と讀むは其義詳かならず。或は淡路の御原海部の分處せし所か。のち三原莊となる。莊名は建久の記文に見え、即ち小早川系圖に建久中、備後國三原莊とあり。地今の尾道市・深田村の邊に當り、尾道市の大字栗原の町名はこの轉訛せしものならん。

クハラ 久原 福岡縣筑前國糟屋郡中部の東邊。福岡市の東北約一〇軒、多々良村と鞍手郡吉川村の間に位し東南は篠栗町、南は勢門村、西北は山田村に隣りす。面積一五・三平方軒、東北境に五百米程の山嶺あり、その支脈西北・東南兩境に延び山地廣くたゞ久原川西流して西南部は低地をなし、多々良村・大川村に續き田畑拓く。農産には米を第一に、小麥・粟・粟稗あり。また高田炭坑の一部を占め石炭を出す。古くは山田村と共に和名抄精屋郡柞原郷の地とす。村名久原は久木多き原の意ならむといふ。

クビ 頸峯 豊後風土記に見ゆる遠見郡の山名。由布嶽の西南にありとあれどいま此名亡びて傳はらず。或は由布院村大字川上附近の山、また同村野稻嶽かといふも詳かならず。木橋に頸を挟まれし鹿を田主の免じたる古傳に依りかく名づくといふ(豊後國風土記)。

クビキ 頸城・久比岐 頸城・久比岐 越後國(新潟縣)の古地名。國造本紀に崇神天皇の御代大和直の

の設備あり。隣近の大歳神社は天文間再修と稱せられ社宇莊嚴、境内は櫻樹多し。西山の山腹に西山神社あり眺望よきを以て知らる。粟谷川に滑り船・魚切等は奇岩・怪石を以て著る。大正十三年町制を布く。

クハ—クヒキ

クハ—クヒキ

クハ—クヒキ

クハ—クヒキ

クハ—クヒキ

クハ—クヒキ

クハ—クヒキ

同祖御支命を以て久比岐國造と爲すとあり。これ本郡及び越中前新川郡の地をも管す。大化改新の際、國を停めて郡となしこれを越中國に隸す。大寶二年以後越後國に入り、頸城郡に作り、國府の所在地たり、和名抄は久比岐と註し沼川・都

【頸城】越後國(新潟縣)頸城郡の古地名。頸城郡家の所在地。和名抄には地名見ゆ。延喜式兵部省式に、頸城郡傳馬八元とあり。郡家にして縣を兼ねたり。なほ此地は越後國府たりしなり。其地いま中頸城郡直江津町に當る。

【頸城平野】新潟縣中頸城郡にある平野。西は妙高山系に、南は關山系に、東は米山分水嶺に圍まれ、北は日本海に臨む。關山系は妙高山系は丘陵となりて平野に廣き、西の妙高山系は直線なる山麓をなして平野に臨む。東北海岸一帯には砂丘連り背後は低濕地をなし池沼多し。荒川・新堀川・黒川等は之等山地に發して北に流れ、平野を多く灌漑し水田よく發達し上越米の産地として知らる。西南海岸黒井村には日本石油の製油所あり。荒川の下流左岸にこの平野の中心都市と爲る高田市あり。この外荒川の河口に海町なる直江津町發達す。古く

長年間藤氏が古上文化を移し、春日山文化を建設せし。この平野に負ふ所大にして、當時の福島城址また砂丘背後の田畑の間にあり、當時の市街名稱の遺稱なる御殿町・御差町等の地名ありて當時の規模を窺ふにたる。尙この平野は積雪量の多きを以て知られ雪の高田市の名あるが如く、冬季はスキー客にて賑盛を極む。

【頸城油田】新潟縣東頸城郡牧村及び中頸城郡池田村に跨る油田。高田市の東方二〇軒信越國道に近き山地にあり。一に收油田ともいふ。明治二十年頃に開闢され、同二十六年頃には全盛を極めしが、現在は頗る衰退し僅に餘命を保つに過ぎず。油質はパラフィン系にして、構造は東西に近き層向を有する四條の衝上層と、之に伴ふ斷層隆起せる四條の背斜軸が相密接して存在せる如き地質構造、即ち斷衝上層構造 (Imbricated thrust fault) ともいへるものなり。出油區域は四條の内北三條の背斜軸の南端に近き比較的傾斜の緩慢なる部分にて、油層は頸城統の上層(寺泊層に相當す)中に介する白土の凝灰質砂岩なり。

【頸城鐵道】私設鐵道。新潟縣中頸城郡・東頸城郡にあり。中頸城郡大濱村より大字白間町を経て東頸城郡下保倉村に至る全長一五・五新、新黒井(大濱村)にて省線信越本線に接続す。大正三年營業を開始し省線と連絡運輸。軌間〇・七六二。【頸城大野】省線大北線北條の驛(昭和九年設

年設)新潟縣西頸城郡大野村にあり。グヒン 狗神岳 狗神岳(北海道渡島支庁)の別稱。クヘリ 玖倍理湯井 豊後國風土記に此湯井は「在郡西河直山東岸、口徑丈餘、湯色黑、壘常不流、人輒到之井邊、發聲大言、驚鳴涌騰二丈餘許、因曰「湯井、俗語曰「玖倍理湯井」とあり。いま別府の東山地獄、また玖倍理地獄と稱するもの即ちこれなり。

【久保】省線小海線の驛(大正四年設)長野縣北佐久郡久保にあり。【久保村】山口縣周防郡瀬戸郡の東南部。北は米川村に、西は花岡村・下松町に隣り、東は熊毛郡勝間村・三井村に、南は同郡渡江村に界す。面積二九平方新に餘る。東端に鳥帽子ヶ岳(四一・二米)ありて村の東南部は山林原野多く、北地にも三四百米臺の山地あり、中部には村内の清水を集めて西南流する久保川あり、その川筋には幅狭き低地ありて、田畑拓く。農を主業とし米の産多きた。栗・栗・栗・栗等を産す。(國道中國街道)と省線山陽本線、中部を横さり後者は大字河内に周防久保驛(昭和九年設)を設き、國道及び周防久保驛と柳井橋下松驛間にはバスを通じ交通便利なり。古くは警備庄に屬し時代により、村域の一部は切山保に屬せしもの、如く、徳川時代には毛利藩の所領となり、明治九年大小

【久保】省線小海線の驛(大正四年設)長野縣北佐久郡久保にあり。【久保村】山口縣周防郡瀬戸郡の東南部。北は米川村に、西は花岡村・下松町に隣り、東は熊毛郡勝間村・三井村に、南は同郡渡江村に界す。面積二九平方新に餘る。東端に鳥帽子ヶ岳(四一・二米)ありて村の東南部は山林原野多く、北地にも三四百米臺の山地あり、中部には村内の清水を集めて西南流する久保川あり、その川筋には幅狭き低地ありて、田畑拓く。農を主業とし米の産多きた。栗・栗・栗・栗等を産す。(國道中國街道)と省線山陽本線、中部を横さり後者は大字河内に周防久保驛(昭和九年設)を設き、國道及び周防久保驛と柳井橋下松驛間にはバスを通じ交通便利なり。古くは警備庄に屬し時代により、村域の一部は切山保に屬せしもの、如く、徳川時代には毛利藩の所領となり、明治九年大小

制の施行に際し、河内・米巻を第七大區第一小區とし、切山・山田・生野屋をその第二小區とし、同十二年上記諸村は、夫れ々々分立せしが、同十八年河内村外三ヶ村(米巻・山田・切山)戸長役場を設け、同二十二年四月町制を實施するや此等四ヶ村を合せて現在に至る。大字河内は江戸時代中國街道の宿市驛のありし所。花岡驛(二十八町、呼坂驛(一里半、(降松神社) 大字河内に鎮座。縣社。祭神、天之御中主大神。社傳に依れば、敏達天皇七年九月十二日の夜に大星ありて、當郡豊井郷青柳浦上瀬手なる松樹に降臨あり。里長竹彦なるものその松下に到る。時に神託ありて吾輩を此處に鎮祀せよとありければ、即ち祠を建立して上國社と稱せしを、その創建の縁由なりとす。社號の降松は即ち之に由来すと云ふ。和銅二年大内正恒は高麗垣山に遷して北辰妙社と改稱せしが、康保元年現地に遷座して上宮・中宮を創建し、元龜二年若宮を同村吉原に設く。爾來、大内氏の崇敬殊に篤く寶器並に社領の寄進あり。毛利家もまた歸崇禮からざりしと云ふ。例祭、四月十五日。

【久保村】福岡縣豊前國。京都郡の中郡西側。行橋町の西南方約八新、北は黒田村、東は神田村、南は原川村に隣り、西は田川郡勾金村に界し面積約一三・四平方新。西端の北部に際子ヶ岳(四二七米)南部に飯岳(五七三米)あり、村の西部は

【久保村】福岡縣豊前國。京都郡の中郡西側。行橋町の西南方約八新、北は黒田村、東は神田村、南は原川村に隣り、西は田川郡勾金村に界し面積約一三・四平方新。西端の北部に際子ヶ岳(四二七米)南部に飯岳(五七三米)あり、村の西部は

クボ

それらの東斜面にて山林をなし、南端も飯岳の東麓にて二・三百米臺の山地ありて北方に緩斜をなす。中部より東部は平坦にして耕地多し。米・麥・粟等の農産を出す。省線日豊本線、行橋驛(行橋町内)より田川郡香春町を経て後藤寺町・添田町及び飯塚市の三方へ夫々バス通じ交通便利なり。此地は和名抄、京都郡と關山系内に屬す。大字松田は古驛の地とす。古く松田新町と呼ばれ七曲峠を越えて香春驛に通ず。この七曲峠は往時仲津より太宰府へ通ずる孔道即ち田河原に當る。村内に際子ヶ岳城址あり。建武三年、足利尊氏、足利義河守統氏に命じて築かしむ。應安元年、千葉上總介光胤、統氏を討ちて自ら居す。應永六年、千葉高胤亡びて大内の地城となる。天正の初、小早川隆景の地城となり同十七年破却す。今なほ空澄鏡り本城北の丸・黒屋の跡など云ふところあり。(大原八幡神社) 大字天久保に鎮座。縣社。祭神、大原足尼命・饒速日命・譽田別命。創立年代不詳。地方の古社にて、江戸時代は近郊の産土神と崇めらる。例祭、四月十八日。

クボイヅミ

久保泉村 佐賀縣肥前國佐賀郡の東部。佐賀市の北方約六新、西は金立村、北は神埼郡音振村、東は同郡西郷村に隣接す。面積約一五平方新、北部に金山の東北傾よりなる山地ある外、中部以南は佐賀平野の一部をなし土地極めて平坦にして田畑よく拓け、米の産多きた。栗・栗等を産す。縣道南部を横さり東は神埼町、西は小城町方面との交通便利なり。川久保村と和泉村と合併して本村を建てしものにして、村名は蓋し二村名に因む。肥前軍記に、天文十四年、馬場頼周の族、和泉村に龍造寺の子息を討取ると見ゆ。大字川久保は古書に河窪と作る。人類學雜誌に川久保村は塚穴多しと見ゆ。而るに此等は近時村人の漫に發掘する所となり、完全のもの甚だ少なし。塚中よりは土器・金銀銅環・曲玉管玉・刀劍馬具等を出土すといふ。(えびめあやめ自生南限地帯) 指定天然記念物。大字川久保の帯限山麓にあり。この城物は朝鮮及び滿洲地方に産する小き葛尾科植物にして、山頂にも多少見られ、當地方はその南限地帯に當る。(白雲神社) 大字川久保宇宮川口(宮分)に鎮座。村社。

クボイヅシキ

久保一色 愛知縣東春日井郡にありし村。明治三十九年本村は岩崎・味岡の二村と共に廢せられ、新たに味岡村を設く。

クボカワ

窪川町 高知縣土佐國高岡郡の東南部。北は松葉川村に接し東北は久禮川との間に仁井田村を隔て、東南は東又村に隣り、南は幡多郡佐賀村に、西は同郡大正村に界し、面積約九七平方新を占む。西半には高度五・六百米の三條の山嶺西北より東南に延びその間に幅狭き二條の谷地をつくり、東南部にも所々に四・五百米臺の山地起伏す。松葉川は北隣松葉川村より東北部に來り、東北隣仁井田村より來る流川の上流仁井田川に合し、西南流して三條の山嶺を穿

クホタ

佐の頼井澤と稱する程にて、高屋風分...

安す。中之宮は伊豫大明神と云ひ、本地...

また窪田にも作る。西方の丘山に久保田...

に属せしが、のち佐賀郡に入り、徳藩...

クホタ

クホタ

窪田村 山形縣羽前國南置賜郡の東北...

クホタ

宇矢野目と同じ。小瀬に八日町なる地名...

院領領たりしこと、東鑑文治三年の條に...

久保田にも作る。西方の丘山に久保田...

クホタ

窪田村 山形縣羽前國南置賜郡の東北...

す。土佐街道に沿ふ段丘類は殊に見事に開拓され、到る所の傾斜地には三椏栽培せらる。冬は寒冷のため農作物は少くも、

久万山麓に太田山中の惣領守と稱され、領主大野氏代々の尊信篤し。例祭。十一月一日。(大寶寺)菅生山大覺院と號し四國八十八所第四十四番の札所。寺傳に大寶元

鳥支藩に屬し、明治四年廢藩置縣後は佐賀縣の所管となり、明治二十二年町村制施行の際現行町村制を布く。

帽子山(一三〇二米)・白岩山(一〇〇二米)等の諸峯聳え、山麓は東北より西南に延び、南境には東に白雲岳(二四一七

クマ 久間村

佐賀縣肥前國藤津郡の北部。鹿島町と武雄町(杵島郡)との中間に位し、南は藤津町、西南は藤野町に隣り、北は杵島郡橋村、東は同郡錦江村、

クマ 球磨

熊本縣肥後國一市十二郡の一。縣の南東部を占め、西は大部分球磨川の峽谷によりて東北郡と分れ、北は八代郡に隣り、東は宮崎縣西臼杵・兒湯の二郡に隣り、東には同縣西諸縣郡に、西南は鹿兒島

和名抄は球磨郡に作り久萬と誤り球珠、久米・人吉・東村・西村・千波の六郷を管す。中世球磨・求麻にも作りしが、今は球磨郡に作る。書紀・皇行紀・十八年四月、到三熊、其處有球津彦者、兄弟二人、天皇先使、微三兄弟、則從使詣之、因

附近最も美しく、人吉町より球磨川下りの遊覧船を出す。船の名成あり。この河谷に沿うて者様肥後及び湯前經過す。古來この川は河道の急なると、水勢強きため舟を通せず、この流域に出入するに

雷の轟きが如く、最險灘と稱せらる。白石附近神瀬の石炭河濱は、河岸を去る數十米のところあり、洞門の高さ約一四

【球磨川】 熊本縣の南部を流るる川。その流域は河口の三角洲を除き、全部九州山地の内には河谷を有す。水源は凡そ二あり、一は球磨・八代郡境尾山附近の山地に發し、一は市房山西麓に發し、二川

舟路によることなれり。大正十三年時旨を以て正林盛に從五位を贈らる。明治四十八年八代・人吉間に鐵道開通するや、球磨川下りの舟舟は著しく衰ふ。近年に至り勝地遊覧客のため遊覧船を出すに際し、身は人吉の大橋より出で、白石まで約二四軒を三時間にて下る。一勝地

【球磨】 肥後國(熊本縣)の古地名。延喜式武部省式に縣名出で藤馬五正とあり。球磨縣に其位置詳かならざるも地勢上球磨郡の人吉盆地の中ならざるべからず。和名抄の球磨郡に球珠磨あり、郡家所在地として今の人吉町を以てこれを球磨の郡として今の人吉町を以てこれを球磨の郡とするも和名抄には別に人吉郷あり。人吉城をまた球磨城とも稱するこ

クマ 熊

熊本縣豊後國江國琴田郡の北西部。二俣町の西北方約一二軒の山村。南は上阿多古村、北は浦川町、龍山村に隣り、西は引佐郡熊玉村に界す。赤石山脈西南支脈の山地にて至る處山林多く、畑地・

クマ—クマ

田地は僅に山林の五分の一に過ぎず。木材・薪炭等の林産を主とし外に米・茶・菓を出す。山道東南西諸の諸村との間に通する外、交通の便なほ開けず。此地或は和名抄高玉郡碧田郷の内に屬せしものか。參州風車寺より本村に出で秋葉山に詣づる行者の道路ありて鹿頭驛といふ。【熊山】 片上鐵道熊山駅の南東方約四軒、同山脈和氣郡熊山村の西方に位す。標高約五〇〇米。東は伊里山・八木山・帆坂峠に連る。和氣川(吉井川とも云ふ)は西麓を通過して南西流す。この山頂には昔、靈仙寺ありたり。この寺は天台宗にして天平寶字年中觀音和尚の開基とぞ。今は荒れ果てて僅に觀音堂或壇場のみ存す。なほ熊山城址あり。太平記に依れば建武二年兒島高徳この城に義兵を挙げ、僅の軍勢にてよく四方の敵を防ぎしが、松田盛朝に破れたり。延元元年高徳再び兵を挙げ、賊兵と大に戦へり。山の中に高徳聖掛岩・崖上岩・鞍掛の松等あり。【熊ヶ巻】 熊山市の南方約六軒に當り、瀬戸内海に面して聳立つる山。廣島縣沼津郡熊野村・水谷村・田尻村の三村境界に峙つ。標高四三八米、山麓花崗岩より成る如し。此西段は彦山(四三〇米)となる。北東麓を廣田川南流し瀬戸内海に注ぐ。山頂より東方より南方、更に西方にかけ、内海邊際に點在する大小數十の鳥嶽を指呼し、遠く四國の群山を眺見し、一望廣藪、清麗を極む。

クマカク—クマキ

興し現寺を稱すと傳へらる。慶長六年徳川家康本寺に休息し、客殿の金具に奏紋を附するを許可し寺領三十石の朱印を附す。安政元年火災に遭ふも、直に再建成る。現在の本堂は近年の造替に係る。〔熊川寺〕 上之にあり。曹洞宗。太平山天鈞院と號し、應永十八年領主成田家時開基し、開山を和庵清順とす。天正十九年、徳川家康、本寺住僧春雪と相知たりし緣故に依り特に参詣し、後年朱印百石を寄進すといふ。明治元年、有栖川宮の御祈願所となり、熈仁親王より特に懐紙・幕・提燈等を賜はる。寺格日恒常會地にて、直末十八寺を統ぶ。所藏の熊川寺年代記は、大永より延寶に至り戦國時代考究の一資料たり。

【熊谷(縣)】 明治初年熊谷に置きし縣。明治六年六月十五日上野國吾妻・碓氷・群馬・甘葉・片岡・多胡・群野・利根・勢多・那波・佐位の十一郡を管せし群馬縣(治所前橋)と、武藏國横見・入間・秩父・男衾・大里・榛澤・加美・幡羅・比企・新坐・那賀・兒王・高麗の十三郡、及び多摩郡の一部を管せし入間縣(治所川越)とを廢して熊谷に置きし縣なり。明治九年八月廿一日、縣廳を上野の前橋に移して群馬縣と改稱し、もと入間縣に屬せし分を埼玉縣に移管し、更に栃木縣所管の上野國山田・邑樂・新田の三縣を合す。〔熊谷縣〕 ↓熊谷市

クマガワ 熊川

【熊川村】 東京府武蔵國西多摩郡の東南隅。多摩川中流の東岸に沿ひ、西は川の對岸に東秋留村あり、北に福生村あり、東は北多摩郡砂川村、南は同郡拜島村と界す。面積約三・六平方町。土地概ね平坦にて畑地多く山林・田地これに次ぐ。農産に粟・麥・米等あり、工業に生糸を出し、また多摩川原の砂利採取行はる。省線八高線拜島驛より成る社線五日市鐵道熊川貨物驛(昭和六年開業)あり。本村は福生村と共に近世は拜島鎮に屬す。或は深山鎮福生郷とも稱す。往昔より幕領・私領入會の村にて代官小野田三郎右衛門信利の治めし外は、田澤久左衛門・長藤長五郎兩人が世々の采地たり。正保の頃は政學權兵衛能利代官たりしこともありといふ。いふ福生村と共に組合町村をなし役場を福生村に置く。

【熊川村】 福井縣若狹國越前郡の東南隅。西は松永村・三宅村、北は瓜生村に隣り、東より南は益賀縣高島郡三谷村・朽木村と界す。面積約二・三・五平方町あるも土地南北に長く、東南西には四一五〇〇米の高度を有する山嶺を繞し、殆ど山林をなす。ただ東端三谷村に發する北川の上流中部を東西に流れ、其兩岸に低地を作り多少の田畑拓く。若狹製紙會社ありて紙の産あり、また清酒・酒を出す。若狹街道北川に沿ひて通じ交通不便ならず。此地古くは和名抄、遠敷郡野里郷の

クマキ 熊木村

石川縣能登國鹿島郡の西北部。和倉町の西北方約八軒、東北は西岸村、東南は中島村、西南は豊川村、西北は羽咋郡能登町に隣る。面積一〇・七平方町。南部は一〇〇米、北部は二〇〇米の臺地性丘陵をなし中部は低平にて田地多く米を主産す。七尾町・輪島町及び富來町への縣道に當り、北は穴水町、西は富來町への縣道に當り、また省線七尾線通じて能登中島驛(昭和三年設置)を置き交通不便ならず。此地古くは和名抄熊登郡熊來郷に屬せしもの如し。また萬葉集にも熊來の名見え、村名は蓋し此等の遺稱なり。村内に熊木城址あり。初め長谷部信連居す。天正五年三月には上杉謙信、其部將三寶寺平四郎・齋藤帶刀等を置きしが、同年五月長綱連之を攻略すといふ。〔久麻加夫都阿良加志比古神社〕 大字宮前に鎮座。神社。祭神、都賀加阿良新止神・阿良加志比古神。創建年代詳ならずも、延喜式所載の古社にして、もと羽咋郡に鎮座せしもの現社地に移る。俗稱、熊甲宮。境内二千三百十六坪。久麻加夫都阿良加志比古神坐像一軀は圓蓋。木彫著色、若冠拱手にして

地なり。延喜兵部省式に濃飯馬五疋と見ゆるも蓋し此地ならん。中世以降近江今津に至る街道の宿驛にして、宮崎氏の時より酒井氏領國の時に至る間此地に關を置かる。いふ熊川・河内・新道の三大字より成り熊川に役場を置く。

クマキ 熊來

能登國(石川縣)能登郡の古地名。萬葉集に地名出で、和名抄に熊見見ゆ。いふ鹿島郡熊木村・中島村・笠原保村等に當り、熊木は其遺稱なり。萬葉一六一はしたての 熊來のやちには新羅斧 摩し入れわし 懸けて懸けて勿泣かしそれ 浮き出つるやと見むわし

【熊木村】 靜岡縣遠江國周智郡の中部。大原町の東北に連り、南は三倉村、西北は氣田村に接し、東北は椋原郡上川根村と、東は同郡中川根村と界す。面積一〇〇平方町に餘る大村なれども、赤石山脈の支脈たる善壽山(一六二七米)・松山(八四八米)の山嶺東端を限り、その山麓西南に派出して北端・中部・南界に及び山地深く、ただ東北部に發して村の西北部を西南流する杉川(氣田川の支流)の谷と、西南部の溪流に沿ひて小低地あるのみ。林産を第一に、農産に茶・粟・米等を出す。川に沿ひて道路通ずるも交通なほ不便なるを免れず。此地或は和名抄、山吾郡氣多郷の内に屬せしものか。大字杉の地は往時丹波郷と稱す。いふ石打松下・遊木平・後戸大上・長藤寺・田河内・田黒・杉・川上の八大

クマク 久麻久

愛知縣幡豆郡にありし村。明治廿九年西尾町・西野町村・大實村・奥津村と共に廢せられ、新に西尾町を置く。

クマク 熊來

三河國(愛知縣)の古地名。和名抄、幡豆郡に熊來郷あり、諸本熊來に作るも延喜式神名帳に當郡久麻久神社あり、これにより熊來となす。其地今の幡豆郡西尾町の邊に當る。

クマク 熊口

伊勢國(三重縣)の古地名。和名抄に桑名郡熊口郷あり、久末久知と訓す。その地今詳ならず。一説に長嶋の邊と云ふも、長嶋は江中の洲にして、古代開村の所とは爲し難し。

クマクラ 熊倉村

福島縣磐代國耶麻郡の中央南部。東は檜原村に、西は關柴村・姥堂村に、北は北山村に、南は駒形村に接す。東部は一般に高地にて、西部に里道交叉し、聚落は此里道を中心として發達す。大鹽川村の西部を貫流す。主として米を産し、麥・清酒の産これに次ぐ。往時は村落半ばは平野、半ばは山地、中間に濁川流れ、用水・灌漑の便あり、油菜・藍・木綿を作り農閑に蘆を織りて土産を賣げ、部落によりては蘭を植みて蘭室を販出す。また幅〇・六米、長さ三・六米程のゆくり船と稱する小舟を作り、一般に二人づつ乗り、二艘相對し、長さ四米程の竹竿に綱をつけて之を水に浸しつつ川下下りて鮭を取る。俗

クマク—クマケ

クマケ 熊毛

山口縣六市十一郡の一。周防國の一部にて縣の東南端を占め、西北は都濃郡、東北は玖珂郡と界し、地狭長にして西北より東南方に延び、その東南部は半島狀をなして瀬戸内海に突出し、東方には大島郡に屬する大島・平部島等を望み、西方には長島・佐合島・牛島・祝島、南方には八島等の屬島を擁して周防灘の東限をなす。面積三〇七平方町餘にて縣の全面積の約五割に當る。全部殆んど花崗岩より成り、北境に鳥帽子ヶ岳あるも標高は六九七米に過ぎず、その他は所所に三―四〇〇米臺の山峯起伏し、東北より西南に延びて丘陵性山地をなし、又東南半島部には泉座・大星の五〇〇米餘の火山あり安山岩にて成る。これら山地の間、周防灘に面して所々に沖積層の

低地あり、西部を南流する島田川流域の低地を最大のものとする。低地と山地の谷には田畑拓げ、米を第一に麥・甘藷等の農産を出し、麥藪及び柑桔栽培も稍行はれ木村・竹村も少からず、酒造技術者たる杜氏また多く酒造桶の製作は世に知らる。沿海には漁獲物・食鹽の利あり。國道と省線山陽本線は北部を横ぎり、縣道は南部海岸に沿ひて通じ、省線柳井線は中部を東西に走り、沿岸には室積・平生・上ノ岡等の鎮地ありて交通・碇泊の便に富む。平生・田布施・室積三町の外二十三箇村を含む。上古は周防國造の所領なりしが大化改新に至りて熊毛郡を置き、養老五年四月本郡を割きて玖珂郡を置く。續日本紀に見ゆれば今の玖珂郡をも含みしものと見ゆ。和名抄は久末計と訓じ周防熊毛・多仁・美和・波瀲・藤家全戸(余戸)の五郷・一隣家・一餘戸を管す。

【熊毛郡】 鹿兒島縣一市十二郡の一。大隅國に屬し、薩南諸島の北部にある種子・屋久の二大島と馬毛島・日之木島・竹島・硫黃島及び黒島等の屬島より成る。面積九六六平方町餘。縣の全面積の約一割に當る。二大島中の種子島は東北部にあり、新第三紀層より成り南北に狭長にして、東西斜面を覆する分水嶺あるも高度は三〇〇米を超ゆる處なく、西斜面に沖積層の狭長なる低地あり。西南方に位する屋久島は之と反對に、略ぼ圓形を

クマコ——クマシ

なし主として花崗岩より成り、中央部に八重山屹立し、その一峯宮之浦岳(一九三五米)は九州地方に於ける屈指の高山に属し、その山腹四方に流出して海岸に急傾斜し、殆んど平地を缺く。その農産物は甘藷・甘蔗を主とし米・麥・粟・大豆・蕎麥等あり、沿海は水産に富み、工業に黒砂糖を出し、林産もた少からず。種子島には縣道南北に通じ島内交通容易なるも、屋久島はなほ不便なるを免れず。海上は鹿兒島と種子島の西之表、屋久島の宮之浦(上屋久村)の間には定期汽船の往來あり。いま西之表町の外中種子・南種子・上屋久・下屋久の四村に分かる。上古は總稱して多嶺島と號し熊毛・熊瀨(種子島)及び取波(屋久島)の四郡とし、各島司を置きて管理せしむ。敏日本紀天平五年の條に郡名初めて見え、のち天長元年これを大隅國に屬せしめ、熊毛郡(熊瀨郡を合す)と取波郡(益敷郡を合す)の二郡とす。和名抄は久米介と訓じ熊毛・幸毛・阿波の三郡を記す。明治十三年、更に取波郡を合して以て、今日に至る。敏日本紀「天平五年六月丁酉、多嶺島熊毛郡大領外從七位下安志託等十一人、賜多嶺後國造姓」類聚三代格「五、大政官譯奏、傳多嶺島、隸大隅國、事、右參議大宰大貳從四位下小野朝臣奉守等傳傳、領傳島隸大隅國、計其課日、不是一、寫、其土地有餘一郡、熊瀨合於取波、益敷合於熊毛、四郡爲二、

クマゴリ

熊瀨 大和國(奈良縣)平群郡の古地名。往昔聖德太子此地に寺を建て熊瀨結舍といふ。熊瀨道場といふもこれに同じ。のち舒明天皇に至り百濟に移し百濟大寺と稱す。更に高市に移し大官大寺と號し平城京の成るに及び、之を新京に移建して大安寺といふ。熊瀨の地の今の生駒郡和村領田部の邊と云ける。

クマサカ

熊坂 石川縣江沼郡三木村の大字。大聖寺の南、北陸街道に當り、その南は越前牛ノ谷峠に出づる山道に當る。此附近はもと熊坂庄と稱せられし地にして、東鑑「壽永三年四月に、池大納言家沙汰、八條院御領熊坂庄」とあり、三州地理志稿に「在郡西、去越前國坂北郡界州町、今橋野左右皆是、東鑑云、爲池大納言領、熊坂新日録、寛正二年四月爲東鑑寺領、熊坂元年造内裏段熊坂庄爲千秋利郡少輔領地、段段四百五十文」とあり。

クマサキ

熊崎 筑前國の古地名。延喜式兵部省に譯名見え、譯馬五疋とあり。豊後國より大宰府に至る官道の一驛次にして、その址今の福岡縣朝倉郡宮野村の邊といふも詳かならず。

クマザワ

熊澤山 甲府市の北東方約二八軒、大菩薩嶺(二〇五七米)の頂上約一軒に峙つ。山梨縣北都留郡小菅村・七保村と東山梨郡神山村との境界に峙つ。標高一八九〇米。北麓は大菩薩峠(最高點一八九七米)を経て大菩薩嶺に抜く。南麓は小金澤山(二〇一四・四米)・

クマシ

また此地に熊坂嶽あり、三州地理志稿に於れば熊坂嶽は大聖寺の左山にあり、壽永三年の役、平軍ここに陣し、弘治元年朝倉宗滴門徒を撃つとき越前縣江中務丞登忠ここに拔くとあり、義經記「源平盛衰記にも熊坂庄の名見ゆ。【熊坂嶽】 鈴鹿山脈北端部の一峯。滋賀縣大上郡彦根町の南東方約一七軒、岐阜縣養老郡時村と三重縣員辨郡立田村との境界に峙ち、標高八六五米。秩父古生層より構成せらる。南西麓は三國岳(八一五米)に連る。牧田川は北西斜面より發源し北麓を流れて北東流す。南東斜面は南東流する町屋川の上流地たり。三重縣側にては熊坂嶽と云ひ、岐阜縣側にては鳥帽子岳と呼ぶ。

クマサキ

熊崎 筑前國の古地名。延喜式兵部省に譯名見え、譯馬五疋とあり。豊後國より大宰府に至る官道の一驛次にして、その址今の福岡縣朝倉郡宮野村の邊といふも詳かならず。

クマザワ

熊澤山 甲府市の北東方約二八軒、大菩薩嶺(二〇五七米)の頂上約一軒に峙つ。山梨縣北都留郡小菅村・七保村と東山梨郡神山村との境界に峙つ。標高一八九〇米。北麓は大菩薩峠(最高點一八九七米)を経て大菩薩嶺に抜く。南麓は小金澤山(二〇一四・四米)・

クマシ

黒岳山(一九八七・五米)に連る。山の東斜面は美しき黒木の密林にて蔽はれ、西斜面は快き茅原なり。南方鞍部は狼平と呼ばれ、なごやかなる景観を呈す。北東方斜面より多摩川支流小菅川源流して東流し、東西方斜面よりは箱吹川支流日川源流して南西流す。

クマシ

熊瀨 大和國(奈良縣)平群郡の古地名。往昔聖德太子此地に寺を建て熊瀨結舍といふ。熊瀨道場といふもこれに同じ。のち舒明天皇に至り百濟に移し百濟大寺と稱す。更に高市に移し大官大寺と號し平城京の成るに及び、之を新京に移建して大安寺といふ。熊瀨の地の今の生駒郡和村領田部の邊と云ける。

クマサカ

熊坂 石川縣江沼郡三木村の大字。大聖寺の南、北陸街道に當り、その南は越前牛ノ谷峠に出づる山道に當る。此附近はもと熊坂庄と稱せられし地にして、東鑑「壽永三年四月に、池大納言家沙汰、八條院御領熊坂庄」とあり、三州地理志稿に「在郡西、去越前國坂北郡界州町、今橋野左右皆是、東鑑云、爲池大納言領、熊坂新日録、寛正二年四月爲東鑑寺領、熊坂元年造内裏段熊坂庄爲千秋利郡少輔領地、段段四百五十文」とあり。

町、地頭右馬允房領と見ゆ。大字國寄は鎌倉時代地頭の邸宅のありし處といふ。後醍醐府は市村大字市村にありしものにて、國寄の地にありしものに非ず。當勢草に「武家より守護職を置きしより、北條氏の時に至り、諸國の古國府はみな漸く廢したり、此時國寄村に新官府を置きて領家の庄園の事を掌らせけるを、國寄と稱せしなり、此村に領家の地名あるも此故なり、地頭方村此村に隣り、公家を領家と云ひ領家方地頭方と公式を分けて役所を置るなり、今三原郡中の神樂座の名に、領家座地頭方あり、武家守護以來の名目なり、これを俗にウマツケと呼ぶは領家の轉訛なり」とあり、これ正鵠を得たる論と云ふべし。上田の決路に於ける湖池の雙壁とも云ふべき上田池、また國寄より八木村に亘る指定天然記念物、淡路國造松並木、式内社たる久廣神社等見るべきもの夥からず。(上田池)大字上田にあり。神代・市・櫻列三村に於ける整理耕地五二六ヘクタールを灌溉するもの。粗石モルタル積石堰堤の湖池にて、昭和四年の竣工、一〇二萬立方米の水を湛ふ。鮎屋溪の大城池に相對して、淡路に於ける湖池の雙壁たり。(淡路國造松並木)指定天然記念物。大字國寄より八木村發宜字上八木に至る街道の内側にある黒松の並木にして延長約四軒に及ぶ。但し中間にて數百米中絶す。樹數は大正七年に一〇六五本と計算され、

クマシ——クマソ

大なるものば、地上約一米半の周四五・七米弱に及ぶ。(八幡神社)大字上田に鎮座。祭神、應神天皇。創立年代不詳。俗に上田八幡と稱す。江戸時代に於ける社領若干を有し、近郷の産土神と崇めらる。境内に高良神社・息長神社あり。例祭、十月一日。(久成神社) 村社。祭神、仲哀天皇。式内社。神位、元慶八年從五位上。例祭日、二月・九月十六日。【神代】 筑後國(福岡縣)の古地名。和名抄、御井郡に神代郷あり、諸本誤りて神氏に作る。思ふに神代とは神稻代を修めしものなり、神稻は久萬と讀む。蓋し高良玉垂命神社の神封たるによりて、名づけしものなるべし。高良神社に傳ふるところの建治元年鎌倉政所の下文に筑後川の神代渡の名見え、また高良社人、神代忠良なるもの見ゆ。筑後志に神代物部良繼は御井郡神代村の人なりとあるは、その裔なるべし。その裔は今の三井郡御井町・合川村・高良内村の邊に當る。

クマシ

熊瀨 大和國(奈良縣)平群郡の古地名。往昔聖德太子此地に寺を建て熊瀨結舍といふ。熊瀨道場といふもこれに同じ。のち舒明天皇に至り百濟に移し百濟大寺と稱す。更に高市に移し大官大寺と號し平城京の成るに及び、之を新京に移建して大安寺といふ。熊瀨の地の今の生駒郡和村領田部の邊と云ける。

クマサカ

熊坂 石川縣江沼郡三木村の大字。大聖寺の南、北陸街道に當り、その南は越前牛ノ谷峠に出づる山道に當る。此附近はもと熊坂庄と稱せられし地にして、東鑑「壽永三年四月に、池大納言家沙汰、八條院御領熊坂庄」とあり、三州地理志稿に「在郡西、去越前國坂北郡界州町、今橋野左右皆是、東鑑云、爲池大納言領、熊坂新日録、寛正二年四月爲東鑑寺領、熊坂元年造内裏段熊坂庄爲千秋利郡少輔領地、段段四百五十文」とあり。

クマサキ

熊崎 筑前國の古地名。延喜式兵部省に譯名見え、譯馬五疋とあり。豊後國より大宰府に至る官道の一驛次にして、その址今の福岡縣朝倉郡宮野村の邊といふも詳かならず。

クマザワ

熊澤山 甲府市の北東方約二八軒、大菩薩嶺(二〇五七米)の頂上約一軒に峙つ。山梨縣北都留郡小菅村・七保村と東山梨郡神山村との境界に峙つ。標高一八九〇米。北麓は大菩薩峠(最高點一八九七米)を経て大菩薩嶺に抜く。南麓は小金澤山(二〇一四・四米)・

抄、日根郡近義郷に属せしもの如し。中世は熊取庄に作る。莊號は建武元年の繪旨に見ゆ。師茂記・曆應二年秋冬記裏書「和泉國熊取莊地頭藤澤本新左衛門尉元、爲勳功賞、可知行者、天氣如此、悉之以狀、建武元年八月十日、民部大輔」とあるはそれなり。兩山城址は貞和四年圖説して楠正儀の將橋本判官正高が領りし城なり。應永年間山名時氏の大内義弘と合戦せし時、山名義理の弟草山駿河守をして防がしめし所なり、後世根来の法師暫く是領とせり。龍王の社は城内の鎮守にて、千疊敷・月見亭・馬場・射場等の名残り。山基が高からず向も孤峻にして、西南は絶險の通ふ路だになく北に羊腸の曲流あり、東は危徑僅に連峯に接く、和泉國の塞址六十餘中かかる名城はなし。かく此地は古くより拓け、中世は城下町として發達せるもの。名所舊蹟の見るべきもの多し。明治四年岸和田縣に屬し、のち堺縣を経て、明治二十二年村制施行。「大森神社」大宇久保に鎮座。郷社。祭神、菅原道眞・事代主命。外二十一年代不詳。中世類聚し天正年間再興すといふ。近郷の産土神。例祭、九月二十八日。本村は中世熊取莊と稱し、延暦二十三年和泉行幸の時熊取野に遊獵ありし事日本後紀に見ゆ。

クマナシ

熊無村 富山縣越中水見郡中部の西邊、水見町の西方約六軒、

これと加納村・上庄村を隔て、南は連川村、北は碓石村に接し、西は石川縣羽咋郡色知村に界す。面積約九・五平方軒。西地に高さ二百米程の高地ありて東方に緩に傾斜し、東南部は平坦にして上庄川その南部を東流し、田畑よく開け、米を主産す。道路東西に通じ、水見町との間にバスの便あり。中世は上庄に屬す。いま谷屋・論田・熊無・中村・新保の五大字より成り、谷屋に役場を置く。

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

【熊野山】 紀國(和歌山縣)の古地名。仁德紀三十年に磐之媛皇后紀國に遊行し給ひ御願を此地に取り給ふ。其地明かならざるも、東牟婁郡熊野の海岸を稱せしものならんといひ、一説には赤草郡の海岸地方ならんといふ。

クマノ

熊野 七月初めて試登せられたり。山頂附近は草叢甚だしく登攀困難とせらる。クマノとはアイマ語にて連山の意なりと。

クマノ

熊野山 北世道後志支應岩内郡岩内町の南西方約七軒半、同郡鳥野村に屬し、日本海岸に面して峙つ。標高七六四米。南方に日國內岳(二〇三三米)・雷電山(二二二二米)・雷電峰最高點(五五五五米)と東方より西方にかけ、延亙する連嶺あり。雷電峰最高點の西方は低夷して海に没す。東方に岩内山(一〇八六六米)峙つ。山麓に熊野神社鎮座するを以て、山名出づ。熊野山の東斜面の谷をニベツと云ふ。こゝより靉別川發して北流す。また東斜面を流る岩内河より南方磯谷郡磯谷(尻別川河口)に至る山道通す。即ち雷電峰路とす。この山道に沿ひ、熊野山の南斜面に朝日温泉湧出す。

クマナシ

熊無村 富山縣越中水見郡中部の西邊、水見町の西方約六軒、

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の六年紀に見ゆる百濟の古城名。本書の註に或本に都、岐留山と云ふとあり。其地いま詳かならず。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナス

熊成峰 熊野山(鳥根山)の別稱。

クマナレ

熊川 任那國の古地名。書紀體天皇の二十三年の條に近江毛野郡任那に遣はされて此處に居り、新羅・百濟二王を召集せしとあり。一本には久斯本縣に次ると見ゆ。其地いま何れなるか詳ならずとも、朝鮮慶尙道川地方なるか。

クマヌ

熊野 古事記神代卷に見ゆる古地名。後に成務天皇の朝、國造を定め給ひし熊野國の内にて、大らかに熊野地方を稱せしものなるべく、今何處と定む難し。古事記・中「神代伊弉諾命(神武天皇)從其地(紀伊國熊山)廻幸到熊野村」

クマナシ

熊無村 富山縣越中水見郡中部の西邊、水見町の西方約六軒、

【熊野山】 紀國(和歌山縣)の古地名。仁德紀三十年に磐之媛皇后紀國に遊行し給ひ御願を此地に取り給ふ。其地明かならざるも、東牟婁郡熊野の海岸を稱せしものならんといひ、一説には赤草郡の海岸地方ならんといふ。

クマノ—クマノ

【熊野山】 紀國(和歌山縣)の古地名。仁德紀三十年に磐之媛皇后紀國に遊行し給ひ御願を此地に取り給ふ。其地明かならざるも、東牟婁郡熊野の海岸を稱せしものならんといひ、一説には赤草郡の海岸地方ならんといふ。

【熊野山】 紀國(和歌山縣)の古地名。仁德紀三十年に磐之媛皇后紀國に遊行し給ひ御願を此地に取り給ふ。其地明かならざるも、東牟婁郡熊野の海岸を稱せしものならんといひ、一説には赤草郡の海岸地方ならんといふ。

【熊野山】 紀國(和歌山縣)の古地名。仁德紀三十年に磐之媛皇后紀國に遊行し給ひ御願を此地に取り給ふ。其地明かならざるも、東牟婁郡熊野の海岸を稱せしものならんといひ、一説には赤草郡の海岸地方ならんといふ。

研究に俟たん。
クマノノ 熊ノ湯
【熊ノ湯】 七飯村(北海道虻田郡)
【熊ノ湯】 七飯村(長野県下高井郡)
クマアセ 熊伏

【熊伏山】 金峯山(山形縣)の別稱。
【熊伏山】 赤石山脈の南西方一支脈に起る一峰。飯田市の南約二十八軒、長野縣下伊那郡平岡村と八重河内村との境界に跨り、南斜面は延亘して静岡縣周智郡水窪町に至る。天龍川はこの山の西麓を南流し、東麓に秋葉街道南北に走る。この山の南東方に當り、秋葉街道に於ける青嶺峠最高點あり。又南西麓には觀音山(一四一八米)聳立す。

クママチ 熊町村 虻田縣磐城國雙葉郡の東北部。東は太平洋に臨み、西は熊川を隔て、宮岡町・上岡村に、北は新山町に接す。農桑の業盛にして、米を主産物とし兼蠶之に次ぐ。また良馬を産するも詳細なる統計を有さず。海岸には小良濱・熊川の漁場あり、魚介を得るの外、村の南部を繞流する熊川より、鮭・鮎を産し、就中鮭は古來熊川の鮭と稱せられ名あり。國道陸前濱街道、村を南北に縱貫し、また大野村との間に村道の通ずるあり。交通概して便ならず。この地當陸奥風土記に「建御旅日命當所、遺跡、以久慈郡之加川、爲遺跡、陸奥國石城郡若原之村、爲遺跡」とあり、

古くは若原に作り、石城郡の北限に位置す。古は熊川を以て繪巻、磐城郡の界水となし、最を以て中外の分限となし、華夷の國門と定めたり。室町時代の元龜元年の古文書には熊の地と見ゆ。鍋田三善著、常陸風土記標註に「相馬ノ界有川謂熊川村、屬磐城郡、其界宇賀熊町若原之村蓋是也」と見ゆ。熊川の南北約十軒に互り、花々たる、今にして不毛の曠野あり。惟ふに上古國界を此地に定められしは、熊川の淡水の阻障を待めるに非ずして、この蒼茫の地の、自然南北の區分をなすに便宜なるに賴れるが如し。江戸時代、相馬藩士藤田百壽著して國界に従事するに及び、相馬領となり、磐城郡に屬す。その位置相馬領の南端なりしかば、此地日付檢断を設き、出入を檢し、警備を嚴にせり。明治十三年七月佐山村を廢し、熊村に併せ熊町村と稱す。大字小良濱は、相馬氏・石城氏傳争の地にして、土地の村民はこれをおらの領と云ひて自己の領と主張せり。されば地名をも小良濱と呼びたり。古くは雙葉郡宮岡町大字の小良濱と本村大字の小良濱とを併せて小良濱と總稱せり。小良濱に笠松とよげると、巨傘の如き松あり。「小夜よけて千鳥なく二年仲秋舞圓登」大字夫澤、畝谷地山中に古碑あり、高さ三米、幅一・五米。一梵字を止む。これ弘法大師の作なりと。附近に古墳散在し、大字夫澤、熊には長

者屋敷と稱する址あり、これ等を綜合するに王朝時代と既に居住せる相當の氏族ありしを知るべし。村中、佐山館址、熊ノ館址あり、前者は相馬藩重臣熊川兵庫の居城、後者は往時熊氏の居城址と傳ふ。「熊照寺」大字熊川にあり。眞言宗。文龜二年權僧都長徳の開基。相馬領四ヶ寺の一。明暦四年正月、相馬藩主勝風より十二石三斗の寺領を寄進さる。寺内に、筑波山參勤を起し當地に脱走し來たり刺腹せし浪士、渡邊一二の墓あり。

熊本 九州本島の略中央に位置し、肥後國一隅を管轄す。「城域」北・東・南の三方は山を以て、西は天草灘に臨み、有明海・島原灘を隔てて長崎縣と相對す。西岸中央に突出する宇土半島は天草諸島と共に本土との間に八代海(不知火海)を抱く。本土は東西約八〇軒、南北約一二〇軒の長方形をなし、屬島を合せばその面積七四三・七方軒(府縣中第十四位)人口一、三三七、〇五四人(第十七位)にして大縣に屬す。一方軒の密度また一八六人に上りて全國の平均數を越ゆ。(昭和十年)行政上熊本市、熊北、宇土、玉名、鹿本・菊池・阿蘇・上益城・下益城・八代・葦北・球磨・天草の十二郡に分ち、縣廳を熊本市に置く。「地勢」地形及び地質上、肥後山地(八女山地)・阿蘇火山地域・九州山脈地域・中部平野及び天草

肥料等の諸工場が極々新設せられて漸く工業の勃興を見るに到れり。「沿革」明治四年七月熊本に熊本縣を、人吉に人吉縣を置く。これより先元年閏四月天草郡に宮岡縣を置きしも、まもなくこれを長崎府に併す。四年十一月従来の熊本縣を縮小し、その殘餘の地と人吉縣及び長崎府下にありし天草郡とを以て新に八代縣を樹つ。五年六月熊本縣を白川縣と改稱し、六年一月八代縣を廢し、その地を白川縣に併す。九年二月白川縣を再び熊本縣と改めて現在に及ぶ。

熊本市 熊本市を中心とする一帯の平野。東は阿蘇山、西は金峯山、北は肥後國境の山地、南は九州山地に接す。そのうち東は阿蘇の外輪山裾野の緩傾斜を以て移行し南は八代階層崖により鋭く境さる。平野の北部は菊池川の流域、南部は白川・熊川・球磨川の流域にて、中央部の菊池川と白川の分水界附近は比較的高き臺地性をなし如地卓越し、南部と北部とは水田の占むる低地あり、殊に白川・熊川・球磨川の複合三角洲地域顯著なるも、一般的には畑の水田よりも多き地域なり。氣候は北九州・南九州に比すれば大陸性にして、寒暑の差相當大なるは、隔海度の他地方に比して大なるに依る。米作は良實にて肥後米と稱さるるも、量必ずしも多からざるは水田著しく廣からざるを以てなり。灌漑用水に利用すべき各河川の外、水前寺の如き豊かなる泉もあ

進みて五〇〇米を越ゆる高地は稀なれども、比較的新しい時代に地盤の沈降せるため沖積平地は殆ど見る能はず。(交通) 福岡縣より來る鹿兒島本線は西海岸に沿うて熊本を過ぎ、三太郎峠を穿つて鹿兒島に達し、豊肥本線は熊本より阿蘇の火口原を買きて大分に出で鹿兒島・日豊兩本線を連絡す。曾て鹿兒島本線たりし肥後線は八代にて本線と分れ、ループ線の鐵路を経て鹿兒島縣の華人において日豊本線と相會す。また三角線は宇土より宇土半島西端の三角に、高森線は豊肥本線立野より岐れて南郷谷の高森に、湯前線は肥後線の人吉より球磨川上流の湯前にそれぞれ達す。その他熊本鐵道は熊本・山鹿間を、熊延鐵道は春竹・鳳用間を、菊池電軌は上熊本・隈府間を、熊本電軌は熊本・百貫石及び川尻間を連絡す。近年自動車道路の發達に伴ひ、縣の東南隅の五家莊を中心とする九州山脈の奥地を除けば、省管もしくは私設の乗合自動車の運轉せざる處なく、熊本はその中心をなす。海岸は八代海沿岸の南半を除けば他は概ね遠淺にして良港に乏しく、僅に宇土半島の尖端に三角港ありて第二種重要港灣に指定せられ、天草諸港・島原・口津・長崎等との間に小汽船の往來を見るのみ。(産業) 耕地面積は鹿兒島縣に次ぎて九州にては第二位を占め、農業最も發達す。米産は福岡縣に次ぎ一七五萬石(そのうち約三〇%内外を縣外へ移出す)に

上り、而も夏季の氣温高きを以て品質優れ、風に肥後米の名著る。田・畑の面積は殆ど差を見れば、寧ろ畑作において本縣農業の特色を見る。即ち櫻子の産額を全國にて第一位を、粟及び南瓜は第二位を、甘藷・苧麻・楮は第三位を占むるほか、大麻・蘭草・楮・甘藷・玉蜀黍・薄荷・西瓜・里芋・牛蒡・小麥・陳稻・茶等は何れも第四位乃至第十位を占めて本縣の畑作が如何に盛なるかを如實に物語る。また養蠶は縣下に普く行はれ、收購額は一千萬圓を突破して西南日本に冠たり。阿蘇火山地域を初め放牧に適する草原廣げれ紅苧産額も亦侮り難く、牛は七萬頭、馬も六萬頭を越え鹿兒島縣に次ぐ畜産縣とせらる。縣の東南部は九州地方の一の深山地域にして杉・松・扁柏等の用材、木炭・椎茸等の産多く、天草諸島は漁港に恵まれて鱈・鰯・鯛・鰺・烏賊等の近海漁業行はれ、筑後川その他の河川には鮎・鯉等の漁獲物あり。釀造は乏しく福岡縣三油に隣接する萬田炭坑の石炭は天草下島の無煙炭と共に本縣の主要産物にして、その他には良質を以て近縣に知らるる天草陶土あるのみ。本縣は從來農業に偏して工業や後れ、織に酒・焼酎・醤油・澱粉等の農産物の加工製造品を出すに過ぎざりしも、熊本附近に製糖・紡織及び官營の煉炭工場等が設けられ、近年に至りて水力發電に便利なる八代附近に製紙・セメント・肥料、水俣に窒素

肥料等の諸工場が極々新設せられて漸く工業の勃興を見るに到れり。「沿革」明治四年七月熊本に熊本縣を、人吉に人吉縣を置く。これより先元年閏四月天草郡に宮岡縣を置きしも、まもなくこれを長崎府に併す。四年十一月従来の熊本縣を縮小し、その殘餘の地と人吉縣及び長崎府下にありし天草郡とを以て新に八代縣を樹つ。五年六月熊本縣を白川縣と改稱し、六年一月八代縣を廢し、その地を白川縣に併す。九年二月白川縣を再び熊本縣と改めて現在に及ぶ。

熊本市 熊本市を中心とする一帯の平野。東は阿蘇山、西は金峯山、北は肥後國境の山地、南は九州山地に接す。そのうち東は阿蘇の外輪山裾野の緩傾斜を以て移行し南は八代階層崖により鋭く境さる。平野の北部は菊池川の流域、南部は白川・熊川・球磨川の流域にて、中央部の菊池川と白川の分水界附近は比較的高き臺地性をなし如地卓越し、南部と北部とは水田の占むる低地あり、殊に白川・熊川・球磨川の複合三角洲地域顯著なるも、一般的には畑の水田よりも多き地域なり。氣候は北九州・南九州に比すれば大陸性にして、寒暑の差相當大なるは、隔海度の他地方に比して大なるに依る。米作は良實にて肥後米と稱さるるも、量必ずしも多からざるは水田著しく廣からざるを以てなり。灌漑用水に利用すべき各河川の外、水前寺の如き豊かなる泉もあ

の諸山が聳え、東北に同じく龍田山が迫り、市街は北方より延び来る洪積層臺地の東端を占め、白川河口より西ること十二軒にして川を挟みてその兩岸に發達す。この地の沿革を尋ねるに、その肥後

を限本の城下に移し、慶長六年城を改築し、限本を改めて熊本と稱す。當時の町筋は土屋敷・町家等を併せて東西三十二町餘、南北三十三町餘、周圍三里三町餘ありしといひ、今日の發展の基礎初めて固まる。而して限本の稱呼は、後三條天皇延久年間、菊池則隆肥後國菊池郡に始めて下向し、鞍馬觀音に詣りて時、山上夕霧紫雲を含み天色奪るが如く、限ありてその限どるところ濃し、よりに限本と稱せりと傳ふ。これを熊本と改めしげ限

す。初め熊本は熊本縣の管轄に屬し、縣廳は花畑館の舊館にありしが、のち城内二ノ丸に移り、明治五年熊本縣は白川縣となり、縣廳を當時の熊本郡古町村二本木に移し、同九年二月白川縣は復た熊本縣に改め、縣廳を熊本城内に置く。かくて熊本は縣下政治上の中心となるに至れり。明治九年政黨の發展あり、翌十年西南の亂起り、熊本城はその攻守の中心となり、同年二月兵燹によりて市街は全く灰燼に歸したり。しかし本縣行政の中心地たると同時に肥後米の獨占的集散地たるの地位はよく市街の復興を促し、殊に全九州の中央に位置すると云ふ條件よりその後續々諸官衙の新設を見て、市勢は年と共に伸展す。いま熊本市區の變遷を尋ねるに、明治六年に熊本を南北の兩區に分ち、北を第一區五十五小區とし京町、坪井の二組これに屬し、南を第二區五十五小區として手取・古町の二組これに屬し、町數計二一六あり。同七年更に第一區八小區に編成し、當時の戶數九四九九、人口四八八六六。同十二年元熊本第一區區域のほかに熊田郡のうち出町、託摩郡のうち新屋敷町及び野町を編入して更に熊本區を置き、町數一三八となり、以て現今市區域の基礎を成る。同二十一年四月市制の發布あり、翌年四月これを實施す。次で同三十二年に至り市街の中央を占むる山崎練兵場と稱する地區に新市街地を創設し、以て本市轉變の街衢をな

せり。かくて本市は年を延うて隆盛に赴きしが、大正十年六月には隣接せる他託郡の黒髪及十箇町村を合し一躍人口十三萬の大都市となり、同十四年には出水村を併合して市域の擴張を圖り、更に昭和六年には白坪村を、翌七年には豊岡村を、また同十一年には市の東邊佐軍村を編入して遂に今日の大をなすに至れり。東西一三軒餘、南北九軒餘、面積約五六・三方軒(昭和十一年末)にして人口は二二七五〇人(昭和十年)に上り、九州第三の大都たり。北に山を負ふ關係上白川の西北岸一帯は地勢既れ高燥にして、舊市街は熊本城址を圍繞して放射狀に發達し、本市の生命たる諸官衙・學校等は何れもここに建並ぶ。即ち先づ舊城址には第六師團司令部を初め第十一旅團及び聯隊司令部・陸軍教導學校・機重兵大隊兵營等が置かれ、城址の北方植木街道に沿ふ京町には清正を祀る加藤神社(社址)・營林局・裁判所・調候所・師範學校があり、東北の坪井町より龍田町にかけては第五高等學校・高等工業學校・中學校・費等が建り、また鹿兒島本線を隔つる西方の丘陵地には本妙寺及び加藤清正廟あり。市の西南端に屹立する花岡山は一に祇園山とも稱し、標高僅か一三三米に過ぎざるも、市街に最も接近せるため本市第一の展望地にして、熊本全市を俯瞰し得ると同時に、東は阿蘇火山の噴煙を眺め、西は有明海を隔て、雲仙岳を望み得るが

故に櫻花と紅葉の頃は特に賑ふ。山頂には薩軍砲陣の址等の史蹟も遺る。實つて城址の東より南にかけては坪井河原に市役所・通信局・放送局・公會堂・商工會事務所・專賣局、やや離れて税務監督局等が建り、白川河原には熊本城の遺蹟たりし藤崎八幡宮(國幣小社)及び熊本縣廳あり。城南の謂ゆる新市街は今劇場・映画館・料亭等都比して最も繁華を極め、その西南に隣る一帯は商業區域の中核部に當り郵便局・銀行等軒を連ね、坪井川を渡りて南下すれば熊本驛を中心に紡織・製絲・瓦斯等の大小工場多し。白川左岸は概して新聞の地にして醫科大學・各種中等學校・農事試験場・兵營・演習場・練兵場・刺殺所等が田園の間に散在す。ただ豊肥本線を横斷して東南に延びたる水前寺通のみは、その末端に在る成趣園に遊ぶ客の往來繁く、市街も亦よく發達す。成趣園は寛永九年藩主細川忠利が水前寺を建立せる故地を開きて庭園化せる處なれば、現今に於ては水前寺公園と通稱せられ、林泉の美は市民の清遊に適し、附設の動物園は兒童を誘致するに足るを以て四時遊覽客の絶ゆる時なし。園内の水を湛ふる江津湖は鱉・鰻等多く、市内唯一の水郷として夏季納涼客を集む。なほ本市には外人經營の福利院及び不良少年の感化と免因保護を目的とする白川學園の如き社會施設も備へる。行政都市として發達せる本市は寧ろ消費地にして工業は餘り

振はず、その産物は四千萬圓内外にしてその大部分は農産加工の飲食料品工業にして、やや著れたる製品は官營の煙草・蠶絲・綿織物等に過ぎず。但その半面において縣内唯一の中心都市なれば、その交通機關はよく具はり、鹿兒島本線は市の西部を南北に貫き、上熊本及び熊本の二驛(いづれも明治二十四年設置)を置き、豊肥本線は熊本驛に發して市の南部を東に迂回し、春竹・水前寺の二驛(何れも大正三年設置)を設く。私設鐵道には菊池電軌(上熊本・限本間)・熊延鐵道(春竹・炭用間)・熊本電軌(熊本・百貫石及び川尻間)ありて南・北・西の三方に走り、市内には市營電車及び乗合自動車線が網を完備せるほか、定期乗合自動車線は縣下の主要町村を殆ど餘すところなく連絡せるは勿論、更に隣縣にも達す。

Table with 2 columns: 明治三十五年 熊本行幸 and 明治三十五年 熊本行幸. It lists various events and dates related to the city's history.

るに及び城ノ久基、城を出でて豊原方に降る。この時秀吉、限本城に逗留數日に及べり。同月即月二十日付にて、秀吉の毛利右馬頭と與へたる書に、肥後國熊本事、命を被助、城を請取候、かの地國のかため所に候間、一兩日令逗留留守居等被仰付、宇土庄之城(取懸)とありし、これに依りてその軍狀を知るを得べし。また九月既に平定し、歸路熊本より本願寺に宛てたる同年六月朔日付秀吉の書狀に、肥後國熊本・熊田・羽柴陸奥・中付候、熊本・名城・候條爲居城、普請丈二被仰付候事とあり、秀吉はこの城を重視し、特に佐々木陸奥守成政を肥後に封じ、熊本に在城せしめたるなり。のち成政の失政により民心離反し、肥後國亂れ、秀吉これを懲りて成政に切腹を申付く。成政の歿後、加藤清正に肥後半國を與へて限本に居城せしめ、その残りの半國はこれを小西行長に與へて宇土城に居らしむ。時に天正十六年五月、のち十四年を経て慶長五年に關ヶ原役起り、小西行長は西軍に當りて亡び、家康は肥後全國を清正に與ふ。清正、肥後の大守となるや、舊城の狹隘を感じ、新たに地を茶臼山即ち今の本丸に相し、慶長六年八月築城の工を起し、經營六十年、同十二年に工役の全部を完成す。これ即ち舊て出田秀信が文明中に築きし千葉城の舊址たり。また鹿子木家心の築きて代々居城せし古城は、その外郭の一帯にすぎざるに

至れり。慶長十二年隈本城を改め隈本となす。即ち事蹟通考編年通考卷十所載の美家藏隈本改稱の觸書に

一筆申觸候、隈本の文字之事今度御城出来に付、御改メ候而隈本と御書被成候間、此以後其旨可被心得候 悉惶 謹言

慶長十二年 月七日 加藤(肥後守)とあり。蓋し一國の府たるが故に、阜に長るといふ文字を忌みたるに因る。ただ前掲天正十五年卯月文書に既に隈本とあり、非公式には早くよりその字を用ひしものならん。寛永九年六月、清正の嫡嗣肥後守忠貞、罪を得て除封せられ、同年九月細川忠利隈本に封ぜられて十二月着藩、爾來世々連綿として相嗣ぎ、維新に至る。本城は隈本市のほぼ中央にして、丘陵に倚り東西一・五軒、南北二軒の互城はその東側を南流する坪井川を内濠、白川を外濠とし、西側は井芹川の低窪地を以つて花岡山と隔離されたればその要害頗るよく、大阪・名古屋の兩城と共に日本三名城と稱せらる。従つて明治四年には既に隈西鐵道が設かれ、現在も亦第六師團司令部に充てらる。明治十年の西南役における陸軍少將谷干城の隈城は本城の名聲を高むるに足れりと雖も、その際第一・第二の兩天主閣を初め本丸以下其主要建築物殆ど烏有に歸し、清正が宇土城より移せる第三天主閣たる宇土櫓その他城門・長射等を礎に遺すのみとな

る。いま國寶に指定せらるゝもの次の如し。宇土櫓、三層櫓(内部五層・地階一層)附屬櫓棟層・二階櫓重層・屋根棟本瓦葺。源之進櫓、單層短折櫓・屋根棟本瓦葺。四間櫓、單層櫓・屋根棟本瓦葺。十間櫓、單層櫓・屋根棟本瓦葺。七間櫓、單層櫓・屋根棟本瓦葺。田子櫓、單層櫓・屋根棟本瓦葺。東十八間櫓、單層短折櫓・屋根棟本瓦葺。北十八間櫓、單層短折櫓・屋根棟本瓦葺。五間櫓、單層櫓・屋根棟本瓦葺。不開門、藤戸附櫓門・屋根左端入母屋造・右端切妻造・本瓦葺。平櫓、單層櫓・前面一部附庇・屋根棟本瓦葺。監物櫓(新堀櫓)、單層櫓・屋根棟本瓦葺。長射、長二五二・七三米(八百三十四尺)・屋根棟本瓦葺。宇土櫓は隈本城及び西南役に關する遺品を陳列し、昭和二年以降一般に公開せらる。(天主主)西南の役に喪失せる大天主は、慶長六年清正の築造せるものにして、桃山時代の城郭建築の様式より之を見れば、過渡期の表現をもつ我國城郭建築中唯一の構造なりとす。遺されたる寫眞・史料・文獻によりその外容の概要を記せば、五層の大天主は建物の根元にある庇を數ふる時は六層とし、總高約三〇米(十六間二尺)也。即ち第二・第四・第六層は屋蓋となり、千鳥破風、或は入母屋となし、第一・第三・第五層は地庇を廻らす。而して他の天主に見る如き、家階にあらず完全なる庇なるため、見様によりては大なる三層櫓の觀を呈す。第二層と第四層と

は一方入母屋となり、反對側は千鳥破風となりて、その破風の口の大さ又はほぼ同一なるため、四方破風の感あり、上層の兩方に唐破風を用ひたるは、小天守下方の突出せる唐破風と對照して總體的美觀を呈し、慶長中年頃の城郭建築の特長を發揮す。大天主と大屋根の平家を繋ぎとし、越天なる屋蓋上に小天主(高さ約一八米)が庇付重層の頭角を現はせるさまは、堂々たる安定感を與へ、初期城郭建築の架橋時代を如實に表現せり。大天主は宏大なる高石垣を精緻して各層に矢狭間を數多切開き、全體に射裝置完備せり。外部は總檢能めなれど、腰高の鎧下見銀となせる點は、慶長以前の古風を採り用したるもの。外部の窓はその數多く、屋根は降り棟なきを特長とし、大破風に當代獨特の鬼瓦を設けり。天主臺石垣は宏大にして、高さ約一四・三米(七間五尺)・築城の權威たる清正が、部下の石築の名人飯田兵衛・小野御治兵衛等をして築かしめしところ。

〔宇土櫓〕もと宇土にありし小西行長の居城の櫓にして、小西亡びて後、加藤清正これを移して三ノ天主となせり。三層櫓にて、内部五層、地階一層あり。單層の檼を以て二階櫓に接続し、屋根は棟本瓦葺。いま國寶建造物に指定せらる。現存桃山時代の天主閣のうち初期の様式を示したるものにして、その屋蓋の流れは破風に多少起りをつくれるを異例とな

千鳥破と呼はれし大建築ありて、この屋下間路をなせるによりて名づく。(師團司令部)くらがり門址を上りて左にあり。明治四年、隈本に隈西鐵道を設け、司令部を此處に設く。のち第六師團司令部となり今日に至る。司令部支團先に大なる銀杏樹あり。加藤清正の築造記念として植みられしもの餘蘖より生じ、隈本城の異稱たる銀杏城の名、實にここに起る。(午砲臺)もと月見櫓にありし址にして、西南の役に廢城となり、いま大砲を据ふ、ここより市街地の展望最も佳し。大砲は總新前に細川家のつくりし青銅製のものにして、九曜の紋所を附す。東隣の丘上に僧行社あり、もとの千鳥城址にして、隈本城發祥の地とす。

〔不開門〕師團司令部前より左、千鳥城址に通ずる下り坂にあり。兵火を免れて舊形を完全に保存せる唯一の城門にして、屋根は左端入母屋造、右端切妻造の藤戸付き樓門なり。往時この門は殆ど開かず、よりて名づく。(大手門址)隈本城正面の本門ありしところ。各城門中最も豪華を極めしが、いま全くその名残を留めず。(二ノ丸址)いま隈本陸軍教導學校の境内。嘗て細川氏の時習館ありし址にして、いま記念碑をたつ。明治九年神風連の徒、大擧して襲ひし第十三聯隊の營所はもとここに設かれ、城内にそれに關する遺蹟多し。教導學校裏手に法華坂あり、昔本城内に入るには此坂を

上り、學校境内を西より東へ貫ける大道によりて大手門に達し、また九年の變によりてこの坂を上りて襲撃せり。(箱馬場)備前堀の西にあり。昔お櫓方といへる藩の財政を司る役所ありし所にして、のち周圍を短冊形に小高く圍みて訓練場となす。これに接して榎の並木あり、城内所々にある大樟と共に、一朝事ある時の燃料となさんとて植うることあり。(百間石垣)教導學校北邊に東西に長く伸びる石壁にして、二個所に柵形門を設く。俗間、敢然難事に當ること、百間石垣うしろとび、といふはこの石壁の名を取れるもの。石壁の下を過ぎ、東して監物櫓(また新堀櫓、國寶)の下を通り、加藤神社の傍より京町を経て植木方面に至る國道は、加藤清正が開墾せしと傳ふる間道にして、隈本城特有のものとし、嘗て城内への糧道たり。

〔鹿崎臺〕城址の西北部。明治十年まで國幣小社鹿崎宮の鎮座せし地。その南側に巨大なる樟樹一群をなし、いま天然記念物に指定さる。樹群のうち大なるもの七本を俗に七本樟とよび、根廻り一三―二二米、樹高二―三三米に達し、壯觀を極む。鹿崎臺の北側下の舊地は漆畑、西方の丘は段山にして、何れも西南役の最激戦地とす。明治十年二月二十二・三日、薩軍この方面より侵襲し、死屍を遺き、官軍また與倉中佐を喪ふ。鹿崎臺の北端に招魂社あり。

りの行列づく、これを夕陽兵といふ。一ノ宮・二ノ宮・三ノ宮の三神輿に勅使代理、甲冑乗馬にて黄・赤の旗指物せる隨兵百騎、甲冑指物の長柄鎧五十本、乗馬の御幸奉行等、昔のままの慣例によりて殿めしく、これに三四十の飾馬を数多の勢子がゴツ／＼の騾馬ましく追立つるさま勇壯なり。祭は十一日に始まり、この日獅子舞あり。十三日ば飾御しと稱しゴツ／＼の掛簾にて市中を進びまはり、祭は十五日まで続く。行列の起りは加藤清正朝鮮征伐の時戦勝を祈り、爾來長柄百騎馬を飲じたるに始まるといふ。

を従ふるや、自ら兵を率ゐて之に參ぜし、同十年信長の異變に遭ひ、出家して阿耨支旨と號し、同十三年從二位法印に敍せらる。爾來文學に長け、故實に通曉し、和歌に精通しその逸作に傳るもの數多し。晩年は京都洛西衣笠山麓に閑居し慶長十五年八月京都に卒す。明治三十五年十一月十二日特旨を以て正二位に追陞せらる。其後、忠興・忠利・宗孝・重實・治平・資茂・資樹・資護・關邦等相繼いで文武兼備の達人として封を繼ぎ、以て續新に至る。明治十二年相殿に光尚以下當主を祀り、縣社に列す。例祭十月二十一日。拜殿の前庭向つて左手にある裝束文の手水鉢は加藤清正が朝鮮より凱旋の際將來せる京極南門の礎石なりといふ。又玄宅寺址は神社後方の竹藪中にあり。

を開拓し、其他諸川の堤防を修築して氾濫を防ぎ、灌漑の便を通ずるなど大いに民治に意を注ぎ、牧民の實大にあり、士俗いよいよその徳澤に感ず。年五十にして卒す。出でては遠く三韓にまで鬼將軍の雷名を擡にし、入りては仁義禮智信を辨ふ。誠に武士の勳靈と言ふべし。相殿に祀れる大木兼能は清正に仕へて三千石を食み、老區に列し、頗る智略に富み常に清正公の左右に侍し輔翼するところ少ならず。清正の薨するやその翌日從容として殉死す。同じく相殿に祀れる韓人金官は、征韓の際に清正に降り、爾來その警導となりて我軍に貢獻せしところ多し、役後わが國に歸化して永く清正に奉侍せしが、その薨去の後に大木と共に公に殉ず。之を以て明治四十年十月その偉烈を得るため官許を得て茲に合祀するに至る。社地は舊堀を隔てて公の遺城なる熊本城址に通じ、土地高燥、一際にして熊本全市を盡すを得べく、東のかた近かに阿蘇の噴煙を望み、東南遠く豊國湖を認め、眺望佳絶、殊に春季櫻花の頃は賽客群を接す。例祭七月二十四日。毎年四月十二日盛大なる神幸祭を行ふ。社實に清正自作の鳥羽子形兜・頬當・佩刀・陣太鼓其餘あり、また園内に征韓役に分捕りし石櫓あり。

同を當國熊田郡湯原(二本木町西南)に勸請して府中鎮護となし、祇園宮と稱せしに創まると云ふ。もと北阿(花園とも云ふ)山上にありしが、後、その山尾なる車屋敷に移祀せり。天慶九年、當社神事の日、京都より勅使下向ありてより冷泉天皇御宇に至るまで年々祭禮に勅使下向の事あり。村上天皇また二百五十町の神領を御寄進ありて拜三山の額を賜ふ。安和二年菅原光家當國々司となり、その子孫累代奉仕す。天元二年再び熊田山に遷祀して社殿を再興す。その後社領の寄進屢々あり。長承元年、菊池氏社殿を建立、のち修造を行ふ。正保四年、藩主細川肥後守光尚、故ありて今の北阿蘇に遷督す。明治初年縣社に列せらる。境内一千九百三十坪。社頭輪奐の美備はり、社地また高燥、古樹蒼蒼として風光殊に勝れたり。例祭八月一日。境内に西南役の際西郷盛自ら登りて大砲の照準を定めしと傳ふる樹齡千年の老榎あり。

り四木の社殿を改めて代徳といふ。天明二年細川重賢、その祖嘉孝(阿耨)の節く文武に通じ、和歌の名手たりしを以て當社歌道の祭神なるに因みて、その靈を祖殿に祀りす。明治八年縣社に列し、縣社に昇格す。例祭、十月十五日。

を従ふるや、自ら兵を率ゐて之に參ぜし、同十年信長の異變に遭ひ、出家して阿耨支旨と號し、同十三年從二位法印に敍せらる。爾來文學に長け、故實に通曉し、和歌に精通しその逸作に傳るもの數多し。晩年は京都洛西衣笠山麓に閑居し慶長十五年八月京都に卒す。明治三十五年十一月十二日特旨を以て正二位に追陞せらる。其後、忠興・忠利・宗孝・重實・治平・資茂・資樹・資護・關邦等相繼いで文武兼備の達人として封を繼ぎ、以て續新に至る。明治十二年相殿に光尚以下當主を祀り、縣社に列す。例祭十月二十一日。拜殿の前庭向つて左手にある裝束文の手水鉢は加藤清正が朝鮮より凱旋の際將來せる京極南門の礎石なりといふ。又玄宅寺址は神社後方の竹藪中にあり。

を開拓し、其他諸川の堤防を修築して氾濫を防ぎ、灌漑の便を通ずるなど大いに民治に意を注ぎ、牧民の實大にあり、士俗いよいよその徳澤に感ず。年五十にして卒す。出でては遠く三韓にまで鬼將軍の雷名を擡にし、入りては仁義禮智信を辨ふ。誠に武士の勳靈と言ふべし。相殿に祀れる大木兼能は清正に仕へて三千石を食み、老區に列し、頗る智略に富み常に清正公の左右に侍し輔翼するところ少ならず。清正の薨するやその翌日從容として殉死す。同じく相殿に祀れる韓人金官は、征韓の際に清正に降り、爾來その警導となりて我軍に貢獻せしところ多し、役後わが國に歸化して永く清正に奉侍せしが、その薨去の後に大木と共に公に殉ず。之を以て明治四十年十月その偉烈を得るため官許を得て茲に合祀するに至る。社地は舊堀を隔てて公の遺城なる熊本城址に通じ、土地高燥、一際にして熊本全市を盡すを得べく、東のかた近かに阿蘇の噴煙を望み、東南遠く豊國湖を認め、眺望佳絶、殊に春季櫻花の頃は賽客群を接す。例祭七月二十四日。毎年四月十二日盛大なる神幸祭を行ふ。社實に清正自作の鳥羽子形兜・頬當・佩刀・陣太鼓其餘あり、また園内に征韓役に分捕りし石櫓あり。

同を當國熊田郡湯原(二本木町西南)に勸請して府中鎮護となし、祇園宮と稱せしに創まると云ふ。もと北阿(花園とも云ふ)山上にありしが、後、その山尾なる車屋敷に移祀せり。天慶九年、當社神事の日、京都より勅使下向ありてより冷泉天皇御宇に至るまで年々祭禮に勅使下向の事あり。村上天皇また二百五十町の神領を御寄進ありて拜三山の額を賜ふ。安和二年菅原光家當國々司となり、その子孫累代奉仕す。天元二年再び熊田山に遷祀して社殿を再興す。その後社領の寄進屢々あり。長承元年、菊池氏社殿を建立、のち修造を行ふ。正保四年、藩主細川肥後守光尚、故ありて今の北阿蘇に遷督す。明治初年縣社に列せらる。境内一千九百三十坪。社頭輪奐の美備はり、社地また高燥、古樹蒼蒼として風光殊に勝れたり。例祭八月一日。境内に西南役の際西郷盛自ら登りて大砲の照準を定めしと傳ふる樹齡千年の老榎あり。

クマモ——クマモ

り四木の社殿を改めて代徳といふ。天明二年細川重賢、その祖嘉孝(阿耨)の節く文武に通じ、和歌の名手たりしを以て當社歌道の祭神なるに因みて、その靈を祖殿に祀りす。明治八年縣社に列し、縣社に昇格す。例祭、十月十五日。

を従ふるや、自ら兵を率ゐて之に參ぜし、同十年信長の異變に遭ひ、出家して阿耨支旨と號し、同十三年從二位法印に敍せらる。爾來文學に長け、故實に通曉し、和歌に精通しその逸作に傳るもの數多し。晩年は京都洛西衣笠山麓に閑居し慶長十五年八月京都に卒す。明治三十五年十一月十二日特旨を以て正二位に追陞せらる。其後、忠興・忠利・宗孝・重實・治平・資茂・資樹・資護・關邦等相繼いで文武兼備の達人として封を繼ぎ、以て續新に至る。明治十二年相殿に光尚以下當主を祀り、縣社に列す。例祭十月二十一日。拜殿の前庭向つて左手にある裝束文の手水鉢は加藤清正が朝鮮より凱旋の際將來せる京極南門の礎石なりといふ。又玄宅寺址は神社後方の竹藪中にあり。

を開拓し、其他諸川の堤防を修築して氾濫を防ぎ、灌漑の便を通ずるなど大いに民治に意を注ぎ、牧民の實大にあり、士俗いよいよその徳澤に感ず。年五十にして卒す。出でては遠く三韓にまで鬼將軍の雷名を擡にし、入りては仁義禮智信を辨ふ。誠に武士の勳靈と言ふべし。相殿に祀れる大木兼能は清正に仕へて三千石を食み、老區に列し、頗る智略に富み常に清正公の左右に侍し輔翼するところ少ならず。清正の薨するやその翌日從容として殉死す。同じく相殿に祀れる韓人金官は、征韓の際に清正に降り、爾來その警導となりて我軍に貢獻せしところ多し、役後わが國に歸化して永く清正に奉侍せしが、その薨去の後に大木と共に公に殉ず。之を以て明治四十年十月その偉烈を得るため官許を得て茲に合祀するに至る。社地は舊堀を隔てて公の遺城なる熊本城址に通じ、土地高燥、一際にして熊本全市を盡すを得べく、東のかた近かに阿蘇の噴煙を望み、東南遠く豊國湖を認め、眺望佳絶、殊に春季櫻花の頃は賽客群を接す。例祭七月二十四日。毎年四月十二日盛大なる神幸祭を行ふ。社實に清正自作の鳥羽子形兜・頬當・佩刀・陣太鼓其餘あり、また園内に征韓役に分捕りし石櫓あり。

同を當國熊田郡湯原(二本木町西南)に勸請して府中鎮護となし、祇園宮と稱せしに創まると云ふ。もと北阿(花園とも云ふ)山上にありしが、後、その山尾なる車屋敷に移祀せり。天慶九年、當社神事の日、京都より勅使下向ありてより冷泉天皇御宇に至るまで年々祭禮に勅使下向の事あり。村上天皇また二百五十町の神領を御寄進ありて拜三山の額を賜ふ。安和二年菅原光家當國々司となり、その子孫累代奉仕す。天元二年再び熊田山に遷祀して社殿を再興す。その後社領の寄進屢々あり。長承元年、菊池氏社殿を建立、のち修造を行ふ。正保四年、藩主細川肥後守光尚、故ありて今の北阿蘇に遷督す。明治初年縣社に列せらる。境内一千九百三十坪。社頭輪奐の美備はり、社地また高燥、古樹蒼蒼として風光殊に勝れたり。例祭八月一日。境内に西南役の際西郷盛自ら登りて大砲の照準を定めしと傳ふる樹齡千年の老榎あり。

〔植原城址〕花園町、上熊本野西方、井...

〔熊本野〕花園町、上熊本野西方、井...

て、維新の際國事に奔走して斃れし宮部...

全く平定せり。〔時習館址〕城内、陸軍教導學校構内に...

こと甚大にして、横井小楠・元田元亨...

〔水前寺〕指定名勝史蹟。出水町にあり...

の子忠興徳川方に従ひて會津の上杉征伐...

カハタケノと呼ばる。五六月の交これ...

陸軍墓地に接して秋山玉出・富田大風の...

と成因を同じくし、海洋學的性質も大體等し。面積七〇八平方軒。周圍二四〇...

側の松林を歩せば、湖に面し斷崖を認む。なほ過みたる葛野には、佐野谷川の水...

飛地に接し、東北は伊佐郡西谷良村に界し、面積三一・五平方軒餘。一般に高度...

村を経て利津町に至り交通不便ならず。中世は上庄に屬し、一に久日谷とも池田...

みし所なるより久米と稱すといふ。佐竹義治の三子、義武、三郎二郎と稱し久米...

るべし。其地今詳かならざるも勢田郡敷地村の邊に當るか。【久米】 愛知縣知多郡にありし村。明治...

といふありて、紀氏の本宗家の木見宿禰を祀る所なるを、大内記味酒首文雄といふ人、當國の民間にあるが、是れ紀氏の別...

稱す、共に叔負部たりしが景行天皇の朝に至り久米七御、日本武尊に從ひ、藤...

クメ——クメシ

東南の袖川(北川上流)の斜面に二分す。前者の東南半部は西北に急斜する山地なれども、西北半部は人吉盆地の東部に當り土地平坦にして耕地よく折け村の主要地帯をなし、後者の袖川斜面は山

【久米路】奈良縣葛城山と高市郡飯傍町大字久米間の交通路。新古今・十五、葛城やくらに渡す岩橋の絶えに中となりやばてなむ。能宣朝臣

【久米路】奈良縣葛城山と高市郡飯傍町大字久米間の交通路。新古今・十五、葛城やくらに渡す岩橋の絶えに中となりやばてなむ。能宣朝臣

【久米路】奈良縣葛城山と高市郡飯傍町大字久米間の交通路。新古今・十五、葛城やくらに渡す岩橋の絶えに中となりやばてなむ。能宣朝臣

【久米路】奈良縣葛城山と高市郡飯傍町大字久米間の交通路。新古今・十五、葛城やくらに渡す岩橋の絶えに中となりやばてなむ。能宣朝臣

【久米路】奈良縣葛城山と高市郡飯傍町大字久米間の交通路。新古今・十五、葛城やくらに渡す岩橋の絶えに中となりやばてなむ。能宣朝臣

クメシ——クモイ

来米を産す。但語久米はた前節、その面影を傳ふ。はた前節の下り溝わてどよこす三升まし、三まし、毛水こめて、はた前節の渡り溝わてどよこす三升まし、六まし、眞水こめて、仲里・具志川二村より成り、中里村の大字儀間・眞里を主邑となし、儀間に小學校・警察派出所・無線局等を置く。村甚井然、人亦美し。島は久米島の名産地にて各戸必ず庭内に桑樹を植ふ、蠶を養ひ、チチカと稱する植物の根及び此島特有の泥を用ひ、他の模倣品を許さざる織物を織り、木炭・蘭席・米・砂糖と共に島の重要産物をなす。

クメ 来目

【来目】 藤波(大阪府)にありし古地名。書記清孝天皇紀に河内三野縣主が大伴室屋大連の恩に報いんが爲めに藤波にある此邑を贈れる旨見ゆ。其地は今大阪府住吉區遠里小野の邊といはる。

クメカワ 久米川

【クメカワ 久米川】 東京府北多摩郡東村山村の大字。此地は近世、多摩郡山口領に屬し来目川或は買馬川とも書さしといふ。古くより葛城に於て正保の頃梅若寺領の外、今井八郎右衛門忠昌の代官所にして、その後八郎右衛門忠昌ならず、大岡源右衛門孟清の支那所となりて梅若寺領も交れり。檢地は寛文八年に兩宮勳兵衛、同九年に同上次郎兵衛・近山五左衛門、延寶二年に中川八郎左衛門

門・今井九右衛門、同六年に秋庭仁右衛門・吉野嘉右衛門、元禄元年に細井九右衛門、享保十九年に眞播磨守正備なり。此の土地の開けし年代は傳はらざるも最古き村にして、僧日蓮略傳に、佐渡國流罪の時、文永八年十月十日相模國を退き、武藏國久目河につくとあり、また、市川市の中山法華經寺文書にも此事を載す。此の地は屢々戰場となりしことは太平記・元弘三年五月十一日小幡原合戦の條、及び文和元年武藏野合戦の條に見ゆ。同國雜記に、「この所をすきてくめくめ川といふ所あり、里の家々に井なども侍らで、ただこの河をくみて朝夕もちひはべるとなん申しければ、里人のくめくめ川と夕ぐれになりなば水の米りこそせめ」とあるも此地なりと。太平記・一〇新田義貞叛の事、附天狗越後勢を催す事、路次に兩日逗留ありて、同十一日の辰の刻に武藏國小幡原に打撃み給ふ。爰にて遂かに源氏の陣を見渡せば、其勢雲霞の如くにて幾千萬騎ともいふべき數を知らず。櫻田、長崎之を見て、案に相違やしたりけん、馬を控へて進み得ず。義貞怒り入河河を打渡して、先づ四の聲を掲げ、陣を進め、早矢合の備をぞ射させる。平家も敵軍を合せて、旗をぞ射てかぶりけり。初は射手を放へて散々に矢軍をしけるが、前は寛寛の馬の足立なり。何れも東國育ちの武士共なれば、いかでか少しもなまるべき、太刀長刀の聲

クメクメ 久米久米川

【クメクメ 久米久米川】 久米川(武藏國)

【クメクメ 久米久米川】 久米川(武藏國)を指す。馬を並べて切つて入る。二百騎、三百騎、千騎、二千騎を添へて相戦ふこと三十餘度になりしかば義貞の兵三百餘騎討たれ、鎌倉勢五百餘騎討死して日已に暮れば、人馬共に疲れたり。軍は明日と約諾して、義貞三里引退いて入河河に陣をとる。鎌倉勢も三里引退いて、久米河に陣をぞ取りける。兩陣相去る其間を見渡せば三十餘町に足らざりけり。何れも今日の合戦の物語して、人馬の息をつがせ、兩陣互に陣を燒いて、明くるを遅しと待ち居たり。夜既に明けぬれば、源氏は平家に先をせられじと、馬の足を進めて久米河の陣へ押し寄せする。平家も夜明けば、源氏定めて寄せんずらん、待つて戦はば利あるべしとて、馬の腹帯を固め、胃の緒をしめ、相待つとぞ見えし、兩陣互に寄せ合せて、六萬餘騎の兵を一手に併せて、陽に開きてなかに取籠めんと勇みける。

クモ 雲

【クモ 雲】 伊弉諾牟婁の歌枕。往時の牟婁郡は三重縣和歌山縣に分れ、今その所在詳ならず。夫木・二二、村雨のけさもゆききのくもりもりいくたび秋の木末そむらむ 如家

クモイ 雲井

【クモイ 雲井】 飯野縣近江國甲賀郡の西部。信樂町の北東に接し、北は三雲村と栗太郡金栗村、西は北極村・南極村、南東は三重縣阿山郡に隣る。信樂町及び附近の村々と共に信樂盆地の一部をなし、東西北の三方は山地に圍まれ高原を形成し、中山地は全體として甲賀高原を形成し、中に東境の飯道山(六六四米)、北境の阿星山(六九三米)突出し花崗岩より成り、山麓に向ひて著しき斷崖層をなす。信樂川、一名雲井川、南方信樂町方面より來り、本村の中央部より屈曲して北西に流れ、栗太郡に入りて大戸川となり湖田川に合流す。全村農林業及び畜業を以て生業とし信樂・陶土・磁石等の特産あり。飯道は信樂線本村を横斷し、大字牧に雲井(昭和八年設置)を設く。飯道に、貴生川方面より來り牧・勸旨を経て信樂町方面へ向ふもの、牧より之と分れ字宮町を経て三雲村に通ずるもの、牧より字黄瀬・字北側を経て湖田方面へ向ふものあり。此地は古の信樂郷、中世の信樂莊の一部、江戸時代には山上藩・宮津藩・旗本高木氏領等に分領せらる。史蹟には大字黄瀬の内裏野と稱する丘陵上に、聖武天皇崇善宮を營み給ひし址あり、三百餘箇の礎石を存す。外に大字宮町の飯道寺山頂殿寺飯道寺構内の木食上人の墓、大

クモイ 雲井

【クモイ 雲井】 飯野縣近江國甲賀郡の西部。信樂町の北東に接し、北は三雲村と栗太郡金栗村、西は北極村・南極村、南東は三重縣阿山郡に隣る。信樂町及び附近の村々と共に信樂盆地の一部をなし、東西北の三方は山地に圍まれ高原を形成し、中山地は全體として甲賀高原を形成し、中に東境の飯道山(六六四米)、北境の阿星山(六九三米)突出し花崗岩より成り、山麓に向ひて著しき斷崖層をなす。信樂川、一名雲井川、南方信樂町方面より來り、本村の中央部より屈曲して北西に流れ、栗太郡に入りて大戸川となり湖田川に合流す。全村農林業及び畜業を以て生業とし信樂・陶土・磁石等の特産あり。飯道は信樂線本村を横斷し、大字牧に雲井(昭和八年設置)を設く。飯道に、貴生川方面より來り牧・勸旨を経て信樂町方面へ向ふもの、牧より之と分れ字宮町を経て三雲村に通ずるもの、牧より字黄瀬・字北側を経て湖田方面へ向ふものあり。此地は古の信樂郷、中世の信樂莊の一部、江戸時代には山上藩・宮津藩・旗本高木氏領等に分領せらる。史蹟には大字黄瀬の内裏野と稱する丘陵上に、聖武天皇崇善宮を營み給ひし址あり、三百餘箇の礎石を存す。外に大字宮町の飯道寺山頂殿寺飯道寺構内の木食上人の墓、大

クモイ 雲井

【クモイ 雲井】 飯野縣近江國甲賀郡の西部。信樂町の北東に接し、北は三雲村と栗太郡金栗村、西は北極村・南極村、南東は三重縣阿山郡に隣る。信樂町及び附近の村々と共に信樂盆地の一部をなし、東西北の三方は山地に圍まれ高原を形成し、中山地は全體として甲賀高原を形成し、中に東境の飯道山(六六四米)、北境の阿星山(六九三米)突出し花崗岩より成り、山麓に向ひて著しき斷崖層をなす。信樂川、一名雲井川、南方信樂町方面より來り、本村の中央部より屈曲して北西に流れ、栗太郡に入りて大戸川となり湖田川に合流す。全村農林業及び畜業を以て生業とし信樂・陶土・磁石等の特産あり。飯道は信樂線本村を横斷し、大字牧に雲井(昭和八年設置)を設く。飯道に、貴生川方面より來り牧・勸旨を経て信樂町方面へ向ふもの、牧より之と分れ字宮町を経て三雲村に通ずるもの、牧より字黄瀬・字北側を経て湖田方面へ向ふものあり。此地は古の信樂郷、中世の信樂莊の一部、江戸時代には山上藩・宮津藩・旗本高木氏領等に分領せらる。史蹟には大字黄瀬の内裏野と稱する丘陵上に、聖武天皇崇善宮を營み給ひし址あり、三百餘箇の礎石を存す。外に大字宮町の飯道寺山頂殿寺飯道寺構内の木食上人の墓、大

クモイ 雲井

【クモイ 雲井】 飯野縣近江國甲賀郡の西部。信樂町の北東に接し、北は三雲村と栗太郡金栗村、西は北極村・南極村、南東は三重縣阿山郡に隣る。信樂町及び附近の村々と共に信樂盆地の一部をなし、東西北の三方は山地に圍まれ高原を形成し、中山地は全體として甲賀高原を形成し、中に東境の飯道山(六六四米)、北境の阿星山(六九三米)突出し花崗岩より成り、山麓に向ひて著しき斷崖層をなす。信樂川、一名雲井川、南方信樂町方面より來り、本村の中央部より屈曲して北西に流れ、栗太郡に入りて大戸川となり湖田川に合流す。全村農林業及び畜業を以て生業とし信樂・陶土・磁石等の特産あり。飯道は信樂線本村を横斷し、大字牧に雲井(昭和八年設置)を設く。飯道に、貴生川方面より來り牧・勸旨を経て信樂町方面へ向ふもの、牧より之と分れ字宮町を経て三雲村に通ずるもの、牧より字黄瀬・字北側を経て湖田方面へ向ふものあり。此地は古の信樂郷、中世の信樂莊の一部、江戸時代には山上藩・宮津藩・旗本高木氏領等に分領せらる。史蹟には大字黄瀬の内裏野と稱する丘陵上に、聖武天皇崇善宮を營み給ひし址あり、三百餘箇の礎石を存す。外に大字宮町の飯道寺山頂殿寺飯道寺構内の木食上人の墓、大

クモイ 雲井

【クモイ 雲井】 飯野縣近江國甲賀郡の西部。信樂町の北東に接し、北は三雲村と栗太郡金栗村、西は北極村・南極村、南東は三重縣阿山郡に隣る。信樂町及び附近の村々と共に信樂盆地の一部をなし、東西北の三方は山地に圍まれ高原を形成し、中山地は全體として甲賀高原を形成し、中に東境の飯道山(六六四米)、北境の阿星山(六九三米)突出し花崗岩より成り、山麓に向ひて著しき斷崖層をなす。信樂川、一名雲井川、南方信樂町方面より來り、本村の中央部より屈曲して北西に流れ、栗太郡に入りて大戸川となり湖田川に合流す。全村農林業及び畜業を以て生業とし信樂・陶土・磁石等の特産あり。飯道は信樂線本村を横斷し、大字牧に雲井(昭和八年設置)を設く。飯道に、貴生川方面より來り牧・勸旨を経て信樂町方面へ向ふもの、牧より之と分れ字宮町を経て三雲村に通ずるもの、牧より字黄瀬・字北側を経て湖田方面へ向ふものあり。此地は古の信樂郷、中世の信樂莊の一部、江戸時代には山上藩・宮津藩・旗本高木氏領等に分領せらる。史蹟には大字黄瀬の内裏野と稱する丘陵上に、聖武天皇崇善宮を營み給ひし址あり、三百餘箇の礎石を存す。外に大字宮町の飯道寺山頂殿寺飯道寺構内の木食上人の墓、大

二四五

二四五

クモイ——クモサ

延喜式甲賀郡八座の一なり。之より先、寶龜二年には近江の地一戸を神封に充てられ、元慶八年從四位上に陞せらる。正平元年神祇官御卜に社司等神事を職し奉りしにより神領ありと云ふを以て、使を遣して中祓を科せしことあり。久安二年近衛天皇宸筆御遺蹟神領の勅額を賜ふ。のち徳川家康社領二百石並に境内東西二十町南北十八町の朱印を附す。境内二千二百三十七坪。本殿(國寶)は三間三

クモオカ

雲岡(丹波國)の歌枕。今その所在詳かならず。大嘗會主基方歌「大夫がまちえたる雨のくもなかの村のさなへやとる手にぎはふ 雲時」

クモガハタ

雲ヶ畑村 京都府山崎國愛宕郡の西南部。南は京都市上京區の北部に接し、東は鞍馬村、西は葛野郡小野郡村に隣り、北は北桑田郡黒田村、山國村と界す。面積二〇平方軒餘、村の西北境には後醍醐天皇(八九六米)築え山地深く、ただ南部の溪谷に沿ひて幅狭き低地あり。農産行はる。京都市に接するも交通はな

二編六

小角の開創と傳ふ。天長六年淳和天皇の勅額に依り、空海堂宇を再建し鎮護國家の新願を修す。宇多天皇亦勅額所に定められ寺運大いに隆興せしが天徳四年災火に罹りて堂宇焼盡す。のち再建成りしも承久の亂に遭ひ再び荒廢す。仍て貞和五年住持雲曉幕府の歸依を得て堂宇を再造す。幕府之に寺領を附す。爾來歷代皇室の尊崇厚く寺運隆盛なりしも、天保年間災厄に遭ひ一山焼土と化す。爾後次第に復興し、昭和五年、境内に西國八十八所靈場を開闢す。現に同宗仁和寺末たり。

クモギ

雲城村 鳥根縣石見國那賀郡の中部。濱田町の東方約八軒。西と北とは石見村、東は今福村、南は波佐村に隣り面積約三三・三平方軒あり。西南境に雲城山(六八八米)、東南境に七百米臺の山地あり其等の山脈共に北方に延び、東西兩部は緩慢に北に下る山地、中部南北に幅狭き低地つづき耕地發達す。林産多く、農産に米あり。道路中部の低地を南北に通じ、濱田町・波佐村間往復のバスの便あり。此地古くは和名抄、那賀郡久佐郡の内か。町村制施行に際し上來原・下米原・七條の三村を合併し現在に至る。「八幡宮」大字下米原にあり。郷社。仲真天皇・應神天皇・仁徳天皇を祭神とす。創建は永徳天皇の天慶五年九月十九日櫻井權大夫藤原基村、山城國石清水八幡宮を勧請し、所有の土地を寄附し、其身神職となりて奉仕せしより、連綿として四

クモキリ

雲霧山 千島火山脈に屬する一峯。千島列島北東端に近き嵯庭島の南西端に起る山。北東麓は現に活動する白煙山を經て斧ヶ岳・燒岳等に連り、南西麓は次第に低夷し、馬背山を經て海に没す。東方斜面より東川・深谷川、南方斜面より南大谷川・宮本川、西方斜面より松山川・矢野川發源す。山頂は未だ極められずと云ふ。

クモサワ

雲澤村 秋田縣羽後國仙北郡の中部。東西約七・五軒、南北約一四軒に及ぶ大村なり。西南北に山を負ひ、東南部は角館町及び長野町に境して其後背地を形成す。入見内川は本村の北部奥山に源を發し、數條の支谷を合して村の中央を南流し玉川に合す。本村の耕地は主として砂質壤土より成り相當肥沃なるを以て農産行はる。縣道秋田・盛岡線は大字西長野部落の中央を貫通し大

クモタ

雲田 丹波國の歌枕。今その所在詳かならず。大嘗會主基方歌「天地のきはめもしらぬみよなればくも田の村のいれをこそつけ 籠堂」

クモツ

雲津 雲出 能登國(石川縣)の歌枕。今の珠洲郡三崎村にあり。村の東の岬角を長手崎と稱す、崎端は沙濱にして險峻ならずと雖も、北の岬角、藤瀬崎と相並び珠洲岬の風割をなす。三崎村の小泊の西南に雲津浦あり。夫木・三三・くもつよりすめくりするこし舟の神かけさがるほの任のともゆ 仲實

クモト

久毛等浦 出雲國(島根縣)の古地名。出雲風土記島根郡に見ゆ。いま八東郡美保岡町の大字に雲津浦あり。此地の海岸をも稱せしものなるべし。

クモトリ

雲取・雲鳥 關東山脈秩父山塊の一峯。東京市西多摩郡水川村と埼玉縣秩父郡大瀧村・山梨縣北都留郡丹波山村との境界に峙つ。標高二〇一八米にして全山秩父古生層より形成せらる。北東麓には白岩山

クモス——クモト

宇雲然部落の北端を過ぎ、又縣道、角館、刈和新線は大字雲然部落を貫通して大字八割部落の東南端を過ぎ、産業は農業及林業を主なるものとす。農業に於ては米を大宗とするも其他の食用農産物漸次行はれつつあり。果實には生柿の産多し葡萄・梨等相當生産せらる。木材は用材として各地に販出せられ、特に木炭の生産は實の良好なると量の大なるを以て遠く東京方面にも販路を有す。注意すべきは近年綿羊の飼育行はれつつあることなり。明治四年十一月秋田縣に併合せられ同五年大小區劃の創設せらるるや本村は第五大區第二小區に編入せらる。縣新前本村は元雲然・八割・西長野・下延の四部落より成り、秋田藩佐竹侯の領地にて主として角館城主の守護する處たり。戊辰の役、角館岩瀬川原に激戦あり、雲然、下延村に肥前大村兵衛軍を撃退したりといふ。是より先備備使として九條殿・隈爾殿仙岩崎を越え角館町を經、雲然・八割を通行せりといふ。維新後、町村制實施以前は總代又は戸長を置き、明治十八年雲然外三ヶ村戸長役場となり、雲澤山龍岩寺内に役場を設置す。明治廿二年四月町村制實施に當り雲然外三箇村を併合、雲澤役場と改稱す。村社八幡神社に老樹の櫻あり。昔源義家、阿部貞任・宗任等討伐の際此地に休憩、愛馬を此の樹に繋ぐといふ。村内に耶麻教信者の古墳あり。傳説によれば、今より約三百年前耶

麻教禁制の頃、その信者此の地に於て謀せらるるといふ。 雲出 三重縣伊勢郡一志郡の東部。雲出川川を界として香良洲町・小野江村に對し、西は桃岡村・高茶屋村に續く。土地低平にて田畑よく拓け、米・麥・粟等を産し、沿海漁業業として水産多し。伊勢街道に當り、また社線參宮急行電線の伊勢線南北に走り、大字本郷に雲出・香良洲の二驛(昭和五年開業)を設け、津市・松阪市方面との交通便利なり。村は本郷・長常・伊倉津・鳥貫の大字より成り、本郷に役場を置く。古くは和名抄、空志郡鳥抜郷の内にして、大字鳥貫は郷名の遺稱なるべし。神風抄に鳥抜御厨とあり、もと伊勢大神宮の神領たり。雲出は一に雲津に作る。延元三年、北畠顯家東國の大军を以て美濃に出で、足利氏よく防ぐを以て、轉じて伊勢に入る、高師泰道に至り、之と雲津川に戦ひたること太平記・雜太平記に見ゆ。その古跡は伊勢名勝志には今の伊倉津なりといふ。而してこの役官軍に利無かりしもの如し。雲津渡と云ふは雲津川の此地に於ける渡場なりしもの。丹波與作待夜の小室節、伊勢へ通しにいつた時、宵から曉の明星が茶屋で飲み干す様大ざり、借金の利を一月に二月をどる松坂越えて、雲津の渡で算用したれば云々、大字本郷は江戸

時代參宮街道の雲出驛にして津・松坂の中間に位し、兩驛へ各二里。 雲出川 伊勢國三重縣一志郡を流るる川。一に雲津川に作る。源を多藝谷の丹生侯に發し、川上川を合せて北流し、家城村を過ぎて東折し、尙屈折して長野川と合し、又八次・宮宮等の諸川と合し、小野江の東に至り、二合して海に入る。流域五二軒。下流は伊勢平野の一部をなし、一志米の産地。此川を以て俗に北伊勢・南伊勢の界となす。延元三年二月、北畠顯家、足利氏の將高師泰と此河邊に戦ひ、其遺蹟は北岸出村大字伊倉津の地なりと云ふ。大永二年の頃、此川洪水に長日記に見えたり。この川、また古來より大變を生じ、渡津製鹽せし由、宗長日記に見えたり。この川、また古來より大變を生じ、渡津製鹽せし由、宗長日記に見えたり。五社首首、くもつ川せき入てまける苗代に秋のそらこそかかれて見え けれ 後成

二編七

(一九二二米)・妙法ヶ岳(一三三二米)連り、白岩山の東方山麓には天目山(一七八米)・大平山(一六〇三米)等續き、西後は大洞山(二〇六〇米)・牛王院山(二〇七〇米)・唐松尾山(二〇九米)・笠取山(一九四一米)等を経て甲武信岳(二四八三米)に至る。南東後は大洞山に低夷し、七ツ石山(一七五七米)を経て多摩川に一旦限られ、溪谷を隔てて三頭山(一五二三米)對峙す。東斜面より多摩川支流日原川源流して南東流し、北斜面より芝川の一支出洞川源流す。この山は東京市より西方に聳えて見え、頂上は大雲取と小雲取との二峯に分る。武蔵通志、大雲取山、西多摩郡米川村の西北にあり、秩父郡大洞村を界す。高七千三百九十五尺、山中深高にして、樹叢山毛榉の屬喬木叢生し、樹皆蒼古老翁之を覆ひ人跡殆ど絶して樵夫も到る稀なりと云。山脈崎嶇として四旁に展敷し西北は秩父郡諸山に連り、南は小雲取山唐松ヶ岳(高六千七百六十一尺)山南七巨巖群立して下に七石社あり甲斐丹波山村之を七石山と稱す)より大洞山(高六千五百六十四尺)に至り、赤指山(高四千五百二十尺)留置村の西南にあり、雨乞場山(高三千九百七十一尺)同村の南にあり)となり、甲斐北郡留置を界して多摩川に至りてつく。とあり。山頂よりの眺望廣大にして見渡すかぎり山又山にして、南アルプスの銀嶽峰に美し。その彼方に太平洋の煙波も見

極めらる。この山は北方の白岩・妙法の二山と共に三峯山と呼ばれ、三峯神社の號は之より導かれしものなりと云ふ。されど雲取にも白岩にも別に宮あるにあらす。三峯神社の奥の院は妙法ヶ岳なり。この山の登山は南麓多摩川左岸丹波山村鴨澤よりするを最も簡便とす。この加茂神社横より大洞山・六ツ石山を経て七ツ石山・小雲取を経て大雲取に達す。約四時間行程なり。又妙法ヶ岳より三峯縦走も試みらる。

【雲取山】古くは雲鳥山とも書き、また雲取の峰の別稱あり。那智山の北嶺。和歌山縣東牟婁郡色川・高田・小口の三村境界附近を凡そ九〇〇米前後の高度を以て南北に延びる。山麓、北方豊野川の一支赤木川の彼方に連なり小雲取山に對しこの山を大雲取山とも呼ぶ。全山石英粗面岩より形成せらる。雲取山の名はこの山高くして雲を取らるべき形なるに因るとぞ。山頂より南方を眺むれば紀伊南部の群山波濤の如く起伏し、彼方に豊野灘の青海波を望見す。この西斜面無野街道の走る所を大雲取と云ひ、その一部に船(舟)見峠(八八四米)と稱する高地あり。ここに海上の舟を眺め得るとぞ。【雲鳥】古くは志古の山路はさておきて小國が原の嶺しからぬか、西行、雲取は笠に爪つく雲雀哉 三千風、

【クモハル】雲治 筑前國(福岡縣)の古地名。和名抄、怡土郡に雲治郷あり、久毛波留と訓す。高山寺本久毛春に作る。諸本に雲治を雲治に作り、太宰府管内志も亦雲治に作り、クモハルと訓めど誤なり。其地今詳かならざるも糸島郡雷山村

【クモト】雲部村 兵庫縣丹波國多紀郡の東部。西は藤山町との間に畑村を隔て、東は村雲村、南は日置村に接す。面積約一・八平方軒。西北より東北境にかけて四一五米の高度を有する山地ありて土地東南に傾き山林多し、東南部と西南部は藤山川上流に沿ひ土地平坦にて田地よく拓く。米を主産し蔬菜・蠶製品・麥等をも出す。藤山町より村雲村へのバスの通路に當り交通不便ならず。村は西本莊・泉・倉谷・春日江・佐貫谷・東本莊・藤守・奥藤守の大字を含み、西本莊に役場を置く。本村及び畑村は古への和名抄、多紀郡宗部郷の地に當る。宗部郷は中世我部庄と呼び、のち畑莊と稱し、波多野氏の起れる處。春日江は往昔春日部氏の居邑、即ち春日江は春日の轉訛なるべし。地に式内無接神社舊座し、いま藤安大明神と呼ぶ。泉村は永保元年大嘗會の際の主基方の歌に見ゆる泉の村に同じ。夫木・三一、白菊のいづみの村に住む人は黒髪ながら年をこそ經れ匡房(無接神社)村社。祭神、皇大神、外五神。式内社。俗稱、藤安大明神。例祭、八月十三日。【洞光寺】曹洞宗。寶鏡山と號す。丹波誌に依れば應安七年天鷹の間に基にして、明徳三年、足利義滿尊氏の爲に法華經一萬部を内野に修すあり。天正年間明智光秀の兵火に罹り、堂宇島有に歸すと共に寺額亦没收せらる。

クモミ

現堂は其後の再建に成り、本郡屈指の大伽藍にして、本寺四十九箇寺を統ぶ。

クラ

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

クモミ

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

クモミ

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

【雲見山】尾張國(愛知縣)愛智郡の歌枕。今の名古屋市熱田神宮の後の山をいふ。神さびていやかげたかき松杉に雲見る山は幾世へわらん 刑部少輔平兼遠、【雲見ヶ峯】愛知縣東春日井郡品野町、西加茂郡藤岡村に跨り、三國嶺の南麓に位す。標高六二〇米前後にして四邊の眺望佳し。

クラカ

信濃國境を越す交通路の一。最高點は標高一四〇八米にして、岐阜縣益田郡竹原村と長野縣西筑摩郡王滝村との境界に跨る。峠路は南東方の三國山(一六一一米)と西方の白草山(一六六九米)その中間鞍部を越す。北東降すれば王滝川上流地域に出で、川に沿ひて降り、御岳山登山口王滝に出づ。南西降すれば、北西方より南東方に走る益田街道に沿ふ竹原村大字御嶽野に至る。

【鞍掛山】 富士火山脈に属する一峯。箱根火山の外輪山南部の一峯。神奈川縣足柄下郡箱根町・湯河原町、静岡縣田方郡函南村に跨る。標高一〇〇四米。山體は輝石安山岩より形成せらる。北西降は降りて箱根峠の最高點(八四九米)に達し、南方は遠く十國峠最高點(七四四米)に達す。西斜面には昭和七年八月、十國峠・鞍掛山・箱根峠を結ぶ自動車専用道路通す。この道路は十國峠より熱海町に、箱根峠より箱根町に續く。山頂附近は茅原をなし、こより北面すれば明鏡池ノ湖を下瞰し、胸ヶ岳等の箱根火山中央火口丘を望み、又時により北西方に蘆峯富士山を仰ぎ、眺望の明細壯麗なること言語に絶するものあり。又山頂より少しく移動し南東面すれば洋々たる相模灘の青海原を望見し、初島の磯邊に寄する白波を見降し、これまた稀に見る清麗雄大な風景なり。

三三三

知縣北設楽郡田口町・振草村と南設楽郡海老町との境界に跨つ。標高八八三米。山體第三紀層より形成せらる。峰頂は南北に長く東西に狭く、峭拔にして鞍馬に似たり。南東降は佛坂最高點(六二二米)に達し、西麓には伊那街道南北に走る。北麓に鹽津温泉湧く。

【鞍掛山】 滋賀縣犬上郡彦根市の南東約一六軒、鈴鹿山脈を横切る峠の最高點にして、犬上郡大津村と三重縣員辨郡白根村との境界に跨り、標高七九一米。北麓は三國岳(八一五米)、南麓は御池岳に達す。峠路はほぼ北西より南東に走り、北西降すれば大津村を経て高宮町に至り、南東降すれば白根村を経て阿下喜町に至る。伊勢・近江兩側とも最高點附近まで立派なる林道出来、鞍掛林道と呼ばれる。これが完成せば三重・滋賀を繋ぐ自動車道路となるべし。

クラカ

二平方軒、土地平坦にして田畑よく拓かれ、米・麥を主産物とし製糸業また盛なり。古く中仙道の一宿驛として榮えし處。今省線高崎線の倉賀野驛(明治二十年設置)あり。驛はまた八高線・岩鼻輕便鐵道の接續點たり。中仙道と東方玉村町(佐波郡)への道路にはバス往復して交通便利なり。此地古くは和名抄、群馬郡上野郡の内に属す。中世有造氏族兒玉黨の一族此地に住して倉賀野氏を稱す。往時は中仙道の一驛として榮え、いま本村より高崎市に至る國道には年經たる松及び杉の並木存す。交通機關の整はざりし往時にては此並木が如何に旅人の慰となりしかを知り得べし。いま高崎線の東窓より之を望見し得。【倉賀野城】町の南方烏川畔にその城址ありて城地の跡存す。倉賀野城に上野には倉賀野城云々と見え、また後上野志に、宮原の庄倉賀野黨は武藏の兒玉黨の分派なり、十六騎あり、その宗人倉賀野三河守天文十五年河越の夜軍に討死す。永祿二年九月信玄叔鼻の陣の時、一黨の總代に金井某、信玄の陣に參す。信玄即ち姓を與へて倉賀野と稱せしむ。鹽川一益金室合戦のとき、倉賀野城に一宿して賊營に逼れり、のち小田原に属す。天正十八年廢城す」とあり。また舊記に、天文の末小田原より海和伊豫守廣忠倉賀野城に遣はせし事見え、平井の上杉資朝の時小田原の手に入り、後また倉賀野氏假住せしものと

思はる。(淺間山古墳) 指定史蹟。宇五六の田圃の間にありて頂に數本の松及び樅あり。南面せる規模雄大なる前方後圓型の古墳にて環濠を有す。封土の高さ、前方部にて約七米、後圓部にて約一五米、全長約一八〇米、前方部の一部は開墾され傾地となり周囲は水田となるも未だ發掘の形迹を存せず、善く舊蹟を保持す。(大鷲古墳) 指定史蹟。宇正六の淺間山古墳の東南三四〇〇米にあり。淺間山古墳に比すれば稍小なるも、環濠を有する前方後圓型にして東南方に面す。墳上は雑木林及び傾地なり。封土の高さ前方部にて約九米、後圓部にて約一四米、全長約一四〇米。現今發掘の厄に罹る古墳多きに比し其の形迹なく善く保存さる。

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラカ

【倉賀野】 群馬縣上野郡群馬郡の南東部。利根川の支流烏川の左岸に沿ひ、西北は高崎市との間に佐野村を隔て北と東は岩倉村に接し、南は川を挟みて多野郡八幡村に對す。面積四・一

クラシキ

【倉敷市】 岡山縣南西部の商工都市。岡山市を距る西方約一六軒、備中國に屬し縣の南部に位す。西は東高梁川筋を境として都窪郡中洲村に、北は菅生村に、東は中庄・豊洲・帯江の三村に、南は兒島郡瀬戸町・福田村に隣接す。東西約四・五軒、南北約六軒、面積約一八・二平方軒。古への阿知湯の一部なるが主として、高梁川の沖積によりて陸地となりしものにて、中部にある都形山、その南方にある足高山、東南端に連る標高約百米の向山丘陵等はいづれも往古阿知湯中に浮びし孤島の丘陵と化せるもの。されば土地一帯に低平肥沃にて田(一〇三二ヘクタール)・畑(二一九ヘクタール)等よく拓け、米(約六二萬圓)・麥(小麥を主とす。約一四萬圓)・粟(約一萬圓)・薄荷・蓮根・西瓜等を主とし、農産總額一八萬圓

Table with 4 columns: 昭和九年, 昭和五年, 大正十年, 計. Rows include 農産, 畜産, 水産, 林産, 工業, 其他.

Table with 4 columns: 昭和九年, 昭和五年, 大正十年, 計. Rows include 職工, 五人以上, 三人以上, 一人以上, 計.

三三三

工産物は綿織(一四六萬圓)・織物(三
四八萬圓)をはじめ、花巻・巻表・綿取
紙・上敷座敷敷・菓子・清酒・醬油・
鰯・田藪等はどれも一〇萬圓以上を産
し、工産総額一八二五萬圓に近く(昭和
九年)、市の全生産額の九三%以上を占
む。明治二十年七月倉敷紡績會社の創設
は本市の發展に一大時期を劃せるもの
にして、當時は未だ一小邑なりしものが、
今日の商工都市たる基礎をここに築きし
ものなり。同會社は初め倉敷紡績所と稱
し後に資本金十萬圓、機數五千の小規模
なりしが、漸次盛大となり、明治四十
年には玉島紡績會社を買収し、大正三年
には高津第一工場を新設し、同七年には
坂田・松山の二工場を併合し、同八年に
萬壽第二工場、同九年高松工場を新設し、
同十年早島紡績會社を併合し、同十一年同
山染色整理會社を併合し、同山工場とし、
同十三年日本メリヤス會社が工場を買
取し全國屈指の大會社となり、市もまた
之に伴ひ漸次發展せり。省線山陽本線は
北部をほぼ東西に貫き倉敷驛(明治二
十四年設置)を榮町に置き、伯備線こ
より分岐して北方島取縣に入り伯耆大山
驛にて山陰本線に連り、宇野線・下津井
線へは自動車によりて連絡し四國への捷
路をなす。國・縣道また市を中心として
四方に通じいづれも自動車の往來あり、
倉敷川による水運の便ありて交通の中心
をなす。本市の發展と共に人口は急激に

Table with 4 main columns: 種別 (Category), 人口 (Population), 戸数 (Households), and 備考 (Remarks). It includes data for 昭和九年 (1934) and 昭和九年末現在 (Present as of 1934).

増加し、舊倉敷町の區域に於て明治三年
六四七九人(一六一〇戸)・大正元年一
二三〇人(三三九戸)・昭和元年一五九
九三人(三三二七戸)と漸次増加し特に
萬壽工場新設後は隣接地域の萬壽・大高
兩村に向ひ街衢を擴張し、昭和二年萬
壽・大高兩村を合併し人口三〇四七六八
(六一三二戸)を數へ翌三年四月遂に市制
を施行するに至る。昭和九年末現在の人
口を見れば本籍人口に對し寄留人口はそ
の半以上に達し、且つ男に比し女の多き
は本市の紡績都市たる所以を明かにする
ものなり。更に之が職業別人口を見れば

商業に従事するもの最も多く工業従事者
之に次ぎ、この兩者にて全人口の約六〇
%以上を占む。また商業従事者も工業従
事者に依存する事多く本市は工業的都市
たりといふも過言にあらず(上表参照)。
古くは阿知湯と稱し一面の海なりしを以
て町名にもその名残りを留め、銅原は開
港前は銅の浦といひ道路を通じて銅原筋と
なり今は繁華なる或町となり、阿知町は
本町と共に古くより市の中心街にして、
新興市街の銅原町・大黒町も亦海に因み
し名なるべし。鐵道開通以前の交通運輸
は専ら河海によりしが、高梁川は今の市
の上水道水源地のある酒津より二流に分
れ、一は水江に走り、一は本市に流れし
ものにて、従つて此地は備中南部の要津
となり、關東御藏人の米は此地より積出
しをなすに至り倉庫を設けられ、その
倉の數地より倉敷と呼ばるるに至るとい
ふ。倉敷の文字古くは倉舖とも書き倉子
城の雅字を用ひしこともあり。倉敷川は
元和年中新田開發と共に改修せられ運河
となる。また此地は古くより徳川幕府の
直轄地にて代官の所在地なりしことは本
市發展上重要な要素をなす。文祿四年
松山城主小堀正次この地を領し、その子
遠江守政一に傳へ、のち池田備中守長幸
これに代り、寛永十九年代官米倉平太夫
の支配所となりてより代々代官所を置か
れ明治維新に及ぶ、其間一時諸侯の私領
となりしことありしも殆んど言ふに足ら

近年倉敷労働科學研究所は東京市青山に
移轉せり。(他形公園)一に倉敷公園と
も稱す。本市街の中央に丘岡をなし、老
松翁嶽として杖を交へ、風景甚だ清雅な
り。登りて丘嶺に至れば、本市の全街を
觀、大小の風舎騰次して屋簷の錯然たる
を見るべく、その眺望頗るよし。近時公
園大に花樹を増植し、更に休福を作り、
漸次其の面目を改めつつあり。(足高神
社)懐沖に鎮座。縣社。主祭神、大山祇
命。相殿神、石長比賣命・木花咲耶麻命。
祭神を一説に尊陀迦神とす。創建年代に
就きて明微なし。延喜の制に式内小社に
列す。天慶三年正月正六位に敘せられ、
以後は永保元年・永治元年・治承四年・元
暦元年・建仁元年・弘長元年・建治元年・
永徳元年と相次いで一階づつ陞叙せられ
て正四位上に進む。天曆元年村上帝は藤
原發成をして奉幣せしめられ、新に社殿
を建立せらる。一に帆下ノ宮と呼ばれ、
往古は山下の湖邊に於て去來の船船は
帆を下げ遙拜して過ぎしより此名あり。
また是高八幡・戊亥八幡・葦高神社とも
稱せり。葦高の用字の由来は社殿の葦葦
の中におりし故なりと云ひ、或ひは葦那
陀迦神を祀るに依るならんと云ふ。例
祭、十月十九日・二十日・二十一日。
〔阿智神社〕妙見山上に鎮座。郷社。祭
神、多紀理毘賣命・市杵島比賣命・多岐
都比賣命。(相殿)應神天皇。もと阿智明
神と稱す。倉敷の鎮守神。阿智那の意也。

阿智は往昔阿智使主等が同きたる村と云
はる。例祭、十月十五・十六日。(林野神
社)朽木に鎮座。郷社。祭神、天照大神。
相殿、豐田別命・倉積魂命、外敷神。倉
敷の守護神。又、林野那の意也。林野那
は和名抄に見ゆる古郷にして、倉敷の舊
名といふ。度々兵燹及び洪水に遭ひて舊
記等を失ふ。例祭、十一月二日。(安養
寺)古義眞言宗。御室末たり。草創期並
に沿革不詳。本造十一面觀音立像一軀は
全身鍍金彩色にして姿態端正、鎌倉初期
の作にして國寶たり。(誓願寺)淨土宗。
佛光山成親院と號す。もとは備中十八箇
寺の總頭にて地蔵殿敷といふ地にありし
が、天正年中興上人現地に移して再興
す。本尊阿彌陀如來。ほかに觀音菩薩を
安置す。(往昔新大納言成親の守本尊たり
しが、成親備前兒島に配流後、當寺に詣
りて菩提を頼み觀音像を寄進したりと傳
ふ。(長蓮寺)曹洞宗。五臺山と號す。
當國玉島開通寺末。寶曆年中の創建。開
基は代官淺井作右衛門たり。本尊文殊菩
薩(備中五文殊の一)。境内に本堂・庫裡・
表門・鐘樓等あり。(大原農業研究所)
本市の素封家大原孫三郎氏は夙に本邦食
糧問題、農村問題に着眼し、大正三年七
月、祖先傳來の土地中より百ヘクタール
を寄附し、後更にまた百ヘクタールを加
へ父祖努力の記念とした父祖に對する
報恩の記念とし、財團法人を組織し、深
遠なる農業の學理を研究し、及び其の應

用による農事の改善を國目的を以て、
組織的なる大計畫の下に農業研究所を創
立せり。農業研究所の資産及び經費はす
べて大原氏の寄附に依るものにて、土地
二〇二ヘクタール餘・建物三十棟三〇ア
ール餘を有し、年々の經費は約十萬圓を
要す。現在農業研究所にて使用せる宅地
及び試験地は合計約四・四三ヘクタール
にて、殘餘の土地は何れも小作又は住宅
用地に當て其小作料及び借地料は經費に
充てらる。建物には事務室及び標本室・
種畜研究室・化學研究室・病蟲害研究室・
蓄電池冷蔵及農具室・堆瓦造三層書庫・
圖書閱覽室・溫室・前子室・細室・農大
舎・收納舎・堆肥舎・農夫休憩室・住宅・
寄宿舎・集會所・俱樂部等あり。大原農
業研究所の目的とするところは農業に關
する學術的研究にして、その結果は直ち
に實地に應用せらるべきもの、或は單に
學術上の研究に止まり實用に達さるもの
あるべし。その研究は極めて自由にて、
短時日にして成績の見ゆるべきもの、或は
數年十數年の長期に亘るものもあり。そ
の研究題目は地方的のもの、或は地方の
農業に關連するものもあり。要するに地方
的事情・年月、及び目前の利害を超越し
て農業に關する純然たる學術的研究に従
事するを以て主眼とし、極めて寛大なる
自由研究をなすを以てその特色とす。研
究所は種畜・化學・昆蟲・病理の四部門
に分る。

〔倉敷線〕明治の初備中國に設けし線。
元年五月窪屋郡倉敷に設きて備前、備中、
備後に於ける利幕府の直轄地を管す。四
年二月に至り備前の多度津藩の地をも併
せて管せしが、同年十一月備後國深津郡
深津に設きて深津線に入る。深津線は翌
年六月山田郡笠岡町に移して小田線と改
稱せしが八年十二月に廢せられて岡山縣
に屬す。
〔倉敷線〕岡山縣都窪郡にある鐵道。倉
敷市より茶屋町に至る。昭和十二年兩備
線と改稱す。
クラシナ 倉科
〔倉科村〕長野縣信濃國埴科郡の中郡。
屋代町の東に近く、南と西は森村に、北
は兩宮縣村・清野村に、東は西條村に隣
接す。面積約九・五平方町、鏡臺山(一
二六九米)の北嶺は東境を南北に走りて
杉山(九七六米)を起し、西北は南境
に延びて大峰(八四一米)となり村内廣
れ山地をなす。ただ西部に、小平垣面あ
りて田畑拓け、米麥を産し爾を出す。此
地古くは隣村清野・兩宮縣二村と共に和
名抄埴科郡倉科郷の地にて、村名倉科は
郷名の遺稱なり。中世は倉科莊といひ東
鑑文治二年に倉科莊、九條城興寺領とあ
り。建武元年の市河文書にも莊名見ゆ。
〔本覺寺〕眞宗本願寺派。白鳥山と號す。
草創年代不詳。開基は鎌倉五郎景政。
初め天台宗に屬せしが中古衰廢せしを正
和二年海法師の二男淨法(小太郎)率

クラシ—クラタ

の南にこれを再興して現宗に改む。明曆三年十三世誠玄和尚の時、其内記境内一町餘を寄進す。寛保二年洪水にて山岳崩潰し堂宇倒潰せしが、寶曆年中再建し以て今日に至る。本尊阿彌陀如来。脇侍に見尊大師・聖德太子・七高僧連座等の畫像を安置す。本堂(八間四面)・庫裡・書院・鐘樓等あり。

【倉科】 山梨縣東山梨郡中牧村の大字。清和源氏、武田氏の族此の地に住し倉科氏を稱す。武田系圖には信濃の庶子治部少輔信康、倉科と註す。倉科氏の城跡あり、琵琶宮といふ。また唐土明神あり、延喜式神名帳の山梨郡黒戸奈神社ならんといふ。されど原書には黒戸奈に作れば詳ならず。甲斐國志に「上求寺の廢蹟、倉科村北の関分山御林の下に在り、男權女權の邊に礎石存せり、天正中御靈燈亡の後僅に不動堂のみを管作す」とあり。

【クラス】 久良栖社 臺灣中州東勢郡にある神社。大甲派上流流域にあり、南勢郡に屬する高砂族の部落なり。戸數三一、人口一四〇。

【クラソ】 蔵増村 山形郡利根國東村山部の西北部。山形市の北方約七軒。天童町の西に隣り、東北は成生村、

クラタ

南は高橋村・寺津村、西は西村山郡溝延村・西根村と界す。龍川扇狀地と立谷川扇狀地の複合する所に當り、西境を最上川北に流れ、東方鶴澤山(七三一米)の西斜面に發源する倉津川は新に扇狀地面を侵蝕して最上川に合す。最上川岸には垂岡、他の大部分は灌漑の設ありて水田と拓く。天童町より西方寒河江町(西村山郡)に至る街道中部をほぼ東西に通じ天童町にて奥羽本線及び國道利根街道に出づ。村は蔵増・矢野目・窪野目・高野邊の四大字より成り蔵増に役場を置く。最上川は蔵増前、蔵増に近き古川を流れ、當時蔵増河岸は米の積出し行はれ或は荷揚げをなせり。倉津川は立谷川扇狀地と龍川扇狀地を縫合して流れ、本村内にて最上川に合流す。此村は水田と最上川畔を利用する桑畑と相半し、養蠶業頗る盛んなりしも、漸く下落の爲頗る困難を感じ、現在國庫補助を得て開田計畫實施中なり。蔵増部落は人口二千四百餘の方形の大型聚落にて、地形圖上よりも城下町なりしこと明かなり。部落内に市神を存し、舊正月十三日祭る。城下時代の名残なり、近年愛に市設くるも盛んならず。蔵増城は文明年中倉津安房守の居城にて本丸は東西二百米、南北二百四十米、宇櫓之内の面積は七千五百坪あり、二の丸の壕跡現存す。三の丸は南方を倉津川にて地せり。堀跡の顯著なるは宇櫓端にて幅二十一米、長さ二百四十米あり。元和

八年安房の嫡子光基鶴島家に預けらる。大字窪野目は成辰の役に天童藩の家老古田大八が庄内軍を遊撃せし古戦場なり。

【クラタ】 倉田村 群馬縣上野國群馬郡の西隅。榛名火山の西斜面にて東南は室田町、西南は碓氷郡烏帽子村に接し、北は吾妻郡坂上村に隣りす。土地東境より西方に傾きて殆んど山地なるも、西南界を東南流する烏川の上流に沿ひ幅狭き低地ありて多少の田畑拓かれ、米・麥・蕎麥を産し、製糸行はる。高崎市より川に沿ひて縣道通じ吾妻郡原町に連り、高崎市へはバス便あり。此地或は和名抄、碓氷郡浮間郷の地に當るか。此地は小栗上野介が晩年營居せし地にして大字榎田の東界内に其墓あり。小栗上野介は幕府の旗本にして二千五百石を食む。其領地は即ち本村なり。幕末に於ける外交・兵制及び財政の要務は主として其責策に由るもの多く、日米條約締結の際には使節として米國に派遣せられ、また横須賀に軍港の基をなすに至りし造船所を設立す慶應三年慶喜の大政を奉還するや開戦論を主張し職を辭して領地たる大字榎田の地に歸る。明治元年官軍の上野に入るや捕へられて四月六日斬に處せらる。法政は陽謀陰謀法岳淨性居士。墓は領民の營みしものにして、同じく刑せられし其子の忠道及び家臣のものと共あり。

【クラタ】 倉田村 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

市の南部に、東は米川村に接し、南は八頭郡河原町と界し、西は川を隔てて氣高郡美徳村に對す。南北に狭長にして面積僅に五・九平方軒、東南境に高さ二一三〇〇米の丘陵南北に延び、外は、列る處平坦にして田地よく拓かれ、米を主産し、蕎麥・工業あり。縣道南北に通じ鳥取市より南方智頭町(八頭郡)への定期バスは通路に當り交通便利なり。此地古くは和名抄、邑美郡美和郷の地。中世、石清水八幡宮領なりし渡房莊に屬し、莊はのち蔵田莊ともいふ。村名は、四條天皇の御宇、因幡國の大庄二箇所蔵田山に御寄附せられ其御倉田なるを以て八幡社を建て倉田と稱するに由るといふ。(八幡宮)

【倉田八幡宮】 大字馬場に鎮座。縣社。祭神、品陀和氣命・帶中津日子命・息長帶比賣命・保食神。創建年代詳かならずれども、因伯紀要に據れば、壽永・文治の交に宇佐八幡の分靈を勧請せしに創ると云ふ。或ひは永祿・元龜の間に毛利氏の社殿再興を被此混同して、之を創建と傳へしもの如く、以て決定し難し。とまれ毛利氏一門の崇敬社にて永祿・元龜の頃は社地廣大、社殿樓閣獨立し、社領數百石、社職數十家を擁したりと云ふ。神田の未だを收納せし所を蔵田村(いま倉田村)、祭典の流儀ありし地を的場村、假設の矢の落下せし所を雁取田と云ふ等、當社が如何に往時盛大なりしかを思はしむに足る地名いまに存す。天正九

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

クラタ

【倉田村】 鳥取縣因幡國岩美郡の西南隅。千代川の右岸に沿ひ、鳥取

爾來子孫授手を以て氏となす。郡城は大變化なく今日に至り、いま直方附近を下...

【鞍手】 筑豊炭田北部の炭礦。其礦區は福岡縣筑前郡中間町・遠賀村及び鞍手郡古月村に亘る。

【鞍手鐵道】 福岡縣北部筑豊炭田地方にある鐵道。直方市内の省線筑豊本線の直方驛附近より鞍手郡若宮村宇福丸に至る。

【鞍手遺蹟】 續紀天平十二年紀に見ゆる古地名。太宰少貳藤原廣嗣が、此年八月自ら兵五千を率ゐる此道を通り板敷川に向ふ。

【倉戸】 福岡縣河津郡にありし村。大正十年飯各村と共に柳津村に合併。

【倉戸】 上總國(千葉縣)の古地名。和名抄、聖院郡に倉戸郷あり、諸本は倉戸郷に作るも誤なり。

【倉永】 福岡縣三池郡にありし村。明治四十年本村及び銀水村・手鎌村・上内村を合し新たに銀水村を置く。

【倉無濱】 豊前國(大分縣)の古地名。今の中津市にあり、龍王濱と稱す。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

【倉波】 千葉縣君津郡長浦村の大字。この地に倉波管地及び本田重次の墓あり。

クラハシ

倉梯村 京都府丹後國加

クラハシ

倉梯村 京都府丹後國加

クラハシ

倉梯村 京都府丹後國加

クラハシ

倉梯村 京都府丹後國加

分を献じてより全く社領となる。然し賣塔院例進は變らず。南方海岸の本浦は古くは長門浦と稱し小松原をなし、萬葉に見ゆる長門浦は此地とす。この東南本島の南端の脚角に鹿老渡の港あり東北に開入す。享保年間始めて築港發遣し一海驛をなす。或はカラワドは韓泊の韓訛せしものにて此地開防洋に西し古へ韓國往來の船繫泊せしもの如し。萬葉・一五。安藝國長門島にて船を磯邊に泊して作れる歌。我が命を長門の島の小松原幾代を継てか神さびわたる。同・一五。長門浦より船出せし夜月光を仰ぎ觀て作れる歌。山の端に月かたぶけば漁する海人のともし。つし沖になづきふ。同・一三。鹿女等が鹿角に垂れたる。續麻なす。長門の浦に朝なぎに。満ち来る潮の夕なぎに。寄り来る波の。その潮の。いや益々に。その浪の。いや重々に。香妹子に。戀ひつづれば。阿胡の海の。波磯の上に。置菜つむ。海人處女どもも。領巾も光るがに。手に纏ける。玉もゆららに。白妙の。袖振る見えつ。相思ふらしも。反歌阿胡の海の波磯の上のさざれ浪音が戀ふらくは息む時もし。鹿島社文書に、奉免安藝國安藝莊所當物事、右伊都岐權現者、云云、仍奉免彼一所之私領、所祈請二世之悉地也、但於故島羽御高野御塔例通御年貢者、無得立可令辨濟彼寺、本家八條院役、不可致同意、其外可採所當地利併備每日之御供、自餘之土産、悉充

内侍之依怙者也、云云、抑以此上分之願業、先願南面之聖主、玉體安穩、弄神器於千秋、實祈延長、傳皇統於萬葉矣、仍奉免如件、治承三年十二月廿七日、正三位權中納言平朝臣(清盛)。〔桂濱神社〕大字倉橋島宇前宮三浦に鎮座。郷社。祭神、宗形三女神・品陀和氣命・帶中津日子命・息長帶日賣命。創立年代不詳。文明年間に平賀時社殿を造營すと云ふ。近郷の産土神。倉橋島は舊名を長門浦と云ふ。萬葉集に、我が命長門の島の小松原幾代を継てかむさびわたる云々の歌あり。例祭、九月十五日。〔倉橋石〕倉橋島の北岸宇鳴瀬・三ヶ瀬及び東岸尾立の丁場にて採石せらるる中粒の黒雲母花崗岩。鳴瀬に産する石材は容易に變色し淡褐色を呈するも角材一〇〇切、長材三米餘の大材を得、且加工容易なる故主として中國・京阪地方九州方面にも板石及び土木用材として供給され、又多少建築用としても用ひらる。嘗て東京市の電車線路板石にも出せしことあり。年産一〇萬切、時に一〇〇萬切以上を出す。三ヶ瀬及び尾立の丁場に於ける石材は紅色長石を含む赤ミカケにて、尾立石・納重石とも呼ばる。角材百數十切、長材七七八米のものを得られ國會議事堂用材として既に數十萬切を出せり。石質佳美なること本邦第一なり。

〔倉橋山〕 書紀天武紀に見ゆる古地名。近江伊賀兩國の境深遠を経て倉橋(藏部)に至る道といふ。壬申の亂の時吉野軍の將田中足麻呂此處を守りて近江軍に備ふ。倉橋とは即ち和名抄に見ゆる藏部郷の地にして、近江國甲賀郡に屬し、伊賀國との間に鹿深山又は倉橋を隔つ。此坂路を鹿深越又は油日越ともいふ。即ち吟鹿越と並んで其西方にあり。今省新橋植此處を通る。吉野軍は倉橋山の南麓に屯し、鹿深越により来る近江軍に備へしもの如し。此時近江軍の別將田邊小綱、或夜竊に鹿深山を越え、旗を巻き牧を御みて田中足麻呂の陣に討入り、吉野軍を潰走せしむ。〔倉橋山〕 また藏部山に作る。滋賀縣甲賀郡油日村と三重縣阿山郡東新橋村との間にある山。此處に山道懸かり、油日越とも鹿深越ともいふ。いま省線草津線通す。壬申の役の時、高市皇子はこの山を越え新橋に於て大海人皇子に會せられしこと、書紀天武紀に見ゆ。

〔倉橋山〕 書紀天武紀に見ゆる古地名。古地名。書紀天武紀に見ゆる倉橋といふも此に同じ。和名抄に郷名見え久良布と註す。然るに高山寺本は久良用に作る。東大寺天平勝寶三年文書に郷名見え、東寺延久二年文書に甲可郡藏部郷と見ゆるも此處を指せしものなるべし。此地また暗部にも作り歌枕ともなる。家集、よそにては暗部の里とききしかとあまねくく

ら千秋の夜の月 大中臣輔親 夫木・五くらふ山下てるみちらばみちとせに咲なるももの花にそありける 匡房。此處は暗部野・暗部嶺・暗部山谷等と稱し歌に詠せらる。村上忠順の名所集に暗部山を紀伊郡とするは誤なり。櫻・梅・櫻・桃・鶯・呼子鳥・鶯・女郎花・雁・鹿・霧・紅葉・時雨・松・埋木・谷等の名所たり。古今集、我がきつるかたもしられすくらふ山木々のこのはのちりともがふに、敏行、金葉集、ことばりやおもひくらふの山ざくら匂ひまされる花をめぐるも、壬二集、人しれすくつるたぐひやわが袖にくらぶの山の谷のうもれ木、尊氏、夫木、一、「くらぶ山のふもとの野べのみなへし露の下よりうつりつるかたな、有忠、同・二〇、春かすみたちやこめつるくらぶ山おとはのやまに雪もみえれば、元葛、同・二九、君が代にくらぶの山の峯におふるまつば千年をかざるばかりぞ、鎌倉右大臣、好色一代男、一、或日暗部山の邊に、しるべの人ありて、梢の小鳥をさわがし、天の網小漉し、もちなどをなびかせ茅が軒端に物漉しくも、赤頭巾きせたる鼻松桂、草がくれなぐきみも過がてにして、歸る山本近く。

クラヘ 椋部 加賀國(石川縣)の古地名。和名抄、石川郡に椋部郷あり、其地今の石川郡出城村・御手洗村・旭村。安

原村の邊に當り、旭村大字倉部は其の遺稱なるべし。日本書紀に越前國加賀郡京戸とあるは此地にして、東大寺の天平神護二年の文書に越前坂井郡の人、椋部葛公とあり、其の高、武藏・尾張・陸奥・信濃・丹後等に散在せるは古書に見ゆる所なり。源平盛衰記の北國所々合戦の條に、壽永二年五月源氏は安宅の湊よりおちて、今湊・藤原・小河濱・倉部雙河打過て、大野庄に陣をとるとあり、また常山記談にも上杉輝虎、能州にて勝ち、軍を加賀に旋し、長一族の首を以て倉部の濱に負すとあり。

〔鞍馬村〕 京都府山城國愛宕郡の中部。南西部は京都市上京區の北端に接し、東と南は靜野村、西北は雲ヶ畑村に、北は花春村と北桑田郡黒田村に隣る。面積約二四・五平方軒、北方より南方に低下する山地にして、殆ど平地を缺く。工業の外見るべき産業なし。古く京都市に近く鞍馬寺・貴船神社あるを以て著はる。今社線鞍馬電鐵通じ、二ノ瀬・貴船日・鞍馬の三驛(昭和四年開業)を設けて交通の便をばかる。村は鞍馬・二ノ瀬・貴船の大字よりなり、鞍馬に役場を置く。貴船には官幣中社貴船神社鎮座。鞍馬は古名關部なり、後撰集に、黒染のくらの山に入谷の」とあるは同じく暗黒の義に因り、後世山谷の形状に附會して鞍馬の字を撰ぶ。鞍馬山の半腹に鞍馬寺あり、延

暦十五年伊勢人創建し毘沙門天を祀る。延喜中東寺僧時延中興、天永年中僧忠孝これを延暦寺に屬せしめ天台宗となる。枕草紙に、近くて遠きもの鞍まのつらかり」とあり、山下より寺門に攀ぢのぼる坂路を謂ふとぞ、深遠は寺門の内に入り、源氏物語に見ゆ、鞍馬寺の西北十町に僧正谷あり、俗説鞍馬天狗太郎坊の栖居となす、巖石樹林の幽邃常にあらず、古へ臺演正なるものの修禪の別所なりと。また鞍馬と云へば天狗を聯想し、また牛若丸を思ひ出す。牛若は義經の幼名なり、父は義朝、母は富勢、誕生の平治元年平治の亂起りて、義朝を初め一族は概れ敗死するの難に遭ひ、翌年の初め母に伴はれて、大和宇陀郡龍門の母の妹家に匿れしが、平氏の追索急にして發見され、母は身を平氏に任せし爲め僅に死を免かる。七歳の時鞍馬寺に入り、東光坊阿闍梨の弟子となり、年十一にして家系とその地過とを知り、家運の再興と平氏の討滅とを念とし、専ら武術武藝に力を注ぐ。承安四年金賣吉次に同伴して鞍馬を去り、陸奥の藤原秀衡の許に赴けるは汎く人口に膾炙せらるるところ。(貴船神社) 貴船に鎮座。官幣中社。祭神、關野神。延暦年中、神域の東南に鞍馬寺の創立せらるゝに及びて社地を二分す。白鳳年中すでに正遷宮の事ありと云へば有数の古刹たるべし。加茂川の源に鎮座する故に古來河上神とも稱す。延喜の制に名

神大社に列し、平安中開廿二社の一に列す。嘉承元年に上賀茂神社火災の際、一時その御神體を當社に遷けし事あり。崇徳天皇御宇に神位一位に遷む。明治四年五月十四日賀茂別雷神社(徳川時代に誤りて賀茂別雷神社の攝社となりし事あり)より獨立して官幣中社に列す。大正十三年十二月皇太后陛下御參拜あり。古來、安早・雲雨・凶作、其他天下に大事ある時は必ず官幣を奉りて御祈願あり。近郷はもとより崇敬者全國に散在す。境内地四萬五千八百三十餘坪、貴船川の右岸に奥ノ宮ありて本殿・拜殿を具ふ。川に沿うて八〇米ほど下りて當社の社殿あり。本殿は文久三年の改修に係る。社境内に雨乞瀧・鼓ヶ瀧・鏡岩・鳥帽子岩・僧正ヶ瀧・磐石(和泉式部の「もの思へば澤のほとろもわが身よりあづかれば出づる玉かぞ見る」の歌より出づ)・船形岩などの名勝・飛瀑あり。東に鞍馬寺・由岐神社、南に市原野・小野寺などありて附近一帶は古蹟に富む。例祭、六月一日。往古は四月と十一月に大祭(貴船祭または虎杖祭)を行ひ、勅使御差遣ありしと。

〔由岐社〕 (由木神社) 大字鞍馬に鎮座。村社。祭神、大己貴命・少彦名命。天慶三年の勅請と云ふ。社説は古來天子不豫および世上騷擾のとき親を社前に懸けて平穩を祈りしに因ると云ふ。慶長年中豊臣秀頼社殿を造營す。社殿は本殿・拜殿。拜殿は俗に荷拜殿と云ひ、桁行六間、梁

間二間、單層、屋根入母屋造、檜皮葺。慶長十五年の建立に係り國寶たり。なほ石造の狛犬一對は鎌倉時代の作にして國寶に指定さる。例祭、十月二十二日・二十三日。(鞍馬火祭) 由岐神社にて十月二十二日に行ふ祭禮。日暮ると共に街道の中央幾箇所となく積み重ねたる松籠等の提桶に火を放ち、子供等は輪相應の大さきに柴を束ねたる松明を肩にし、サイレサオイヨと囃しつゝ行き交ふ。其中を參詣の群衆押し合ふ。夜裏に大松明とて一丈ほどあるを身出す頃が、眞の祭禮の始まりにて、午前一時、太鼓を鳴らすと共に、山門石殿の上下兩側に精進竹とて注連を張りたるもの中央斷たる。松明を肩にせる若衆初めて石段を登り由岐神社に參詣す。明神二社の神輿は神職の御靈遷の後、拜殿より擔ぎ出され、石段を下る。裸體に手甲、雲着の肩當をせるものこれを擔ぎ、甲冑姿の者これの世話なす。神輿の孝順は一村の婦人總出となりて之に隨る。安山の咒といふ。御旗所に神幸終れば、體の神酒を供へ、神靈の神樂あり。また廣前にて一文程の松の前に割竹を幾本も束ねにさせしもの二十本を焼く。かくて火の豪華版ともいふべきこの祭は夜明けて終る。由岐神社は昔天子不豫の際、親を神前に懸けて祈りしものにて、除夜の祭なり。此神は非常に汚れを忌み、またかばかり火を焚くも、古來この爲に火を失せしことなし。

クラマ 鞍馬

クラマ 鞍馬

クラマ 鞍馬

クラマ 鞍馬

クラマ 鞍馬

「火祭の吹あけゆく水の音 青泉」
〔鞍馬寺〕 大宇鞍馬にあり。天台宗。松尾山金剛壽命院と號す。寶龜元年觀音の高尾靈蹟の開基と傳へ、白馬寶鞍の奇蹟に依り鞍馬寺と號すといふ。延暦年間、大中大友藤原伊勢人堂宇を建立し、勅して定額寺となし山并寺田を賜ふ。清和天皇貞觀五年樓門の御建立あり、當時本寺洛北の互利として法威盛んなりしが、のち一時衰頹す。寛平年間、東寺十禪寺の一人たる峰上人再興す。天永年間、天台座主忠實僧正更に之を興隆し、天台宗に改む。當時朝廷武門の崇敬厚く寺門隆盛を極めたり。室町時代以後漸く衰へしが、豊臣・徳川兩氏の出づるありて領地下附の朱印狀を與へられ、漸次寺運舊に復す。時に寺域洛北の險山鞍馬の一山に互り、堂宇・子院山上山下に相連り輪奐の美を極めたり。當寺古來數度の災厄に遭ふも、歸依者に依りて直ちに再建さる。近世稍も寺勢衰へしも、大正の初年舊經入寺するや大いに寺運興隆に努め、第一期、第二期に分ちて多くの堂宇を建立し、今や稍舊觀に復す。寺域は洛北の名山鞍馬山の中腹に位置し、一山互嶺老杉鬱々として神祕の靈域をなす中に多くの塔堂を連ね、牛若丸に關する舊跡また所々に散在す。寺寶中國寶に指定されしもの甚だ多くして十數餘を算す。毘沙門天及脇侍（吉祥天・善膩蘭童子）立像三軀（國寶）は不動堂に安置、有名な玉皇靈蹟の

毘沙門天にして、毘沙門天像は左手を額にかかげ、玉城を俯瞰するといふ珍らしい形相をなし、英姿颯爽、明朗な善膩蘭童子像と共に像材一木彫成、藤原初期を降らざる像、吉祥天像は後補作にて、像材寄木、像内に經卷を納入す、その奥書によりこの像大治二年二月鞍馬中興重怡上人等祈願して造佛巧匠快賢・靜眞等をして造立せしめたものと知られ、藤原時代特有の優雅な相を示す。兜跋毘沙門天立像一軀（國寶）は佛守夜又毘沙門天と稱す。不動堂に安置、藤原初期の作。聖觀音立像（國寶）は木造玉眼・彩色鍍金文様あり、宋朝式顯著、左足納に「嘉祿二年二月造之大佛師肥後別當定慶一右足納に「奉鞍馬寺之安貞三年三月三日」の銘あり。銅燈籠一基（國寶）は本堂の前に立ちて正嘉元年の年銘あり、火袋の扉に二天・四天王像等を浮彫せり。鞍馬寺經塚遺物（銅經筒殘片・瓦製經筒・銅寶塔・鐵寶塔・銅如來坐像・銅菩薩立像・銅佛殘片・銅佛佛殘片・銅板押出佛殘片・銅獨存・鏡・白磁合子類・硯・銅錢其他）並びに經塚石寶塔一基は（國寶）。經塚遺物は本堂後方山腹にある經塚より明治十一年以降昭和六年三月迄の間に數回に亘り發掘されし遺物約二百點にて、經筒の一に保安元年九月十一日開經云々の經あり、以てこの經塚の造營年代が知られ、またその銘文中には前項毘沙門天像傳國寶吉祥寺天立像胎内文書中に記

されたる僧重怡の名もあり。善膩像は金銅佛にて、藤原時代の作風なるが、經塚の標幟として舊同様にありしを、同塚廢後護摩堂背後の山腹に移せしもの藤原末期のものたるべし。鞍馬寺文書一卷（國寶）は紙本墨書、建長三年十月廿三日將軍額顯文、延元元年六月二十三日新田義貞書狀、八月十三日名相長年書狀外八通。黒漆銀一口（國寶）は寺傳に坂上田村麿佩銀。銀一口（國寶）は無銘、持三鉢黒漆漆箱。〔鞍馬竹切〕鞍馬寺に於て六月二十日に行はるる行事なり。本堂の前に大竹を置き、東西の二組に分れこれを切り、遠に代りし方を勝とす。東を近江、西を丹波とし、その距離によりその年の豊凶を占ふ。神事の起原は延喜年間奉延和尚護摩の秘法を修せし時、雌雄の大蛇和尚を呑まんとして、毘沙門の咒のために倒伏され、段々に斬り捨てられしも、雌蛇のみは助けられ、誓ひて湯泉を湧出せしめたりといふ故事による。八本の竹は雌雄の蛇に象りしものにて、竹根のあるを雌とし、根のなきを雄とす。當日は一山の僧徒、本堂に於て法樂を行ふ、これを蓮華會といふ。竹伐や珠數取そへて拜み打（永儀）〔鞍馬語〕鞍馬寺への參詣をいふ。同寺に安置されし毘沙門天、福徳を授け靈驗あらたかりとて廣く民間の信仰を極め、宇治拾遺物語第六に、今はむかし、比叡山に僧ありけり、いとま

づしかりけるが、くらまに七日まゐりけり。夢などや、みゆるとて、まゐりければ、みえざりければ、七日をのべのべしに古くより存せし風習と思はる。看聞御記永享九年八月二十日の條に「鞍馬の月詣にて。今日代官參る」と記されたるも其一例なり。近畿地方民間の一風習となる。〔鞍馬石〕 本村産の岩石を鞍馬石と稱し、石質は中絶乃至粗粒の閃綠岩なり。閃綠岩或は斑輝岩にて、石材として利用出来るは本邦に於ては極めて少なく、その中に本岩等は斑輝石と共に間知石として利用せらる。産額少なし。
〔鞍馬山〕 京都市の北方、京都府愛宕郡鞍馬村にある山。標高五七〇米。南西方には貴船山（七〇〇米）對峙す。山中より鞍馬川源流して南流す。山腹に鞍馬寺あり。古來修験者の登山する者多し。天台宗にして延暦十五年藤原伊勢人創建、寶龜元年（一四三〇）末・靈蹟上人の開基と傳へ、延喜中東寺僧峰延中興す。山麓より寺までつづら折の山道通じ、杜草紙にも「近くて遠きもの鞍馬のつづらあり」とあり。又寺門の内に涙淵と稱するものあり。源氏物語には、わらは病したまふに鞍馬山に有驗の聖おはすとて參詣し給ふ時源氏「吹まよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす淵のおとかなし」とあり。鞍馬山の全山は老杉巨樹おび茂り、その中に標幟點綴して溪流に映え、特に鞍馬の雲

峰標は高嶺鞍馬天狗にも見ゆる程にして古來名高し。寺の北西方約一軒なる僧正谷には俗説鞍馬天狗のすみかと云ふ慶王堂あり。又牛若丸はこゝにて劍道を學びしと傳ふ。こゝより貴船山へ約一軒にて至る道あり。鞍馬の稱は靈蹟上人ある夜夢を見て洛北の山に登り、靈地を求めしが求め得られず、寝れて暫しまどろむうち、夢に白馬寶鞍の瑞を感じてこゝ地に得草庵を結び毘沙門天を安置したるが、これ鞍馬山の初めにして鞍馬の名もこれに因ると云ふ。又一説に白鳳十一年天武天皇大友皇子と戦ひて利あらず、この北山の奥に城を構へて籠り給ひ、當に御馬に鞍をかかせしませがしが給へるに因るとも云ひ、また集姫玉には關山とあり、老杉おびしげり表尙暗きに因ると云ふ。山中より鞍馬岩・鞍馬柴・鞍馬石等を産し、鞍馬穂・木芽煮・牛若豆等の名物あり。毎年四月十八日より一週間の花供養、六月二十日の竹伐會式、毎月七日の御通夜會には參詣者多し。また毎年十月廿二日夜間に行はるる火祭には、廿四本の炬火に點火し、全山火の海と化す。好色一代男・三・二日は越年にて或人鞍馬山に誘はれて、一ばらといふ野を行ば、厄はらひの聲、夢遺ひの糞の札、寶丹賣など細巻をさして鬼打豆、竹より屏しめて、懸がれといへる坂をすざりて、鬼一法眼三略巻・三・愛に源氏左馬頭義朝の八男牛若丸、御母當誓の懐を離れ、鞍馬山東光

坊の御元を忍びて成長り給ひ、十六年の春も過ぎ、芦屋道満大内蔵・五・錫杖取つて振り立て、高き御山は愛宕山、鞍馬山には多開天、持國增長廣日の四天王にも先立つて、神道如意的の胸に鞭を打ちかけ、
〔鞍馬川〕 京都府山城國愛宕郡花背峠に發し、鞍馬山の東を流れ貴船川・勝原川を合せて西流賀茂川に入る。流曲、鐵輪「市原野への踏むけて月遅き夜のくらまがは」
〔鞍馬電氣鐵道線〕 京都府愛宕郡にある私設鐵道。京都電燈軌山電氣線（山崎線）（京都市左京區上高野土芝蔭町）に起り、愛宕郡鞍馬村鞍馬に至る。全長八・八軒。昭和三年に營業を開始し、翌四年市原驛（靜市野村）より鞍馬村鞍馬まで延長、軌間一・四三五米。
クラマエ 藏前 東京市淺草區の地名。淺草通の鳥越橋より賑橋通に至る間をいふ。此處の隅田川畔には元和六年より徳川幕府が年貢米を貯蔵する米倉を置き淺草御藏と呼べり。弘化年中には其數六十七棟、三百五十餘戸前を算す。通りに對しては火除の土手あり、片側町にして今も藏前片町の名稱残る。當時の倉庫は全國の年貢米を入れしものにして、庶士の俸祿はこゝより出せしものなり、承應元年以後は米穀も夏冬二回に定められ、俸祿の少なき者は米・金の請拂の事を町人に委託し、その後年を追うてそ

其例多くなり、寛文の頃は相當の武士まで町人に委託する様になり、これにより札差なるもの生ぜり。札差とは江戸時代、旗本御家人の代理として切米・扶持米・役料・足高等凡て淺草御藏より支給せらるる米穀の受取方及び賣捌方を掌り、これに對する手数料を徴し、又その米穀を賣入として金銀を貸與くるを業とするものを云ふ。札は、藏米受取手形のことにて、昔はこれに受取人名を記し割竹に狭み藏役所の蓋包に挿したると、ろより、札差なる名稱を生ぜしといふ。札差より諸々の得意なる旗本御家人（藏米取）を札旦那と云ひ、旗本御家人より、各自取引の札差の店を藏前または略して單に前と稱せり。而して札差仲間とはみな江戸淺草の御藏前（今の藏前）に住みたり。甲府・田安一橋の二郷および加賀藩にも札差ありしが、これ等はみな江戸藏前の札差に倣ひしものなり。札差同様の業を營むものは、古く慶安の頃より存し、江戸市内各方面に散在せしと云ふ。札差が株仲間となりしは、享保九年七月（皇紀二三八四）のことにして、江戸町奉行大岡忠相は札差の人数を一〇九人となし、片町組三人、森田町組四人、天王町組三人となし、各組に行司五名を置き月代りにこれを勤めて組中の取締に任ぜしむ。各組に屬する札差は必ずしも其町にのみ住居せるものにあらず、附近の旅籠町・新旅籠町・平右衛門町・茅町・

瓦町・猿屋町・福富町・黒船町・諏訪町等に散居せり。この組別は延享四年（皇紀二四〇七）十組となり、毎組に定行司一人を置き、安永七年（皇紀二四三三）には舊の如く、片町・森田町・天王町の三組となり、毎組に組役二人を置き、別に札差掛名主二人を命じ、更に毎組に一番より六番までの小組を置く。而して組役及び札差掛名主は天明七年（皇紀二四四七）に廢せられしも、三組及細別は幕末に至るまで變動なかりき。仲間人員は延享四年九人、安永七年九人、文政元年同數、嘉永四年一〇一人なり。札差仲間人員を一定せし故に、新に新業を營まんとする者は明珠を譲受くる規定なりき。札差は謂ゆる千兩株にて、價格の高價なるは利益の多き證據たり。新規營業者は、勿論一、二の例外の場合もあるも、従來の營業者の二三男、或は札差方に多年過失なく奉公し別家を許されしもの等、縁故あるものに限らる。従つて同じ屋敷の札差多く、伊勢屋・板倉屋・大日屋・泉屋等の屋敷多數に見ゆ。御藏の址は專賣局の敷地となり、その南の一部に東京工業大學の前身、東京高等工業學校も移轉前は此處に置かる。關東大震災後、專賣局の敷地を通り隅田川に新橋を架け、藏前橋と呼ぶ。賣花新驛（せんど正燈寺）の紅葉見にいったれば、藏前の仙遊にあつた。古製三船、あとできけばゆびが切つたとさ、なくなつたふりでしたんぞうとい